

鹿児島県史料

西南戦争

第四卷

解題

平成十九（二〇〇七）年は、西南戦争が戦われた年、すなわち西郷隆盛が城山の露と消えてから一三〇年目という節目の年である。そのため、『鹿兒島県史料』は、継続している『薩摩藩法令史料集』を中断し、『西南戦争 第四巻』を発刊することにした。

『鹿兒島県史料』では、昭和五十二年（五十四年）に『西南戦争』を第一巻（第三巻）として発刊しており、第二巻には「西南之役懲役人筆記」が収載されている。同巻解題によると、秋田・宮城・福島・千葉・埼玉・神奈川・山梨・堺・広島・熊本・青森・茨城・群馬・栃木・石川・岡山・新潟一七県の監獄に収監された懲役人一〇四五名の上申者分を収載しているが、注に「右の表には東京府（市ヶ谷監獄）関係のものは全然含まれていない」とあるように、東京府関係分は収載されていない。これは、発刊計画当時、底本を所蔵していた東京大学史料編纂所に東京府関係分があれば当然収載されていたであろうが、当時同編纂所では同史料の所在が不明であったという理由による。その後、同編纂所で東京府関係分が確認されたため、同編纂所所蔵本を底本にして東京府関係分を今回発刊する。

三〇年の間において、ようやく先のシリーズの欠を補うことができたことを喜びたい。

東京府関係分は、四八〇名四一二通であるが、同一人のほぼ同文のもの、連名による上申書もあるので、掲載する上申書は四〇六通である。

出身地は、旧薩摩藩領域の外に、福岡県三名二通（大原一二三は福岡県出身であるが中津隊として大分県出身の和久井鉄馬と連名である）、大分県三名三通、熊本県二八名一七通、宮崎県三二六名二三通である。

上申書成立の背景、構成などを含め、内容の部分については「西南戦争 第二巻」と同様であるので、全般的なことは第二巻の解題に譲ることにする。

ここでは、内容について、第二巻解題の補足と新たな注目すべき内容を紹介し、さらに、佐土原才助の従軍とそれ以後について触れる。

一 内容について

1 参加の位置づけ

旧薩摩藩領域出身者と他県出身者とは、戦争参加の位置づけに違いが見られる。

前者は、中原尚雄の西郷暗殺の説について触れ、「君側ノ姦ヲ掃除シ、天皇陛下至聖至仁ノ徳ヲシテ四表ニ光被セシメ、鴻号ヲ無窮ニ垂レ賜ハンコトヲ欲セザル者ナシ」（邊見昌司）と他県人と同様の理由を述べた者もいるが、多くは「西郷隆盛等政府へ尋問ノ儀有之、上京スルニ随行シ、第五番大隊五番小隊ノ押伍ニ編入セラレ云々」（宮之原藤八）や「明治十年二月二番大隊五番小隊ノ兵士ニ編入セラレ云々」（吉海郷十郎）の記述に代表されるように、事実関係が淡々と記される。これに対し、他県人の記述には、参加者全てではないが、参加理由が記されるものが多く、また、戦争の大義について触れる。

① 中原尚雄ラノ口供ニ抛レハ其ノ根元全ク要路ノ大臣ヨリ出ルコト疑フ処ナシ、実ニ国家安危社稷存亡ノ秋ナリ（中略）此ノ時ニ当リテ豈ニ傍觀座視スルニ忍ンヤ、敢テ官軍ニ抗敵スルニアラス、内ハ奸臣賊子ヲ攘除シ、外ハ武威海内ニ輝カシ、忝クモ天皇陛下ノ至聖至仁ノ徳ヲ四表ニ光被セシメントノミ断然方向ヲ定ム（熊本・能勢運雄）

② 我等協同隊巨魁宮崎八郎ニ面会シ、先ツ大義名分ノアル所ヲ問フ（熊本・堀善三郎）

③薩ノ此拳ニ於ケルヤ未タ孰レカ直孰レカ曲ナルヲ知ラス、人ノ出処ニ於テハ一世ノ大事、慢リニ之ヲ処ス可ラサルモノナレハ、一旦薩軍ノ在ル所ニ至リ、其兵ノ起ル名義正シク、弥義拳ノ至当ナルカヲ察シ、然ル後其進退ヲ決セント窃カニ郷里ヲ出発シ（中略）然ルニ諸君ノ言ノ如キハ名義屹然、国家ヲ憂ヒ蒼生ノ為メ三將ヲ保護シテ其志ヲ遂ケシメントスルハ実ニ盛ナリト云ツ可シ（福岡・荒牧重三郎）

④刺客ノ口供書ヲ閱スルニ、廟堂大臣一二名ノ使ムル所ニ係リ実ニ国家ノ大事ニシテ、臣子タルモノ座視傍觀スルノ秋キニアラス、同志百余名西郷氏ト共ニ上京シ、上ハ禁闕ヲ保護シ奉リ、下ハ姦臣ヲ除去セント衆議ヲ決定（人吉・丸尾静）

刺客云々を前提としながらも、大義名分を問い、国家のためになる義拳であることを理由としている。そのため、降伏・帰順についても、その理由を述べている。

八月十七日、熊本隊は降伏するが、それについてはつぎのようにある。

⑤事既ニ此ニ至ル、如何トモスル能ハス、今ヤ糧竭矢尽計出シ知ラス、夫一戦戸ヲ原野ニ暴スハ志士ノ本色、快ハ則快ナリト雖モ徒ニ流賊雷同ノ汚名ヲ後世ニ流スハ豈遺憾ナラスヤ、寧口從容縛ニ就キ素志ヲ陳述シ顛末ヲ吐露シ、然ル後常刑ヲ受ケント衆議一二決ス（松崎迪他五名）

また、熊本・協同隊も同月日に降伏する。理由はつぎの通りである。

⑥抑吾儕王師ニ抗敵シ万死ニ出入シテ一生ノ計ヲ顧ミサル所以ノモノハ、敢テ各自ノ私ヨリ發起スルモノニアラス、則チ西郷隆盛暗殺ノ事件ニ基シ、国家ノ衰頹・大臣ノ専横ヲ慨嘆シ我三千万ノ同胞ヲ塗炭ノ中ニ救ハント欲シテナリ、然レトモ不幸ニシテ謀機ニ中ラス百戦敗衄、糧竭キ矢尽キ事既ニ此ニ至リ如何トモ為ル能ハス（中略）イマ進退此レ谷リ謀出シ所ヲ知ラス、其事ノ成ラサルヤ既ニ万々ナルヲ察シ、而シテ後一兵士ト云トモ之ヲ殺シ之ヲ傷ル

ハ豈ニ其本心ナランヤ、況ヤ従来ノ風習ニ泥ミ屠腹鬪死ノ醜体ヲ極ムルニ至テハ、独り我日本帝国ノ恥ノミナラス素志モ亦消滅センコトヲ此レ恐ル、故ニ方今文明各国ニ行ハル、所ノ陣上虜ノ例ニ倣ヒ携エル所ノ凶器尽ク之ヲ官軍ニ納メ從容縛ニ就キ、各自抱ク所ノ素懷ヲ法廷ニ陳述シ、甘テ国典ニ就カン（野満長太郎他六名）

事の成就せざるを見極め、せめて大義のための行動であったことを後世に伝えるための降伏であるとした。釈明の機会を得ず「流賊雷同ノ汚名」を後世に残すことは避けたかったのである。人吉隊の丸尾静が、人吉での敗軍を契機に、戦争の早い段階の六月四日、残兵を引き連れて降伏したのも、無用に人材を失うことを恐れたためであつたらう。

2 出軍兵に対する士庶の態度

西郷隆盛刺殺計画に抗して立ち上がり、政府の掃除をするとの立場への理解か、または西郷への信頼・崇拜によるかは明らかでないが、戦争の初期段階では、西郷軍に対する士庶の対応は、表面的には暖かいものであつた。鹿児島では、「沿途ノ士民之ヲ視コト父母ノ如ク、聊カ疾苦ヲ慰メント侑ムルニ茶或ハ果実ヲ以ス」（河野通代）との光景が見られたのであるが、これは、熊本でも同様であつた。

明巨高瀬ニ向フ、途中木ノ葉村ヲ過クレハ士民欣然酒餐ヲ擁シ路頭ニ迎ヘテ我ヲ慰勞ス（宇都宮泰輔・白尾源太郎）とあり、福永十郎も同文を記し、「其情実ニ感觸スルニ禁ヘタリ」との感想を述べている。

戦争最終末期、西郷の鹿児島入りに際しても「住民は喜んでこれを迎え、陰に陽に物心両面から薩軍を支援している」（『西南戦争 第二巻』解題）とするが、鹿児島全体がそのような雰囲気であつたかは疑わしい。しかし、鹿児島へ進入した官軍への対応という作戦上のことであつたとしても、「豊地ノ全軍ヲ揚ケ鹿児島ノ敵ヲ驅ランヨリ寧口死力ヲ尽シ兵ヲ進メテ馬関ニ迫ラハ、鹿兒島ノ敵ハ刃ヲ不用ニシテ自カラ退カン」との意見を押しさえ、「人民戦ヒノ為糧食乏シク飢餓旦夕ニ迫リ実ニ現今ノ危窮鹿兒島ニ在リ、之ヲ救ハンスンバ不義也、速カニ豊地ノ全軍ヲ揚ケ大挙シテ鹿児島ノ敵

兵ヲ駆り、根ヲ固フシ再挙シテ肥豊ニ出シ」(長崎道義)と主張した神宮司助左衛門・別府九郎が、各隊を率いて鹿兒島へ向かい、直ちに県下飢餓の窮民を賑撫したということは、西郷軍への鹿兒島の支持を高めることになったかもしれない。児玉武志、山口勢人・久米十郎右衛門上申書でも鹿兒島県下窮民救助の記述がある。

3 連隊旗の奪取

第二卷上申書でもこれに触れたものがあるが、本巻にも複数人の記述がある。

榊権右衛門は、連隊旗を取り、銃器彈薬を得たとの記述に留めるが、久木元直吉は、連隊旗を得た状況を「官軍支ユル能ハス、連隊旗章并ニ兵仗・屍骸ヲ棄テ走ル」と記す。手に入れた村田三介は、二十三日早朝村田三介来り、昨日植木役ノ得ル所ナリトテ、連隊旗ヲ懐中ヨリ出シテ之ヲ視ス」(深見有常)と、得々としていた様子が窺える。

熊本城を攻撃中であつた辺見は、それを籠城兵に示し、罵つた。

一日辺見植木ニ於テ村田三介隊ノ得タル十四連隊ノ隊旗ヲ携へ来り、丈余ノ竿頭ニ掲ケ之ヲ壘上ニ立テ城兵ヲ麾キ、大音ヲ発シ罵詈訾シテ曰ク、見ヨ見ヨ、此ノ旗ノ何タルヲ知乎、天我輩ノ誠忠ヲ感シ下タシ賜ヘルナリ、汝等苟モ恥ヲ知ラハ急ニ来テ之ヲトレ、今ヤ内ニ軍糧ナク、外ニ援兵無シ、然ルニ荏苒孤城ヲ守ル、豈謬ラスヤ、急ニ邪正ヲ分弁シ先非ヲ悔悟シ、速ニ甲ヲ脱キ銃ヲ捨テ我轅門ニ降ハ寛宥之ヲ処セント、又我兵ニ令シ百銃齊シク発ス、城兵ハ遠望鏡ヲ以テ之ヲ熟視シ劇シク連射シ飛丸雨注ス(大磯彦六)

辺見十郎太は籠城兵を挑発し、籠城を解かして一戦交えようとしたのであろうが、天皇陛下より賜つた連隊旗を奪われ、それをこのような形で利用された乃木希典の無念は如何ばかりであつたであらうか。自責の念が彼の一生に重くのしかかつたのも当然であらう。

新納織之丞上申書にも右の大磯彦六とはほぼ同内容があり、また四本助八上申書でも辺見十郎太の城兵への罵言を記し

ている。

4 偽計

近代戦の交戦規定では、軍隊は軍服などにより見分け、相手側の軍服を着用して欺むいたり、軍服を着用せずに関戦したりすることは禁止されている。しかし、偽計により戦闘を有利に導くことは許される。西南戦争でも偽計により戦闘の勝利を得たり、自軍の戦闘力を維持することがなされた。上申書で窺える最初の偽計は官軍からしかけられた。

①同(二月)二十六日熊本隊ノ全軍玉名寺田原ニ於テ官兵ト戦フ、伊倉出張ノ三小队モ我カ全軍ノ左翼ニ進ム、時ニ林中ヨリ紅旗ヲ以テ頻ニ我兵ヲ麾クアリ、紅旗ハ味方ノ符合ナル故ニ進ンテ是ニ近ツクニ、忽チ伏兵起ツテ我カ軍ヲ瞰射ス、彈丸雨ノ注クカ如シ、血戦暫時我軍大ニ敗走ス(能勢運雄)

旗印を誤認させることにより戦闘に勝利したのであるが、この後すぐに同様の西郷軍の偽計に官軍がかかり手酷い打撃を受け、また別の偽計により官軍の夜襲を防いでいる。

②(味取山の攻防において)河野ハ其半隊ヲ以テ正面ヨリ攻撃スベシト道ヲ分ツテ上ル、半腹ニ至ル頃敵我隊ニ向テ旗ヲ麾ク、我隊旗ノ徽号ヲ絞リテ之レニ応シ詐リテ官軍ナルヲ示ス、如此スルモノ数次、敵ヲ距ル僅ニ五十歩、直チニ発砲ス(中略)日方ニ暮ル、雨又甚シ、乃篝火ヲ二ヶ所ニ点シ陽ハリ守兵ヲ為シ、陰ニ全隊ヲ山本村ニ引上ケ劣ヲ憩フ(中略)其翌未明又味取山ニ軍ス、夜ニ至リ虚勢ヲ張りテ退ク前夜ノ如シ、爾后每霄此策ヲ用ユ、官兵ハ日ニ来リテ戦ヲ挑ムトイヘトモ之ヲ覚ラズシテ夜襲ヲ為サ、リシヤ、該山ハ常ニ我手ニアリト云(深見有常)

5 武器・弾薬

近代戦は消耗戦であり兵站が重要であるが、第二巻解題でも触れるように、西郷軍はそれが十分でなかった。本巻の

多くの上申書が弾薬の欠乏を記している。

中山盛高は、池上四郎の手紙の内容を「我軍全ク弾薬欠乏、故ヲ以テ川尻ノ軍守ヲ失シ、終ニ熊本惣敗軍ニ及ヒ各隊矢部へ退ク」と記す。弾薬の欠乏した時の戦闘の状況については、つぎのようにある。

①時ニ湯ノ浦へ進撃セシ干城四番策成ラスシテ茲ニ会シ、接戦数刻ニ及フト雖モ勝敗未タ決セス、既ニ味方弾薬尽キ、或ハ関ヲ揚ケ或ハ礮ヲ抛チ挑ミ合フ（祢寝重邦・大峰兼昭）

②（鳥ノ巢攻防）未タ酣ナル時弾薬既ニ乏シク各余ス所五六発ニ多カラス、糧ヲ擲チ或ハ火木ヲ飛シ大ニ憤戦シテ稀ニ銃丸ヲ発ス（東郷静一）

戦闘中に弾薬が不足・欠乏し、関の声で虚勢を張り、礮・糧・火木を投げて抵抗したのであり、弾丸を雨の如く注ぐ官軍には尋常では抵抗できなかった。それを打開するのは抜刀による肉薄戦であり、これにより武器弾薬を戦利品として確保することも多かった。この戦法は戦争の初めからの常套手段であった。

③（木ノ葉）味方関声ヲ揚ケ抜刀切込（中略）其時分捕針打銃三百余挺・弾薬一万二千発余ニテ大勝利ヲ得（飛田親教）

④木留口ノ兵ハ進テ敵壘ヲ悉ク落シ、官兵ヲ追撃スルコト拾丁計、数万ノ弾薬等ヲ得タリ、依テ此地ニ壘ヲ築キ昼夜連戦砲声雷ノ如ク、味方固ヨリ機械・弾薬ニ乏シケレハ戦フ毎ニ僅ニ二三発ヲ余シ、弾竭レハ輒チ抜刀シテ壘ニ伏セ、敵兵ノ近ク寄スルヲ俟テ叱咤一声直ニ殺到、短兵急ニ接シ屢官兵ヲ走ラシ、銃器ハ勿論敵ノ屍腰間ノ胴乱ヲ搜リ、弾薬等ヲ分捕コト数スナシ、因テ味方不具ノ銃器モ悉クスナイードル銃ニ変ス（相良長良）

⑤各口始終弾薬ニ乏敷相成リ、防禦堪兼戦敗ヲ取レリ（中略）官兵襲来ノ処、弾薬乏敷亦都城敗軍後各隊寡兵トナルノ而已ナラス、熊本隊亦持場ヲ捨テ官軍ニ降ルニ依リ、無ニ念決戦ニ相極リ（中略）官兵守場へ未明ヨリエヒク、声ニテ突入り、直ニ打破リ弾薬四十余箱分捕、同品乏敷如何トモシカタキ場合ニ魚ノ水ヲ得タト云モ愚ナリ（久留

③・④は戦争初期の戦闘である。官兵の装備品を得ることにより西郷軍の装備改善がなされた。⑤は可愛岳から鹿兒島へ転進する戦争の最終段階であり、特に弾薬を確保できたことは重要であつた。官軍からの弾薬奪取の記述は他にもある。

⑥途ニシテ官軍大煩・弾薬新町ニ運搬スルヲ分捕リ（大磯孝平太）

⑦我隊長七連銃五十余挺・針打銃拾挺・弾薬三個ヲ分捕レリ（三重攻撃）（中略）我兵追撃、敵降ル、此時数十万個ノ雷管・弾薬・糧食・武器ノ分捕リ数フルニ違アラス（臼杵攻撃）（小久保正實他三名）

しかし、武器・弾薬の補給が分捕り品のみに頼っていたのでは勿論ない。自前の製造所により製造、輸送していたが、原料不足、資金不足に悩まされた。関係記事を以下示す。

⑧余弾薬製造掛リヲ命セラレ鳥ノ巢ニテ製造シ、同所引揚ケ熊本二本木ノ弾薬製造所ニ入り勉強スルコト凡ソ十日余（中略）矢部ニ退キ、弾薬製造所ニ入りテ勉強ス（中略）人吉ニ達シ、専ラ銃薬包ヲ事スル凡ソ二十日（中略）延岡ニ着シ、同所製造所ニアルコト凡ソ八十日（荒武勇記）

⑨当是時向田中学校ヲ制作所トナシ、方リニ各郷ノ時鐘ヲ徵集シテ臼砲ヲ鑄リ、弾薬ヲ制ス（中鶴重明）

⑩延岡・高岡・高鍋・佐土原ニテハ弾薬ヲ製シ、大砲ヲ鑄、小銃ヲ修繕シ、或ハ木砲ヲ製シ、大二鉛・錫・銅・鉄ヲ購求シ、遂ニ梵鐘・仏具人民日常ノ器物ニ及フ、細嶋ニハ佐土原・高鍋ノ兵大砲ヲ引キ来リ、各南北両岬在来ノ台場ヲ修繕シ之ニ備フ（石川駿・守永守）

⑪延岡ニテハ資金・弾丸ノ足ラサルヲ憂ヒ、資金ハ市在ニ借り、弾丸ハ老若集リテ僅ニ之ヲ製シ、日夜熊本戦争ノ景況ヲ窺フ（中略）五月中旬ニ至リ奇兵隊長野村忍助二千余人ヲ率ヒ、延岡ニ来着シ本営ヲ据へ、先鋒隊ヲ豊後地ニ発遣ス、是時ニ当リ野村ノ軍弾薬已ニ乏シ、乃製造所ヲ設ケ盛ニ弾丸ヲ製造ス、錫・鉛・古銅ノ買入、大砲製造等

ノ依頼アリ、之ニ因テ各市村二人ヲ馳セ古銅・錫・鉛・鉄或ハ梵鐘・仏具類ニ至ルマテ悉ク之ヲ購求シ、終ニ日常器物ニ及フ、七月ニ至テ錫・鉛已ニ尽ク、爾後製スル処ハ皆銅・鉄丸ナリト云（塚本長民）

製造が追いつかない弾丸の補給が落ち玉の購入にあつたことは第二巻の解題でも触れられているが、有馬序介もつぎのように記す。

⑫（植木攻防）味方ハ彈藥乏シク、依之敵之雨射スル落チ玉土民拾ヒ取タルヲ、鹿ノ子木大小荷駄方へ毎日五六百斤内外ツ、買円メテ、玉葉ヲ制シテ各隊ニ分与ス、戦之烈シキハ押テ知ルヘシ

この他、彈藥製造に関しては津曲兼敏の記述があり、輸送については、満木清雄・柴善次郎による記述がある。

しかしながら、注目されるのは、長崎の外国人から武器・彈藥のみならず軍艦購入も考えられていたことである。

⑬高瀬川ハ予メ押ノ兵ヲ置キ、当方面ノ兵ヲ併セテ一軍トシ南ノ関本營ヲ襲撃シ、然ル后神速軍ヲ二ツニ分チ、一ハ以テ豊前路ニ押出シ先鋒ニ本營ヲ置キ、一ハ以テ肥前佐賀ヲ經テ長崎ヲ突キ、器械・彈藥ノ便宜ヲ占メ、快戦以テ名声ヲ天下ニ張ルニ如カスト（相良長良）

⑭村田・池上曰、彈藥已ニ乏シ、速ニ長崎ニ至リ、之ヲ外国人ニ謀リ且便宜ヲ得ハ軍艦ヲモ購求スベシト、乃発程川内向田ニ至リ、人ヲ長崎ニ遣シ該地ノ情ヲ探ラシム（深見有常）

⑮（九月一日、味方の諸隊が城山に入るとの情報に接し、兵を募集し吉田郷に到り桐野利秋と会議）利秋謂テ曰ク、我軍幾回モ敗レ数日危難ニ遭フハ職トシテ彈藥ノ乏キニ由レリ、今ヤ幾許ノ彈藥ヲ得ルアラハ敵ヲ破リ將ヲ擒ニシ軍勢ヲ復スル、何ノ難キコトカ之アラント談笑、自若平日ノ如ク勇ニシテ且ツ快然タリ、依テ甌島ニ航シ該地ノ兵ヲ募リ長崎港ニ衝キ入り、要地ヲ得テ彈藥運輸ノ便ヲ開カハ策ノ成ラサル無キ（下略）（小倉啓介）

⑯は伊倉の本営會議において、村田新八・篠原国幹から意見を求められた明日の戦機着目に対する相良と浅江直之の回答である。村田は「斯策尤宜シ」としながらも、現在熊本城攻撃中であり西郷の本営を離して置くことの問題点、弾

葉輸送の不便、熊本落城も間近であることを指摘し、相良などの意見を退けた。⑭の情報収集の結果は知られないが、実現性はなかったであろう。しかし、桐野利秋は、⑮にあるように、武器・弾薬の欠乏だけに戦闘に敗れた原因を帰しており、それが入手できさえすれば状況を転回できるとみている。その入手先を長崎に求めたのであるが、あまりにも樂觀の見方であった。現実には悪天候のためではあったが、小倉啓介は甌島にも到着できず、捕縛された。

6 間諜

官軍への情報提供・内部擾乱の工作等による利敵行為につき記したものもある。上申書という資料の性格上、真实性については問題もあるが、紹介する。

①薩兵敵ノ間諜二名ヲ縛シ之ヲ詰問スルニ、始メハ事ヲ左右ニシテ情実ヲ吐露セス、拷問嚴ニ至ル、此ニ於テ婦人苦痛ニ堪ヘス実ヲ述テ曰、妾等ハ元鹿兒島ノ住ナリシカ、過日旧主某窃ニ婦家セシヲ妾直チニ官ニ訴ヘ、既ニ該人モ官ノ拘スル処トナレリ、此ノ際多ク金錢ヲ賜ハレリ、官又妾ニ命シテ曰、高城病院ノ患者百人ニ充ツルニ及ンテ火ヲ縱チテ之ヲ焼殺セヨ、事モシ成ルヲ得ハ賞ハ其ノ乞処ニ任セシト、故ヲ以テ妾ヲ母子当病院ノ看病人トナリテ傷者ノ増加スルヲ待テリ、一旦利欲ニ眩惑シ、遂ニ此ニ至ル、婦人ノ身願ハクハ助命セラレンコトヲ（能勢運雄）

②石川某ナル者性甚強情、郷内拳テ出軍イタシタルヲ惡ミ、官軍ノ誘道探偵トナリ、猥ニ威力ヲ張り土民之カ為メ大ニ困難ス、禍ノ起ル此一人ニ之レ困リ、人皆之ヲ惡ムニヨリ未然ニ処分センコトヲ乞フトイヘトモ卒爾ノ処分決シテス可カサルノ旨ヲ達シ、同所戸長ヘ預ケ置市来郷湊ニ至ルニ同郷正副戸長ト見得、両名来テ四五名記載セシ名簿ヲ出シ、此者等密ニ官軍ノ探偵トナリ、嚮導ヲ謀リ情実ヲ内通シタルハ確然タリ、且市村ノ民舎ニ立入り威力ヲ以テ酒肴ヲ促シ、或ハ官兵不日攻入放火セント流言シテ土民ヲ擾乱シ利欲ヲ貪ルコト屢アリ、故ニ振武本營ノ令ニヨ

リ今爰ニ捕縛シ来レリ、処置如何スヘキヤト云ニヨリ、伊集院郷へ預置キ振武ノ營ニ指揮ヲ受クベキヲ命（中山盛高）

③和泉郷并河辺郷ノ竹添六郎及ヒ永井軍吉母龜以下拾九名ノ者共密カニ時機ヲ譎リ敵兵ヲ誘引シ或ハ事情ヲ探偵シテ敵陣ニ報シ、陰カニ威力ヲ仮リ人民ヲ苦シメ、如此艱難ノ際ニ当リ却テ利ヲ得ルコトヲ謀リ、該地ハ勿論接近ノ郷民之レカ為メニ大イニ困難ニ罹ル者多ク、衆人忌ニ惡マサル者ナシ、依テ其確証ヲ採リテ速カニ捕縛シ、尽ク罪状ヲ揚テ首ヲ川辺ニ斬ル、此後猶兵ヲ募リ彈藥・銃器ノ便ヲ計ルノ時、敵軍ニ取巻カレ抗戦ノ策ヲ失シ、終ニ解隊シテ各処ノ村落ニ潜伏ス（小倉啓介）

①は拷問による白状であるので、白状通りであるかは疑わしい。出軍者を密告して金銭が与えられたことを含め検討の要がある。②・③は、人数の多さから、官軍の威を借りた利欲行為という罪状よりも、反西郷軍の動きを窺わせるものである。

7 徵募・降伏・解隊

田原坂以降の死傷者の増加により、補充兵の徵募が盛んに行われ、正規兵として出軍し、負傷帰巢した者の再徵募もおこなった。徵募に当たっては「出兵不致者ハ敵同様切捨可申嚴敷申聞」（岩崎幸左衛門）という脅迫的のものもあった。このように徵募され、兵となった者は、「大口において別府晋介・邊見十郎太・瀨邊群平の募兵、人員凡そ千四五百名）該所（人吉）ヨリ八代屯集ノ官軍ニ向ハント評議ニ決シ、壹隊百弍拾人ニナラシ銃器五六拾挺ニ不足而已ナラス、殊ニ不練兵ニシテ平常ノ戦シテハ勝算無覚束ト、無ニ無三三突入スルニ於テハ変シテ勝利タルベキカ」（河野通英）とあるように、武器不足・練度不足であり、正規の戦闘では勝ち目はなく、ただ突撃により、たまたま勝利することがあった

のである。このような無謀な戦いゆえか「人吉口本営洲邊氏ノ来書アリ、蒲生郷ヨリ後出ノ隊赤塚源太郎ヲ始メ九十余名脱走シテ敵軍ニ降りタル由ヲ報ス、子直子ニ帰リ源太郎始潛ニ逃レ帰リナハ捕ヘテ差出スベシ」(赤塚真志)と、集団投降も行われた。

鹿兒島を護るために急遽編制された勇義隊、郷土警備にあたる兵は、人・装備の面でさらに不備であつた。

勇義隊については「然ルニ丁壮ニシテ軍役ニ堪ユヘキ者ハ先既ニ出兵シ尽シ、此隊ノ兵士ハ老者ト幼者ト耳ニシテ兵器モ又々素ヨリ充備セス、或ハ刀或ハ槍或ハ鉄棍或ハ火繩銃ナリ」(小谷伴左衛門)とある。官軍に対抗できる状況ではなかつたことは軍幹部も認識していた。伊東四郎左衛門は五小隊を率い官軍に投降する(松山助ノ進)が、伊東一人ではなく兵士全体に厭戦の気があつたためであることが知られる。

貴島云、海陸ヨリ進撃スルハ必然ナリ、軍艦去ラス、我兵和銃或ハ無銃ニシテ此地保ツヘカラス、依テ振武ノ兵ニ中隊引率シテ来ルヘシ、然ラサレハ兵ヲ出スコト能ハスト(中略)爰ニ至テ本道ノ我兵纔ニ二十余名、皆和銃ナレハ要地ハアレトモ守難ク、遂ニ高城郷ヘ走ル、散兵漸ク集ル、已ニシテ宮ノ城方面ヨリ出水ヘ進撃、途中ヨリ伊東四郎左衛門・竹宮惟一・三原直記等ヲ始メ出水ノ兵隊悉ク反心ヲ顯シテ、味方ニ砲発シテ官軍ヘ降レリ(中山盛高)

また、福山本営から派遣された伊東昌吉により設置された都城分営が徵募し、火難・盜賊その他区内非常警戒を名目にして編制された都城六小隊は、「壮士輩悉ク出軍跡ニシテ、老若ノ別ナク拾五以上六拾歳迄ノ人員」であり、いずれも無銃であつた(稻元氏總)。このため官軍の進撃に際しては、すぐさま区長川西幸三の令により解隊された。

なお、高鍋では「兵隊ニハ士族ハ勿論農商ニ至テモ富ミ且ツ壮強ナルモノハ之ヲ募リ、十余隊ヲ編制シ鎌攘隊ト称」(武藤東四郎他四名)と、富農商の子弟も徵募された。

西南戦争最後の戦闘の場となる城山における籠城は、最初から意図されたものではなかった。最初は旧蒲生城に籠城する計画であつた。旧蒲生城の籠城準備が急遽できないことと、戦闘の成り行きにより城山籠城となつたことは、つきにより知られる。

(可愛岳から鹿兒島へ移動途中) 味方夜二乗シテ間道ヲ経蒲生郷ニ出ツ、於是西郷・桐野ヨリ令シテ曰、先ツ斃ニ突入シ官兵追退ケタル后蒲生ニ兵ヲ揚ルノ議ニ決シ、既ニ発スト、依テ籠城ノ用意手配ヲナセト拾四名余モ之レニ加ル、然ルニ此ノ旧城タルヤ薪水ニ便ナラス、殊ニ兵員数少ニシテ急ニ籠城ナリカタケレハ、其旨ヲ述ント跡ヲ追フテ鹿兒島ニ赴ク(中略) 吉野村華棚ニテ官兵二道ヲ遮ラレ間道ヲ経テ伊敷村ニ至リ、九月一日鹿兒島ニ出テ味方二会ス、同日韃靼冬々口味方破レテ悉ク鹿兒島城中ニ籠ル(満木清雄)

二 佐土原才助と「獄中日記」

二九三の上申書を提出する佐土原才助は、大口郷出身であり、第四大隊九番小隊として出陣した。上申書によれば、二月二十二日熊本着後すぐさま戦闘に加わり、さらに植木の戦の後、「山鹿へ到ル、滞留二十余日、其内四度戦争、三度八官軍ヲ破リ一戦味方敗(中略) 夫ヨリ隈府迄引揚廿余日对阵、其内兩度戦争(中略) 其折銃創ヲ負ヒ木山病院へ入院、熊本敗軍ノ后帰県シ、全快之后亦出軍、大口へ到リ雷撃八番中隊左小隊へ加入」となり、転戦して都城の戦にて銃創を負い宮崎病院へ入院。西郷軍敗走により転院する。「病員ノ護送モ届カス、且官軍ノ為ニ追迫セラレ終ニ帰宅、直ニ降伏仕候」とある。上申書には記されないが、裁判判決書では半隊長であつた。

佐土原才助の「獄中日記」(佐土原ツミ子氏蔵、塩満郁夫氏提供コピー)によれば、明治十年旧十月八日、戸長より大口分署への出頭が命ぜられ、そこで西南戦争に西郷軍の一員として従軍したことが罪であることを知つた。溝辺・加治木を経て十二日旧日置屋敷跡の東京警視庁出張所へ護送され収監された。十四日警視庁による取調が行われ、翌日九

州臨時裁判所へ呼び出されて、翌日磯監倉に収監された。

十一月二日鹿児島発の千歳丸にて長崎へ送られ収監され、九日、「上等裁判所」に呼び出され、十三日付で懲役二年の判決書が出された。

同十三日、□京丸に乗船し、下関・神戸を経て十八日横浜港へついた。「縛二就キナガラ上陸、汽車二乗也、東京新橋ステーションへ着シ、佃島監獄所へ護送セラレ、当所へ一泊、同十九日市ヶ谷監獄第二支署へ護送セラレ、赤衣ヲ着セラレ第一番監へ入監」とある。

「獄中日記」には、獄内での日常に関する具体的記述はほとんどない。ただ四月二十日発の倅八兵衛からの書状により母の不幸が知らされ、それにより一週間の休業が与えられたことを記している。

獄内での情報伝達については、大山綱良・横山賢栄・酒田諸清・池辺吉十郎の斬刑に処せられた事実を記し、さらに、五月十四日（旧四月十三日）には、「今日大変ナル云々ノ咄シヲ聞ク」とあり、島田一郎以下六名の名前を記している。大久保利通暗殺の事実が獄中にも伝わったのである。

獄中の作業などには触れていない。佃海苔・のこ（布子カ）さらしの方法の記述があるが、それに従事していたかどうかは不明である。賞銭・給金・賃銭などについては、

四月三日

一金貳銭

右工作所ヨリ賞銭トシテ本行之通下賜也

とあり、同五月六日には金六銭が四月中賞銭として、同六日には金六銭が四月中給金としてそれぞれ下賜されており、他所にも賞銭などの記述があるが、継続した記載ではない。

興味深いのは、「取入品ノ部」として物品購入の記述がある。つぎに品物と代価を列挙する（同品、同価格の品につ

いては除いた。

半紙一帖 二銭、手甲掛一ツ 一九銭、十露盤一間 一〇銭、黒砂糖一斤 六銭五厘、サンマノ魚四五疋 一〇銭、塩三銭、干肴 一〇銭、サホン 二銭、小筆二本 四銭、墨一挺 五銭、きなこ 四銭、煮屋(千) 三銭、四を(塩)一銭、小ふ代 三銭

(明治十二年)十二月十二日十時放免となつた。横浜から三興丸に乗船し、神戸で三邦丸に乗り換え二十四日鹿兒島に着き、二十六日帰宅した。これにより佐土原才助の西南戦争は完全に終わったのである。

(安藤 保)

例 言

一本書は、東京大学史料編纂所所蔵「懲役人筆記東京府 十綴之内」を底本とし、「鹿児島県史料 西南戦争 第四巻」として刊行するものである。

一本書の目次は、「懲役人筆記東京府 十綴之内」をもとに一〇十まで、上申者名、出身地、初期の所属部隊と役職名を順に記載した。なお、出身地、初期の所属部隊と役職名が不明の場合は「国事犯裁断書」（東京大学史料編纂所所蔵）から補足した。その際、西南戦争当時は鹿児島県、現在は宮崎県に含まれる地名については割書で表記した。

一文書の掲載順は、原則として底本に従った。

一各文書の文首には通し番号を付し、同文書については文書を省略し、その都度その旨を付記した。

一刊行にあたって本文の体裁をおおよそ次のように統一した。

ア 字体は原則として常用漢字を用いた。

イ 人名は、上申者自身の人名については底本の通りとした。その他文書内の人名についても底本の通りとしたが、一部の漢字は統一した。

ウ 地名は、底本の通りとした。但し、一部の地名については常用漢字を用いた。

エ 平出・擅頭・闕字・割書・および但書などは、原則として底本の体裁に従い、闕字は一字分あけとした。

文書の記載年月日・出身・上申者名の位置などは、適宜改行・字配りを行い、体裁を整えた。

オ 仮名は、底本の体裁に従った。変体仮名は仮名に改めたが、江・而・之・者・茂はそのまま用いた。

カ 文書などの本文中には、適宜に読点「、」や並列点「・」を付した。

キ 原注は、底本の体裁に随って示したが、新たに付した注記は、() で囲み原注と区別し、文意の通じない

箇所や文字は(ママ)・(○○カ) などとした。

ク 頭注は、(頭注) と注を付して該行間に転記し、「」で囲んだ。

ケ ルビは、底本にあるもののみを付した。

コ 朱書は、(朱書) と注を付して朱書部分を「」で囲んだ。

サ 文字の不明や欠失は、その箇所を□で囲み(摩滅)・(破損) と傍注を付した。

シ 編制・編入については、底本の通りとした。

一 卷末に、上申者の索引を掲げた。上申者名の読み方については、『鹿児島県史料 西南戦争 第二巻』に倣った。

一 編集の際に利用した史料・文献は以下の通りである。

『国事犯裁断書』(東京大学史料編纂所蔵)

『新編西南戦史』(陸上自衛隊北熊本修親会編、原書房)

『征西戦記稿付録』(参謀本部陸軍部編纂課編、新潮社)

『日本歴史地名体系』(平凡社)

『角川日本地名大辞典』(角川書店)

鹿児島県史料 西南戦争 第四卷 目次

懲役人筆記東京府

十綴之内(一)

宮之原藤八(鹿児島岩崎、五番大隊五番小队)	三	村田佐吉(鹿児島新照院、二番大隊一番小队)	二六
長寄信夫(鹿児島伊敷、貴島隊六番小队)	六	上脇喜右衛門(吉利、九番大隊五番小队)	二七
能勢運雄(熊本県大友、熊本隊一番小队)	七	坂口幸助(吉利、九番大隊五番小队)	二七
仁禮猶介(鹿児島新屋敷、第二砲隊)	一三	中鶴重明(東郷、一番大隊三番小队)	二八
木脇盛清(鹿児島城ヶ谷、五番大隊一番小队)	一五	松崎善兵衛(鹿児島城ヶ谷、二番大隊四番小队)	二九
林昌助(鹿児島新屋敷、一番大隊三番小队分隊長)	一六	宮内康寧(鹿児島武、二番大隊二番小队)	三二
塩津正吉(鹿児島西田、五番大隊九番小队)	一八	山下謙藏(鹿児島 ^{那珂郡} _{西方村} 、福島隊)	三三
時任右八郎(鹿児島岩崎、一番大隊五番小队)	一九	吉海郷十郎(伊集院、二番大隊五番小队)	三三
酒匂源五郎(蒲生)	二〇	邊見昌司(鹿児島高麗町、二番大隊二番小队)	三四
坂口正朝(吉利、三番大隊七番小队)	二〇	榊権右衛門(穎娃、五番大隊二番小队)	三六
染川亮一(鹿児島、一番大隊五番小队)	二二	田中市右衛門(鹿児島上伊敷、一番大隊一番小队)	三七
蓑田休左衛門(蒲生、三番大隊三番小队)	二二	伊勢直(鹿児島東福ヶ城、一番大隊一番小队)	三七
田中資幹(鹿児島、三番大隊三番小队半隊長)	二三	伊集院勇(鹿児島大乘院門前、一番大隊一番小队)	三七
中村喜八(中甕島、十三番大隊二番小队)	二四	中馬喜之進(伊集院、一番大隊一番小队)	三七
永田彦兵衛(鹿児島冷水、三番大隊七番小队分隊長)	二四	武元清芳(鹿児島山之口、二番大隊五番小队)	三九
志賀静一(鹿児島、四番大隊三番小队)	二五	大磯孝平太(宮之城、九番大隊四番小队分隊長)	四一
		鎌田正方(垂水、蟠龍六番中队)	四四

樺山資美 (鹿兒島城ヶ谷、五番大隊四番小隊)……………四五
前田藤次郎 (出水、二番大隊五番小隊)……………四六
(署名ナシ)……………四六

矢田宏 (大分県別府、中津隊)……………四七
彌寝重邦 (都城、遊撃二番隊)……………四九
大峰兼昭 (都城、遊撃一番隊)……………四九

津曲兼敏 (莊内、遊軍九番隊小隊長)……………五三
肥後雲八 (今和泉、貴島隊)……………五三
小久保正賢 (鹿兒島、四番大隊二番小隊)……………五四

伊集院宗吉 (鹿兒島大乘院門前、四番大隊二番小隊)……………五四
朮岡信一 (鹿兒島川上、四番大隊二番小隊)……………五四
平井政徳 (谷山、四番大隊二番小隊)……………五四

田中資雄 (鹿兒島後迫、三番大隊七番小隊)……………五八
四元悟次郎 (横川、奇兵十六番隊)……………六〇
芳野寛太郎 (横川、奇兵十六番隊)……………六〇

竹内喜平次 (郡山、五番大隊五番小隊)……………六二
上村友右衛門 (市来、遊撃七番小隊長)……………六二
松崎美徹 (谷山、四番大隊九番小隊)……………六三

帖佐経一 (鹿兒島内之丸、一番大隊六番小隊)……………六四

十綴之内 (二)

益山兼繁 (末吉、振武十二番中隊一番小隊)……………六八
山下織兵衛 (樋脇、鷗翼五番中隊左小隊長)……………六九
川添太之助 (鹿兒島県、四番大隊七番小隊)……………六九

兒玉良四郎 (鹿兒島鴨馬場)……………七〇
山下静吾 (谷山、五番大隊四番小隊)……………七〇
齋藤八郎 (鹿兒島中村、二番大隊八番小隊)……………七一

向田幸藏 (鹿兒島池之上、一番大隊四番小隊)……………七二
木原胤澄 (鹿兒島新屋敷、四番大隊四番小隊半隊長)……………七三
赤崎直記 (加治木、六番大隊六番小隊分隊長)……………七四

宮内善右衛門 (永利、勇義十一番小隊)……………七五
四本幾 (鹿兒島西田、第二砲隊)……………七五
野間金左衛門 (鹿兒島小山田、五番大隊九番小隊)……………七七

大磯彦六 (宮之城、三番大隊一番小隊)……………七七
池水友之進 (佐多、切隊十番隊半隊長)……………八〇
町田萬 (鹿兒島西田)……………八一

中村金五郎 (田上、四番大隊六番小隊)……………八二
柳田源八 (今和泉、勇義十一番小隊)……………八四
竹下升一 (鹿兒島比志島、一番大隊八番小隊)……………八四

萩原金左衛門 (宮之城、勇義二番小隊分隊長)……………八五
飛田親教 (志布志、四番大隊四番小隊)……………八六
春田吉二 (踊、遊撃六番小隊長)……………八七

山内六之丞 (野田、遊撃九番小隊)……………八七

兒玉勘左衛門 (宮之城、十三番大隊三番小隊)	八八
中島泰助 (加世田)	八八
國生直右衛門 (鹿兒島川上、四番大隊二番小隊)	八八
竹ノ内善次 (重富、十三番大隊三番小隊)	八九
菱刈良之助 (鹿兒島樋之口)	八九
桐原彌一郎 (高城、勇義九番小隊)	八九
山元鉄二 (高城、勇義九番小隊半隊長)	九〇
中馬甚七 (鹿兒島堀ノ面通)	九〇
原田勘次郎 (鹿兒島常盤、五番大隊八番小隊)	九〇
岩崎幸左衛門 (谷山、一番大隊八番小隊)	九一
瀧木清雄 (都城、遊擊一番小隊)	九二
志水元善 (大分県竹田)	九三
洲邊與市 (鹿兒島県、貴島隊一番小隊)	九四
池田十郎 (高江、九番大隊八番小隊)	九四
安藤源之丞 (鹿兒島韃靼冬、三番大隊四番小隊)	九四
蜂須賀權之進 (穎娃)	一〇三
一宮之家 (熊本県京町、熊本隊十二番小隊分隊長)	一〇四
久富直之丞 (鹿兒島県、二番大隊五番小隊)	一〇四
武藤東四郎 (鹿兒島県 <small>児湯郡</small> 、 <small>高鍋村</small>)	一〇七
神代勝彦 (鹿兒島県 <small>児湯郡</small> 、 <small>高鍋村</small>)	一〇七
石井卓巳 (鹿兒島県 <small>児湯郡</small> 、 <small>高鍋村</small>)	一〇七
財津吉一 (鹿兒島県 <small>上江村</small>)	一〇七

團井忠人 (鹿兒島県 <small>児湯郡</small> 、 <small>高鍋村</small>)	一〇七
小野長四郎 (熊本県山崎、熊本隊十番小隊)	一〇八
松本末吉 (加世田、四番大隊四番小隊)	一〇九
吉田清武 (鹿兒島、八番大隊一番小隊)	一一〇
永井金太郎 (鹿兒島小山田、一番大隊五番小隊)	一一〇
阿萬利右衛門 (穎娃、振武三十九番小隊)	一一一
神孝兵衛 (穎娃、振武三十九番小隊)	一一一
西牟田六郎 (穎娃、振武三十九番小隊)	一一一

十綴之内 (三)

藤田稻介 (四番大隊七番小隊)	一一一
荒武勇記 (飢肥、飢肥隊三番小隊)	一一二
新納織之丞 (鹿兒島新屋敷、三番大隊一番小隊)	一一三
大山武兵 (鹿兒島西田、一番大隊一番小隊)	一一六
荒田藤五郎 (豊山、遊軍十番隊隊長)	一一六
加治木彦七 (鹿兒島常盤、四番大隊五番小隊)	一一七
長野祐賢 (小根占、遊軍十七番隊)	一一八
細山田十兵衛 (豊山、遊軍十一番隊小隊長)	一一八
久留景起 (鹿兒島高麗橋、四番大隊七番小隊)	一一九
藤崎休右衛門 (今和泉、三番大隊五番小隊)	一二〇
牧瀬音右衛門 (樋脇)	一二一

瀬之口覺之助 (蒲生、二番大隊六番小隊) …… 一二一

中江員治 (鹿兒島、三番大隊五番小隊半隊長) …… 一二二

宗像景雄 (熊本春日) …… 一二二

深見有常 (鹿兒島泉田之浦) …… 一二六

有富信吾 (加世田、振武隊) …… 一二九

佐多正藏 (永利、十番大隊四番小隊) …… 一三〇

豎山利智 (鹿兒島泉) …… 一三〇

宮原良助 (国分、先鋒二番大隊一番小隊) …… 一三一

岩城十郎 (鹿兒島内之丸、一番大隊五番小隊) …… 一三二

隈元一 (鹿兒島小野、振武十八番隊) …… 一三三

相良研一 (鹿兒島常盤、四番大隊三番小隊) …… 一三三

白尾國芳 (鹿兒島豎馬場、一番大隊四番小隊) …… 一三四

赤塚真志 (蒲生、一番大隊二番小隊) …… 一三七

春成龜太郎 (出水、二番大隊四番小隊) …… 一三九

有馬孫兵衛 (隈之城、勇義七番小隊) …… 一四〇

小城宗一郎 (帖佐、七番大隊十番小隊長) …… 一四一

中山右吉 (伊集院、四番大隊二番小隊) …… 一四二

壹岐義保 (飯野、破竹一番中隊) …… 一四二

枚尾萬藏 (垂水、正義九番小隊) …… 一四三

有馬純尚 (鹿兒島西田、四番大隊九番小隊分隊長) …… 一四三

佐々木八郎次 (宮之城、勇義二番小隊) …… 一四三

長崎武兵衛 (黒木、勇義二番小隊半隊長) …… 一四四

宇田善左衛門 (市来、勇義隊) …… 一四四

大神祐太郎 (鹿兒島泉庄内郷、蟠龍四番小隊半隊長) …… 一四五

若松長治 (鹿兒島韃靼冬、二番大隊四番小隊) …… 一四五

園田敬助 (鹿兒島上後迫、四番大隊十番小隊半隊長) …… 一五〇

橋口龜助 (鹿兒島塩屋) …… 一五〇

田邊善左衛門 (鹿兒島下具服町) …… 一五〇

川端甚兵衛 (鹿兒島塩屋) …… 一五〇

島子弥右衛門 (宮之城、十三番大隊三番小隊) …… 一五一

鶴田貞直 (都城) …… 一五二

黒木直左衛門 (鹿兒島加治屋町、四番大隊三番小隊) …… 一五二

加治木鷹之介 (鹿兒島下伊敷、五番大隊一番小隊) …… 一五三

隈崎喜次郎 (鹿兒島吉野、四番大隊三番小隊) …… 一五三

岡留誠藏 (申良、四番大隊十番小隊) …… 一五四

有馬知純 (頼娃、一番大隊五番小隊) …… 一五四

篠原藤右衛門 (頼娃、一番大隊五番小隊) …… 一五四

宇宿栄之丞 (鹿兒島平之馬場、五番大隊小荷駄) …… 一五五

松岡直左衛門 (鹿兒島下伊敷、二番大隊八番小隊) …… 一五五

二階堂高 (宮之城、五番大隊六番小隊) …… 一五六

五代友廣 (鹿兒島下伊敷、二番大隊九番小隊) …… 一五七

山口輝光 (鹿兒島伊敷、三番大隊一番小隊) …… 一五九

十綴之内(四)

湯田金兵衛(蒲生、四番大隊三番小隊)	一六一
隈元幸次(今和泉、四番大隊九番小隊)	一六二
堀善三郎(熊本県植木町、協同隊)	一六三
松山助ノ進(伊集院、勇義一番小隊)	一六四
泉隼太(宮之城、勇義二番小隊半隊長)	一六五
二宮金之助(田布施、九番大隊七番小隊)	一六六
大村形右衛門(上甕島、十三番大隊二番小隊)	一六六
神宮司純當(佐土原、佐土原隊五番小隊長)	一六六
志々目眞幸(喜入、二番大隊七番小隊)	一六七
草野兼固(鹿児島内之丸、第二砲隊)	一六七
讚良貞信(鹿児島坂元、第二砲隊)	一六八
大塚又次郎(熊本県飽田郡、熊本隊十五番小隊)	一六九
柴善次郎(鹿児島坂元、四番大隊一番小隊)	一七一
木佐貫清八(鹿児島県城、区内番兵分隊長)	一七一
美代清容(鹿児島上清水馬場、一番大隊二番小隊)	一七一
園田秀里(鹿児島県城、区内番兵半隊長)	一七二
永井喜之進(鹿児島吉野、四番大隊九番小隊)	一七二
長崎道義(鹿児島草牟田、五番大隊三番小隊)	一七三
鮫島敬助(加治木、先鋒一番大隊一番小隊長)	一七七
東清助(加治木、先鋒一番大隊一番小隊分隊長)	一七七
中山盛高(鹿児島冷水、二番大隊大小荷駄)	一八二

肥後壯之助(川辺、三番大隊十番小隊)	一九四
高柳一二(鹿児島常盤、一番大隊七番小隊)	一九七
石川駿(飲肥、飲肥隊一番小隊)	一九八
守永守(飲肥、飲肥隊書記)	一九八
後藤八郎太(永吉、貴島隊一番小隊)	二〇八
有川二平太(鹿児島常盤、第二砲隊)	二〇九
朴尚達(伊集院、奇兵二番小隊半隊長)	二一二
嶺崎良助(蒲生、鵬翼三番中隊分隊長)	二一三
大野義行(鹿児島坂元、三番大隊三番小隊)	二一五
稻元氏總(都城、予備六番小隊半隊長)	二一六
小野嘉雄(大崎、振武十番中隊)	二一七
荒牧重三郎(福岡県城島)	二一七
古河勝次郎(鹿児島西田、五番大隊六番小隊)	二二五

十綴之内(五)

四本豊治(串良、一番大隊九番小隊)	二二八
町田四郎左衛門(鹿児島岩崎、五番大隊五番小隊)	二二八
西牟田源太郎(指宿、四番大隊一番小隊)	二三五
高橋源平(襲山、一番大隊三番小隊)	二三六
兒島叢吾(宮之城、一番大隊八番小隊)	二三八
小田幸之助(串良、四番大隊十番小隊)	二三九

四本助八 (伊集院、三番大隊一番小隊)	二四〇
松田友之介 (鹿兒島沖之村、五番大隊三番小隊半隊長)	二四二
中村惣太郎 (永利、勇義十一番小隊)	二四三
有吉正直 (鹿兒島新屋敷、五番大隊六番小隊)	二四三
伊地知季義 (蒲生、二番大隊七番小隊)	二四四
高橋新介 (清水、十番大隊八番小隊)	二四六
小川善太郎 (襲山、九番大隊八番小隊)	二四六
外山金次郎 (国分、正義六番中隊左小隊)	二四七
勝目喜兵衛 (隈之城、四番大隊六番小隊)	二四七
松崎迪 (熊本県飽田郡、熊本隊)	二四八
野々村三郎次 (熊本県高麗門、熊本隊十五番小隊)	二四八
大塚平太郎 (熊本県高麗門、熊本隊十五番小隊)	二四八
佐々干城 (熊本県今村、熊本隊一番小隊)	二四八
津田平士 (熊本県田崎、熊本隊十三番小隊)	二四八
東真次郎 (熊本県本庄、熊本隊)	二四八
中村與四郎 (高江、三番大隊五番小隊)	二五六
野満長太郎 (熊本県古閑、協同隊)	二五七
高田露 (熊本県、協同隊)	二五七
卯道弥二男 (熊本県、協同隊)	二五七
宗像政 (熊本県日向、協同隊)	二五七
宗像覺馬 (熊本県新屋敷、協同隊)	二五七
甲田頼尚 (熊本県、協同隊)	二五七

月田道春 (熊本県長須、協同隊)	二五七
菊地武文 (鹿兒島県、三番大隊十番小隊)	二六五
河野晋之丞 (鹿兒島下伊敷、四番大隊三番小隊)	二六七
児玉武志 (鹿兒島内之丸、二番大隊十番小隊)	二六八
塚本長民 (延岡)	二七三
千歳萬左衛門 (今和泉、貴島隊)	二七五
兼元幾衛 (穎娃、五番大隊一番小隊)	二七五
鹿屋兼輝 (志布志、四番大隊一番小隊)	二七五
若松則亮 (鹿兒島内之丸、二番大隊九番小隊)	二七六
遠坂關内 (熊本県二丁村、熊本隊十一番小隊長)	二七七
矢神直之丞 (鹿兒島県、四番大隊三番小隊)	二七八
東郷重護 (荒田、五番大隊八番小隊半隊長)	二七八
川添清一郎 (高江、四番大隊六番小隊)	二八〇
市成弥助 (国分、先鋒二番大隊六番小隊分隊長)	二八〇
切通強二郎 (高山、三番大隊九番小隊)	二八一
永野作太郎 (重富、一番大隊七番小隊)	二八一
伊東筑左衛門 (鹿兒島県、五番大隊四番小隊)	二八二
久木崙伊兵衛 (永吉、五番大隊十番小隊)	二八三
肥後十内 (永吉、五番大隊十番小隊)	二八三
曾木彦助 (永吉、五番大隊十番小隊)	二八三
山口通清 (鹿兒島武、一番大隊十番小隊半隊長)	二八四
山本常行 (鹿兒島西田、一番大隊十番小隊)	二八四

重信榮之丞 (鹿兒島草牟田、一番大隊十番小隊) ……二八四

綾部繁 (鹿兒島吉野、一番大隊十番小隊) ……二八四

河野通代 (志布志、四番大隊一番小隊) ……二八九

川畑八造 (今和泉、一番大隊八番小隊) ……二九〇

肥後愛助 (内之浦、貴島隊一番小隊) ……二九一

吉井清 (内之浦、貴島隊一番小隊) ……二九一

丸尾静 (熊本県人吉、人吉隊一番隊分隊長補) ……二九二

永井實功 (高山、二番大隊三番小隊) ……二九三

伊東祐一 (鹿兒島千石馬場、五番大隊九番小隊) ……二九五

山下正藏 (指宿、一番大隊六番小隊) ……三〇〇

高橋新介 (清水、十番大隊八番小隊) ……三〇一

小川善太郎 (襲山、九番大隊八番小隊) ……三〇一

十綴之内 (六)

野元萬之助 (永吉、行進十四番中隊) ……三〇二

出田経兒 (谷山、二番大隊五番小隊) ……三〇二

上杉頼政 (鹿兒島県、切隊四番隊) ……三〇三

坂元盛吉 (鹿兒島坂元、砲隊) ……三〇三

山本盛房 (鹿兒島武、二番大隊三番小隊分隊長) ……三〇五

深見清次郎 (鹿兒島田上、四番大隊六番小隊分隊長) ……三〇六

山下覺左衛門 (永吉、振武十五番小隊分隊長) ……三〇七

久留四郎助 (永吉、振武十五番小隊) ……三〇七

松壽十次郎 (永吉、振武十五番小隊) ……三〇七

左近允庄之丞 (永吉、振武十五番小隊) ……三〇七

佐土原藤五郎 (永吉、振武十五番小隊) ……三〇七

木村平右衛門 (鹿兒島県、一番大隊四番小隊半隊長) ……三〇八

帖佐金八 (谷山、五番大隊四番小隊) ……三〇九

池ノ上嘉太郎 (鹿兒島郡元、四番大隊六番小隊) ……三一〇

二見喜之介 (鹿兒島内之丸、二番大隊九番小隊) ……三一〇

永田喜之助 (鹿兒島加治屋町、三番大隊大小荷駄) ……三一三

兒玉直次 (永利、三番大隊三番小隊) ……三一三

川井田宗右衛門 (鹿屋、十番大隊八番小隊) ……三一三

小田市郎右衛門 (飯野、破竹一番中隊) ……三一四

穎川德幸 (飯野、破竹一番中隊) ……三一四

新名徳太郎 (佐土原、佐土原隊五番小隊長) ……三一五

竹下雄一郎 (佐土原、佐土原隊五番小隊) ……三一五

倉山孫次郎 (鹿兒島西田、一番大隊八番小隊) ……三一六

東郷静一 (鹿兒島高見馬場、四番大隊四番小隊) ……三一七

後醍院良弼 (鹿兒島上横馬場、二番大隊四番小隊) ……三一九

橋重幹 (小根占、切隊十番隊) ……三二三

松元満吉 (鹿兒島小野、二番大隊二番小隊) ……三二三

河野通英 (鹿兒島高麗町、一番大隊一番小隊小荷駄) ……三二三

小田良輔 (串良、十番大隊十番小隊長) ……三二六

有馬序介(隈之城、四番大隊七番小隊)……………	三二七
原田宗之丞(加治木、六番大隊大小荷駄)……………	三三〇
波多與藏(加治木、六番大隊大小荷駄)……………	三三〇
柚木新十郎(加治木、六番大隊大小荷駄)……………	三三〇
大重善太郎(帖佐、二番大隊二番小隊)……………	三三一
藤井甚之助(入来、切隊五番小隊)……………	三三一
相良次太夫(宮之城、宮之城隊小隊長)……………	三三一
神田橋耕内(宮之城、宮之城隊半隊長)……………	三三一
藤田彦右衛門(宮之城、宮之城隊分隊長)……………	三三一
田中重右衛門(永吉、貴島隊一番小隊)……………	三三三
池田彦四郎(花岡、五番大隊十番小隊)……………	三三三
前山國寧(栗野、三番大隊四番小隊)……………	三三四
中村常治(垂水、常山七番中隊左小隊)……………	三三五
久保田助次郎(襲山、遊軍十番小隊長心得)……………	三三六
宮ノ原直右衛門(串木野、遊撃九番小隊長)……………	三三六
本野喜太郎(平佐、十番大隊二番小隊)……………	三三七
島名正治(鹿兒島吉野、三番大隊三番小隊)……………	三三八
大山綱任(鹿兒島西田、四番大隊五番小隊)……………	三三九
林惟祥(鹿兒島西田、十番大隊五番小隊)……………	三四一
細山田重雄(襲山、一番大隊二番小隊)……………	三四二
平田成助(宮之城、四番大隊五番小隊)……………	三四四
木藤與右衛門(平佐、五番大隊一番小隊)……………	三四五

松元勇左衛門(西襲山、二番大隊九番小隊)……………	三四六
南四右衛門(鹿兒島西田)……………	三四六
島田十七郎(東襲山、十番大隊四番小隊)……………	三四七
黒川作助(蒲生)……………	三四八
橋口隼治(下甕島、勇義十三番小隊分隊長)……………	三四八
竹下莊之進(加治木、六番大隊三番小隊長)……………	三四九
曾木彦二(加治木、六番大隊三番小隊)……………	三四九
松葉新藏(加治木、六番大隊三番小隊)……………	三四九
川崎良光(鹿兒島島、四番大隊三番小隊)……………	三五一

十綴之内(七)

山口勢人(山川、二番大隊十番小隊)……………	三五三
久米十郎右衛門(鹿兒島島、二番大隊十番小隊)……………	三五三
柿本長四郎(松山、切隊三番隊分隊長)……………	三五五
深川淡水(都城、予備六小隊)……………	三五五
和泉祐太郎(五番大隊四番小隊)……………	三五六
有田道博(大崎、四番大隊十番小隊)……………	三六一
櫛山贊一(鹿兒島島、四番大隊十番小隊)……………	三六一
藤井道愛(大崎、四番大隊十番小隊)……………	三六三
伊集院久實(大崎)……………	三六三
佐々木新藏(鹿兒島新照院、二番大隊四番小隊)……………	三六四

妻屋九郎 (鹿兒島西田、三番大隊六番小隊)	三六七	長寄謙助 (鹿兒島下伊敷、三番大隊五番小隊)	四〇三
竹下良介 (鹿兒島草牟田、二番大隊五番小隊)	三六九	伊勢貞喬 (鹿兒島)	四〇三
福岡直彦 (蒲生、四番大隊三番小隊)	三七二	久留景美 (鹿兒島武、一番大隊五番小隊長)	四〇四
松村勝三 (熊本泉京町、熊本隊一番小隊)	三七五	有馬靜藏 (鹿兒島田上、二番大隊七番小隊分隊長)	四〇四
桑原種勝 (都城、予備一番小隊長)	三八一	種子田則勝 (国分、七番大隊六番小隊)	四〇四
阿久根良愛 (都城、予備五番小隊長)	三八一	益崎幾太郎 (伊集院、一番大隊三番小隊)	四〇四
川崎市次 (横川)	三八二	黒岩慶之介 (始良、十一番大隊二番小隊)	四〇五
愛甲蘓太 (永利、一番大隊五番小隊)	三八二	木佐貫愛介 (始良、十一番大隊二番小隊)	四〇五
川崎祐親 (横川、常山三番中隊半隊長)	三八三	大熊正次郎 (鹿兒島清水馬場、二番大隊二番小隊)	四〇六
大重勇熊 (鹿兒島泉、一番大隊五番小隊)	三八五	福岡経紀 (都城、予備五番小隊半隊長)	四〇六
久木田孝兵衛 (国分、二番大隊六番小隊)	三八五	黒木治信 (佐志、二番大隊十番小隊)	四〇七
菊野健助 (国分、二番大隊六番小隊)	三八五	宇都宮泰輔 (加治木、六番大隊四番小隊半隊長)	四〇八
金丸雄造 (蒲生、五番大隊一番小隊)	三八七	白尾源太郎 (加治木、六番大隊四番小隊分隊長)	四〇八
野村源右衛門 (国分、二番大隊六番小隊)	三九〇	久木元直吉 (襲山、五番大隊二番小隊)	四一〇
山下敬藏 (宮之城、三番大隊一番小隊)	三九三	飯田善吾 (申木野、勇義隊一番小隊)	四一二
大内山精一 (加治木、六番大隊八番小隊)	三九六	福永十郎 (加治木、六番大隊一番小隊半隊長)	四一三
北村次兵衛 (加治木、六番大隊八番小隊)	三九六	野田經中 (鹿屋、切隊十番小隊)	四一四
林盛 (垂水、五番大隊一番小隊)	三九八	坂元良一 (都城)	四一五
仁科源左衛門 (宮之城、三番大隊三番小隊)	三九九	安藤利孟 (都城、予備二番小隊長)	四一五
勝部泰十郎 (鹿兒島塩屋、一番大隊七番小隊)	四〇〇	羽佐間元充 (都城、予備二番小隊半隊長)	四一五
敷根市藏 (鹿兒島永吉、三番大隊六番小隊)	四〇二	岩切堅助 (都城、予備四番小隊半隊長)	四一五
佐土原才助 (太良、四番大隊九番小隊)	四〇二	小谷伴左衛門 (高尾野、勇義隊)	四一五

久長喜七郎（財部、切隊三番小隊長）……………四一六

山下兼富（都城、遊軍六番隊半隊長）……………四一六

池田静治（加治木、六番大隊二番小隊長）……………四一六

鮫島熊介（花岡、常山七番中隊左小隊）……………四一八

有田道博（大崎、四番大隊十番小隊）……………四一九

桑原種勝（都城、予備一番小隊長）……………四一九

阿久根良愛（都城、予備五番小隊長）……………四一九

金丸雄造（浦生、五番大隊一番小隊）……………四一九

十綴之内（八）

石神平（大村、三番大隊一番小隊）……………四一九

宇都宮尚次（鹿兒島、一番大隊七番小隊）……………四二〇

仁禮俊一（鹿兒島上之園、二番大隊二番小隊分隊長）……………四二〇

小倉啓介（鹿兒島上後迫、遊撃七番大隊一番小隊）……………四二一

前田重本（吉田、正義四番中隊左小隊長）……………四二三

相良長良（鹿兒島平之馬場、一番大隊五番小隊長）……………四二六

奈田健（鹿兒島山之口馬場、二番大隊十番小隊）……………四三三

本田藤左衛門（襲山、十番大隊四番小隊分隊長）……………四三三

橋口吉次（阿久根、勇義十一番小隊分隊長）……………四三四

白石惟一（鹿兒島韃韃冬、一番大隊五番小隊）……………四三四

上井甚七（鹿兒島新照院、三番大隊八番小隊）……………四三四

川上寶山（鹿兒島新屋敷、三番大隊六番小隊）……………四三六

小野仙藏（伊集院、五番大隊十番小隊）……………四三七

上床壯助（鹿兒島冷水、一番大隊九番小隊）……………四三八

木場貞丈（鹿兒島梶、三番大隊七番小隊）……………四三九

川上趙二（鹿兒島、四番大隊八番小隊）……………四四一

重久敬一（鹿兒島高麗町、二番大隊九番小隊半隊長）……………四四二

長野庄之丞（永吉、五番大隊十番小隊）……………四四五

原口常右衛門（吉利、二番大隊二番小隊）……………四四七

伊地知季修（鹿兒島後迫、二番大隊一番小隊）……………四四八

和田伊右衛門（鹿兒島常盤、四番大隊八番小隊）……………四四八

有馬義純（鹿兒島高麗町、五番大隊七番小隊）……………四四九

有村武五郎（鹿兒島樋之口、五番大隊五番小隊）……………四五〇

森長壽（鹿兒島新屋敷、二番大隊三番小隊）……………四五三

安永伸左衛門（羽月、遊撃一番十隊小隊長）……………四五七

永田源七郎（羽月、遊撃一番十隊半隊長）……………四五七

松寄休兵衛（鹿兒島高麗町）……………四五七

富山孫四郎（永吉、切隊十八番隊）……………四五八

崎元休右衛門（鹿兒島内之丸、一番大隊五番小隊）……………四五八

大重庄五郎（入来、切隊五番小隊分隊長）……………四五九

北原吉藏（鹿兒島樋之口、三番大隊六番小隊）……………四五九

久保之近（鹿兒島樋之口、三番大隊六番小隊）……………四五九

楯岡小文吾（熊本梶高橋）……………四六〇

大童治成(熊本県人吉)……………四六一

坂本敬介(国分、七番大隊一番小隊長)……………四六一

安藤喜藏(鹿児島原良、第二砲隊)……………四六一

徳持幸藏(国分、先鋒二番大隊六番小隊)……………四六五

宮本東之助(鹿児島中村、四番大隊八番小隊)……………四六七

桐野與藤二(樋脇、三番大隊十番小隊)……………四六九

弓削七郎(鹿児島西田、三番大隊五番小隊)……………四七〇

永山源左衛門(鹿児島下伊敷、四番大隊六番小隊)……………四七一

池田伊介(山田、七番大隊八番小隊分隊長)……………四七二

風呂上要之介(伊佐郡、九番大隊七番小隊)……………四七五

向江宗規治(伊佐郡、五番大隊八番小隊)……………四七六

名越轟(鹿児島韃靼冬、五番大隊二番小隊)……………四七八

十綴之内(九)

大山賢介(鹿児島西田、一番大隊六番小隊)……………四八五

染川嘉七郎(水引、勇義八番小隊)……………四八六

平山愛藏(水引、勇義八番小隊)……………四八六

和田一助(甌島、十三番大隊二番小隊)……………四八七

(署名ナシ)(五番大隊三番小隊)……………四八七

仁禮仲格(鹿児島島上、二番大隊五番小隊)……………四八八

市来求藏(横川、勇義四番小隊長)……………四八八

平岡浩太郎(福岡県行町、奇兵九番隊)……………四八九

加藤伊右衛門(加世田、振武二十一番小隊半隊長)……………四九一

黒木實澄(鹿児島坂元、第二砲隊)……………四九一

内藤儀十郎(熊本県京町、熊本隊三番小隊)……………四九二

弓削新(熊本県塩屋町、熊本隊)……………四九七

平井甚十郎(熊本神水、熊本隊七番小隊左半隊長)……………四九八

野口勝藏(熊本県飽田郡、龍口隊)……………五〇一

大浦良太郎(串木野、三番大隊九番小隊)……………五〇三

榎並八兵衛(高江、九番大隊八番小隊)……………五〇六

柏原直亮(鹿児島県、五番大隊九番小隊)……………五〇七

松山為則(鹿児島県、五番大隊九番小隊)……………五〇七

平川兼善(鹿児島樋之口、五番大隊九番小隊)……………五〇七

橋口兼重(上甌島、四番大隊八番小隊)……………五〇九

河野辰次郎(高江、九番大隊八番小隊)……………五一〇

町田貞道(垂水、十一番大隊五番小隊長)……………五一〇

東堅藏(志布志、四番大隊五番小隊)……………五一二

中原巖(垂水、十一番大隊五番小隊半隊長)……………五一三

松下助一(国分、遊軍十五番隊半隊長)……………五一四

泥谷直義(児湯郡上江村、高鍋隊三番小隊)……………五一五

菊池忠(鹿児島県、二番大隊九番小隊)……………五一六

藤田藤十郎(今和泉、二番大隊八番小隊)……………五一六

松山直之進(田布施、十二番大隊三番小隊)……………五一七

和久井鉄馬 (大分県玉津村、中津隊)	五一八
大原一二三 (福岡県東上村、中津隊)	五一八
原田種秋 (伊集院、一番大隊二番小隊)	五一九
木原胤相 (鹿児島県高麗町、一番大隊)	五一九
満尾勘兵衛 (宮之城、三番大隊一番小隊)	五二〇
長次郎兵衛 (串木野、勇義一番小隊)	五二〇
宮内彦一 (出水、二番大隊四番小隊)	五二一
斜木等 (肝付郡、一番大隊九番小隊)	五二二
町田実雄 (串良、二番大隊九番小隊)	五二二
坂元直衛 (山川)	五二三
上村壮之丞 (上甕島、常山隊三番中隊右小隊)	五二四
高江郷太郎 (出水、十番大隊十番小隊)	五二五
綾部直景 (鹿児島吉野、五番大隊五番小隊)	五二五
竹内三平 (大始良、一番大隊四番小隊)	五二九
野村孫七 (伊集院、一番大隊一番小隊)	五二九
関弥平太 (肝付郡、一番大隊九番小隊)	五三〇
長井武右衛門 (加世田、遊撃三番小隊)	五三〇
桑原周吉 (肝付郡、四番大隊十番小隊)	五三〇
山下勘次郎 (永吉)	五三一
土持直治 (宮之城、二番大隊十番小隊)	五三一
杉元孫右衛門 (伊佐郡、十三番大隊三番小隊半隊長)	五三五
大磯雄介 (宮之城、三番大隊三番小隊)	五三五

植村良右衛門 (下甕島、正義九番小隊長)	五三六
木原胤相 (鹿児島高麗町、一番大隊)	五三六

十綴之内(十)

野村忍介 (鹿児島西田、四番大隊小隊長)	五三七
別府九郎 (鹿児島吉野、二番大隊小隊長)	五三七
伊東祐高 (鹿児島県)	五三七
神宮司助左衛門 (鹿児島高麗町、五番大隊小隊長)	五三七
山口盛高 (鹿児島上冷水、二番大隊小隊長)	五三七
長倉訥 (鹿児島県 <small>那珂郡桶原村</small>)	五三七

索引

懲役人筆記東京府

(表紙)

(朱書)

「第廿一号」

十綴之内

印

一 宮之原藤八上申書

明治十年二月西郷隆盛等政府へ尋問ノ儀有之、上京スルニ隨行シ、第五番大隊五番小隊ノ押伍ニ編入セラレ、小隊長蘭田武一・半隊長川上芳仲・分隊長黒田清定ナリ、同十七日鹿兒島ヲ発シ、途市來・阿久根・出水ニ泊シ、同所來ノ津ヨリ乗船、佐敷ニ到着ス、翌日出船、午後五時頃松橋ニ着船、該地ヨリ午前一時頃発足、黎明熊本城下ニ至ルニ、俄ニ城内ヨリ大小銃ヲ発シ、我先駆ヲ遮リ拒戦ス、我隊モ之ニ応砲ス、午後十時頃植木戦争ノ急報アリ、依テ我隊外二小隊ヲ転シテ植木ニ向フ、途中ニ於テ既ニ聞ク我兵大勝利、官兵狼狽、捨ルニ死傷及ヒ銃器・彈藥等ヲ以テシ、木ノ葉ノ街道ニ走レリト、故ニ歩ヲ速ニシ植木ニ至ル、午前八時頃斥候ヲ以テ官兵ノ在ル所ヲ探ルニ、木ノ葉ノ村落ニ抛ルトノ報知アルニ、則チ我軍

三小隊ヲ以テ木ノ葉ニ進撃、我隊正面ヨリス、午前九時頃木ノ葉ニ向ヒ進軍、田原坂ニ於テ官軍ノ斥候ト小戦、追テ坂上ニ至リ急ニ三道ニ配兵、我隊ハ正面ヨリ、外二小隊左右ノ山手ヨリシテ木ノ葉ニ至ルニ、官兵壘内ヨリ発砲、兩軍激戦數刻、然ルニ我隊援山鹿ノ山路ヨリ官軍ノ背ニ出、斜ニ之ヲ突ク、官軍狼狽、死傷・鞍馬壱疋及針打銃數百挺・彈藥數万ヲ捨テ南ノ關地方ヲ指テ走ル、此時我隊負傷五六名、該夜植木ニ引揚ク、同廿四日山鹿ニ進入スヘキノ令アリ、午前六時頃植木ヲ発、九時頃山鹿ノ内新町ニ到ル、該地敵ナキ故山鹿ニ進軍、昨夜木ノ葉ノ兵暫時休息シタル而已ニシ、敵ハ南ノ關ニ退クヲ聞ク、故ニ該地ノ北面ニ哨兵ヲ張り、本隊ハ山鹿ニ休息ス、翌日南ノ關街道ヨリ官兵襲來、我隊等速ニ正面ヨリ進軍、激戦數刻大ニ勝利ヲ得、一里余追撃、官軍ノ伏屍士官五名・兵士百二十余名ナリ、味方死傷二十名ニ滿タス、我隊ハ負傷二名而已ナリ、余モ右ノ肩ニ傷ヲ受ケ、即刻山鹿出張病院へ送ラレ、翌日川尻本院へ送ラル、治療スルコト十余日、三月七日院長ノ令アリ、鹿兒島へ帰巢療養スヘシト、同九日病院ヲ発シ、八代・出水諸所ヲ經同廿三日故郷へ帰着ス、四月廿七日軍艦十四艘鹿兒島ニ入湊、

官軍數大隊上陸、時ニ我疵未平愈セスト雖トモ速ニ町田四郎左衛門ト同道、諸所間道ヲ經吉田郷ニ至リ、午後六時頃蒲生郷ニ到ルニ、諸郷ノ募兵三百名余同所ニ屯集、既ニ官兵加治木ニ上陸、蒲生ニ入ラントスルニヨリ不得止翌朝我等新兵ト同道、溝辺ヲ經横川ニ到ルニ、別府晋介加治木ヨリ忍テ来ルニ会ス、則チ同道、栗野ニ到リ、新兵三百余名ヲ以テ横川ヲ守ラシメ、鹿兒島ノ景況ヲ人吉本營ヘ急報スヘシト別府ヨリ聞テ、午後四時頃栗野ヲ発シ、翌廿九日午前三時頃人吉ニ到リ、本營ニ告ルニ、振武一大隊ヲ鹿兒島ヘ繰込ヘキト決議ス、此時我始テ各隊ノ變制アルヲ知り、我旧隊第五大隊五番小隊ハ振武一番中隊ト改号シ、中隊長園田武一ナリ、即日中島健彦振武一大隊ヲ將ヒテ人吉ヲ発シ小畑二一泊、該夜余ハ貴島清二付ヒテ横川ニ到ル、貴島清新兵ヲ編制シテ二中隊トナシ、溝辺・横川ヲ守ラシム、本隊ハ翌日同所ニ着陣ス、全軍會議、振武十一中隊ハ地形ニ精ナルヲ以テ加治木ヲ守ルヘシト、又余隊ハ山田ノ間道ヨリ蒲生ヲ經鹿兒島ヲ突カント、五月二日蒲生二一泊、同三日吉田郷(坂本力)本明邑(本名力)ニ到リ再ヒ會議、同所ヨリ下田村・坂元村ノ間道ヲ經紙屋谷七曲ヨリ玉里邸前ニ至リ、岩崎城山ノ背ヨリ黎明攻撃

セント、又我隊及ヒ市来某隊冷水谷和田某ノ邸ヨリ夏陰ノ官壘ニ掛リ、能勢矢九郎隊及山野田一甫隊ハ(新照院之)真正院谷ヨリ城山ニ掛リ、武強兵衛隊ハ武橋ヨリ下町ヲ衝キ、余ノ各隊ハ惣軍ノ応援トナリ玉江橋ニ陣シ、假ニ此二本營ヲ定メ四方ノ報ヲ待ツ、午後十時本明村ヲ発シ下田村ニ至ルニ、天俄ニ大雨ヲ降ラシ夜色暗黒咫尺ヲ弁セズ、手足ヲ以テ道ヲ探リ跌倒転滑、漸ク午前六時頃各隊玉里邸前ニ会スレトモ時間後レテ攻撃ノ機ヲ失フ、此時異論紛々、直ニ城山ヲ撃ント或ハ夜ヲ待テ攻撃セント衆議決セズ、引テ伊敷村ニ陣ス、此日余ハ振武一番中隊右小隊ノ分隊長トナレリ、同五日午前十二時各隊再ヒ玉里邸後ニ会シ、同三時頃進テ岩崎城山ヲ攻撃セント欲ス、時ニ我隊ハ冷水谷ノ先鋒タルヲ以テ夏陰ナル官軍ノ壘壁直下ニ間許ノ距離ニ至ルニ、壘上兵ヲ警ムルヲ聞ク、我隊壘ニ登ントスルニ壘外ニ柵ヲ結ヒ、要害嚴ナルニヨリ進ム能ハス、故ニ発銃ヲ禁シ抜刀シテ柵ヲ破ラントスルニ、瞬時ニ右半隊長川北某外八名死傷、之ニ依テ我中隊長園田武一令ヲ伝テ一中隊ヲ二手二分チ、一手ハ短兵ヲ駆ツテ壘ニ登レ、又一手ハ退テ官壘ヲ狙撃シ壘上ノ発銃ヲ害スヘシト、時ニ朝旭既ニ昇ル、又官軍ノ援兵之ニ応ス、

故ニ我隊進ム能ハス、依テ策ヲ転シテ再ヒ一中隊ヲ壘下ニ集メ、歟斃數十ヲ以テ壘壁ヲ掘崩ント勇往憤戦ス、又城ヶ谷口市来某隊外一中隊ハ未明城ヶ谷三原某ノ邸ヨリ掛ル、頭上ヨリ官兵発銃、市来某隊等ハ勝利不全ヲ察シ兵ヲ冷水ニ引ク、又能勢某隊外一中隊ハ真正院谷ヨリ城山ニ掛リ、官兵ノ壘ニ手ヲ掛ケ已ニ飛込マントスルトキ、官兵覺テ一時ニ発銃、我兵散乱、能勢某之ニ死ス、某外死傷數名悉ク揚クルニ暇アラス、引テ冷水ニ会ス、我隊モ遂ニ壘ヲ抜クコト能ハス、全軍ヲ伊敷村ニ引揚クルニ、本日行進大砲隊ハ内瀬山上ニ守兵ス、本日戦始ルヤ、官兵鹿兒島城外ヲ放火スルニ、火災天ヲ焦シ煙焰地ヲ覆フ、同六日午前十二時頃行進砲隊ヲ除ノ外玉江橋ニ会ス、該夜天保山ヨリ川尻ヲ渡リ、官ノ牙宮ヲ襲フノ軍議決定シ、午後十二時頃中島某・貴島某等之ヲ率ヒテ発軍、午前三時頃川尻ニ達シ、我先鋒進テ川ヲ渡ルニ前岸ニ登ラントスルトキ、官兵ノ壘壁悉ク兵ヲ戒メ、続テ発銃ノ令アルヤ否ヤ、彈丸雨ノ如ク注ク、我兵川中ニ斃ル、者數十名、後軍之レニ応セント欲スルニ水深クシテ渡ルニ自在ヲ得ス、故ニ我後軍川ノ堤防ニ伏セ発銃ヲ禁シ官兵ノ動靜ヲ窺フ、而シテ我軍川ヲ渡ル、又利アラサルヲ察シ、先鋒ヲ引揚ケ全軍ヲ転シテ武橋ヲ攻撃セントス、我隊外二中隊ト合テ武橋ニ至ラントスルニ官兵築壁益嚴ナリ、故ニ引テ荒田村ニ至ル、中島某ヨリ悉ク我兵ヲ伊敷村ニ引揚ヘント令スルニ依テ、本日零時全軍旧伊敷村ニ至リ配兵ス、我隊ハ冷水山上和田ノ畠ヲ守ル、各隊築壘守兵ス、其後行進大隊鹿兒島吉野ニ繰込ミ我軍ヲ援ク、故ニ吉野方面ノ守リ備ル、同二十日頃振武二番中隊藤井直二郎隊ヲ揚ケテ人吉ニ応援ス、故ニ我隊ノ壘ヲ合テ之レヲ守ルニ兵少シテ備不全、故ニ旧壘ヲ廢シ進テ敵壘ニ近クコト三町余、徹夜築壘シ壘上草木ヲ植ヘ官兵ノ知ルナカラシム、或日官軍我兵ノ武村ニ迫ルニ我兵守ル能ハス、壘ヲ棄テ數丁引テ之ニ戦フ數刻、時ニ我応援官兵ノ横ヲ突テ憤關進戦、官軍散乱、死骸及ヒ銃器・彈藥ヲ棄テ走ル、我軍追撃スルコト數町、揚ケテ旧壘ヲ守ル、又官兵草牟田村本道ヲ襲フ、内瀬社前毛利權平隊ノ守壁五六十間ノ所ニ押寄セ発銃甚急ナリ、我軍内瀬ノ壘壁殆ト破レントスルノ勢アリ、依テ我隊精兵七八人ヲ草牟田山上ヨリ官軍ノ背ニ出テ発銃、官軍辟易シテ草牟田村丸山ノ後ニ籠リ、午後二至ツテ新道ヲ開キ城山ニ引ク、六月二十二日官兵吉野ニ在ル我行進隊ノ壘壁ヲ破リ、吉野方面一時官

兵ノ有トナリ、翌朝行進ノ諸隊憤激勇戦、遂ニ吉野ヲ復ス、此日貴島清振武一中隊ヲ率ヒテ川内ニ応援ス、同二十四日官兵武村及紫原ニ襲来、激戦数刻、時ニ官兵ノ別軍谷山ニ上陸、我紫原壘壁ノ背ヲ突ク、我軍支ユル能ハス、退テ武岡ニ会ス、官軍尾撃シテ之レニ迫ル、此時中島健彦数隊ヲ率ヒテ応援ス、又官兵大勢ノ応援アリ、已ニシテ両軍ノ彈丸雨ノ如ク、炮声百千ノ雷ヲ欺ク、午後ニ至ツテ拔刀接戦死傷頗ル多シ、日暮ニ及テ我兵ノ彈丸悉尽キ求ムルニ所ナシ、依テ各隊不得已切齒扼腕シテ壘ヲ棄テ、水上^{地名}坂ノ上ニ退キ築壘守兵、余モ一分隊ト武岡ニ応援ス、此ヨリ以前入来郷ノ戦ヒ我兵不利、擾乱シテ行ク所ヲ不知、同廿六日官軍入来ノ山道ヲ越ヘ郡山郷ニ出テ、比志島ノ間道ヲ經北郷某及武某等ノ壘壁ノ背ニ出テ、我不意ヲ討ツ、我兵支ユル能ハサルヲ知テ伊敷方面及坂元村ノ兵ヲ下田村ニ引揚ク、官兵尾撃伊敷村ノ民屋ニ放火ス、依テ我水上坂ノ兵守ル能ハス、本日零時一隊ヲ小野村山上ニ伏セ、全隊ヲ花房村ヨリ下田村ニ会シ、後小野ノ兵ヲ揚ケテ同所ニ至ルニ、既ニ我中隊長蘭田武一負傷ヲ聞ク、同廿六日官兵大二襲来、時ニ我隊及ヒ武強兵衛隊ハ本日ノ応援トシテ下田村ニアリ、官軍我振武

隊ト行進隊ノ中間ニ出ツ、依テ我隊直チニ行テ是ニ戦フ、数刻ニシテ吉野方面ニ在ル諸隊彈藥ニ尽キ悉ク兵ヲ吉田・重留ノ間ニ引ク、故ニ我隊左翼ヲ欠キ戦ヒ機ヲ失ヒ既ニ拔刀接戦セント欲スル時、武某一隊ヲ率ヒテ我隊ヲ援ク、我隊勢ヒ再ヒ振ヒ官軍ト激戦、終ニ数町ノ外ニ走ラス、午前十時頃ニ至リ我右ノ手ニ負傷、続テ我右小隊長町田四郎左衛門負傷、武強兵衛戦死、午後三時頃ニ至リ振武ノ全軍悉ク彈藥ニ尽キ戦フニ無術、各隊ヲ吉田郷ニ引揚ク、本日我隊ノ死傷二十余人ナリ、夫ヨリ都ノ城病院へ送ラル、治療二十余日、時ニ諸方ノ味方不利、官軍都ノ城ニ迫ル、夫ヨリ各病院ヲ転送セラレ、終ニ延岡^(長井カ)永井邑ニ於テ軍門ニ降ル、爾後戦状ヲ不詳、

明治十一年四月

鹿兒島県

宮之原藤八

二 長寄信夫上申書

戦記

貴島隊第六番小隊外一中隊隈府ヲ守ル、伊藤直次之ヲ率ユ、第二番大隊四番中隊ニ重峠ヲ守ル、四番中隊援ヲ隈府ニ請フ、三月十六日伊藤直次貴島隊半隊ヲ分チテ之ニ

赴キ援ハシム、本日敵兵二重ヲ攻ム、勢ヒ烈疾ナリト雖トモ四番中隊憤戦之ヲ走ラシ、貴島隊抵ルトキ戦既ニ決セリ、(後尾カ) 后後貴島隊止リ居ルコト十日許ニシテ隈府ニ還リケサヲ村ヲ守リ山鹿間道ニ備フ、三月三十日敵兵来リ攻ム、貴島隊死傷数多、殆ント支ユル能ハス、将サニ守ヲ撤テ退キ走ラントス、適々本道ノ戦ヒ我兵田間ニ伏ヲ設ケ以テ備無キヲ視ス、敵兵先ヲ争テ疾ク進ム、両間僅ニ十歩許ナラントス、我兵遽ニ蹶起シ咄噉刀ヲ揮テ逼ル、敵兵縦横擾乱、先ヲ争ヒ兵器ヲ棄テ走ル、然ルヲ以テ間道ノ敵モ又タ退キ走ル、四月九日敵兵大幸四面野ヲ蔽テ到ル、先是我鳥巢本營兵ヲ遣リテ勢ヲ援クト雖トモ猶僅ニ四中隊ニ過キス、守備甚タ疎ナリ、両軍互ニ銃砲ヲ交発シ各勇威ヲ振テ戦フ、煙数里ニ(彌滿カ) 纏漫シ、響キ天地ヲ震撼ス、銃丸雨注砲丸空中ニ破烈シ、恰モ白日煙火ヲ視ルカ如シ、我兵終ニ保ス可ラサルヲ悟リ、夜ニ入テ竹迫ニ退ク、

明治十一年四月廿六日 鹿兒島県 長寄信夫

三 能勢運雄上申書

戦記景況概略

于時明治十年上旬ノ頃ロヨリ陸軍大将西郷隆盛大軍ヲ引率シメ上京ノ巷説アリ、熊本鎮台漸々壘ヲ高フシ、溝ヲ深クシ、兵糧・彈藥ヲ城中ニ輸入シ防戦ノ伏ヲ顕ハス、故ヲ以テ物情騒然タリ、同十八日鹿兒島県令大山綱良使ヲ熊本鎮台及ヒ県庁ニ遣シ、告ルニ西郷ヲノ上京ノ旨趣ヲ以テシ、且中原尚雄ヲノ口供ヲ贈ル、此ノ日熊本県令富岡敬明ヨリ池邊吉十郎其ノ他五六名ニ県士鎮撫方命ス、同十九日大砲三発ヲ以テ非常ヲ四方ニ報ス、既ニシテ熊本城火起り府下連焼数百家、焰烟天ニ漲キル、日色為ニ渋レ、人民雜沓扶老携幼ヲ四方ニ逃避シ道路織ルカ如シ、此ノ時ニ乘シ曩ニ同志間相議シ、窃ニ集メ置キタル処ノ兵器ヲ市外ニ運(運送カ) 搜スルコトヲ得タリ、夕刻県庁御船ニ転移ス、是ニ於テ同志三四十名建宮村某氏ノ宅ニ会シ、更ニ相議シテ曰、中原尚雄ヲノ口供ニ拠レハ其ノ根元全ク要路ノ大臣ヨリ出ルコト疑フ処ナシ、実ニ国家安危社稷存亡ノ秋ナリ、語ニ曰、人ノ禄ヲ食者ハ其ノ難ニ死ス、況ンヤ数千年ノ皇恩ニ沐浴スルニ於テテヤ、嗚呼忠臣烈夫苟クモ憂國ノ念アル者、此ノ時ニ当リテ豈ニ傍觀座視

スルニ忍シヤ、敢テ官軍ニ抗敵スルニアラス、内ハ姦臣賊子ヲ攘除シ、外ハ武威ヲ海内外ニ輝カシ、忝クモ天皇陛下ノ至聖至仁ノ徳ヲ四表ニ光被セシメントノミ断然方向ヲ定ム、直チニ集ル処ノ同志ヲ以テ隊伍ヲ組ミ、佐々友房ヲ推シテ小隊長トナシ、隊号ヲ敵愾隊ト称ス、同二十一日薩軍川尻ノ駅ニ到着ス、此ノ夜台兵ヨリ兵端ヲ開ク、同二十二日薩兵熊本城ヲ攻撃ス、砲声天地ニ轟ロク、此ノ日池邊吉十郎薩軍ノ本營ニ到リ、偶マアラサルヲ以テ松浦新吉郎ヲ推シテ大隊副長トシ、櫻田惣四郎・山崎定平・大里八郎參謀タリ、部伍未タ定マラサルヲ以テ仮ニ隊ヲ分ツテ七小隊トナス、余カ隊一番小隊トナリ兵ヲ健軍祠前ニ萃ク、此ニ於テ兵器ヲ携ヘ入隊ヲ乞フ者陸續相繼、申牌熊本ニ向フテ進発ス、此ノ夜大江村ニ宿陣ス、同二十三日黎明大江村ヲ発シ出町口ニ進軍ス、是ヨリ先キ池邊吉十郎薩將篠原國幹ヲト段山口ニ向イシカ、(吉十郎之)我カ熊本隊発スト聞キ、出町ニ来リ諸軍ヲ指揮ス、時ニ薩兵急ニ熊城ヲ抜クノ色ナケレハ、我カ一番及ヒ七番・九番ノ三隊長本營ニ到リ乞フテ日、速カニ植木街道ニ進撃シテ官軍ノ援路ヲ絶ント、本營之ヲ許ス、即夜植木ニ向イテ進発ス、道ニシテ薩軍木ノ葉・(稲佐力)稲ナサノ戦イ大勝

利ノ報アリ、之ニ依テ植木街道ノ憂ヒ既ニ少キカ故ニ転シテ吉次ニ向フ、其ノ夜木留ニ陣ス、同二十四日伊(伊倉力)クラニ進撃、遂ニ高瀬ニ至ル、其ノ夜伊倉ニ帰陣ス、同二十五日斥候来リ報ス、官軍一大隊許高瀬ニ繰込メリト、此ノ日小天ヲ守ル処ノ薩兵ト相議シ、我カ三小隊ヲ合シテ高瀬ニ進撃ス、薩軍橋ヲ渡リテ進ム、我カ軍津ヲ涸リテ向イ撃チ、遂ニ繁根木ニ到リ官軍ト岩崎ノ原ニ戦フ、日已ニ晡ニ及ヒ勝敗決セス、夜ニ到リ全軍引揚ケテ伊倉ニ退守ス、同二十六日熊本隊ノ全軍玉名寺田原ニ於テ官兵ト戦フ、伊倉出張ノ三小隊モ我カ全軍ノ左翼ニ進ム、時ニ林中ヨリ紅旗ヲ以テ頻ニ我カ兵ヲ麾クアリ、紅旗ハ味方ノ符号ナル故ニ進シテ是ニ近ツクニ、忽チ伏兵起ツテ我カ軍ヲ瞰射ス、飛丸雨ノ注クカ如シ、血戰暫時我軍大ニ敗走ス、死傷甚タ多シ、我カ大隊長池邊吉十郎自ラ銃ヲ以テ敵二人ヲ倒シ、腹ヲ傷キヨフヤク重圍ヲ脱シテ退ソクコトヲ得タリ、日已ニ暮レントスル頃我カ一番小隊長佐々友房一隊ヲ纏メ後レテ吉次越ニ来ル、我カ軍隻兵モ止マリ守ルモノナキヲ見テ慨歎日、我レ此ノ地ヲ熟視スルニ城北第一ノ險要ナリ、此ノ險ヲシテ敵ノ有トナサシメハ、縦イ西郷ヲノ明智計略有ト雖モ万拒ク可ラス、

且今夜官軍ノ尾撃ハカリ難シ、寡兵孤軍ナリトモ豈ニ此ノ險ヲスツルニ忍ンヤ、是則チ我輩ノ死処ナリト、衆ミナ感服奮激死ヲ誓イテ守ル、友房余ニ謂曰、我輩此ニ在ルコト人未タ知ル可ラス、且我カ全軍何ラ乃地ニアルヲ詳カニセス、願ハ子全軍ノ在ル処ニ到リ此ノ状ヲ陳ヘ来レト、余直チニ吉次ヲ発シ大窪ニ到ル、熊本隊ハ此ノ日寺田原ノ戦イニ敗衄シ隊伍散乱、道ヲ二ツニ分ツテ漸ヤク大窪・中村ノ兩処ニ屯ロセリ、余參謀ヲ二會シ、告ルニ友房ノ見ヲ以テス、參謀ラ曰、友房小勢ヲ以テ止リ守ル、其ノ意感ス可シ、義援ハサルヲ得ス、急ニ援兵ヲ出ス可シト、議未タ決セサルニ、其夜三更薩將桐野利秋・篠原国幹・村田新八・別府晋介其ノ兵凡ソ三千余人ヲ引率シ大窪ニ到着、各兵ヲ三ツニ分ケ道ヲ異ニシ、明日高瀬ニ會戦セント前後大窪ヲ発ス、村田新八千余人ヲ引率シ、熊本隊山崎定平・松浦新吉郎・松崎迪ヲ村田ニ隨テ吉次越ニ達ス、之ニ依テ我カ一番小隊大ニカヲ得、再生ノ思ヲナス、同二十七日薩軍高セニ進撃ス、終日砲声烈シクシテ山嶽為ニ崩ントス、遂ニ抜ク能ハスシテ退キテ木ノ葉・稻ノ佐ノ兩処ヲ守ル、此ノ日薩及ヒ我カ本營ヲ木留ニ置ク、三月三日官軍大挙吉次・耳取ヲ攻撃ス、勢

甚タ銳ナリト雖トモ薩及ヒ我カ一番小隊必死堅ク守リテ防戦ス、村田・篠原ヲ自ラ刀ヲ揮ツテ軍ヲ指揮ス、味方死傷尠カラス、同四日戦イ益々猛烈、此ノ日耳取ノ熊本隊五番小隊長三宅新十郎創キ、薩將篠原国幹戦死、戦イスヘテ一昼夜、官軍遂ニ大ニ敗レ走ル、敵ノ死屍路ニ横ハルモノ数十名アリ、此ノ日田原口ノ戦甚々急ナルヲキ、參謀山崎定平我カ隊ヲ引率シテ田原坂ニ到ルニ、味方ノ援兵余リアルヲ以テ退キテ那智山ヲ守ル、同五日那智山ヲ発シ吉次ニ歸ル、此ノ日数ヶ処ニ台場ヲ築キ哨兵ヲ四方ニ張り、専ハラ伊倉本道ニ備ユ、同十日黎明白木村ヨリ薩兵官軍ノ砲台ヲ衝カントス、道險ニシテ進ム能ハス、遂ニ退キテ吉次ヲ守、同十四日比斥候来リ報シテ曰、田原口ノ戦イ甚々危急ナリト、之ニ依テ我カ小隊モ佐々友房半隊ヲ引率シテ田原口ニ趣ク、戦イマサニ酣ナリ、我カ隊直チニ薩兵ト合シテ拒キ戦フ、此ノ日我カ參謀大里八郎額ヲ創ツク、同十五日戦益猛烈、此ニ於テ我カ隊薩兵ト相議シテ曰、此ノ如ク互ニ壘ニヨリテ戦一時ハ勝敗速ニ決セスシテ徒ニ彈藥ヲツイヤスノミ、短兵直チニ屠ラント、午後五時コロ我カ軍刀ヲ揮ツテ勇往稀突ス、遂ニ壘壁ヲ得タリト雖トモ左翼守ルニ悪キヲ以テ

少シク退キ、右翼ヲ張りテ防キ守ル、此ノ日頗ル勝利ニテ銃器・彈藥ヲエタリト雖トモ我カ兵死スル者十有余名、負傷モ亦タ尠ナカラス、同十六日戦イ止ム時ナシ、我カ隊連戦一昼夜ニシテ兵士大ニ疲勞シ、加フルニ銃器多ク破損スルヲ以テ交代シテ木留ニ帰ル、同十七日はヨリ先キ官軍我カ兵ノ田原ヲ横撃センコトヲ恐レテ、日々斥候ヲ出シテ我カ吉次ノ台場ニ進撃ノ状ヲナス、此ノ日モ亦タ来リ攻ム、戦イ暫時ニシテ退ソク、同二十四日官軍黎明大霧ニ乗シ吉次及ヒ三ノ嶽・耳取ノ三ヶ処ヲ攻撃ス、我カ一番隊吉次ノ本道ニ邀撃フ、大ニ之ヲ走ラス、四月一日曉霧ニ乗シ官軍復来リ撃ツ、我カ隊本道ニ拒キ戦フ、官軍遂ニ我カ背面ノ半行山ヲ抜キ山上ヨリ頻ニ我カ軍ヲ瞰射ス、故ヲ以テ我カ軍守リヲ失シ三ノ嶽ニ退ソク、同二日我カ一番小隊三ノ嶽ヲ下リ山口村ヲ守ル、同十四日官軍川尻ヲ取り、遂ニ城兵ト合スルノ報アリ、此ノ日薩及ヒ我カ熊本本營ヲ木山ニ移ス、池邊吉十郎西山ニ来リテ三ノ嶽及ヒ山口ノ兵ヲ引揚ケ、該夜退ソキテ中村ニ陣ス、同十五日味方惣軍木山方面ニ退ソク、同十七日黎明薩肥ノ兵ヲ合シテ二ツニ分ケ御船ニ進軍ス、一軍ハ本道ヨリス、一軍ハ飯田山ヲ攻ム、飯田山ノ官兵已ニ去テ見

ヘサルヲ以テ兩道ノ軍合シテ御船ニ進撃ス、官兵亦タ去テ見ヘス、シハラクアリテ官軍御船ニ襲来ル、薩兵・協同隊邀戦大ニ之ヲ走ラス、銃器・彈藥トウヲ得タリ、同二十日官軍大拳緑川ヲ渡リテ御船ヲ攻撃ス、我カ軍防戦フ、彈丸雨ノ注クカ如シ、官兵ノ鋒銳ニシテ当ル可ラス、戦争三時間ハカリニシテ味方右翼ヨリ破レテ、遂ニ諸壘一時ニ敗走ス、官軍勝ニ乘シ追撃スレトモ我カ軍隊伍散乱、止リ戦フコト能ハス、遂ニ矢部濱町ニ到リ泊ス、此ノ日我カ半隊長眞鍋新十郎戦死、其ノ他死傷甚タ多シ、同二十二日熊本隊矢部男成村ニ於テ隊伍編製シテ五中隊トス、余カ隊三番中隊トナリ中隊長佐々友房トス、同二十三日味方惣軍肥後地方ヲステ、割拠ノ策ニ決ス、同二十四日早朝我カ軍男成ヲ発シ馬見原ニ陣ス、同二十五日黎明諸軍人毎々糧食・芒鞋ヲ負ヒ馬見原ヲ発ス、我カ隊胡麻山越ニ向フ、胡麻山ハ所謂五家山ノ背面ニシテ深山幽谷、牛馬過ル能ハス、加フルニ風雨烈シクシテ行路意ノ如クナラス、負フ処ノ糧食・芒鞋モ殆ント尽ントス、或ハ居民ニ食ヲ乞イ或ハ芒鞋ヲ自ラ製シ、木ノ根ヲ攀シ竹枝ニ縋リ、漸ヤク四日程ニシテ惣軍前後江代ニ達ス、同二十九日我カ惣軍人吉ニ到着、本營及ヒ諸軍ヲ西間村

二宿陣ス、五月三日我カ三番及ヒ二・四ノ中隊人吉ヲ発シ遠ノ原ヲ守ル、同四日コロ官軍山野ニ進入ノ報アリ、居民ヲ我カ軍ニ告テ曰、遠ノ原ヨリ山野ニ出ル間道アリ、道程三里ハカリニシテ官軍屯集スル処ノ背後ノ山上ニ出ツト、此ニ於テ參謀山崎定平三中隊ヲ引率シテ夕刻遠ノ原ヲ発シ、暗夜深山幽谷ヲ經過シテ山野ニ向テ潜行シ、既ニ石ゴチニ到ラントスルトキ、灯火數十村間ヨリ顯レ出ツ、直チニ斥候ヲ出シテ窺ニ之ヲ偵ハシム、斥候帰り報シテ曰、敵モ亦タ来リ討ツナリト、此ニ於テ戦ヲ交ユト雖トモ地形便ナラサルヲ以テ猶引テ遠ノ原ニ退ソク、同十一日薩将来リテ山野ヲ進撃センコトヲ議ス、我カ軍之二同ス、同十二日黎明池邊吉十郎我カ三中隊ヲ引率シテ山野ニ進撃ス、薩軍・協同隊大ニ官軍ヲ走ラス、我カ隊後レテ之ニ会シ、直チニ薩兵ト合シテ追撃ス、夕刻官軍ト鬼神山ニ戦フ、官軍遂ニ敗レテ水俣ニ引揚ク、同十三日水俣ニ進撃ス、我カ三番中隊深川村ニ到リ暫ク休憩シ、午後三時コロヨリ深川村ヲ繰出シ深川ノ山下ニ整列シテ四方ヲ瞻望スルニ、各地ノ戦争マサニ酣ナリ、時ニ斥候帰り報シテ曰、官軍今此ノ山上ニ繰込メリト、隊長佐々友房曰、量ルニ敵未タ我カ軍ノアルヲ知ラサル可シ、

速ニ行テ不意ヲ討ツ可キナリト、ヒソカニ兵ヲ澗道ヨリ登ラシメ忽然敵ノ正面ニ突出ス、官兵驚怪出ン処ヲ知ラサルニ、我カ兵斉シク万銃ヲ撃射吶喊ニ向フ、官兵潰乱狼狽、先ヲ争フテ走ル、大ニ之ヲ追躡尾撃、遂ニ壘ヲ奪テ之ヲ守、既ニシテ官軍大挙猶返撃ス、戦イ頗ル激烈ナリ、同十四日戦益々烈シ、此ノ日薩兵一中隊来リ援フ、同十五日戦イ尤モ劇烈ナリヲ聞キ、薩將辺見十郎大弾薬及ヒ醇酒ヲ贈リテ軍士ヲ慰勞ス、故ヲ以テ兵氣大ニ振フ、我カ三番中隊三昼夜ノ連戦ニテ兵士疲勞シ、加フルニ暴雨瓶水ヲ覆スカ如ク、我カ銃半ハ口込メニテ弾薬浸潤ユルコト能ハス、故ニ四番中隊ト交代ス、同二十五日四番五番ト交代、此ノ日モマタ大雨盆ヲ傾ルカ如ク、弾薬湿濡尽ク発セス、此ニ於テ衆皆銃ヲステ刀ヲ抜イテ空シク台場ヲ守ル、此ノ時ニ乘シ官兵斉シク進ミ来リ、我カ兵支エントスレハ彈丸雨ヨリモ繁ク、退カント欲スレハ深谷数切輒スク下ルコト能ハス、或ハ単身敵軍ニ突入シ或ハ山下ニ転ヒ落チ、隊伍散乱シテ大ニ潰ユ、此ノ日我カ兵死傷甚タ多シ、同十六日我カ三番及ヒ二・四ノ中隊壘ヲ山上ニ築キテ之ヲ守ル、同十七日午後一時頃官軍進ンテ薩兵ノ胸壁ヲ攻撃ス、本道及ヒ右翼敗レ味方守ニ便

ナラサルヲ以テ惣軍大境ニ引揚、我カ三・四ノ中隊ハ小河内ニ到リ、其ノ夜小河内ヨリ六ヶ所ニ向テ進発ス、同十八日薩兵官軍ト猪ノ嶽ニ戦フ、我カ三・四ノ中隊敵ノ横ヲ衝カント六ヶ所ヲ進発ス、道險ニシテ行クコトヲ果サス、空ク引キテ六ヶ所ニ帰ル、明日我カ隊進ンテ雉山ヲ守ル、同二十日頃官ノ軍艦水俣ニ着港大軍上陸ス、我カ軍山上ヨリ之ヲ見ルヤ、急ニ哨兵ヲ四方ニ出シテ守リヲ嚴重ニス、同二十一日頃官軍進ンテ矢筈嶽ヲ取ル、是ヨリ先キ官軍日々台場ヲ築キ守備ヲ嚴ニシテ急ニ進撃色ナシ、明日我カ軍間道ヨリ矢筈ノ軍ヲ横撃セント進ンテ嶽ノ半腹ニ至ル頃、官軍既ニ之ヲ知りテ万銃ヲ進発ス、是ニヨリ勢イ達ス可ラサルヲ察シマサニ退カントス、時ニ矢筈間道ヲ守ル薩兵我カ軍ニ交代ヲ乞フ、依テ代リテ之ヲ防守ス、暮ニ到リ亦タ薩兵ト交代シテ全軍雉子山ニ引揚ク、道ニシテ矢筈方位ニ当リ砲声烈シク聞ユ、顧テ之ヲ望ムニ官軍既ニ薩兵ヲ破リテ山下マテ追撃シ来ル、我カ軍直チニ左右ノ山ニ登リテ拒キ戦フ、遂ニ之ヲ走ラス、此ノ日我カ小隊長高嵩義恭臂ヲ創ツク、同二十四日コロ我カ三番及ヒ四番ノ中隊長各半隊ヲ合シテ矢筈嶽ヲ夜襲ス、道險ニシテ輒スク登ル能ハス、兵士皆銃ヲ負イ

岩ヲ攀チテ漸ヤク敵ノ壘下ニ達シ、諸軍刀ヲ抜キ音シク壘中ニ突入シ接戦暫時、遂ニ台場ヲ取得タリト雖トモ衆寡敵セス、從容雉子山ニ退ソク、此ノ日我カ小隊長鳥井某シ戦死ス、其ノ他死傷尠ナカラス、六月上旬ノ頃熊本隊大口ニ引揚ク、同処一泊、明日進発シテ石ゴチニ到リ、台場ヲキツキ之ヲ守ル、同十三日頃官軍大拳石ゴチ及ヒ小河内・六ヶ処ニ進撃、午後十二時比六ヶ所ノ薩兵敗レタルノ報アリ、故ニ味方守ルニ便ナラサルヲ以テ大口ニ退キ守ル、出水口ノ官軍紫尾山ヲ越テ大口マテ追撃シ来ル、薩ノ干城九番隊邀戦フ、遂ニ大二之ヲ走ラス、此ノ日銃器・彈藥ヲ得タリ、同十八日官軍大拳曉霧ニ乘シ我カ高熊山ノ壘ヲ攻撃ス、勢イ甚タ猛烈、官兵進ンテ我カ右翼ノ台場ヲトル、全軍殆ント敗レントス、我カ中隊長佐々友房奮激、軍ヲ指揮シテ拒キ戦フ、遂ニ大二之ヲ走ラス、此ノ日余重創ヲ受ケ、都ノ城病院ニ入院ス、故ニ後事不詳、既ニシテ都之城危キヲ以テ病院ヲ高城ニ移ス、居ルコト日アリテ薩兵敵ノ間諜二名ヲ縛シ之ヲ詰問スルニ、始メハ事ヲ左右ニシテ情実ヲ吐露セス、拷問嚴ニ至ル、此ニ於テ婦人苦痛ニ堪ヘス実ヲ述テ曰、妾等ハ元鹿兒島ノ住ナリシカ、過日旧主某窃ニ婦家セシヲ妾直チニ

官二訴へ、既ニ該人モ官ノ拘スル処トナレリ、此ノ際多ク金錢ヲ賜ハレリ、官又妾ニ命シテ曰、高城病院ノ患者百人ニ充ツルニ及ンテ火ヲ縱チテ之ヲ焼殺セヨ、事モシ成ルヲ得ハ賞ハ其ノ乞処ニ任セシト、故ヲ以テ妾ヲ母子当病院ノ看病人トナリテ傷者ノ増加スルヲ待テリ、一旦利欲ニ眩惑シ、遂ニ此ニ至ル、婦人ノ身願ハクハ助命セラレンコトヲト、其ノ後諸々転院、遂ニ延岡ニ到ル、八月十五日官軍延岡ニ進入、此ノ日大患ノ者ヲ永井村ニ移(長井カ)ス、同十七日官軍砲声枕頭ニヒ、クト雖トモ重創起能ハス、進退維ニ谷レリ、余ヲモヘラク、事ナラスシテ割腹スルハ武夫ノ本色ト雖トモ徒ニ乱臣賊子ノ汚名ヲ受ケケニ遺憾ナラスヤ、寧口從容縛ニ就キ詳ニ素志ヲ陳へ、快ヨク常刑ヲ受ケント断然決心シテ、同所ニ於テ縛ニ就ケリ、

(年月日脱)

熊本県
能勢運雄

四 仁禮猶介上申書

明治十年二月陸軍大将西郷隆盛等政府ニ尋問ノ儀ニ就テ上京、余モ素ヨリ同意ニシテ随行、第式砲隊小頭トナリ、

同十七日鹿兒島ヲ発程、大口筋ヨリ人吉ニ繰込ミ八代ニ着陣ノ処、熊本県下途中ニ於テ先鋒ノ隊ニ台兵ヨリ砲撃シ、不得止開戦ニ議決ノ報ヲ聞キ、則チ繰出シ、同県下日向崎ニ繰込ミ華岡山両所ニ壘ヲ築キ、拾二門ノ砲ヲ備へ一時ニ連発、城兵ト砲戦ス、後チ長六及ヒ安政ノ両橋ニ砲ヲ備へ昼夜砲戦頗ル烈シ、后チ分隊長トナリ、出町赤尾口又者正面ヨリ砲戦、是モ亦同前ナリ、熊本県下川尻駅味方守兵同所接戦、終ニ味方敗走シテ其夜惣軍ヲ同県下木山ニ引揚タリ、後チ又矢部ニ至ル、我隊長田代某モ川尻破レノ以前戦死ス、半隊長桂某モ於川尻駅ニ手負タリ、此際ニ当リ我砲隊モ解隊シテ各銃隊ニ編入シ、余モ又振武八番中隊左小隊ノ命ヲ受ケ、各隊ト共ニ人吉ニ向テ進軍シ、更ニ軍配ニ可及ト令アリ、即チ胡麻山諸山道ヲ越シ人吉ニ着陣ス、本營ヨリ鹿兒島進軍ノ令各小隊ニ達ス、直チニ進発シテ眞幸吉田郷ヲ經テ蒲生郷ニ着陣ス、会合ヲ期シテ鹿兒島県下伊敷村ニ到着ス、其夜四時頃ニモ候ヤ、城山ニ夜撃ス、敵要害時ニ大雨降りテ終日防戦ス、我半隊長戦死ス、其夜亦伊敷村ニ引揚タリ、翌夜我軍川尻ヨリ夜攻ス、我隊先鋒トシテ堤前ニエイ々声ニテ散布シ、劇戦シテ前岸敵壘ノ下ニ抵リ石墻ニ馳登ン

トスル時、敵大小銃ヲ雨射シ、我後軍モ発射スルニ依リ夾撃トナリ、故ニ進コト能ハス、繰引シテ引揚タリ、于時川流満潮ニシテ死傷ノ者揚ルコトヲ得ス、海外ニ流出シテ全ク拾七名ヲ失セリ、玉江橋ニ壘ヲ築キ守兵ス、此地ニ於テ同五月日不詳暫時防戦ス、同廿五日桂山ノ戦ヒ敗報ヲ聞キ、則チ応援トシテ我力左小隊ヲ繰出シ、戦ヒ暫時ニシテ川上村ニ引揚ケ、当夜岡之原村丸岡ト申処へ守兵ス、右小隊モ川上村ニ引揚ケ一中隊トナリ、翌廿六日吉田郷ニ引揚ケベキ命アリテヨリ引揚タリ、当所一泊シテ帖佐郷ニ至リ、各隊各所ニ配兵ス、我隊ハ蒲生漆邑ニ守兵、一泊シテ溝辺村ニ至リ、三四日モ守兵、各隊横川諸所ニ守兵ス、振武各隊恒吉ニ引揚、百引ニ進撃ス、我隊正面先鋒トシテ拔刀、直チニ切り声ヲ掛ケテ進入、接戦暫時ニシテ敵大敗、我隊二三名手負タリ、敵ノ死骸頗ル多シ、大勝利ヲ得テ又恒吉ニ引揚ケ、大崎応援トシテ進軍ノ処、途中荒佐野ト申処ニ於テ戦ヒ烈シ、我軍彈藥尽キテ当夜志布志ニ引揚ケ、当所ヨリ庄内山田村二宿陣シテ高原ニ進撃ス、敵要害ニシテ落ス事能ハス、又山田村ニ各隊引揚ケタリ、高原ニ進撃スルコト両度ニシテ是レ同前ナリ、同所ニ於テ振武七番中隊中隊長トナリ、

末吉郷之内通り山ト申ス処ニ守兵之命アリ、即チ進発ス、通り山本道筋ニ土豚ヲ築キ守兵ノ処、月日不覚未明ヨリ敵来襲、振武各隊壘ヲ築キ防戦ス、我隊本道ニ在テ防禦ノ処、敵進撃スルコト頗ル烈シ、我後軍本道ノ中央ヨリ敗走、我隊都之城ヲ差シテ引揚ル中途ニ於テ戦ヒ暫時、終ニ敗走、我隊モ散々ニシテ当夜山中ニ宿陣シ、未明（午カ）ノ峠ヲ越シ飲肥地清武二兵ヲ引揚ケ、壘ヲ築キ守兵ノ処、敵襲来、暫時防戦ス、振武各隊ヲ宮崎ニ引揚ケ会令ヲ期シ、木脇ト申ス処ニ守兵ノ命アリ、当所ヲ差テ進発守兵ス、后チ佐土原川二兵ヲ引揚ケ守兵ノ令アリ、即チ進軍川堤正面ニ壘ヲ築キ守兵ノ処、敵襲来、暫時防戦烈シ、敵川ヲ越スコト能ハス戦ヒ烈シク候処、各隊美々津川堤ニ引揚ベキノ命アリテヨリ即チ引揚ケ、美々津川堤ニ壘ヲ築キ川ヲ隔テ守兵ノ処、八月五日敵川向ノ堤ニ襲来、諸所ニ発射ス、我隊之ニ応セズ敵川ヲ渡リテ進軍ヲ待居、余レハ台場ノ上ニ在テ敵ノ様子ヲ伺リ見ルニ、敵ハ之ヲ狙撃ス、其彈丸ノ為ニ重創ヲ負ヒ直チ二病院ニ至ル、療養ス、又各所ノ病院ヲ經テ日州延岡永井村ト申ス（長井カ）処ニ退院ス、遂ニ官軍襲来、我軍敗テ此ノ地ニ迫ル、時ニ余病院ニ在テ降伏ス、

右、戦地景況申上旨奉恐入、見聞ノ儘如斯御座候也、

寅四月十八日

仁禮猶介

五 木脇盛清上申書

于時明治十年春西郷隆盛出京ノ際随行ヲ乞テ、五番大隊
 壹番小隊給養トナリ、同年二月十七日鹿兒島ヲ発シ、途
 中熊本県下川尻駅ニ於テ先鋒ヲ鎮台兵ニ遮ラレ、故二同
 廿二日黎明ヨリ籠城ノ台兵ヲ攻撃ス、烈戦スト雖トモ城
 ヲ抜コト能ス、圍テ防戦ス、三月三日田原口応援トシテ
 進軍、田原坂ニ於テ暫ク戦テ兵ヲ内村ニ向、少戦シテ同
 所ノ嶮ヲ取、此地ヲ守コト数日、同廿日田原七本ヲ破リ
 植木ニ突入、街市ヘ火ヲ縦ツ、内村ノ守兵ヲ引揚、山鹿
 街道ヨリ植木町ヲ襲ヒ、激戦スト雖トモ利アラスシテ暮
 二及ヒ味取町ニ兵ヲ引揚、同二十三日植木ヲ横撃争戦ス
 ト雖トモ勝敗決セズ、改寄村ニ壘ヲ築防戦ス、此トキ二
 番大隊七番小隊半隊長トナリ、植木・木留ノ中央ノ壘ヲ
 守、同四月六日午前六時敵襲来、我左翼ノ壘ヲ取ラル、
 分隊長今給黎某ト謀テ兵ヲ分チ潜メ敵背ニ出、一発ヲ期
 シ不意ニ切入テ忽チ旧壘ヲ取返シ、敵散乱シテ潰走ル、
 爰ニ於テ右腕ニ銃創ヲ蒙リ木山村病院江退キ療養ス、后

千鹿兒島ニ帰ル、五月二十四日振武本營ニ属ス、同二十
 五日十時敵兵郡山ヨリ比志島ノ間道ヲ過テ、上ノ原ノ我
 壘背ヲ突レ支ユル能スシテ壁ヲ撤テ下田街道ニ兵ヲ揚、
 行進(奇兵カ)寄兵ト合シ天上ケ峯ノ敵ヲ襲、此トキ中隊長武郷
 兵衛・餅原正之進兵ヲ指揮シ奮戦進テ彈丸ニ当リ斃ル、
 烈戦スト雖トモ守ルニ便ナラスシテ同二十六日重富二兵
 ヲ引揚、同二十八日蒲生郷ヘ転陣シテ吉田郷涼松ヲ固守
 ス、同二十九日未明ヨリ敵兵涼松ノ壘ニ迫ル、拒キ戦フ
 ト雖トモ遂ニ保ツ能スシテ山田郷ヘ退キ、加治木瀧門寺(竜門カ)
 へ兵纏メ、三日ヲ経テ恒吉ニ転ス、同七月八日百引郷ヘ
 進撃、此トキ振武隊大隊長中島健彦・貴島清兵ヲ励シ刀
 ヲ揮テ指揮シ、短兵急ニ薄テ忽チ是ヲ破ル、敵狼狽シテ
 砲二門其餘軍器悉ク撤テ市成ノ方ヘ走ル、會計吏一名・
 付属并ニ兵卒十名余・夫八十名余擒ニス、得処ノ物品数
 ルニ違アラス、大勝利ヲ得タリ、暮二及ヒ全軍ヲ恒吉ニ
 引揚、復タ三日ヲ経テ大崎ニ進発ス、途中荒佐野ニ出ル
 ニ敵我軍ノ至ルヲ見テ直チニ大砲ヲ発ス、中島令シテ速
 二兵ヲ配布シ、奮戦スト雖トモ壁固シテ、遂ニ抜コト能
 ハス、日暮ニ及テ兵ヲ空シク大崎ニ引揚、一週間ヲ経テ
 庄内山田村ニ転ス、同十七日高原ヘ進軍、烈戦スト雖ト

モ遂ニ抜コト能ハス、日暮ニ及テ兵ヲ山田ニ取ム、同二
十二日通山ニ転陣シテ財部ヨリ通山へ哨兵ヲ張り防禦ス、
同二十四日未明ヨリ敵大挙シテ諸壘ニ迫ル、庄内・財部
ヲ破テ本道ヲ絶ツ、我軍五中隊余散乱シテ大敗トナル、
兵ヲ漸ク^(三股カ)ニ纏メ山ノ口ニ陣ス、其后チ諸所ニ於テ防
戦スト雖トモ毎戦破ラル、遂ニ延岡ノ内三輪村ニ於テ
敵ニ囲レ、ツマラ村ニ於テ縛ニ就、余ハ戦状詳セス、

十一年四月

鹿兒島県
木脇盛清

六 林昌助上申書

明治十年二月十五日西郷隆盛等政府へ尋問トシテ上京ニ
随行シ、第一大隊三番小隊ニ加入シ鹿兒島県ヲ発ス、同
廿一日熊本県川尻駅ニ到着ス、時ニ先駆ノ輩該県鎮台ヨ
リ発砲候故、既ニ戦争ニ相決候旨ヲ隊長淺江謙成ヨリ承
知ス、翌未明ヨリ進軍、熊本城後面ニカ、ル、遂ニ段山
ヲ乘取リ戦コト三昼夜、我隊死傷九名ニ及ヘリ、同廿七
日高瀬進軍ノ令アリ、我隊其他四小隊ヲ繰出シ高瀬ノ浜
手方面ニ先鋒トシテ本道ト浜手ノ中間ヲ三小隊進ム、此
五小隊ヲ村田新八指揮セリ、西郷小兵衛・淺江ノ二小隊

ハ高瀬川ヲ渡リ官軍ノ哨兵ト出会ヒ戦ヲ始メ、僅ニ二時間
ヲ過スシテ進入シ高瀬本營ノ背面ニ突出、此所ニシテ互
ニ奮戦、我兵烈風ノ如ク進入セシニ、官兵堪ヘスシテ本
營及ヒ米庫等家屋ニ放火シテ退去セリ、此戦我隊死傷頗
ル多シ、是ヨリ正午時分官兵ヲ進撃スルコト半里許、然
ルニ左右ノ各隊砲声ノ緩カナルニ從ヒ、官兵数千トナリ
我軍ニ当ルノ烈シキニ、隊ヲ囲ミ死生ヲ不知決死ノトキ、
壹小隊応援ニ来リ、脇面ヨリ突出シニ西郷・淺江ノ兩隊
カヲ得、三小隊ヲ以テ激戦シ官兵ヲ退ク、此陣所ニ敵ノ
死骸余多アリ、銃器若干ヲ得タリ、互ニ相引セントスル
トキ、左翼ノ山手ヨリ俄ニ官兵来リ我隊ヲ襲フ、故ニ不
意ヲ打レ我兵ノ死骸ヲ揚クルニ暇ナク、隊ヲ繰引シテ飯
倉ニ退ク、同廿八日未明三番小隊高瀬川内ニ番兵トシテ
繰出シタルニ、敵已ニ進撃スルニ会ス、暫ク防戦、夫ヨ
リ木留街道ノ原倉ニ引揚ケ同所ニ番兵ス、留ル凡一週、
官兵来リ攻ム、接戦已ニ午時ナル頃篠原・村田壹小隊ヲ
率ヒ木留ヨリ来リ援フ、我兵即チ奮戦山手ノ官兵ヲ打破
リシガ、官兵又烈ク進ミ来シ故へ原倉ニ退ク、午後三時
頃官兵原倉背面ナル山手ヨリ攻メ来リ、我軍大ニ潰へ隊
伍散乱シ死傷ヲ顧ルニ暇アラス、吉次峠ニ繰引ス、官兵

追躡シ来リ戦フ、夜二及テ不止、同廿八日午前十時頃四小隊熊本ヨリ来援ス、我隊勢ヒヲ得テ戦フ、各隊ハ二手二分子左右ノ山手ヨリ進撃ス、官兵忽チ披靡シテ敗走ス、我軍之ヲ追テ原倉ニ至ル、此戦昼夜連戦ナリシカ敵ノ死傷夥シク伏尸途ニ滿ツ、我軍篠原國幹始メ隊長浅江讓成戦死、其他死傷多シ、時ニ村田敵近傍ニ在ラント思考シ、各隊ヲ指揮シテ部伍ヲ整ヘ直チニ進撃ス、然ルニ官兵已ニ飯倉ニ退キタルノ報ヲ得テ退テ原倉ヲ守ル、同十三日未明ヨリ那智山進軍ニ付我半隊応援トナリ那智山左山手ヨリ向テ進ミ奮戦ス、官兵能ク防ク、遂ニ達スル不能、夜二及テ復原倉ニ歸ル、我隊死傷六名ナリ、同十八日未明ヨリ官兵来リ攻ム、我軍山手ノ一方破レ官兵我ノ背後ヲ衝ントス、我軍退テ吉次峠ヲ守ル、同廿四日未明ヨリ官兵大拳シテ来リ攻ム、我軍烈シク戦フ、一隊ヲ分チ左翼ノ山間ヲ廻リ敵ノ横合ヨリ抜刀衝撃ス、官兵大ニ敗走ス、官兵ノ死骸數ヲ不知、銃・彈葉余多ヲ得タリ、此戦我隊死傷六名ナリ、然ルニ我隊數戦ニ死傷多クシテ、在ル者僅ニ三十余名ナリ、是ヨリ連戦不止、同廿七日頃未明ヨリ官兵又大拳シテ吉次峠ヲ襲フ、我兵殊死シテ戦フ、時ニ官兵中間ノ人吉隊之守場ヲ打破リ左右ヲ狙撃ス、我

隊不得止木留街道ノ中間迄繰引ス、官兵之ヲ追撃シ戦不止、夜二及テ我軍ヲ辺田野村ヨリ山手ニ引揚ク、翌日午前八時頃敵數百人ヲ率ヒ襲来ラントス、我隊之ヲ知り一同ニ狙撃ス、官兵直チニ散乱シテ退ク、同廿八日頃未明官兵進ミ来テ殆ント我塁柵ニ忍ヒ入り、味方々ト詐リ云フ聞テ我兵之ヲ一斉ニ発砲シテ敵四五名ヲ柵前ニ斃ス、敵直チニ散乱シテ退ク、此戦敵ノ伏尸數十アリ、銃器・彈葉ヲ得タリ、我隊死傷五名ナリ、暫アツテ官兵又来リ襲フ、我兵之ヲ防ク、戦ヒ酣ナルニ和田某隊来援ス、時ニ官兵其隙ヲ以テ死骸ヲ運フノ状見ヘタリ、我兵直チニ衝入り撃テ之ヲ走ス、同四月上旬頃官兵来リ攻ム、我兵之ト接戦ス、時ニ大迫某隊来援ス、我兵大ニ振フテ之ヲ撃破ス、是ヨリ連戦ナリシガ、官兵攻ムルニ大砲ヲ以テシ、小銃之二交ヘ、互ニ勝敗死傷アリ、同四月十五日正午時分川尻味方敗軍ノ報アリ、軍ヲ長峯ニ転ス、留凡一週、又味方御船敗軍ノ報ヲ得テ軍ヲ木山ニ転ス、夫ヨリ矢部ニ転シテ守禦シタリ、此ニ於テ隊号ヲ編制シテ行進隊ト云、同四月廿四日人吉ニ転軍ノ令アリ、椎葉山ヲ經過シテ薄暮ニ尾前ニ着シ翌日江代ニ到着ス、留凡十五日、諸所ニ転陣ス、同五月中旬頃又人吉ニ至リ頭地口ノ応援

トナリ、居コト四五日、官兵大拳シテ来リ攻ム、勢ヒ甚
タ猖獗ナリ、我兵之ヲ防ク、然ルニ各方面破レテ味方狼
狽、遂ニ大敗シテ人吉ニ退ク、此戦我隊死傷多シ、同六
月日不詳又大木場并ニ飯野ニ転陣ス、同七月中旬日不詳官
軍大拳シテ飯野并ニ野尻ヲ来襲ス、勢ヒ猛烈ナリ、我兵
殊死シテ戦フ、酣ナルニ余遂ニ銃創ヲ蒙リ、各所ノ病院
ヲ經テ延岡加賀瀬村ニ至リ、病院ニ於テ前非ヲ悔悟シ帰
順仕候、

右、戦地景況見聞ノ儘可申上旨奉恐入、概略如斯御座
候也、

明治十一年寅三月

林昌助

七 塩津正吉上申書

曩ニ 政府江尋問ノ云々有之、陸軍大将西郷隆盛出京ニ
付随行候処、一ツハ大口街道・出水口両街道ヲ別チ発程
ス、予ハ第五番大隊九番小队押伍ニ編入セラレ、于時明
治十年二月十七日鹿兒島ヲ発シ、西目筋諸駅ヲ經過シ同
廿一日熊本県松橋瀬駅ニ着到スル処、先鋒隊台兵ト事ア
ルノ報ヲ聞哉、即時川尻駅ニ繰込、翌日統テ城下ニ進、
台兵江攻撃スレ雖要害嚴重ニシテ城ヲ抜コト不能、勝敗

不決、戦央植木駅ニ官ノ援兵来ルノ報アリ、速ニ彼ノ地
ニ繰込ト雖味方外隊ヨリ追散シ空シクシテ諸駅ニ止リ、
同廿四日未明木ノ葉江援軍トシテ繰出シ、接戦暫時ニシ
テ竟ニ官軍ヲ破ルコト拾町余、日西山ニ没入シ尾撃スル
コト不能、其際彈藥・針打銃六箱其他分捕アリ、則植木
駅ニ曳揚、同廿五日山鹿江官兵アルノ報アリ、進入スレ
トモ空敷シテ此地ヲ守ル、翌日鍋田村江敵兵アルニ付進
撃シ、我隊ハ該村ノ左ノ山手ニ進、敵ノ背後ニ突入り敵
ヲ破リ、永野原村マテ追打ス、敵ヲ斃スコト余多アリ、
味方ノ死傷モ五五六名アリ、日暮ニ至リ山鹿江曳揚、翌
日二本樹江曳揚トノ令アリ、彼ノ地ニ至リ木留駅ニ援兵
トシテ到ル、戦決シテ愛ヲ守ル、翌ヲ築キテ防戦スルコ
ト数日ニシテ此ノ守リヲ外隊江譲リ、シントリ峠ニ守衛
交代トシテ到リ、爰ニ於テ護兵狙撃ニ番小队押伍ニ転シ
熊本ニアリ、宮原江官兵上陸シ小川駅ニテ戦鬪スルノ報
アリ、援軍トシテ実地ニ至リ、戦ト雖利ナクシテ松橋瀬
江退テ守兵置、翌日敵ヨリ襲来セラレ、応戦スルコト暫
時ニシテ敵ヲ破ルコト巷里計也、翌日再敵軍大拳シテ襲
撃シ、一時応戦スト雖終ニ利ヲ失シテ此地ヲ退テ川尻駅
ニ止リ守ヲ付、夫ヨリ木山駅ニ転陣シ人吉駅ニ至リ、日

不覺、爰ニ於テ常山八番小隊監軍代理ヲ命ス、五六日ヲ過、平病ニ係リ飯野病院ニ到リテ療治ヲ尽スト雖速ニ帰隊スル廉無之ニ付、一時職務ヲ辞シ數日経テ全快スルニ付野尻ノ紙屋ニ於テ奇兵三番中隊斥候長ニテ帰隊ス、余者戦スシテ竟ニ延岡富高新町ニ於テ銃創ヲ負、永井村病院ニ於テ帰順ス、

(年月日脱)

鹿兒島県

塩津正吉

八 時任右八郎上申書

客歲明治十年二月十五日西郷隆盛等上京ニ付、第一大隊五番小隊押伍ニ編入サレ、鹿兒島ヲ発シ、同ク二十一日熊本県下川尻江到着シ、我先鋒隊ハ同県鎮台ヨリ炮発サレシ報知ヲ聞、翌二十二日熊本城ヲ攻撃セントシテ八幡山向ヨリ差掛リ、即時ニ戦ニ及ヒ城壁迄走掛土壁高フシテ不能登、夜ニ入テ兵ヲ円メ春日村江引揚休兵シ、同二十六日高瀬口江進撃ノ令アリ、午後四時比発兵シ、二十七日高瀬口江相掛川下ヲ渡リ終日撃戦ニ及ヒ、午後三時比官兵散乱シ、夫ヨリ兵ヲ伊倉迄引揚、同所ニ一夜ノ逗留、翌二十八日木留ニ趣キ休隊スルコト五日間、三月三

日堅右ノ隊進撃ヲ受ケシ報知アリ、援兵トシテ繰出シ午後三時比マテ奮戦ニ及タレトモ不能勝コト、終ニ敗散シテ苦戦トナリ、不得止ヲ吉次峠ニ引退ク、同所ヲ防守シ翌未明ヨリ進撃ニ及ヒ大勝利ヲ得、堅右ヲ乗取、官兵ノ死骸如山、我兵死者僅ニ五六名、夜ニ入テ兵ヲ纏メ同所へ固守ノ兵ヲ置キ滞陣ス、同月中旬比那知山苦戦ノ報知アリ、応援トシテ吉次ヨリ半隊繰出シ直ニ撃戦相始メ、其日大勝利ヲ得テ同所ニ二晝夜番兵シ再ヒ吉次工帰陣ス、其後同所ニ於テ中隊ニ変製シ其時左半隊ニ加ハリ、同月中旬比三ノ嶽番兵敵兵ト戦ヒ防ク能ハス、為メニ退軍、我隊援兵トナリ一小隊ヲ以テ晝夜防戦シ、翌未明ニ右本隊ノ奨励ヲ受ケ我隊ヲ合シ暫時ノ間ニ追ヒ帰シ、其後鳥巢へ応援トシテ差越ト雖トモ戦ヒニ及ハス、其夜木留ニ引揚、一夜当町へ番兵シ夫ヨリ木留工防守ス、其折度々官兵襲来ニ及ヒ我隊少モ不動、故ニ敵兵空ク台場へ引揚タリ、四月下旬比川尻ノ我守兵破軍ノ報知アリ、我隊ノ守ヲ大久保迄引揚ケトノ令アリ、同月日不覺午前十一時比七八丁後口へ引揚ケ暫時休兵シ、直ニ官兵我兵引揚ルヲ見、則襲来シ暫ク相戦ヒ、我隊引揚ルノ氣アリ不能拒コト、故ニ繰引シテ右大久保へ退ケトノ令ヲ受ケ相守、

本隊ハ引揚タリ、我両三名ハ跡ヲ取切ラレ本隊ヘ往コト
ヲ不得、夫ヨリ山中ヘ二晝夜位忍ヒ入り是非味方ヲ求メ
ントテ山ヨリ出、人家ヲ尋至リ、味方ノ在処ヲ問フ、其
土人云、味方ハ矢部ノ様引タリシト云フヲ聞、夜々道
ヲ忍ンテ往シニ、既ニ夜明ントスルニ竹山ヲ求メ忍入シ
処、同月日不覺晝十二時比終ニ官兵ヨリ見付ラレシニ付、
夫ヨリ走出テ十丁位ノ処人家アリ、往テ木山街道ヲ何方
ト問フニ土人云、右街道是也、官兵ハ吾人モ不相見ヘト
云、幸トシテ往キシニ人家ノ門ニ官兵ノ省標アリ、如何
トモ可為様無シ、人家ノ床下ニ忍入、間モナク官兵二十
名位馳来リ、家中角々探索シ、終ニ床板ヲ毀テ既ニ死ニ
決シ、終ニ官兵不得索空ク立去レリ、時ニ運ツヨフシテ
死ヲ免カレ、夜ニ入テ床下ヲ出テ立田山ヘ入り、最早午
後十一時比漸ク山頂ニ至リ、道ヲ索メテ山ヲ下リ人家ニ
至リ、(須臾力)須臾休息ヲ為シ味方ノ在処ヲ細々尋問ヒ、直ニ道
ヲ避ケ畑中ヲ往ク、時ニ官ノ哨兵アリ、直ニ馳走シ一丁
位ヲ隔テ跡ヨリ砲発シタリト雖終ニ逃レ上鍋村ヘ達ス、
夫ヨリ川ヲ渡リ岸ニ着上ラントスルトキ、石ニ躓イテ墮
ツ、刀ヲ足ニ貫キ往コト不能、故ニ井上武輔ナル者ニ引
立ラレ漸ク味方ノ四ノ七番小隊ノ哨兵先ヘ出、直ニ砲発

ス、雖然味方ノ兵ト聞覚ヘシニヤ、砲発ヲ止メ走来リ、
右七番小隊ノ宿陣ヘ至リ、其夜右小隊ヘ一泊シ翌日我本
隊江送ラル、同日保養ノ為メ該地ヲ発シ矢部病院ヘ入
室シ、加療之后帰県イタシ、爾後ノ事情全ク相分不申候
也、

明治十一年第四月

鹿兒島県第壹大区一小区

時任右八郎

九 酒匂源五郎上申書

戦記

明治十年旧三月戸長某郷村守衛兵ヲ募ル、応スル者三十
八人、戸長某振武隊本営主事(維多力)中島建彦・貴島清等ニ謀ル
所アリ、振武付属隊ト称シ郷村ヲ守衛ス、五月十九日鹿
兒島本道ノ破ル、ヤ、官軍我蒲生郷ニ入ルニ際シ隊伍解
散、廿五日官兵ノ軍門ニ降ル、

(年月日脱)

酒匂源五郎

一〇 坂口正朝上申書

明治十年二月西郷隆盛等東上ノ際随行ヲ乞フ、第三番大
隊七番小隊ニ編入シ、同十六日鹿兒島県ヲ発シ、同二十

二日熊本県下向町江着、川尻開戦且城攻二ハ不係、翌二十三日該地ヲ発シ河内村ニ至リ海岸ヲ守ル、同二十五日大隊長児玉五之助ニ小隊ヲ率ヒ我隊ト共ニ高瀬ノ官兵ヲ進撃ス、交戦凡ソ六時間ナリ、官兵麓ノ險山ニ抛リ頻リニ防戦ス、薄暮兵ヲ収メテ伊倉町江退ク、翌二十六日曉天官軍襲来ス、全軍直チニ進テ寺田ニ迎ヘ戦フ、交戦甚タ烈シ、飛丸雨注、是ヲ不厭我兵塩田某・山下某抜刀接戦敵数名ヲ斃ス、故ニ破ル能ハスシテ暮ニ及ンテ官兵高瀬ニ退ク、我全軍河内村ニ歸ル、我隊死傷八名余、此地ヲ守ル旬余、亦転シテ野出村ニ至リ、同所七曲リヲ持スルコト二十余日ナリ、是ニ於テ中隊編制アリ、本營ノ令ニ依リ右小隊ハ中隊長岩切喜二郎引率シテ二本樹ニ至リ、四月十四日川尻大敗ノ報アリ、翌十五日左小隊ハ該地ヲ発シテ永峯村ヘ退ク、翌十六日保田窪ニ至リ、第三ノ四番・第壹ノ七番小隊ノ中間ヲ守ル、同二十日頃黎明官兵大拳シテ来リ攻ム、我隊能ク拒戦ス、後食ノ比ニ至リ左翼ノ遊撃隊敗レテ走ル、敵進入シテ我隊ノ背後ヲ狙撃ス、故ニ支ユル克ハス、十余町退テ防戦ス、築壁悉ク敵ノ有トナレリ、時ニ援兵ノ来ルニ会フ、反戦衝突シテ旧寨ヲ復シ拒戦ス、是時針打彈丸三千発ヲ分捕ス、我隊死傷六

七名アリ、此ニ御船ノ戦不利ニ依リ本營ノ令ヲ受ケ全軍木山ヘ退ク、翌二十一日矢部ヘ引上ケ滞陣ス、同二十六日比該地発足、那須山ヲ越ヘ尾前ニ抵ル、是ニ於テ右小隊ト合シ、亦第三ノ二番小隊ト合併シテ干城四番中隊改ム、五月一日比該地ヲ発シ、江代・人吉ノ間ヲ經テ大野村ニ至リ鵬翼隊ノ応援トナレリ、佐敷ヲ距ル一里余、同十五日比黎明鵬翼五小隊ト三通ヨリ進ンテ佐敷ヲ襲フ、奮闘接戦既ニ敵營ヲ突ントス、右翼敗レテ退ク、応援ニ駒シタル干城二番中隊モ期ヲ失フ、遂ニ抜クコト克ハスシテ大野村ニ引上ケ、同二十日比再ヒ佐敷ヲ進撃セント雷撃・鵬翼隊ト間通ヨリ進ム、途ヲ迷フテ達セス、誤リテ大口方面ノ諸隊ト久木野ノ官軍ヲ進撃スルニ会フ、協力攻撃シテ数壁ヲ抜ク、針打銃并彈藥若干ヲ分捕ス、我隊死傷五六名アリ、此ノ時ニ当リ我レモ於爰銃創ヲ蒙リ、退テ吉田病院ニ行キ療治加ユレドモ急ニ難愈ヲ計リ、帰郷シ遂ニ軍門ニ降ル、

四月

鹿兒島県下吉利郷
坂口正朝

一一 染川亮一上申書

戦記概略

先般西郷隆盛外二名政府へ尋問之筋有之、上京之際第一大隊五番小隊押伍ヲ以テ隨行、明治十年二月十三日鹿兒島程ヲ発シ、出水街道ヲ經同十九日小川ニ着ス、此日前驅国分等ノ諸隊川尻ニ於テ台兵ト事アルヲ聞キ、馳セテ熊本城ヲ攻ム、三昼夜抜ク能ハス、高瀬へ転戦、我軍利アラズ吉次へ退キ築壘之ヲ守ル、二日ヲ經官軍襲ヒ来リ、劇戦終日勝敗分タス、官兵夜入退壘ス、翌日黎明官軍又来リ侵シ大ニ我カ壘ニ逼ル、然レトモ我軍能ク相拒キ、終ニ大勝利ヲ得、伏戸百余名ヲ見ル、三日ヲ過キ狙撃一隊編入シ熊本へ行ク、爾後川尻口ノ味方破ル、ヲ以テ矢部ヲ經胡麻山ヲ越へ人吉へ退ク、滞陣二拾余日ニシテ人吉破レ宮崎へ退ク、居ル五拾余日、又宮崎破レ延岡ニ引ク、此ニ於テ隊長トナル、終ニ連敗^(長井カ)永井村ニ引、此ニ日豊両口ノ軍ヲ合シ大ニ永井村ニ戦フ、味方利アラズ、終ニ猪ノ嶽ノ圍ヲ切り抜ケ三田井ノ官兵ヲ追散シ、分捕數多アリ、中ニモ針打銃ノ如キハ組メ銃ノ儘ニアリ、夫ヨリ米良山ヲ經小林ニ出テ同所ノ巡查ヲ追散シ、溝辺ノ官軍ト戦ヒ之ニ勝ち、又夕浦生ノ官兵ヲ追散シ、一泊シ

テ翌九月一日鹿兒島ノ官兵ヲ襲ヒ城山ヲ乘リ取、米蔵攻撃ニ銃創ヲ受ケ、谷山山田病院ニ入ル、故ニ其後ノ景況ヲ不詳、

明治十一年四月

鹿兒島県鹿兒島第二大区二小区
染川亮一

一二 養田休左衛門上申書

戦地景況概略

明治十年二月西郷隆盛等尋問ノ儀アリ、上京スルニ隨行シ、余ハ三番大隊三番小隊ニ編入セラレ、高城七之丞是カ小隊長タリ、二月十六日鹿兒島ヲ発シ、西目街道ヲ經テ阿久根・出水ニ泊シ、同二十一日熊本県下宮ノ原ニ着ス、翌二十二日午後一時頃川尻駅ニ到着ス、熊本城戦闘ニ及ヤ、砲声甚烈シ、乃同所繰出城下近辺へ馳付ル、時ニ午後四時頃三間町ニ至ル、其夜ハ爰ニ守兵ス、同所ヨリ半隊ヲ以テ寺町ニ番兵スル事凡二十余日ニ及ヤ、梅木谷ニ繰出シ仮ニ守禦ヲナス、三月廿日頃田原敗レテ味取町ニ引揚、翌日植木進撃ノ事決シ、我隊外三小隊ヲ以テ植木裏手ニ廻リ官軍ノ不意ニ出、接戦ニ柵ヲ敗リ、四時頃隊ヲ引揚ケ、荒木村ヲ守ル事三日間ニシテ亦植木ニ進

軍、激戦數刻ニシテ荒木村ニ引揚、爰ニ於テ中隊編制ノ事アリ、余カ半隊左小隊トナル、該地二十余日守禦ヲナス、時ニ櫻原ニ応援トシテ出張スルニ、同十六日午後一時頃双方防戦半ニ我隊激戦シ、即日於爰ニ余モ手負シ、則給養方ニ控居ルニ出張病院へ送ラレ療養ニ預ルト雖トモ兩日ヲ経、木山病院ニ転室スルニ最早該地モ引揚ケ、続テ矢部引揚ケ、遂ニ余モ於自宅ニ療養ノ免ヲ蒙リ、四月二十三日帰宅ス、然ルニ日ヲ歴テ六月中旬大口方面雷撃本營邊見十郎太ヨリ各郷へ医師ヲ巡廻セシヲ、手負快氣ノ面々帰隊スヘキノ厳令アルヤ、余モ是ニ依テ我郷ヲ六月十八日出発シ大口ニ赴ル処、最早彼ノ地モ撃敗セラレ本城ニ退軍、途中ニテ邊見氏江行合シカハ此地ニ止リ、追尾ノ敵ト返戦スルノ指揮アリト雖トモ終ニ敗シテ兵ヲ本城へ引キ、其夜ハ爰ニ宿陣ス、其翌二十一日雷撃本營邊見十郎太ヨリ千城九番中隊右小隊分隊長ニ命セラレ、樺山嘉之助中隊長タリ、即日我隊ハ本城ノ内大川筋ニ台場ヲ築キ守禦ヲナス事數日ニ及ンテ、同三十日敵兵潛ニ川ヲ越シ進撃ス、我隊ハ宮之城ノ内針持村ニ戦フ、味方敗シテ兵ヲ湯野尾本道左翼山手ニ退キ、則守場ヲ決シ翌未明亦進撃ス、味方防戦數刻接戦ニ及、遂ニ余モ爰ニ深

手ヲ負ヒ、味方若干ノ負傷、即日大久保病院ニ至リ療養ニ預リ爰ニ二泊ス、味方敗走ニ及ヒ都之城ニ転室ス、是ヨリ戦地景況不詳、余ハ高岡・佐土原及高鍋諸所病院ニ転シテ延岡之内永井村ニツイテ降伏帰順セリ、

(年月日脱)

鹿兒島県

養田休左衛門

一三 田中資幹上申書

于時明治十年二月西郷隆盛上京云々ニ付、第三大隊三番小隊ニ編入サレ、同月十六日鹿兒島発程、同廿一日熊本工着ス、同日ヨリ城兵攻撃ニ相係リ、翌日城ノ背面寺原町工墨ヲ築キ防戦スル數日、同三月十四日比同県下姫井村工進軍ス、此ノ所工棄ヲ築キ防戦ノ備ヲナス、同廿日田原口ノ味方敗走ノ急報ヲ聞ク、且ツ援ヲ乞ノ故ニ我小隊ノ分隊ヲ以植木街道工応シ、時ヲ移サス我本隊モ急ニ応シテ合隊シ昼夜防戦ス、同街ノ左翼ノ寨ヲ守、連戦數日、同四月十四日川尻口ノ味方敗ル、故ニ翌十五日総軍ヲ木山工引揚、是於テ我小隊ハ翌日武宮口工応援ニ備フ、同月廿日味方ノ防兵敗走、故ニ我小隊ヲ以急ヲ援ヒ、終ニ旧寨ヲ復ス、此日予右腕ニ銃創ヲ負ヒ退テ入院ス、然

ルニ負傷容易ニ難癒各所ノ病院工転院ノ末、八月十五日延岡領ノ内長井村ニ於テ降伏ス、

右、戦地景況臆記之儘概略上申仕候也、

明治十一年寅四月

鹿兒島県第一大区四小区

田中資幹

一四 中村喜八上申書

戦地景況之大略

明治十稔四月戸長ノ募兵ニ応シ、同二十一日頃甌島ヲ発シ、同二十五日熊本県下^(球磨方)求麻ノ人吉ニ達ス、直二十三番大隊二番小隊兵士ニ編入セラレ、爰ニ居ルコト殆ント一週間、夫ヨリ我隊鹿兒島県下飯野郷ニ抵リ番兵スルコト一週間余、五月九日頃福山へ転ス、爰ニ於テ隊号ヲ變シテ切隊二番小隊トナル、同二十八日午後第四時頃官軍襲来、勝敗決セサル内一時兵ヲ福山ノ牧へ引揚、同夜十二時頃福山へ進撃スルニ、官兵退散スルニ依リ該地ニ炮台ヲ築キ堅守相待ツコト久シ、八月一日加治木ノ我兵敗スルノ報アリ、該地ヲ捨テ通り山へ引揚、同五日頃^(牧ノ原方)牧ノ石へ進撃シ、我兵利アラス、又通山へ退ク、同七日庄内ノ我兵敗走ノ報アリ、此力為メ都ノ城・山口ヲ經テ宮崎ニ

転ス、不日ニシテ官兵来リ戦フ、我軍毎ニ利アラス、佐土原・高鍋ヲ經テ延岡ニ退キ、同十五日降伏後帰宅スルニ再ヒ我兵鹿兒島工突出ノ際、戸長ノ達ニ依リ九月十日頃我区へ派出ノ巡查三名ヲ捕搏シ鹿兒島ニ送り、又前非ヲ悔悟スルニ依リ警視へ自訴帰順ス、

明治十一年四月

鹿兒島県

中村喜八

一五 永田彦兵衛上申書

客年二月西郷隆盛政府へ尋問之儀有之、上京之際随行を乞て、第三大隊七番小隊隊長岩切喜二郎・半隊長竹原半兵衛・予分隊長となり、同月十六日鹿兒島を発し、同廿二日熊本県下向町へ着す、此日早朝より戦争となりて砲声四方に轟く、翌廿三日該地を發し河内村へ至り海岸を守る、同廿五日大隊長児玉強之介ニ小隊を引て我隊と俱に高瀬之官兵を進撃す、交战凡そ六時間なり、官兵麓之險山に抛り頻に防戦す、故に破るあたハす、薄暮兵を収て伊倉町へ退て、翌廿六日暁天より官軍襲来す、我全軍直に進て寺田に迎へ戦事甚た烈しく飛丸雨注、此時に方て我隊等く進て接戦敵数名を斃す、暮に及て官軍高瀬に

退て我軍河内村へ帰陣す、此戦に我隊死傷七八名、予も創を蒙り川尻病院に入て療養す、故に爾後戦地之顛末を不詳、諸所の病院を経て日州延岡に於て帰順す、実に明治十年八月十五日也、

十一年四月

鹿兒島県
永田彦兵衛

一六 志賀静一上申書

戦記概略

明治十年二月十六日第四大隊三番小隊兵士ヲ以テ鹿兒島程ヲ発シ、大口路ヲ経同廿日小川ニ至レハ、川尻ニ於テ早官軍我前驅ヲ暴撃シ既ニ開戦、故ニ我隊御船屯集ノ敵兵ヲ襲ハント直チニ奮進疾行及ハス、其日川尻ニ泊ス、翌日植木口ノ味方劇戦ノ報ヲ得、我隊之ニ馳セ敵已ニ敗走ス、則チ爰ニ陣ヲ張ル、廿五日山鹿へ繰リ込ミ壘ヲ築ク、廿七日黎明官軍襲ヒ来リ、我營ヲ侵サントス、時ニ各隊共ニ烈戦数刻、終ニ官軍敗北、一里余ヲ追討シ、僵尸百余名、我隊死傷僅三四名、爾来官軍屢攻撃スト雖毎戦利アラス、田原坂ノ味方敗報ニヨリ全軍山鹿ヲ引、鳥ノ巢村ニ陣ス、我隊転シテ植木大鳥村ヲ守ル、或日一時

鳥ノ巢破レテ復スルアリ、一分隊ト此急ニ趣キ敵二人ヲ畠中ニ殪シ針打銃ヲ分捕レリ、此日我隊兵士壹名之ニ死ス、川尻口味方破レテ大津へ転陣、翌未明官軍襲ヒ来リ、戦テ之ニ勝ツ、四五日ヲ経官軍復来リ侵ス、終日戦ヒ勝敗決セス、夜ニ入官軍退ク、此日木山口ノ味方破レテ全軍矢部ニ引揚、是ニ於テ隊号ヲ変シ我隊奇兵九番中隊ト改称ス、夫ヨリ胡麻山ヲ越ヘ江代ニ出テ、山陰街道ヲ経テ日州細島ニ至ル、居ル一兩日ニシテ延岡ニ出テ、重岡ヲ経テ豊後竹田ニ出張シ、我左小隊大分口ノ本道ニ築壘之ヲ守ル、不日ニシテ官軍夜間ニ乘シ暗ニ我カ壘前ニ胸壁ヲ設ケ、未明大挙、互ニ奮戦更ニ勝敗ヲ決セス、故ニ抜刀呐喊シテ官軍支ユル能ハス、散々敗北死傷ヲ顧ス、此時伏尸ニ拾余名、銃五拾二挺ヲ分捕レリ、一日我右小隊古城ノ左側ニ有リ、頻リニ難戦ニ及ヒ、余カ左小隊ノ一分隊ヲ以テ之ニ馳セ応援シテ勝敗分タス、夜入り敵退壘ス、爾後四五日ヲ過キ古城右側ノ味方守ヲ失シ全軍支フル能ハス、終ニ小野市へ引揚ク、此日我右小隊長深見宗助外兵士拾五六名・左小隊兵士壹名死ス、翌日一同進シテ三重市ヲ取り我隊竹田ノ通路ヲ守ル、翌黎明官軍襲ヒ来リ、外一中隊ト討テ二里余ヲ追撃シ、針打銃七八

挺・同彈藥等ノ分捕アリ、同夜十二時臼杵進撃トシテ全軍三重市ヲ発シ、翌日八時比臼杵へ衝入ル、官兵不意ヲ討レ散々敗走ス、此戦ヒ銃器・彈藥等數多分捕ル、依テ築壘固守ス、一両日アリ官軍来リ侵ス、外二小隊ト討テ之ヲ退ケ敵八九名ヲ斃ス、此時我隊即死式名、四五日ヲ經官軍我方後山ノ高頂ヨリ突然乱射ス、故ニ味方防禦ノ術ナク全軍切畑ニ引、我隊転シテ虫付村ヲ守ル、四五日アリ、三国峠味方破レ重岡危急ノ報ヲ得、之ニ馳セ劇戦徹夜、未明敵少シク引、於是我隊転シテ佐伯口ヲ守ル、同夜報アリ、赤木村ノ味方難戦スト、故ニ応援ニ馳セ、(途チ大原村ニ味方ノ敗兵ニ逢ヒ共ニ湯ケ内へ退ク、夫ヨリ全軍進ンテ陸地峠ノ官軍ヲ追散シ、復転シテ厚狭峠ヲ乘リ取黒土峠迄追討シ、我隊重岡口ノ本道ヲ守ル、翌日我隊外三中隊重岡ノ背後ヲ襲ハント間道ヨリ途チ二柵ヲ抜キ、猶進ンテ敵營已ニ近シ時ニ報知アリ、引揚ノ令ヲ伝フ、故ニ止ヲ得ス練引ニシテ、半途切畠ニ於テ報知者ノ誤リナル^{ヲ脱カ}聞キ歸壘ス、一日官軍我壘ニ逼ル、然レトモ抜ク能ハス、壘ニ引、此時我壘下ニ殪ル、者三拾余名、銃四拾八挺・彈藥數万発ヲ分捕ル、我隊死傷僅ニ五六名、対壘殆ント月余ニシテ一日左側ノ味方破レ全軍厚狭峠迄

引揚、此夜我隊外二中隊宮崎表応援トシテ延岡迄繰出ス、此ニ於テ瘧病ニ罹リ不能起病院へ入ル、故ニ其後ノ景況ヲ不詳、

明治十一年四月

鹿兒島縣鹿兒島
志賀靜一

一七 村田佐吉上申書

于時明治十年二月西郷隆盛等上京スルニ随從シ、第二大隊番小队工編入、同月十五日鹿兒島ヲ発程、同廿日熊本臬川尻駅ニ到達スルヤ、我先鋒隊台兵ト開戦シタル報ヲ得、速ニ我隊モ城兵工進撃ス、同二十五日田原坂工発軍、連戦スル事久シ、三月廿日我軍敗績シ植木エ引退キ、爰ニ於テ銃創ヲ被リ病院ニ引退キ、爾後諸処ノ病舎ニ転運ニ付戦地ノ景況詳覽セサル也、

寅四月

鹿兒島縣第一大区四小区
村田佐吉

一八 尻岡助十郎上申書

明治十年二月西郷隆盛等鹿兒島縣下ノ兵士數万ヲ引率シ熊本縣下所々ニ戦争、其后追々引退クトキニ官軍出水

二進来り、既ニ阿久根ニ逼ラントスルノ勢ナレハ、余ニハ勇義十五番小隊ニ編入、即チ分隊長トナリ、六月十五日ヲ以テ阿久根ニ出張、即チ海浜ヲ警備ス、同廿一日官軍来リ戦フ、我諸隊之レニ応スレトモ遂ニ不利シテ敗績、平佐ニ退キ皿山ノ下浅処アリ、之ヲ守、同廿四日官軍大ニ来リ戦フ、我諸隊防戦甚タ勗ムト雖モ官軍遂ニ川ヲ渡リ、左右翼ヲ衝キ、背後ヲ断ツヲ以我兵大ニ潰乱進退措ヲ失ヒ、遂ニ夜行昼伏シ潜行シテ家ニ帰り、其后チ千代警視分署ニ降伏ス、

明治十一年第四月

鹿兒島県下第三拾四大区五小区
高城郡高城
耽岡助十郎

一九 上脇喜右衛門・坂口幸助連署上申書

明治十年三月鹿兒島県下吉利ヲ発シ、大口郷ニ到着シ、爰ニテ隊号ヲ編制シテ第九ノ五番小隊小倉勇之助隊ニ編入セラレ、大口郷ヲ発程シ人吉ニ到ル、神ノ瀬ノ守衛タラシム、既ニ命ヲ奉シテ神ノ瀬ニ赴キ固守スル事殆ト五日、余亦藤本ニ転兵シ、小川口ニ官軍守兵スルヲ聞キ、速ニ之ニ赴キ拒戦ス、我隊勝ニ乘シテ追撃シテ妙見山マテ進ミ、茲ニ守兵ス、翌日櫻馬場ニ進戦フ、官兵及敗走ニ

八代マテ追撃ス、午後一時頃味方大ヒニ敗レ櫻馬場ニ引揚ケ、昼夜接戦互ニ勝敗不決、翌日十二時比官兵来攻、味方及敗走神ノ瀬ニ引揚、爰ニ壘ヲ築キテ守兵スルコト五日位、或日亦藤本ニ繰出、翌暁天小川口ニ攻懸リ戦、味方勝ニ乘シテ妙見山マテ進撃ス、爰ニ守衛ス、翌日八代ノ宮治(宮地カ)ニ攻懸ルコト六昼夜、防戦スレドモ或日猫谷口大ニ敗走シ、故ニ我隊モ神ノ瀬マテ退、固守スルコト二十日位、爰ニテ隊号ヲ編制シテ雷撃一番中隊トナル、隊長西村清之丞中隊長トナル、或日官兵大挙シテ来戦、勝敗不決、翌日亦来リ攻ム、互ニ勝敗アリ、翌未明天兵来リ戦フ、我隊勝ニ乘シテ切込大勝利ヲ得、銃器・弾薬ヲ分捕ス、旧壘ニ依テ一週間位守兵ス、或日午後十時頃ニ官兵来攻ム、勝敗不決、此ノ日大ノ村方面大ヒニ及敗走ニ引揚クベノ令(手脱カ)ヲ受ケ高早ニ退ク、翌日午後二時来リ攻スレドモ官兵潰走ル、翌未明亦来攻、味方及敗走赤松ニ退キ一週間位守兵ス、月日不詳三方谷敗走及退クベキノ指揮ヲ受ケ深上ニ引揚ケ、固ク壘ヲ築テ守兵スルトキ天兵来戦フ、我隊勝ニ乘シテ五六町位追撃ス、銃器・弾薬ヲ分捕シテ拒守ス、然ル後千人吉方面敗走ヲ聞キ、是ニ応シテ速ニ赴キ、川ヲ挟テ合戦スレドモ守リ壘(壘カ)キヲ計リ、翌

未明引揚大畑ニ退キ固守スルコト殆ンド一週間位、或日官軍大挙シテ進撃ス、故ヲ以テ大ヒニ敗走シ、亦タ応援来リ、旧ノ塁ヲ乗取り、終ニ負傷シ退テ小林病院ニ行キ療治加ユレドモ急ニ難愈ヲ計リ、帰家シテ軍門ニ降ル、

寅四月

鹿兒島県下吉利郷
上脇喜右衛門

坂口 幸助

二〇 中鶴重明上申書

戦記

明治十年旧二月廿一日坂元ニ会スル者八小队、分テ二トス、一ハ八代ニ向テ発ス、一ハ日奈久ニ向テ発ス、八代方面ノ軍既ニ坂元ヲ去ルコト十五町許、敵兵深水谷ノ險ニ拠リ頻リニ銃砲ヲ夾発シテ我行路ヲ遮ル、直チニ撃テ之ヲ走ラス、廿二日黎明進テ府本ノ敵塁ヲ攻メ、一戦之ヲ蹂躪シ尾シテ萩原ニ到ル、敵軍返戦大ニ雌雄ヲ争フ、我軍終ニ大ニ破レ櫻馬場ニ退ク、日奈久方面ノ軍モ亦大ニ破レ、將帥別府氏傷ヲ蒙リ人吉ニ帰ルニ属シ、其麾下皆来リテ我軍ニ合ス、俄ニ胸壁ヲ築テ櫻馬場ヲ守ル、廿三日払眺敵軍兵ヲ潜メテ正覚寺山ヲ越ヘ我背面ニ出ツ、

我軍不意ニシテ備ナク少ラク防戦スト雖モ終ニ保守ス可ラサルヲ察シ將サニ退カントス、敵ノ追撃甚タ急ナリ、我兵大ニ破レ神瀬ニ走ル、漸ク敗兵ヲ集メ廿八日藤元ニ到ル、敵兵深水谷ヲ守ル初メノ如シ、奮戦之ヲ敗リ急追横石ニ到ル、敵兵窘蹙殆ント逃ル、ニ隙ナク縦横狼狽シテ走ル、或ハ道傍ノ民舎ニ伏匿スル者アルニ至ル、尽ク之ヲ生擒シ我兵氣益マス猛銃進シテ櫻馬場ヲ攻ム、廿九日敵兵櫻馬場ヲ撤八代ニ走ル、爾後連戦六昼夜、旧三月四日我猫谷ノ守懈ルヲ以テ敵正覚寺山ノ險ヲ占メ我側面ヲ下リ撃ツ、其勢頗ル疾銃、我軍終ニ大ニ破レ神瀬ニ走ル、旧五月十日勇義廿番小队半隊長ニ撰ハル、当是時向田中学校ヲ制作所トナシ、方リニ各郷ノ時鐘ヲ徵集シテ臼砲ヲ鑄リ彈藥ヲ制ス、我隊之ヲ守衛ス、十一日我阿久根ノ守リ破レ敵兵追撃大小路ニ来ル、我軍俄カニ川内川ノ橋架ヲ落シ塁ヲ築テ向田ヲ守ル、我隊皿山ノ渡ヲ守ル、十二日敵軍四面向田ヲ攻ム、我軍大ニ破ル、

明治十一年四月

鹿兒島県第三十二大区
一小区東郷
中鶴重明

二一 松崎善兵衛上申書

戦地景況概略

明治十年二月十五日第二大隊四番小隊ニテ鹿兒島ヲ発程シ、大口筋ヲ経同十八日肥後水俣ニ出テ、同廿一日川尻駅ニ着陣ス、爰ニ於テ隊長佐藤三三令ヲ伝テ曰、已ニ昨夜熊本鎮台ノ斥候隊我加治木隊ノ哨兵ヲ襲ヒ、開戦ニ及ヒ大勝利ヲ得、生虜并銃器等ヲ分捕ス、依テ明廿二日黎明ヨリ熊本鎮台工攻撃ノ議相決シ、我カ四番小隊ハ城ノ背後ヨリ攻撃ス可キト約束セリ、即夜三時頃惣軍熊本ヲ差テ進軍ス、我カ四番小隊ハ疾ク進ミテ花岡山ヲ越ヘ、八幡山ノ右翼ヲ衝キ、敵味方奮戦殊死シテ戦フ数刻ニ及ヒ、爰ニ佐藤令ヲ伝テ少シク退キ守囲ス、此時午後四時頃押伍宮里嘉左門戦死ストモ死傷十余名、是ヨリ昼夜連戦弾丸恰毛雨ノ降ル如キ、后三日ヲ経テ本営ヲ護衛シ川尻ニ転シ、翌日二本樹ニ帰ル、是ヨリ暫ク本営ノ護衛隊トナリ、后三月初豊後鶴崎ヨリ警視隊進入スルノ報来リ、我四番小隊ハ二重峠ニ出張シ、古道・新道・小国街道ノ三道ニ壘ヲ築キ固ク守ル、黒川ニハ第二ノ五番小隊長鎌田雄一郎出張シ、同三月十六日未明ヨリ坂梨ノ官軍ヲ襲(ハ)ハト佐藤鎌田ニ約シ、隈府出張ノ山口十蔵ニ使ヲ遣リ、

二重・小国ノ守兵ヲ乞フ、右小隊ハ小国街道ヨリ進軍スル為メニ小国街道ニ出張シ、左小隊ハ本道ヨリ進軍スル為メニ峠ヲ越ヘ車返シニ出張シ、哨兵ヲ坂ノ下ニ出シ、明ルル今ヤ遅シト相待ツ処ニ、隈府ノ隊外カ口エ転シ其策不成ノ報来リ、明早朝峠エ引ク可クノ所ニ朝六時頃黒川ノ方エ数十砲声相聞ヘ、間モナク我カ哨兵ノ坂下ニ砲声聞ユルヤ、各銃器ヲ取り駈出セシニ、早官軍坂ノ下ノ哨兵ヲ破リ、我等為ス可キ様ナク野ヲ攀チ峠ニ走り登リ相距ク、此時小国街道ハ戦ヒ酣ナリ、峠ハ嶮岨ニシテ要所ユエ僅分隊ヲ以テ拒キ、外ハ小国ヲ差テ進ミ戦フ、敵勢ヒ猖獗、兵ヲ二ツニ分ケ、一ツハ街道ヲ攻メ、一ツハ中ノ小舎本部ヲ目ニ当テ進ミ来ル、半隊長川上周藏非番分隊ヲ率ヒ、小国ノ戦ヒ急ナルヲ聞キ、横撃セン為メニ進ミシ処、中ノ小舎ニ向ケシ敵ニ出逢ヒ疾ク進ミ防戦スルニ、敵次第二邊巡シ遂ニ小国ノ横ニナリ、官軍狼狽シ谷ヲ攀チ下リ散々ニ敗走ス、小国ノ兵ト川上ノ兵ト一ツニナリ一里余追撃ス、此時押伍川西新之丞坂ノ下哨兵先キニテ戦死ス、押伍山内猛助同ク原田親義小国街道ニテ戦死ス、凡死傷六名ナリ、銃器・弾薬ヲ分捕ス、黒川口ノ戦ヒ味方大勝利ヲ得、生虜六名・斬首二十余ノ確報来

リ、后三日ヲ経テ我四番小隊ヲ編制シテ四番中隊ト改ムルノ令アリ、后四月五日豊前中津ノ土族増田宗太郎等兵六十余名ヲ率ヒ、小国街道ノ我哨兵先キニ来リ告ルニ、今般西郷ノ兵ヲ拳ルニ我等義兵ヲ拳ケ其前路ヲ開カン為メニ来リシト、具ニ告ク、哨兵ノ押伍某増田等ヲ伴ヒ中ノ小舎本部ニ至リ其状ヲ佐藤ニ述フ、佐藤其実情ヲ得、速カニ其兵ヲ率ヒ来ラシメテ、川上ヲシテ増田ヲ熊本本營ニ誘ヒ到リテ其状ヲ告テ帰ル、是ヨリ中津ノ兵ハ暫ク大津ヲ守ル、爰ニ黒川出張ノ鎌田ニ豊二中津等ノ兵蜂起スルニ坂梨ノ官軍豊後竹田ニ退キシト謀者帰テ告ケシニ、速カニ一中隊ヲ坂梨ニ出シ諸口ニ壘ヲ築キ固ク守ル、不日ニシテ官軍大挙シテ来リ攻ム、鎌田ハ山手ニ出張シ、児玉八二ハ本道ニ出張シ、兵ヲ勵マシ殊死シテ戦フ、鎌田ハ僅カ分隊ヲ以テ突戦ス、遂ニ官軍ノ兵氣挫ケ笹倉迄追撃ス、本營輜重ニ火ヲ放チ退カントスルニ四面官軍充滿シ、坂梨ノ諸壘官軍ノ為メニ奪ハレ、漸ク挺身シテ黒川ノ旧營ニ歸リ、児玉等ハ本道ノ敵我カ軍ノ背後ニ出テ前後ノ敵ヲ支ル不能シテ、坊中ヲ経是モ黒川ノ旧壘ニ引ク、后四月十六日山鹿口ノ官軍大津近ク侵入シ、我カ四番中隊右小隊援兵トシテ大津ニ出張シ、中津隊ト会シ

防戦ス、官軍敗走ス、我軍尾撃シテ本營輜重等ヲ取り、此時小隊長川上周藏・押伍河野新藏等戦死ス、凡死傷六名、后三日ヲ経テ右小隊及ヒ中津隊ヲ二重ニ引ク、同廿日大津方面ノ戦ヒ二重ヨリ眼下ニ瞰、戦ヒ猛烈、中隊長左右小隊ヨリ分隊宛出シ半隊トナシ、中津隊ト大津平川村ヨリ横撃スルニ敵五六丁逸巡シ、此時日暮ニ成リ勝敗不決シテ二重ニ引ク、半隊長池水壽藏・押伍赤川孝之丞戦死ス、凡死傷三四名ナリ、即夜一時頃大津ヨリ矢部ノ様引揚クヘク報来リ、衆愕然トシテ哨兵ヲ撤シ間道ヨリ黒川ヲ経矢部ニ引ク、道程十二里余ナリ、爰ニ於テ大津方面ノ兵ヲ奇兵隊ト名称ス、替リ我カ四番中隊ヲ奇兵三番中隊ト称シ、不日^(二九)シテ胡麻山ヲ越ヘ江代ヲ経人吉ニ到リ滞陣ス、爰ニ於テ奇兵隊ハ日州路ヲ経豊後ニ進入スルノ報来リ、又江代ニ出テ渡川・神門・山陰ヲ経富高新町ニ到リ、爰ニ於テハ中隊ヲ二ツニ分ケ、四中隊ハ先鋒隊トナリ延岡ヲ経豊後重岡ニ進入シ、此所大分県ノ警察分署在リ、我軍ノ不意ニ出ルヤ、諸器械ヲ捨テ逃走ス、斬首凡三ツ、爰ニ於テ先鋒隊ヨリ壯士百六十名ヲ精選シ、斥候隊トナリ竹田ヲ襲フ、未官軍備エ全カラスシテ、区裁判巡查ノミニテ戦フ可ク術テナクシテ逃走ス、此日本

隊宇田枝二着ス、翌日竹田二着陣ス、此時五月十二日頃也、翌日後軍着ス、后三日ヲ經大分庁ヲ襲フノ令有リ、一中隊ヨリ壯士二十名ヲ精選シ百六十名ヲ一中隊トナシ、中隊長鎌田雄一郎之ヲ率ヒ進入ス、大分ヲ距ル十余町ニシテ官軍嶮ニ拠リ守備嚴ナルヲ聞キ、俄カニ遂ヲ転シ鶴崎分署ヲ襲ハントテ、尚十五名ヲ精選シ鎌田之ヲ率ヒ夜ニ乘シテ襲フニ、警視隊五百名余上陸セシ処ニ出会シ、鎌田之ヲ指揮シ抜刀シテ切込ミ、瞬間ニ敵數十ヲ切ツテ退ソク、此時鎌田一名手負ス、翌日竹田ニ返ル、后五月二十日熊本路ヨリ官軍恵良原ニ進入スルノ報有ルヤ、非番隊ヲ以テ進撃スルノ令在リ、我カ三番中隊ノ左小隊ハ本道ノ先鋒隊トナリ、黎明ヨリ出張シ、玉来村ヨリ十余丁ノ処ニテ敵ノ斥候相見得、我カ軍ノ見ユルヤ、退テ嶮ニ拠リ壘ヲ築キ防戦ス、右翼ノ味方戦フニ地形便ナルヲ以テ進ンテ諸壘ヲ取り、又敵嶮ニ拠リテ防戦ス、此時薄暮ニ至リ勝敗不決シテ竹田ニ返ル、死傷三四名、同二十二日敵襲来シ防戦ス、次第ニ敵相迫リ、同廿五日大分街道ヨリ警視隊今市街道ノ我カ右小隊内守り場ニ襲来シ、敵勢ヒ猖獗、味方殊死シテ戦フ、遂ニ抜刀ニテ我カ壘ニ突来リ四名ヲ斃ス、我軍大勝利、同シク廿九日大拳シテ

竹田ヲ来リ攻ム、我カ左小隊ハ西休寺ノ辺ヲ守ルニ、敵村落ニ火ヲ放チ来リ攻ム、遂ニ古城口相破レ支ル不能シテ小野ノ市ニ引揚ク、翌三十日三重市ニ進入シ、同三十一日朝六時頃大分・竹田ノ両街道ヨリ敵襲来シ、我カ三番中隊ハ竹田街道ノ援兵ニ出張シ、兵ヲ二ツニ分ケ横撃スルニ、敵支ル不能シテ散々ニ敗走ス、岩戸迄追撃ス、敵營ニ火ヲ放チテ退ク、大分街道モ大勝利ヲ得、伏尸三十余ヲ見ル、明六月一日臼杵進撃ノ令在リ、十二時ニ繰出シ我三番中隊ハ本道ノ先鋒タリ、山手ノ兵ト等シク進ミテ攻ルニ、敵防戦数刻、遂ニ旧城下ニ迫ルニ支ル不能シテ諸方ニ敗走シ、臼杵川ニ溺レ或ハ縛ニツクモノ数十ニ及ヘリ、銃器・彈藥等ヲ得タリ、同八日敵大分・竹田ノ両道ヨリ襲来シ、味方壘ニ拠リ防戦ス、大分街道ノ敵勢ヒ猖獗、我左小隊援兵ニ出テ防戦スルニ支ル不能シテ引テ臼杵川ヲ守リ、天満宮ノ井垣ヲ楯ニ取り防戦ス、翌九日敵山手ヨリ襲来シ、遂ニ支ル不能シテ佐伯街道ヨリ切畑ニ引ク、此時死傷六名ナリ、同十一日三重市進撃ノ令アリ、夜十二時ニ繰出シ白岩ニ泊シ、十二日鷺谷ヨリ進撃シ、敵嶮ニ拠リ防戦ス、勝敗不決シテ小野ノ市ニ引ク、旗返シ及ヒ三國峠ノ嶮ヲ守ル、我カ三番中隊右小隊

八田原ヲ守リ、右小隊ハ木浦ノ嶮ヲ守ル、同十五日三国峠ノ敗報来ルヤ、左小隊ハ引テ上赤ノ嶮ヲ守ル、右小隊ハ水ケ谷ヲ守ル、翌日右小隊ハ重岡ニ出張シ、左小隊ハ

水ケ谷ニ到ル、后三日ヲ経テ赤木ノ我軍連雨ニテ運輸不便シテ、引テ陸地・不動・大原越等ノ嶮ヲ守ル、重岡・

水ケ谷ノ軍ハ引テ鑑ヲ守ル、我カ左小隊ハ右小隊ト合シ行テ大原越ヲ守ル、后数日ヲ経テ屢来リ攻ムレトモ撃テ

之ヲ退ク、遂ニ大挙シテ諸口ヲ来リ攻ム、我守ノ大原越ニ曉霧ニ乗シ不意ニ来リ攻メシニ、右翼ノ二塁破レシニ、

直チニ諸塁ノ兵ヲ絞リ二十余名ヲ以テ奮戦シ、遂ニ撃テ之ヲ走ラス、陸地・不動ノ敗報来ルヤ、引テ矢ケ内ノ嶮

ヲ守ル、是ヨリ先キ三河内口エ援兵トシテ二分隊出張シ、后三日ヲ経テ曉霧ニ乗シ敵塁ヲ襲フニ奮戦数刻、遂ニ撃

ツテ之ヲ走ラス、銃器・弾薬ヲ得タリ、后三日ヲ経テ重岡進撃ノ報来リ、我カ三番中隊ハ夜十二時ニ矢ケ内ヲ出

張シ鑑ニ会シ、後軍ニテ赤松峠ニ至リ攻ム、敵嶮ニ抛リテ拒ク、味方激戦数刻、遂ニ大雨ニ遇ヒ引テ旧塁ニ還ル、

后数日ヲ経テ三河内エ敵襲来ノ報来リ、七月一日夜我半隊ヲ山神山ノ右ニ備エシニ、敵未明ヨリ来シヤ、大砲ノ

相図ニテ山嶽ヨリ小銃ヲ乱射ス、我半隊ヲ散隊ニ開キ圍

ノ声ニテ駈込ミ、敵狼狽シ諸方ニ散乱セリ、爰ニ於テ鹿兒島方面三田井口等シク敗レテ永井村ニ引ク、同十八日軍門ニ降ル、

明治十一年四月

松崎善兵衛

二二 宮内康寧上申書

戦略記

明治十年二月中旬第二大隊二番小隊ノ押伍ニ偏入セラレ、同月十五日鹿兒島ヲ発シ、同廿日熊本県川尻ニ着ス、病ヲ煩ヒ入院、無程帰隊、同廿五日松橋駅ヲ守ル、三月四日二本木江引揚、同七日田原江趣キ、翌黎明第一大隊八番小隊江更代防戦ス、同廿日本道ノ味方軍敗レ、依テ我隊植木駅江引揚ケ、夜ニ入該町ノ中央ヲ守ル、同廿二日第二大隊六番小隊長トナリ、木留・植木ノ往還置迫村ノ近傍ヲ守リ屢戦フ、川尻ノ味方敗軍ノ報アリ、就テ四月十五日各隊一同諸塁ヲ引揚ケ永峯村ニ屯ス、同廿日黎明保田窪ノ本道ヲ守ル、此日負傷、則入院、八月十五日延岡税子村大野病院ニ於テ降伏仕候、

明治十一年四月

鹿兒島県第二大区六小区

宮内康寧

二三 山下謙藏上申書

明治十年二月中旬陸軍大将西郷隆盛等政府へ尋問ノ筋有之上京、兵隊隨行之次第且中原尚雄等ノ口供及ヒ野村綱自訴書鹿兒島県令ヨリ布告ニ及ヒ、就テハ県内各区出兵、西郷二応スト聞キ、実ニ傍觀スベカラザルノ勢ヒナリ、然ルニ区长阪田諸潔該区モ出兵センコトヲ衆ニ告示ス、義拳ト心得衆皆同意セリ、諸潔自ラ福馬軍宰トナリ百事ヲ總轄シ俄ニ一小隊ヲ編制ス、諸潔之ヲ引率、二月二十七日ヲ以出発、豊後路ニ出ントス、三月八日大隊長貴馬清使ヲ驅、肥後熊本へ繰込ムベキノ由ヲ申越タリ、依テ本県美々津ヨリ引返シ飯野踰ヨリ進ム、同十六日熊本着、諸潔直チニ二本木ノ本營ニ到ル、然ル処熊本城外安政橋詰坂元某ノ隊ニ代リ守兵ノ令ヲ受ケ、即日交代番兵ス、城ヲ距ル纔三四町、城内ヨリ大小炮ヲ狙撃スル度々ナリ、四月八日午前第五時頃我台場先キ竹山ニ倚リ台兵突出攻撃ス、我隊奮戦激励時ヲ移ト雖トモ敵衆ニシテ我二十倍、遂ニ一二ノ守塁ヲ突破リ、川ヲ涉リ前後ヨリ挟ミ撃タレ、頗ル苦戦トナリ守保スルコト能ハス、川ニ添フテ却キ、白川ヲ涉リ神社ノ森ヨリ横ヲ撃、午后二時頃台兵引揚ル、乃其兵ヲ以先ノ守塁ヲ固ム、此日諸潔銃創ヲ被ル、其他

死傷多シ、台兵モ亦数名ヲ斃ス、同十四日川尻ノ敗ニ依リ番兵引上ベク令アリ、此所ヲ守ル三十日ナリ、乃解テ新山ニ却ク、翌十五日戸鳥村二次ス、同十六日本營ヨリ健宮ノ方城ヲ固ムヘキノ令ニ依リ発シテ健宮ニ到ル、同所出張本營ノ命ニヨツテ下村ヲ守ル、同二十日午前第五時ヨリ官軍大ニ進撃ス、健宮及御船ノ大小炮声地ヲ動シ恰モ千雷ノ如シ、我隊モ午前第七時ヨリ激戦、十二時ニ至テ彈藥竭キ、一分隊ノ守塁難保ニ付二・三・四ノ分隊ヨリ繰上ケ防戦ス、此時謙藏銃彈両脛ヲ貫キ歩行スル能ハス、五月一日帰県、家ニ在テ治療ヲ加ヘ、八月一日自首帰順ス、

明治十一年四月 日 (空白) 鹿兒島県 山下謙藏

二四 吉海郷十郎上申書

戦地景況概略

明治十年二月二番大隊五番小隊ノ兵士ニ編入セラレ、同月十五日ヲ以テ大口街道ニ発程ス、同廿一日熊本県下川尻駅ニ到ル、此ニ於テ前驅ノ六番・七番大隊熊本鎮台兵ト事アルノ報ヲ得開戦イタシ、我隊ニモ翌廿二日進テ城

ヲ囲ム、八幡山ヨリ攻撃スト雖モ官軍善ク防戦シテ成敗
決ス、午後六時ニ至リ(二本木之)二本樹迄引揚ケ、爰ニ宿陣スルコ

ト四日間、同廿六日官軍松橋へ上陸ノ報アリ、我一小隊
外ニ一小隊防禦ノ為メ繰出シ、亀崎所々ニ他隊ト隔日ノ

交代ニテ哨兵ヲ張ル、同三月十三日頃迎柴町迄繰出シ、

翌十四日午後第一時ニ大津迄出張、坂梨街道ニ一夜番兵

ス、翌十五日南郷ノ内黒川村へ繰出シ所々ニ胸壁ヲ築キ、

番兵ニ行ク道ノ嚮フニ官軍巡查兵(二三拾名計リ)進ミ来リ、

我一分隊ヲ以テ戦フ、官軍直ニ敗走ス、我胸壁ニ引揚ケ

堅ク守之、翌十六日復官兵二百五拾名計リ寄セ来ル、我

二分隊ハ右ノ山手ニ登リ、左翼ノ半隊ハ本道ヨリ進ム、

右翼ノ二分隊ハ敵ノ背後ニ出ルノ約ヲナシテ戦フニ、二

分隊本道ヨリ頻リニ切込ントスルト雖モ砲声烈シクシテ

間隙ナシ、山手ノ半隊敵ノ背後ニ出テ之ヲ衝クニ官軍敗

走ス、其機ニ乗シテ一里計リ永野村迄尾撃ス、官軍死傷

拳得サル者二十名・生捕八名、外ニ銃器二十挺余ヲ分捕

リ、我隊僅ニ四名ノ即死ナリ、此ニ至テ我受持ノ胸壁ニ

引揚ケ暫時之ヲ守ル、内ニ煩熱ヲ病ミ川尻病院ニ退キ、

夫ヨリ木山所々ノ病舎へ転シ療治スル(下脱之)雖モ急ニ癒難シテ、

高鍋病舎ヨリ国ニ帰ル、

明治十一年四月

鹿兒島県伊集院郷平民
吉海郷十郎

二五 邊見昌司上申書

戦地景況概略

明治十年鹿兒島県私学校党ノ王師ニ抵抗スル所以ハ豈他
アランヤ、丁丑ノ春中原尚雄等要路官吏ノ内命ヲ受ケ、
維新ノ元勳・国家ノ棟梁タル陸軍大将西郷隆盛ヲ暗殺ス
ルノ奸謀発頭スルニ及ヒ道路皆言フ、嗚呼廟堂ノ上ニ趨
躡シ天子ノ爵秩ヲ取テ以テ黎民ヲ保護シ国家ヲ維持スル
ノ頭官、其私ヲ以テ天下ノ法度ヲ破リ為ス可カラザルノ
事ヲ行フコト如此ナルトキハ、黔首何ニ倚テ立コトヲ得
ンヤ、天下何ニ倚テ至治ナルヲ得ンヤ、況ンヤ慷慨ノ士
ニ於テハ從ニ之ヲ詞上ニ誹議スルヲ欲セズ、之ヲ廟堂ニ
以聞シ君側ノ姦ヲ掃除シ、天皇陛下至聖至仁ノ徳ヲシ
テ四表ニ光被セシメ、鴻号ヲ無窮ニ垂レ賜ハンコトヲ欲
セザル者ナシ、此時ニ当テ西郷隆盛等自ラ愆フル所アラ
ント東上スルニ及テハ、元来死ヲ共ニスルノ約アル者安
ソ袖手傍觀スルヲ得ンヤ、其国憲ヲ犯シ朝廷嚴禁ノ兇器
ヲ携ルノ件ハ、国法ノ免サミル所ト雖トモ奸計如此ナレ

八則千^(熊眉力)燃眉ノ急ヲ救ハントスルニ於テ之ヲ須ヒザルヲ得
 ス、悉ク戎器ヲ携エ、十年二月十五日鹿兒島県下旧練兵
 場二集会シ之ヲ五大隊ニ編製シ、余ハ二番大隊二番小隊
 ノ押伍トナリ、中島建彦^(健彦力)ヲ以テ隊長トス、二月十五日ヲ
 以テ鹿兒島ヲ発シ、大口街道ヲ經過シ同二十一日熊本県
 川尻ニ着ス、此時台兵我先鋒ヲ遮リ既ニ兵端ヲ開ク、我
 隊該夜川尻ヲ発シテ高橋ノ海岸ヲ守リ居ルコト不日ニシ
 テ、官軍百貫石ニ上陸スルノ報アルニ由リ直チ二百貫石
 ニ趣ク、然ルニ官軍上陸セサルヲ以テ同廿三日攻城ノ令
 アリ、馳セテ牙城ノ下ニ到リ、城兵ト奮戦甚タ熾ナリト
 雖トモ城兵能ク拒クヲ以テ蹂躪スルコト能ハス、廿四日
 黎明退テ出町ヲ守ル、三月二日官軍陸続木留ニ雲集スト
 諜知シテ之ニ赴ク、既ニシテ田原方面ノ兵大ニ敗績スト
 聞キ、三月八日詰朝田原ニ至リ、壘ヲ築テ之ニ拠ル、対
 壘ノ際官兵昼夜ヲ分タズ我壘ニ向テ乱射スルコト大進戦
 ノ時ヨリ甚シ、我兵彈藥欠乏スルヲ以テ敢テ応砲セス、
 官軍大挙進戦ヲ待チ機ニ臨テ一斉ニ接戦シ屢官兵ヲ破ル、
 官兵ノ死傷勝テ言可ラス、此時二当テヤ我軍撼山排嶽ノ
 勢アルヲ以テ向フ所勁敵ナシ、然ルニ或日七本ノ戦大ニ
 利ヲ失ヒ援ヲ我隊ニ乞フ、此時半隊長川上群介半隊ヲ率

テ赴キ救ヒ撃テ官軍ヲ破リ、追撃スルコト壱町余ニシテ
 川上群介飛丸ニ中テ斃ル、本日ノ戦ニ於ケルヤ頗ル快戦
 ニテ再ビ旧壘ニ拠ル、滯陣スルコト数日ニシテ官軍大挙
 七本ヲ攻撃ス、我隊勉メテ返戦スト雖トモ其精銳当ル可
 カラズ、退クベキノ令ヲ奉シテ味取町ニ退キ、転シテ鹿
 子木ニ突出シ植木本道ニ出レバ、七本方面ノ官軍駭々衝
 突スルニ逢ヒ撃テ之ヲ退ケ、植木本道ニ胸壁ヲ築キ守ル
 コト大抵二十余日、其間屢小戦アレトモ勝敗ヲ決セス、
 殊ニ我軍彈藥空乏ノ為ニ進軍スルヲ得ス、四月十四日川
 尻方面ノ軍大ニ敗衄スルニ及テハ官軍我背面ヲ壅塞スル
 カ故ニ、偶々取ル所ノ地ヲ捨テ長峯ニ退キ、同十五日進
 テ保田窪ニ到リ寨壘ヲ築テ之ヲ守ル、廿日官軍大挙シテ
 突進ス、其勢ヒ甚タ鋭クシテ遂ニ支ルコト能ハズシテ退
 ク、官軍勝ニ乘シ呼譟シテ尾撃スルコト八丁余、此時垣
 瀬ノ援兵来リ救ヒ横撃スルニ会ス、於是我隊返戦合撃縦
 横馳突、敵兵披靡シ先ヲ争テ走ル、逃ヲ逐ヒ奔ヲ追ヒ斬
 首三百余級・大砲三門及ヒ尾注銃并彈藥若干ヲ獲、凱歌
 シテ旧壘ニ還ル、既ニシテ御船ノ敗報至ル、即夜援軍木
 山ニ至ル、於是軍議割拠ニ決シ、木山ヲ発シテ矢部濱町
 ニ退ク、此時我軍隊ヲ編製シテ我隊号ヲ振武四番小隊ト

改ム、隊長黒江八左衛門・中島建彦ヲ以テ振武本營トス、四月下旬矢部ヲ斃シテ崎嶇嶮岨ノ椎葉山ヲ踰越シ、江代ヲ経テ遂ニ人吉ニ至ル、此時官軍鹿兒島ニ上陸ノ報アルニヨリ中島建彦等直チニ振武十一中隊ヲ率テ人吉ヲ斃シテ五月三日鹿兒島ニ着ス、時ニ官軍既ニ鶴嶺及ヒ諸道ニ寨壘ヲ築キ防禦ノ策甚タ嚴ナリ、五月五日軍議進撃ニ決シ振武一大隊ヲ以テ城山ヲ攻撃シ、四面蟻付シテ登ルニ、敵險ニ抛リ壘ヲ築キ頻リニ発砲ス、矢下ルコト雨ノ如シ、我兵直チニ城山ヲ蹂躪シ雌雄ヲ決セント拔刀ニテ敵壘ニ逼迫ス、敵壘前ニ柵ヲ堅クシテ我兵ノ進入ヲ狙撃スルカ故ニ、遂ニ抜コト能ハス、兵ヲ聚合シテ紙屋谷ニ退キ該夜玉里ヲ守ル、五月六日黎明復タ一大隊ヲ以テ川尻ヨリ官軍ノ背面ヲ衝ントス、然レトモ官軍能ク拒戦スルヲ以テ小野村ニ退キ、止ルコト数日ニシテ後チ田上村ヲ守ル、五月下旬真幸戦地景況ノ探偵ヲ担当シテ拾四五名ト真崎ニ至リ、後チ攻撃隊ノ分隊長トナリ、六月中旬大崎ニ進軍シテ大捷ヲ得タリ、七月下旬岩川ヲ攻撃ス、勢ヒ甚タ激烈砲声雷ノ如ク、死傷モ亦尠カラス、半途ニ至テ彈藥竭乏、我兵終ニ潰走シテ退ク、本日ノ戦ニ余銃創ヲ蒙リ、都之城病院ニ於テ療治ス、翌日諸道ノ兵皆利ヲ失ヒ、都

ノ城モ漸次ニ其危キヲ以テ宮崎及ヒ高鍋ヲ經過シテ美々津ニ至ル、後又延岡ニ移ル、此時ニ当テヤ兵勢日ニ縮マリ、彈丸黒子ノ地ニ相集リ四面皆官軍ノ有トナル、嗚呼亦城下ノ戦ニ彷彿タラサランヤ、余ハ銃創未タ癒エザルヲ以テ間道ヲ潜行シ、大野村ノ民家ニ於テ創ヲ療スルコト数日、創稍癒タリ、既ニシテ我兵永井村ニ至ト聞キ、追跡シテ之ニ赴カント欲スレドモ官軍道路ヲ壅塞シテ行コト能ハズ、村落ニ潜伏シ勢挽回ヲ俟ツコト十余日ニシテ西郷隆盛等一方ヲ撃破シ鹿兒島ニ趣キ、官軍亦其困ヲ解キタリト聞キ、間行シテ鹿兒島ニ歸レハ城山既ニ陥没シ、隆盛以下悉ク自殺セリ、於是蓬頭跣足軍門ニ降ル、

(年月日脱)

鹿兒島県
邊見昌司

二六 榊権右衛門上申書

戦地景況概略

客歲西郷氏ノ事ヲ西隅ニ拳ルヤ、其驥尾ニ付カント第五大隊ニ番小隊ニ編入シ、明治十年二月十七日鹿兒島県下ヲ発ス、同月廿二日熊本県下ニ着陣シ、即日先鋒植木ノ陣ニ到リ向坂ヲ守ル、午後六時比敵兵俄カニ襲来リ、之

レニ応シ抗戦数烈、雷砲空ニ轟キ、電火地ニ散シ雌雄争フ、此時第四大隊六番小隊及ヒ第五大隊七番小隊ノ援隊ト共ニ奮戦進シ、夜半ヲ過キ終ニ敵ヲ破リ追撃シテ連隊旗ヲ採リ銃器・弾薬ヲ得、斃敵數十名流血前路ニ迸ル、同廿五日山鹿ニ戦フ、敵兵ヲ退ケ宮ノ原藤八郎先鋒ニ進ミ砲壘ヲ乗取り接戦シテ士官三名ヲ斬ル、猶進ンテ悉ク追散シ二里余ヲ尾撃ス、此間敵兵ノ死骸百八十余名ニ及ヒ戦ヒ大ニ勝ち、再ヒ我カ兵ヲ山鹿ニ揚ク、三月四日平山村ニ抗戦ス、追撃シテ十丁村ニ揚ク、同五日山鹿ニ転陣シ兵ヲ鍋田村ニ張ル、同十二日朝天ヨリ敵兵我陣ヲ襲フ、抗戦時ヲ移ス、村田三介憤然トシテ先鋒ニ進ミ白刃ヲ振テ衆ヲ指揮シ、援隊ト共ニ猛闘奮進ス、此時胸壁ニ銃丸ヲ負ヒ戦地ニ斃ル、我兵氣ノ挫ケタルヲ隊長伊地知某一層奨励シテ進入シ、終ニ敵ヲ破ル、同十五日ヨリ連日戦フ毎ニ悉ク追散ス、同廿四日隈府ニ守ル、戦フコト両度、四月七日黎明敵亦大挙シテ来リ攻ム、激戦数刻雌雄ヲ決セス、此夜老木村(小池カ)ニ守ル、同十日土山村ニ戦フ、我軍敗レテ死傷十七名ニ及ヒ木山村ニ引テ、同十二日再ヒ御船ニ進ミ向フ、午后四時敵戦ヒ来リ、奮戦敵ヲ破リ十余町ヲ追フ、同十六日敵来リ攻ム、我軍不利シテ退テ

矢部ヲ守ル於此我隊ヲ改称シ奇兵十三番中隊トナス、不日ニシテ胡麻山ヲ經テ人吉ニ入ル、三日ヲ過キ人吉ヲ発シ日州延岡ニ至ル、豊後路ニ向ヒ五月中旬竹田ノ敵兵ト防戦ス、或日某右足ニ銃丸ヲ帯ヒ、傷痕ノ為メニ高岡郷ノ病院ニ送ラル、八月下旬郷里ニ帰リ后軍門ニ降ル、

明治十一年四月

鹿兒島県下穎娃郷
榊権石衛門

二七 田中市右衛門他三名連署上申書

戦地景況概略

客歳西郷氏ノ事ヲ起スノ時機ニ臨ンテ有志其驥尾ニ付カシコトヲ欲ス、我輩右翼一番小隊第一大隊ニ編入ス、西郷小兵衛之ヲ指揮ス、明治十年二月十五日鹿兒島県下ヲ発シ、西出水郷ヲ經テ同二十一日熊本県下川尻駅ニ到着ス、翌廿二日黎明兵ヲ拳テ熊本城ニ向フ、我隊八段山口ニ進ミ雷声数烈、奮戦シテ敵壘ヲ破リ城壁ニ近ツクト雖トモ守備嚴然タルカ故ニ進登スル能ワス、日夜連戦幾回ナルヲ知ラス、同廿五日夜半援隊ト代テ二本木町ニ揚ク、同廿六日午后六時高瀬ニ向ツテ進発ス、同廿七日朝天ヨリ高瀬八幡山ノ敵陣ヲ排撃セント潜力ニ高瀬川ノ下流ヲ渡リ、

突然敵兵ノ不意ヲ衝キ破ラント隊長西郷自ラ手旗ヲ振ツテ先鋒ニ進ミ縦横ニ指揮シ奮戦、時ヲ移サス一声ニ敵ヲ破リ追散シテ砲壘ヲ乗取ル、此時西郷小兵衛銃丸ヲ左胸ニ貫キ戦地ニ斃ル、同二十八日木留へ引揚ケ、兩日ヲ經テ大田尾村ニ転シテ守兵ス、三月三日吉次峠ノ戦ヒ急ナルニ依リ我隊援兵トシテ進軍、直二本道右ノ山ヨリ攻撃ス、昼夜激戦、翌黎明ニ至リ尚烈戦ニ及ヒ、午后二時比終ニ敵兵ヲ破リ一里計リ追撃シテ、我兵又吉次峠ノ旧壘ニ拳テ守兵ス、我隊ハ大田尾村ニ帰陣ス、時日不詳田原ノ味方敗報来リシニ木留ニ向ヒ援兵ス、連日戦フ、互ニ勝敗ヲ決セス、四月中旬川尻ノ味方敗レ、我軍引テ新鍋・武宮・御船等ニ守ル、我隊ハ長峯ニ移陣ス、同十九日頃新鍋・武宮・御船ニ敵大拳シテ襲ヒ来ル、我隊ヲ以テ新鍋ニ応援ス、敵數十ヲ斃ス、本日ノ戦ヒ先鋒大二苦戦スルヲ以テ我隊及ヒ貴島カ隊ト相闘ノ喇叭一声直ニ進ス可キノ約ヲナシ、衆ヲ奨励シ劇戦シテ大ニ敵軍ヲ破リ奮進スル時、中馬喜之進頭上ニ銃丸ヲ受ケ木山ノ病院ニ療養ス、同日御船ノ味方敗レテ木山ニ退ク、我隊モ木山ヲ經テ川原ニ至ル、該地ニ戦ヒ敵兵ヲ破ツテ走ラス、于時全軍矢部ニ引揚ケ、我隊モ同シク矢部ニ至ル於愛諸隊編制ヲ為ス、我隊ヲ行進營

番中隊ト、名稱ス不日ニシテ胡麻山ヲ越ヘ人吉ニ入ル、五月一日人吉ヲ殄シ鹿兒島ニ向フ、吉野村雀ヶ宮鹿兒島近在ニ守兵ス、時日ヲ詳カセス敵兵花倉阪ヨリ吉野七社ニ侵入シ、味方四方ニ手配シテ之ヲ攻撃ス、敵散乱シフ及ヒ銃器・彈藥等若干捨テ走ル、我隊一度雀ヶ宮ノ旧壘ニ抛リ、同廿四日敵我軍ノ背後ヨリ襲ヒ来ルヲ之ニ応シ、我中隊長松岡精介先鋒ニ進ミ憤戦シテ該地ニ斃ル腰骨ヲ破ラレ死ス、外ニ我隊中ノ死傷五六名ニ及フ、薄暮至リ終ニ防ク能ワスシテ川上村ニ引揚ケ、同二十五日黎明ヨリ雀ヶ宮及ヒ桂山ノ敵兵ヲ襲撃シ、我軍頗ル奮進シテ直チニ敵軍ヲ破ル、銃器・彈藥等數多得タリ、同廿七日ヨリ廿八日ニ至リ吉野村帶迫ニ戦フ、敵味方乱入シ憤闘猛戦時ヲ移ス、味方利アラスシテ帖佐ニ退ク、此日烈戦ノトキ分隊長伊勢直禎骨ニ銃丸ヲ負ヒ病院ニ送ル、同廿九日加治木ニ転陣シ該地福山村ニ守兵ス、三日ヲ經敵我軍ノ背後ヨリ倏然攻撃ス、我隊防拒ノ策ナシ、因分郷新川へ引テ防戦ス、又三日ヲ過キ末吉郷通リ山村ニ移陣ス、於愛田中市右衛門行進九番中隊ニ転ス、連日戦フコト數回、七月二十日財部郷ノ十文街道ニ於テ防戦スル時、伊集院勇銃彈丸ヲ左手ニ負ヒ延岡病院ニ送ル、后不詳岩川郷ニ進撃、我隊不利ニシテ再ヒ末吉郷ニ引揚、尚諸所ニ

於テ連戦スト雖トモ悉ク敗兵トナリ、進退途ヲ失シ漸ク延岡ニ退ク、該地ノ戦ヒニ味方敗レテ散乱ス、此時田中市右衛門敵ノ囲中ニ陥リ一時山林ニ潜伏シ間道ヲ經テ鹿兒島ニ帰ル、后チ軍門ニ降テ帰順ス、

明治十一年四月

鹿兒島県下

田中市右衛門

伊 勢 直

伊 集 院 勇

中馬喜之進

二八 武元清芳上申書

戦地景況概略

明治十年二月陸軍大将西郷隆盛等政府へ尋問之儀有之、上京ノ事起ル、旧兵隊隨行ニ決シ、乃チ隊伍ヲ編制シ七大隊ト定ム、余第二大隊五番小隊鎌田雄一郎隊ナリ押伍ト成リ、同十五日大口街道ヲ発程ス、廿五日熊本県下川尻駅ニ至リタルニ、先驅ノ隊へ熊本鎮台兵俄然頻リニ砲発ス、因テ此ニ応シ兵端ヲ開クノ令聞クヤ、我隊ニモ先ヲ争フテ進ミ、八幡山ニ向ヒ之ニ応戦シ且攻撃ス、戦ヒ終日ニシテ終ニ勝敗決セス、午后六時頃ニ至リ二本木ニ轉移ス、此

ニ各隊ト交守スル事数日、同廿六日官兵松橋辺へ上陸ノ報ヲ得、我隊及ヒ他一隊保守トシテ出張、龜崎へ哨兵ヲ張ツテ固守ス、三月十四日大津阪梨道ニ至リ彼駅へ一泊ス、翌日阿蘇郡黒川村ニ繰出シ四方ニ胸壁ヲ築キ固守ス、或日官兵候兵三拾余名寄来リ、我一分隊ヲ以テ応戦スルニ官軍敗走ス、同十六日官軍ニ中隊余我胸壁ニ襲来ス、我兵一ツハ敵ノ左翼ヲ繞リ、一ハ背後ニ出ルノ約ヲ為テ戦フ、我兵抜刀之ニ迫リ交戦尤厲ハゲ、官軍敗績ス、其機ニ乗テ我兵一里余ヲ追躡ス、官隊長佐川某其外生獲八名・死傷二拾名・銃器二拾余挺ヲ分捕セリ、我兵僅ニ四名ノ即死ナリ、是ニ於テ益々先驅ノ勢ヲ成ス、然ルニ或日阪梨屯集ノ官軍岡駅竹田ヲ云フ迄引揚ルノ偵報ヲ聞クヤ、四月十日彼地ニ進軍シ其頂ニ柵壘ヲ築キテ保守ス、同十四日未明遙ニ官軍斥候来ルヲ望ム、之ヲ本隊ニ達ス、官兵忽チ我壘ニ逼リ応戦スル内、他壘ノ守兵ヲ引揚ケ二ツニ分チ、一ツハ援兵トシ、一ハ間道ヨリ横発シ、相戦フ事凡ソ二時間計、彈藥已ニ欠乏帶フ所僅ニ二三発ニ過キス、遂ニ支フル能ズシテ敗績ス、我兵死スル者數十人ニ及ヘリ、且徑道ヨリ横撃スル者亦僅ニ身ヲ以テ逃ル、此時我兵ニ拾余名敵ノ背後ヲ繞テ笹倉ニ侵入シ本部ニ火ヲ放チ、且

銃器・彈藥等ヲ分捕シ黒川村ヲ指テ引退ク、此時我兵死傷二拾七名ナリ、是ニ固守スル内、已ニ川尻方面ノ敗聞至ル、亦大津本營ノ令ニヨリ夜ニ乘シテ神速矢部ニ曳退ク、是ニ於テ隊号変制アリ、我隊奇兵四番中隊ト改号ス、四月廿四日矢部ヲ発、胡麻山嶮路ヲ經テ江代ニ至ル、是ニ野村忍介奇兵長ト為リ豊後進撃ヲ令ス、已ニシテ大分県下重岡駅ニ至ル、此地官兵僅ニ二拾余名アリシカ狼狽逃走ス、五月十四日兵士強壯ナル者ヲ絞テ一隊トシ、岡駅ニ馳セ屯集ノ官軍ヲ襲討シ、各所ニ守兵ヲ張ル、我隊ニモ此ニ哨兵ス、同十六日官軍鶴崎ニ上陸ノ探報ヲ聞キ、見兵二百名彼地ニ發行シ、亦途中ヨリ我官兵二拾名車ニ乗テ之ニ馳セ市街ニ衝入り、夜暗ニ乘シテ襲撃ス、官兵狼狽遁ル所ヲ知ラス、四方ニ遁走ス、官兵死傷ヲ捨去ル者三拾余名、即夜兵ヲ収メテ岡駅ニ引揚タリ、我隊長僅ニ傷ヲ負フ、同十八日余分隊長ニ転ス、或日官兵当地ノ内江良原村（惠良原カ）ヘ繰込ミタル報ヲ得、同廿日味爽ヨリ進撃スト雖トモ敵嶮要ノ地ニ抛ルヲ以テ遂ニ之ヲ敗ルヲ不得、同四時頃ニ至テ岡駅ニ揚兵ス、同廿二日官兵玉来村ニ奇来ル、我隊先鋒トナリ進撃ス、終ニ敗ル事不得、小鷹野村（小鷹野カ）ニ敵壁ヲ構ヘ対峙シテ相戦フ事十日余、同廿九日ニ至

リ我軍敗績ス、死傷捨去ル者数十人、我隊間道ヲ經テ小野市村ニ退軍ス、同卅日三重市ニ戍兵ス、六月一日曉霧ニ乘シテ官軍前後ニ襲来リ、一ツハ正面、一ハ後面ヨリス、戦ヒ未ダ刻ヲ不移ルニ官軍潰走ス、死傷途ニ棄ル者八拾余名、我軍僅ニ八名ノ死傷ナリ、已ニシテ夜白杵ニ軍ヲ出ス、同二日十二時頃ニ白杵ヲ襲フ、我隊ハ山手ノ先驅ト成テ正面ニ横撃ス、官軍柵壘ヲ棄テ遁走セリ、或ハ海川ニ溺死シ或ハ降ルアリ、此時銃砲・彈藥等ヲ分捕セリ、是ニ於テ所々ニ胸壁ヲ構ヘ固守ス、同六日官兵我壁ノ左翼山岳ニ寄来リ、互ニ対峙スル事五日余、遂ニ我軍敗績シテ退ク事三丁余、大川ヲ狭テ防戦ス、已ニシテ翌日官軍我軍ノ背後ヲ繞テ攻撃ス、互ニ激戦スト雖支フル得スシテ退ク、同十二日三重市ヲ攻撃シ勝敗決セス、即夜小野市村ニ退止ス、同十三日官軍三国峠ヘ寄来ル、我兵赴キ援ク、此日激戦両軍相距ル僅ニ二十余間ニ及ヘリ、夜ニ乘シテ官軍三中隊余我拒壁ヲ襲フ、我軍敗走ス、其翌四時頃官軍霖霧ニ乘シ一斉ニ吶喊シテ復来リ戦フ、我軍敗績シテ重岡ニ退軍ス、既ニシテ当地ニ敵壁ヲ構ヘ頻リニ進撃スト雖不利、此ニ対戦スル事四日余、当地ヲ発熊田駅ニ退ク、於是乎官軍日豊境赤松峠ニ敵壁ヲ構ヘ保

守スル事甚厳ナリ、已ニシテ豊境宗太郎越へ進撃ス、戦ヒ酣ルトキ俄ニ大風雨ニ乗シ咫尺モ弁セス、激戦スルニ已ニ弾薬尽キ各抜刀シテ烈戦、塁柵ヲ取ル事十五ヶ所ニ及ヘリ、然レトモ弾薬尽ルヲ以テ空ク繰引シテ引揚タリ、此時我兵死傷四拾余名ナリ、而シテ我隊矢ケ内村ニ保守ス、此ニ於テ余俄ニ熱病ニ罹リ延岡病室ニ入院ス、良久シテ病已ニ愈ユ、亦八戸村出張本営ノ事務掛ヲ命セラ、佐土原及宮崎方面ノ敗聞アルヤ、突然当地引揚ノ令達ス、其夜兵ヲ収メテ引揚ク、時ニ我軍熊田川ヲ挟テ拒守スル議アリ、遂ニ決セスシテ長井村ニ止マル、爾后数戦ヲ交ユト雖トモ遂ニ利アラス、頃アリテ宮崎・佐土原及延岡ノ我軍敗走シテ爰ニ頓止セシニ、官軍日ニ加ハリ柵ヲ立塁ヲ固フシテ是ヲ重圍スル事数十重、大小砲ヲ発スル事雨ヲ注クカ如シ、八月十七日可愛峠ノ官軍ヲ望ムニ山嶮要害ノ地ニ拠テ拒守ス、我軍曉霧ニ乗万死ヲ期シテ進撃ス、西郷ヲ始トシ圍ヲ脱スル者僅ニ五百余人ナリ、而シテ我軍山谿ノ徑ヲ経テ三日ニシテ祝川村ニ出テ転々鹿兒島ニ達ス、実ニ九月一日ナリ、時ニ官軍ノ哨兵ヲ見ルヤ、我軍ヲ潜メテ旧城内軍馬方趾及ヒ庁所等ノ官兵ヲ進撃シ、一斉呐喊抜刀シテ進ム、官軍支フル不能シ

テ退ク、然ルニ官軍米庫ニ拒壁ヲ構ヘ頻リニ連発ス、我軍攻撃且夜襲スト雖遂ニ不能抜、三日ヲ経四方ノ敗聞至ル、我軍乃チ岩崎谷及城山ニ籠城ス、而シテ官軍大砲ヲ以テ進撃スト雖我兵亦能ク拒、兩軍互ニ哨兵ヲ張り相対峙スル事凡十八日、同廿四日曉三時頃官軍四方ニ相圍ヲ為テ我塁柵ヲ襲フ、衆寡不敵、我軍遂ニ敗績シ諸將士戦死スル者数十人、余此ニ於テ官兵ノ軍門ニ降伏ス、

明治十一年四月

鹿兒島県

武元清芳伏記

二九 大磯孝平太上申書

明治十年旧二月十三日我郷ヲ発足シ、同十五日人吉ニ到ル、九番大隊四番小隊ニ編入、分隊長ト成リ、十七日人吉ヲ発シ大阪間ニ到リ、茶碗山・嶽本ノ間ヲ守ルコトニ日ニシテ十九日神ノ瀬二次シ、廿日神ノ瀬ヲ発シ、漸ク進ンテ廿一日坂元ニ着ス、邊見十郎太・別府晋介本営ニ在リ、爰ニ相会スル兵八小隊ト云ヘリ、之ヲ分テ二ト爲シ、一ハ本道ヨリ八代ニ向テ発ス、邊見十郎太之二將タリ、一ハ税坂ヲ歴日奈久ニ向テ発ス、別府晋介之二將タリ、然ルニ我四番小隊ハ本道ニ懸リ、小隊長三原七左衛

門・半隊長愛甲清之進・分隊長有川直治ナリ、然シテ坂元ヲ発シ、十五六町ヲ経テ深見谷ノ險ニ官軍ノ守兵アリ、我軍ノ進路ヲ遮リ砲発ス、之二応シ激戦シ撃テ之ヲ走ラス、古田迄尾撃ス、敵府本ノ人家ニ壘ヲ築テ防ク、爰ニ於テ愛甲清之進・有川直治銃丸ニ中テ斃ル、敵ノ伏尸五人ヲ見ル、日漸ク没ス、古田ヨリ妙見山ノ兵ヲ連ネテ終夜守ル、翌廿二日黎明ヨリ惣軍齊シク奮戦シテ、遂ニ府本ノ壘ヲ抜ク、尾撃シテ萩原ニ至ル、我隊溝堤ヲ楯ニ取り、攻撃暫時ニシテ我軍彈藥竭ク、因テ櫻馬場エ引揚タリ、既ニ黄昏ニ至リ別府力麾下日奈久ヨリ帰リ我軍ト合シ、戸或ハ障子ヲ以テ爰ニ胸壁ヲ築キ守ル、其夜未明敵正覚寺ノ山ヲ潜ミ背撃ス、因テ我兵防ク能ハス古田ニ退ク、隊伍潰乱防キ戦フ不能、終ニ惣軍神ノ瀬ニ引揚タリ、実ニ旧二月廿三日ナリ、又軍ヲ整ヘテ旧二月廿七日同所ヲ出発シ、萩村及ヒ所々二次テ翌廿八日藤元へ至ル、辺見十郎太・洲辺群平爰ニ在リ、兩人將トシテ八代ニ赴ク、敵兵又初メノ如ク深見谷ノ險ヲ守ル、直ニ砲発送ニ奮ヒ戦フ、遂ニ攻抜キ横石ニ追詰、彈藥・銃器許多ヲ分捕ス、台兵并夫卒十一名ヲ生捕リ、敵味方ノ死傷數ヲ知ラス、撃テ府本ニ攻寄セタリ、官兵櫻馬場ノ壁ニ抛テ防戦ス、

日暮ル、ニ及ンテ古田・妙見山・(猫谷力)猫舎等ノ險ヲ守ル、翌廿九日黎明ヨリ交戦、遂ニ櫻馬場ヲ拔キ取ル、櫻馬場ハ我四番小隊之ヲ守ル、余兵ハ正覚寺内猫舎・妙見山等ニ守兵、敵ハ八代ノ田地溝堤或ハ衝路ニ胸壁ス、連戦スルコト六昼夜ナリ、時ニ旧三月四日余ニハ銃丸ニ疵ヲ蒙リ人吉病院ニ退キ、三四日ヲ経テ故郷ニ帰ル、六月十五日友人數十名ト俱ニ大口郷方面辺見十郎太ノ本營ニ到ル、乃チ列伍ヲ編シ雷撃八番中隊エ編入、押伍トナリ、翌十六日暁天官軍ヲ襲撃セント進ンテ(烏神岡力)「トカメ」岡ノ近隣ニ至リ頻リニ進撃、終日ニ及ンテ勝敗決セス、薄暮ニ至リ引揚ケ上青木村ヲ守ル、同廿日官軍大ニ進撃、本道ヨリ左側ノ胸壁ヲ破ルニ及ヒ、我隊戦ヲ交ヘスシテ本城ニ引揚ケ、川涯ニ土豚ヲ以テ胸壁ヲ築キ之ヲ守ル、同三十日官兵神子ヲ渡リ鶴田ニ来リ、我兵ノ備無キヲ窺ヒ、曾木及ヒ針持ノ両所ヲ侵シ来リ、逼ルヲ以テ之ニ応セスシテ横川街道永地ヲ守ル、一夜翌日黎明官軍大ニ来リ戦ヲ挑ム、我兵之ニ応シ遂ニ不利シテ横川ニ退キ、官軍尾撃シ、之ニ於テ辺見等力ヲ振ヒ防戦スト雖モ遂ニ敗走、踊ニ退軍守ルコト六七日余、之地幾何モナクシテ七月六日頃大窪ニ転戦、翌日我兵齊シク官軍ヲ進撃シ撃テ

之ヲ退ント約ヲ成シ、兵ヲ斃シテ攻撃スト雖モ官軍要地ヲ守リ能ク拒クヲ以テ破ル能ハス、同八日我兵又之ヲ進撃ス、戦酣ノトキ官軍王子道ヲ破リ背後ニ迫ルニ依リ退キ、高野ニ至リ官軍ノ攻撃ヲ待ツ、此ニ於テ我全軍再ヒ進撃スト雖モ一戦破ル不能、該地モ亦幾何モナクシテ上荘内ニ転戦、同二十日官軍大ニ鼓譟シテ来リ戦フ、我兵遂ニ敗績シテ山ノ口ニ退軍、翌日官軍又来リ撃ツ、我兵衆寡不敵シテ額貫ニ退軍、或日官軍板屋道ヲ破リ来ルヲ以テ我兵少シク邀戦スト雖モ地理不便ニシテ清武ニ軍ヲ移シ守備ヲ為ス、此地最モ要害、同廿八日官軍又此地ニ来リ戦ヲ挑ム、我兵奮ヒ逆戦拒戦フ、遂ニ本道ノ左側ヲ破ラレ敗走シテ宮崎川ヲ守ル、同三十日敵軍攻撃シ、遂ニ川ノ上流ヲ渡リ我右翼ニ来リ、人家ヲ火スル焰ヲ望観、支フ不可ヲ察シ佐土原ニ走り、廣瀬ニ於テ暫時追撃ヲ防ク、夜ニ及ンテ一ツ瀬川ヲ渡リ河涯ニ拠テ守禦ヲナシ、カヲ尽シテ防戦スト雖モ終ニ上流ノ守ヲ破ラレ、退キ耳川ニ転戦ス、八月八日頃官軍山陰ヲ破リ富高新町へ衝入ヲ聞キ、守兵ヲ引揚ケ辺見之ヲ追散セント兵ヲ選ミ進ミタルニ、官軍既ニ板橋ヲ撤シ墨柵ヲ設ケ堅ク守ルニ因テ、転テ問道ヲ求メ、途ニシテ官軍大煩・彈藥新町ニ運搬ス

ルヲ分捕リ、山川ノ險隘ヲ經テ川路ニ出テ門川ニ至ル、此日大風雨河水大ニ漲ル、或日官軍大拳本道ニ逼ル、我兵利アラスシテ退キ草香ノ本道ヲ守ル、同十三日昼過官軍三田井口ヲ破リ延岡ニ突入ラントスルノ報聞有ルニ依リ、桐野利秋我一中隊ヲ率テ該夜ノ防禦トシテ彼ノ地ニ赴キ市街ヲ守ル、翌曉天官軍来リ戦、我兵防戦スレトモ衆寡不敵シテ永井^(長井)ヶ^力二到リ、官軍追撃、要害ニ抛リ之ヲ拒ク、同十五日我全軍一斉ニ官軍ヲ撃チ退ケント邊見等兵ヲ率ヒ衆ニ先ンシ戦ヲ挑ム、官軍大衆ヲ帥ヒ来リ戦フ、我軍遂ニ不利シテ堂ヶ坂ノ守壘ヲ棄テ、転シテ又丘岳ニ抛リ追撃ヲ禦ク、敵敢不逼、日ヲ連ネテ官軍大ニ来リ四方八方ヲ囲ム、我兵網魚ノ如ク、銃炮ヲ斃スルコト殆ト如霰、故ニ我軍少シク苦ム、十七日兵ヲ選ミ我壘ヲ退キ辺見ノ本陣ニ至ルニ、此地永ク保守ス不可ハ勿論事ヲ待タスト、該夜十一時頃兵ヲ潜メ官軍ノ壘ヲ擣キ破リ鹿兒島ニ突キ出ント、辺見十郎太・河野主一郎前軍ヲ將ヒ、問道ヲ潜ミ漸ク進テ可愛嶽ノ麓ニ到リ、数百仞ノ險巖ヲ攀チ登テ官軍ノ營ヲ俯撃ス、官軍不意ナルヲ以テ大ニ潰乱逃レ走ル、我兵機ニ乘シ敵營ヲ蹂躪シ器械・彈藥・輜重ヲ獲ル、甚タ多シ、我兵大ニ益振ヒ、又別ニ一營ヲ抜

キ分捕スル者モ亦多シ、官軍ノ伏尸途ニ充テ我兵踏テ之ヲ超ユ、此夜山中へ泊ス、同十八日暁天辺見等前軍ヲ整へ進シテ延岡口へ突出ント斥候数名ヲ出ス、時二官軍道ニ要シ我先鋒ヲ邀撃ス、依テ奮戦衝キ破ラント烈シク戦フ央ニ、官軍ノ卒適々書一輪ヲ齎シ祝人川祝子カ口ヨリ来ルヲ獲へ、官兵寡キヲ知り乃チ道ヲ祝人川ニ転シ官軍ヲ破リ、祝子川ニ出テ官軍ト戦ヒ、器械・彈藥ヲ獲ル又多シ、死傷モ亦多ク在リ、同廿日三田井ニ衝出官軍二名ヲ斬リ此ニ在ル金穀・器械ヲ獲ル、最モ多シ、爰ニ於テ余ニハ前軍三番中隊ニ編入、同廿四日漸ク進テ神門ニ出ント、途上鬼神野ニ至テ官軍ト終日砲戦、少シク利アリ、病院ヲ取り又銃ヲ分捕ル、同廿六日大雨銀鏡ニ至リ、官軍八名ヲ斬ル、同廿八日小林郷ニ至リ、巡查五六名ヲ生捕ル、同三十日後軍ト先駆ヲ交代シ官兵ト横川ニ戦ヒ、勝敗不決、遂ニ軍ヲ転シ踊ニ至ル、官軍又此地ヲ守リ戦フ初メ、我軍之ヲ破リ加治木ニ通ント頻ニ激戦スレトモ夜ニ及ンテ成敗決セス、此夜兵ヲ引キ揚ケ軍ヲ潜メ山田ニ突出セント間道ヲ進ミ、同三十一日溝辺ヲ過キテ山田ニ至リ、

巡查四名・旅団兵一名ヲ生捕ル、此地ニ暫時休足、午飯ヲ喫ストキニ官軍蒲生ニ在リ、午后四時頃蒲生ニ在ル新

選旅団ノ兵ト戦フ、官軍大ニ逃走、我兵尾躡、士官并ニ兵卒ヲ斃スコト二十名余・生擒スルモノ九名、我軍大ニ利アリ、此夜各所ノ要路ヲ守ル、九月一日辺見等前軍ヲ將トシ、鹿兒島ニ在ル官軍ヲ鑿殺セント各抜刀進テ私学校境内ノ官兵ヲ撃チ退ケ十数名ヲ斬ル、余ハ米庫内ニ逃走ル、然ルニ此時士民誰カ喜感セサル者ナシト云フ、此ヨリ之ニ抛リ米蔵ノ官兵ト大ニ砲撃最モ熾ナリ、呼声天ニ響ク、官軍又城山ニ登リ我軍ヲ俯撃ス、我軍即チ之レニ応シ追散ス、我兵又城山ヨリ米庫ノ兵ヲ狙撃ス、我軍此ニ抛リ永久ノ基ヲ計リ兵士ヲ要地ニ配リ日々壘柵ヲ設ケ防禦ヲ嚴ニス、官軍敢テ不遁、官軍モ亦諸山ノ險要ニ壘柵ヲ設ケ大小砲ヲ備へ対峙、互ニ砲発スルコト轟々雷鳴ノ如ク、夜ニ至レハ白砲ヲ発シ篝火連綿星ノ如ク、海軍モ亦時々巨砲ヲ発スト雖モ我軍保守スルコト三旬ニ垂ントス、余ニ某日城ヲ出、軍門ニ降ル、

明治十一年第四月

鹿兒島県宮ノ城

大磯孝平太

三〇 鎌田正方上申書

記事

明治十年六月七日蟠龍六番中隊鹿兒島ヲ斃シ、十七日延岡ニ達シ、熊田ヲ守リ以テ豊後方面ニ備フ、自是以後四方ノ戦我軍多ク利アラス軍勢日ニ蹙ル、八月十四日延岡ノ破ル、ヤ、我軍退テ永井村地方ヲ保ス、敵軍毛鹿ニ来リ将サニ進ンテ我ヲ撃ントス、十五日一戦延岡ヲ復セント大拳毛鹿ヲ撃ツ、豊後方面ノ兵モ亦タ皆ナ来リ援ク、奮戦朝ヨリ日中ニ至リ、我軍終ニ大ニ破レ全軍永井村ニ退ク、此地ノ形状タルヤ峻山険岳ニシテ熊田川屈曲溪底ヲ流シ、川ニ沿テ村落ヲナセリ、実ニ狭隘ノ一小溪ナリ、然リ即チ民家へ皆ナ負傷患者ノ居ル所ニシテ壮士ハ家ニ入ルコトヲ得ス、通路トナク田畠トナク雑沓窘蹙豈ニ錐ヲ立ルノ余地アラシヤ、兵糧具ナキニ非スト雖モ炊クニ所ナク、兵士飢ユル者アルニ至ル、仰テ四山ヲ望メハ敵兵充滿、困ミ幾層ナルヲ知ラス、昼ハ銃砲ノ頻リニ轟クヲ聞テ軍備ノ愈ヨ敵整ナルヲ察シ、夜ハ天際ニ炫燿スルノ燐火數里ニ連続シ、恰モ星光ノ沈々タルカ如ク、夫レ幾点ナルヲ知ラス、又タ益ス備ノ敵整ナルヲ覺フ、於是人情誰レカ感涙ナカランヤ、殆ント垓下ノ趣アルニ至ル、

明治十一年四月

鹿兒島県

鎌田正方

三一 樺山資美上申書

戦地景況概略書

明治十年二月十七日五番大隊四番小隊ニテ斃程、肥後川尻駅へ着ス、同廿二日黎明熊本城安政橋口ヨリ進撃、十二時頃休戦、千反島^(千反福丸)へ二日守戦、同二十四日段山口へ交代シ守戦スルコト十四日、夫ヨリ木留本營ニ至リ、同三月十一日夕刻田原口ヨリ応援ヲ乞フ、直ニ赴ク、然ルニ味方壘ヲ二三町引テ守兵ス、翌日二時比我力隊ニテ右壘ヲ復ス、時ニ右ノ腕ニ銃丸ヲ蒙リ入院ス、同七月上旬庄内郷山田村ニ我力隊アルヲ聞キ帰隊シ、其后日不詳高原郷ニ進撃ス、官軍ノ壘ヲ乗落シ尾撃スルコト七八町、二時比彈藥尽キ山田村へ引揚ク、其后再ヒ高原へ進撃、官兵ヲ破ルコト能ハス、山田村へ帰陣ス、同廿三日財部郷ノ内通山守兵行進隊ト交代ス、翌未明ヨリ官軍大進撃、右翼ノ味方敗走、我隊守ルコト能ス、繰引ヲ以テ都城ヲ指シ引退ク、都城ハ最早官軍ノ有トナリ我力兵散乱ス、時ニ銃創ヲ蒙リ病院ニ入り療養ス、其后戦地ノ実情不相分候也、

明治十一年四月二十七日

鹿兒島県

樺山資美

三二 前田藤次郎上申書

戦地景況概略

明治十年二月西郷隆盛政府へ尋問之筋有之、上京之節余ハ二番大隊五番小隊ノ兵士ニ編入セラレ、同十五日以テ大口街道ニ発程、所々宿陣ヲ経テ同廿廿日熊本県下川尻駅ニ到ル、爰ニ於テ前駆ノ六番・七番大隊熊本台兵ト事アルノ報ヲ得、開戦イタシタルノ報ヲ聞クニ、我隊ニモ翌廿二日進テ熊本城ヲ囲ム、八幡山ヨリ攻撃スト雖モ官軍善ク防戦シテ成敗決セス、午後六時ニ至リ二本樹迄引揚ケ、爰ニ宿陣スルコト四日間、同廿六日官軍松橋へ上陸ノ報アリ、乃チ直チニ我小隊外ニ一小隊防禦ノタメ繰出、亀崎所々ニ哨兵ヲ張ルニ、同三月十三日頃我隊迎榮町迄繰出スニ、余ハ癩瘡病^ミ川尻病室ニ入院イタシ、療治スト雖モ急ニ愈ヘ難フシテ、同下旬ニ帰郷ス、旧四月五日頃当郷ニ於テ勇義隊一番小隊ニ編入イタシ、翌六日米ノ津之内八ヶ所迄出張ス、爰ニ於テ分隊長トナリ、爰ニ胸壁ヲ築キ堅ク守之、同廿三日頃針原迄出張、胸壁ヲ構ヘ守兵スルコト三日間、同廿七日頃^(矢管カ)八ハツ峠ノ味方難戦ノ報アルヤ、直チニ我半隊応援トシテ繰出戦フニ、我左半隊ハ翌廿八日同所ニ繰出シ激戦スル内、我守場ノ針

原ニ官軍襲来リ戦フ、遂ニ我敗走シテ当所麓迄退軍ス、爰ニ胸壁ヲ築キ守之ニ、旧五月朔日復官軍寄来リ、戦フニ我軍彈藥既ニ竭キ、各帯ル処一二発ニ限ルニ止ヲ得ス宮ノ城迄引退キ、不日シテ上宮山迄繰出シ平川越へ壘ヲ設ケ守之、五月六日頃我軍ヨリ忽進撃シテ麓ノ官軍ヲ直チニ打破ラント該夜所々ニ兵ヲ分配シ、一ツハ本道ヨリ進ミ、一ツハ本道ノ先隊敵ノ正面ニ近キ戦フノ砲声アラバ其機ニ乗シ、山中ヲ忍ンテ敵ノ胸壁ニ抜刀シテ切込ノ約ヲナシテ進ムニ、不図モ本道ヨリ進コト能ハス空シク引退キ、爰ニ於テ各隊総ヘテ所々ニ散乱ス、

明治十一年寅四月

鹿兒島県出水郷

前田藤次郎

三三 (署名ナシ)

明治十年三月中熊城ヨリ辺見等帰県募兵ノ際、第九番大隊一番小隊監軍トナリ、同二十五日発程、四月二日熊本県下人吉ニ着陣、哨兵二日官兵告口ニ襲来ノ報アリ、即チ該地ニ出兵、到レハ官兵既ニ佐敷ニ引揚マタ一人ヲ不見、因テ哨兵三日ヲ経テ令アリ、神ノ瀬口ニ出会ス可シト、直チニ兵ヲ引率シ該地ニ達ス、軍議アリ、坂本進撃

二決ス、因テ昼夜兼行該地ニ進入、官兵風ヲ望ンテ走ル、愛ニ於テ軍ヲ分ツテ二ツトナシ、壹隊ハ八代口ニ発向シ、我隊ハ萩村ヲ經テ日奈久ニ到ル、敵一名ナシ、仍テ暫時休兵ノ折柄、八代口頗ル激戦、速ニ応援ス可キ報アリ、即直ニ八代口ニ発向ノ途上説アリ、軍艦日奈久ニ入港、官兵上陸スト、因テ隊ヲ斑セハ果シテ然リ、海岸ニ到レハ銃炮交モタ発ス、味方之レニ応シ銃ヲ発スト雖モ距離遠隔艦ニ達スル能ハス、即チ発弾ヲ止メ隊伍ヲ整列シ以テ敵ノ上陸ニ備フ、翌日ニ至リ軍艦一艘復入港、兩艦交モ炮発、夕陽ニ及ンテ左モ烈シ、我兵波戸或ハ新拓ノ土堤ニ伏シ以テ俟ツ、既ニシテ官兵輕舸三艘ニ乗シ海岸ニ寄來ル、我兵斉シク銃ヲ発ス、敵遂ニ上陸ヲ得ス、輕舸ヲ走ラシ本艦ニ歸ル、翌日軍艦復臻ル、三艦炮発亦タ前日ノ如シ、午後三時ニ及ンテ輕舸五艘ニテ海岸近ク寄來ル、我兵復タ撃テ走ラス、然ルニ八代口ノ敗聞臻ル、仍テ背後ニ敵ヲ受ルコトヲ慮リ、此夜兵ヲ潜ソメ嶮岨ヲ經過シ神ノ瀬ニ引揚ク、斯ノ時間夜我輩誤テ千尺ノ蹊谷^(溪谷)ニ失墜、右足ヲ傷キ支体動カズ寸モ步行ヲ得ズ、仍テ人吉病院ニ入療ス、爾後戦地景況詳ニセズ、

三四 矢田宏上申書

十年四月一日大分県発程、増田宋太郎等ニ隨行シ、同月六日熊本県下大津着陣、這ノ間道路嶮巖昼夜兼行、兵ノ疲倦尤モ甚シ、因テ休息三日、時ニ隊伍ヲ編製ス、梅谷某及ヒ宏ハ宿病アルヲ以テ隊外周旋方トナリ、薩軍第二大隊四番中隊屬隊トナリ限府街道ニ哨兵スルコト日アリ、既ニシテ而シテ川尻敗レ熊城圍ヲ解キ、尋テ限府口亦潰ヘ鳥ノ巢ノ壘兵ヲ退ク、斯ニ於テ官軍限府口ヨリ來攻ノ報アリ、我隊直ニ大斥候ヲ出シ之ヲ見セシム、果シテ然リ、則チ四番右小隊ト共ニ兵ヲ冷水村ニ伏セ以テ俟ツ、敵兵臻ルニ及ンテ一斉発炮、蹶起呼噪シテ進ム、敵狼狽シテ走ル、味方久追セテ退テ壘ヲ大谷ニ築キ防守ス、薩兵ハ二重峠ニ引揚、翌日官兵復大谷ニ來攻ス、時ニ守兵僅二十余名、如何ントモ為ス可キナク皆刀ヲ拔キ壘中ニ仰臥ス、敵銃乱発、我兵又一発ヲ応セテ、官兵疑テ敢テ前マス、即チ拾余名ヲ二ツニ分チ左右翼ニ廻進シ、既已ニ殺到ノ勢ヒヲ為ス、敵兵色動ク、因テ菜花ノ中ヨリ進発、追躡四五町ニシテ帰壘、這ノ時ニ當ツテ限府・鳥ノ巢ノ味方長峰ヨリ大津ニ臻ル、官兵察セテ、十九日詰朝大挙シテ來攻、味方邀戦炮撃頗ル烈シク戦鬪數里ニ亘ル、

時ニ我隊四番右小隊ト共ニ二重口ヨリ進ミ之ヲ横撃ス、
敵兵動揺即チ機ニ乘シ奮前(奮然力)、官兵敗走、大津口ハ味方左
右翼ヨリ殺到、大ニ之ヲ敗リ勇往奮進、敵器械ヲ棄テ、
走ル、追躡二里余、斃尸道路ニ充塞ス、遂ニ本営ヲ乗取
リ、騎馬・銃器・彈藥等其他ノ分捕枚挙ニ違アラス、翌
廿日官兵前敗ヲ雪カント大拳來撃、其勢ヒ頗ル銳ナリ、
味方防戦尤モカム、敵ヲ退ソクルコト三四丁、銃器・彈
丸ノ分捕若干、時ニ我隊四番隊ト復進シテ敵ノ左翼ヲ横
撃シ之レヲ走ラス、追撃半里計、敵嶮ニ掘テ鎗銃前ム可
ラス、日暮ニ及シテ二重口ニ引揚ク、此夜潛兵退軍ノ令
アリ、蓋シ御船口敗ル、ヲ以テノ故ナリ、之ニ於テ昼夜
兼行山谷ヲ跋涉シ、矢部・馬見原・胡麻山・椎葉ノ嶮艱
ヲ經過シ江代ニ着ス、不日シテ三田井進軍ノ令アリ、我
隊之レカ先鋒タリ、孤軍ヲ以テ長驅シ嶮岨ヲ闔テ兼行直
ニ坂本ヲ突ク、巡查兵今ヲ望シテ馬見原ニ走ル、而シテ
後軍遲緩我隊援兵ナシ、即チ壘ヲ馬見原口ニ築キ疑兵ヲ
張り之ヲ守ル、後隊尋テ臻ル、我隊直ニ三田井ニ進入、
尋テ奇兵拾六番隊長小濱某等兵ヲ率ヒ來ル、各道ヲ分ツ
テ哨兵ス、五月十四日ニ至リ灰床村ニ転移シ、夜土人ヲ
募リ嚮導トシ、闇夜兵ヲ潛メテ鏡山ニ達ス、這ノ山尤ト

毛峻絶、敵兵許多ノ炮壘ヲ築キ掘テ以テ要衝ノ地ト爲ス、
之ニ於テ各隊ヲ分チ三道ヨリ進ム、我隊岩神口支道ヨリ
ス、宏等七名闇黒ニ紛レ隊ニ遅ル、迷テ路ヲ失フ、頓ニ
岩神本道敵壘ノ前ニ出ツ、敵兵烈シク炮發ス、時ニ山手
及ヒ諸道ノ軍戦ヒ既ニ開ケ、炮声地ニ震シ山岳爲ニ崩レ
ントス、我兵叱咤匍匐シテ進ミ、一同抜刀炮壘ニ殺到ス、
敵三名ヲ斃シ進ムノ折柄、左岡ノ壘ヨリ鎗丸注グカ如ク、
直ニ吶喊之ニ赴キ炮壘ヲ乘落ス、既ニシテ後兵尋テ進ミ
支道ノ兵亦敵ヲ破ツテ來会ス、即兵ヲ併セ晝霧ニ乘シ鯨
呼突進ス、官兵度ヲ失ヒ先ヲ争フテ走、山岳ヨリ顛墜ス
ルモノ無數、味方機ニ乘シ左右ニ殺到シ、終ニ大ニ之ヲ
敗ル、六時ヨリ九時ノ間壘柵ヲ落スコト廿四五、斃屍
累々郊野ニ縦横ス、殆ント將ニ馬見原ヲ取ラントス、既
ニシテ而シテ坂本々營ヨリ急報アリ、云ク、大至急事ア
リ、各隊長官速ニ來会セヨト、因テ内變アルカト疑ヒ馳
セテ該地ニ到レハ他ノ異事ナシ、増田・小濱等帰來怒リ
且ツ罵ツテ云、豎見人ヲシテ軍機ヲ失セシムト、切齒之
ニ久シ、而シテ味方ノ兵氣大ニ沮喪シ敵勢復振フ、我隊・
奇隊互ニ殿戦シテ退ク、旧壘ニ防線ス、這ノ日我隊死傷
拾余名、銃器・彈丸等ノ分捕許多ナリ、斯ニ於テ我隊男

子坂ニ転守、日アリ半隊長梅井某・梅谷及宏等隊用アリ、大分県下竹田出張奇兵本営ニ到ル、不日ニシテ兩名帰隊ス、宏ハ宿病愈甚シキヲ以テ滞在療治、廿五日竹田ヲ発シ日向延岡ニ到リ、出張病院ニ入療ス、八月十四日該地大敗、(長井カ)長江村ニ転移ス、同十七日病ヲ扶ケ中軍ニ属シ、長江ノ重圍ヲ潰ヤシ、(可愛岳カ)愛ノ敵壘ヲ襲撃シ、嶮難ヲ跋涉シ鹿兒島進向ノ際、日向鹿河ニ於テ銃創ヲ負ヒ轎駕ニ扶ケラレ、九月一日鹿兒島着、同五日該地尾畔臨時病院ニ入療、爾余戦状ヲ詳ニセス、

(年月日脱)

矢田宏

三五 彌重邦・大峰兼昭連署上申書

客年二月西郷隆盛上京云々ニ於ル徒ニ傍觀スルニ忍ヒス、爰ニ数輩議ヲ決シテ鹿兒島ニ赴キ随行ヲ乞フ、時ニ県令大山綱良為ス所アラントシテ庁下ニ止ムル、累日ニシテ熊本進発ノコトヲ命ス、由是三月八日該区兵士貳百三十余名仮ニ隊伍ヲ組ンテ発程シ、同十二日熊本春日山ノ本営ニ達ス、於是我兵ヲ遊撃一・二番ト編制セラレ、其夜安政橋ノ守兵ニ交代ス、同廿日兩隊共ニ同県小川へ応援ス可キノ令ヲ受ケテ発シ、同廿二日到着ス、此日海東村

ニ向ツテ始テ戦フ、我軍利ヲ得テ同村ノ官營ヲ拔ク、日方ニ暮ントシテ兵ヲ近村ニ纏ム、翌廿三日転シテ種山村ニ至リ守兵ス、同廿七日八代口ノ官軍大挙シテ小川全面ヲ襲フ、竟ニ本道口ノ守兵敗レテ味方ノ全軍悉ク松橋ニ退ク、於是我ニ番隊ヲ浜手四万田ニ配リ、一番隊ヲ山手一ツ橋村ニ繰出ス、同廿九日官軍松橋ニ來撃ス、此日山手萩ノ尾方面頗ル激戦ニ付我一ツ橋ノ兵半隊ヲ進メテ横ヲ衝ク、官兵忽チ散乱ス、之ヲ追フテ夜ニ入ル、由テ兵ヲ一ツ橋ニ返ス、同卅日官軍我守兵ヲ襲フ、互ニ勝敗決セスシテ相引ス、時ニ遊撃ニ番隊四万田ヨリ猫坂ニ転ス、四月一日官軍尚松橋全面ヲ攻撃ス、我隊亦萩ノ尾ニ進シテ戦フ、猫坂ノ味方モ隣リニ在ツテ防戦ス、遂ニ松橋ノ本道ヨリ敗レテ我方面支ユル能ス、繰引ニシテ熊ノ庄ニ退キ、亦川尻ニ引キ、同夜宇都ノ官軍ヲ襲フ、此時味方五、六小隊ト云フ官哨兵ヲ宇都ノ田畝ニ布ク、方此時ヤ、我兩隊先鋒トナツテ放銃スルニ三発、乃チ露刃シテ突入り目前七八名ヲ殲ス、既ニシテ夜方ニ明ントスルニ及ヒ、四方ヲ望視スレハ我隊不凶官兵ニ困マレ居タリ、於是必死奮激大ヒニ苦戦シ、散々川尻ニ退ヒテ固守ス、日不詳、川尻ヲ転シテ御船ニ応援シ、諸隊ト陣列呈ヲ築テ守兵ス、四月十二

日官軍大挙シテ御船ヲ襲フ、各自共ニ奮戦スト雖モ竟ニ味方ノ両翼ヲ敗ラレ、尚支ントスルニ我隊左右ニ挟マレ頗ル苦戦、由テ拳兵南田代村ニ退ク或ハ云フ、味方失部ヘモ赴ト、同十四日午后ニ至リ官兵南田代ニ攻メ来ル、即チ兵ヲ要地ニ伏セ須臾接戦シ大ヒニ利アリ、之ヲ追躡シテ日既ニ暮ル、其夜黎明ニ乘シテ南田代ヲ発シ木山ニ転ス、此時桐野利秋令シテ之ヲ金打村(釜内カ)ニ遣リ守兵セシム、同廿日此兵再び御船ノ味方ニ加ハ、ル、翌廿一日官軍大挙シテ御船ノ総面ニ襲撃ス、我両隊ニ於ル左翼ノ山岳ニ布キ谷ヲ阻テ、互ニ炮撃ス、激戦時ヲ移スト雖モ竟ニ亦タ味方右翼ヲ敗ラレ、之ガ為メ全軍悉ク守リヲ失シテ敗走ス、我両隊モ亦タ退ヒテ田尾野村ヲ守備ス、同廿五日奈須越ヲ歴テ尾前ニ至ル、茲ニ滯ルコト七日ヲ経タリ、於是我游撃一・二番ヲ中隊ニ編制シテ干城八番隊ト為ス、是ヨリ人吉ニ至ル、五月六日該地ヲ転シ大野口ノ味方ニ合シテ守兵ス、或日佐敷ノ官軍祝坂ヲ襲フ、此日味方甚タ苦戦シ急ヲ本營ニ告ク、由テ直ニ我左半隊ヲ応援セシム、然ルニ守塁既ニ敗レテ官兵ハ尚嶮山ノ要地ニ進ミ烈シク炮撃ス、我半隊須臾正面ニ在ツテ戦ヘト毛利アラス、由テ僅ニ兵ヲ正面ニ戦ハシメ、余ハ背後ニ旋リテ潜ニ山ノ絶頂ヘ攀上

リ、忽然闕ヲ発シ一同炮撃ス、官兵支ル能ハス忽チ散乱ス、尾撃シテ之ヲ山下ニ却ケ味方旧塁ニ復シテ守備ヲ嚴ニス、或日官軍久木野村ヘ繰込ムト云フ、之ヲ襲ハントシテ兵ヲ二手ニ分チ共ニ山路ヲ押サシム、我隊一方ノ先鋒タリ、尋テ干城四番後軍ニ在リ、斥候反リ告テ日、敵合既ニ近シ、山際ニ守塁アリト、乃チ潜ニ兵ヲ塁近ク進メ、之ヲ左右ノ山間ニ伏セテ一声発炮スルヤ、直チニ衝キ入ル、官兵一支ニモ能ハス、塁ヲ棄テ散々敗走ス、干城四番又続テ共ニ追撃シ忽チ官ノ陣營ニ衝キ入ル、官軍亦數品ヲ棄テ走ル、此時一手ノ味方干城ニ戦ヒ勝テ茲ニ番其他會合ス、然ルニ該地ハ守備ノ要地ニ非ラザルヲ以テ軍ヲ返シテ大野ヲ衛ル、時ニ邊見十郎太総轄ノ兵先ニ大口ヨリ衝キ出、水俣口ノ官軍ト屢戦ヲ挑ムト云フ、或日邊見久木野ニ進ンテ応援ヲ大野口ニ乞フ、我中隊之ニ応シテ発ス、此日又大野口ハ湯ノ浦ノ官軍ニ進撃センコトヲ決シ、兵ヲ二手ニ分ツテ進発ス、我隊既ニ辺見ノ軍ニ達スルヤ、戦ヒ未タ酣ナラス、官兵爰ニ數ケノ堅塁ヲ設ケ克ク防ク、邊見奮然議シテ日、我中隊ヲ以テ山手ニ廻シ横撃セヨ、余ハ其炮声ヲ聞ヤ、正面ヨリ衝キ入り、一瞬目ノ間ニ駈ケ散サント、乃チ直チニ嶮ヲ伝フテ徐々潜行シ、

一声発炮スルヤ、忽然烟下ニ突入ス、官兵之ヲ防ク能ハス、一ノ守塁ヲ棄テ遁逃ス、此機ニ乗シテ三四丁追撃スレトモ官亦堅塁或ハ要所ニ在ツテ克ク防クヲ以テ進ムヲ得ス、此二兵ヲ止ム、然ルニ邊見モ時ヲ移サス衝キ出共ニ激戦ス、時ニ湯ノ浦へ進撃セシ干城四番策成ラスシテ茲ニ会シ、接戦数刻ニ及フト雖モ勝敗未タ決セス、既ニ味方弾薬尽キ、或ハ関ヲ揚ケ或ハ礮ヲ抛チ挑ミ合フ、又湯ノ浦ニ向フ処ノ干城二番同シク之ニ加リ一同奮戦ス、此時邊見指揮シテ此二炮一門ヲ備ヘシメ自ラ狙フ、発弾弥烈シ、竟ニ官兵色(摩滅)□□ヤ此機ヲ透カサス鯨ヲ発シ、一同抜刀シテ衝入レハ忽チ七八ノ塁ヲ棄テ散乱ス、尚之ヲ追躡セント議スレトモ日已ニ没シテ止ム、該夜其塁ニ拠ツテ守ル、翌日官兵大野口ニ襲撃シテ味方守備薄キノ旨ヲ報ス、由テ我隊ヲ大野ニ返ス、此日味方敗レテ一ノ守塁ヲ失シ官軍茲ニ拋ル、本營之ヲ守返サント議シテ折衝隊拾七八名ヲ撰ンテ令シテ日、今夜潛ニ塁下ヘ忍ヒ曉ニ至リテ衝入ル可シト、皆白襪ヲ以テ相印ト為セリ、又干城二番ニ令シテ日、関ヲ揚ナバ直ニ続ヒテ塁ヲ固メヨト、且ツ奮ヒ且勇ンテ皆進ム、官兵不意ニ出ルヲ以テ大ヒニ狼狽シ面前三四人殲レテ走ル、須臾シテ官兵亦之ヲ襲フ、

此時干城二番後レテ機ヲ失ス、故ニ衆寡敵シ難フシテ退ケリ、此日赤旗或ハ小銃等分捕ス、味方負傷スル者三名アリ、五月中旬日詳ナラス、官兵札松越ノ守塁ニ攻撃ス、味方大敗シテ悉ク人吉ニ向ツテ引退ク、我隊ニハ即(照岳カ)チ程角越ニ応援ス可キノ令ヲ受ケ進発ス、続ヒテ振武二番・鵬翼二番同シク発ス、六月卅日昧旦官兵我左翼ノ守兵ニ攻撃ス、一時炮声烈シクシテ程ナク敗ルト云、官軍此機ニ乗シテ又兵ヲ我塁ノ横ニ進マシメ、正面モ亦大小炮ヲ以テ頻ニ襲撃ス、竟ニ前軍振武十六番敗レテ退散ス、此地タルヤ道路唯一條ニシテ狹隘、左右嶮難ニシテ兵ヲ分布スルニ術ナク、大ヒニ苦戦シテ悉ク兵ヲ原田村ヘ引揚ケタリ、官兵追撃シテ山ヲ下ントス、味方軍ヲ返シテ激戦シ防禦殆ント夜ニ入ル、翌卅一日原田村ニ兵ヲ布ク、翌六月一日早天官軍大ニ攻撃ス、竟ニ本道或ハ左翼ノ守兵敗レ、我隊既ニ囲マレントシテ本道ニ駆抜ケ防禦スト雖モ利アラス、悉ク人吉城下ニ退ク、此日諸口ノ味方陸續愛ニ集合シ大川ヲ挟ンテ戦フ、既ニシテ市街炎上火勢最モ烈シ、此際我隊城中ニ在ツテ炮撃ス、稍アツテ同所引揚ク可キノ令ヲ受ケ全軍大畑ヘ退ク、此時河野主一郎指揮シテ諸所ニ兵ヲ配ル、我隊及ヒ鵬翼一中隊大河間ニ

到ツテ守ル、日不詳、大畑敗レテ吉田ノ山岳ニ退陣ス^三、
中隊集、翌正午過ニ及ンテ官兵遽ニ來擊ス、乃チ散兵ヲ
布キ互ニ炮擊時ヲ移ス、既ニ彈藥尽ントスルニ及ヒ一同

拔刀シテ衝キ入ント議ス、衆皆奮然之レニ同ス、由テ喇叭相囂ニシテ鬨ヲ発シ短兵急ニ駈込ム、官兵防禦発炮彈丸霰ノ如シ、我軍之ヲ冒シ益奮激シテ進ム、官軍竟ニ支ユルコト能ハス忽チ退散ス、尚之ヲ追ントシテ日既ニ暮レタリ、此夜爰ニ兵ヲ収テ露宿ス、暁天兵ヲ馬関田ニ集メ守兵スルコト累日、亦軫シテ飯野ニ到リ、両日ヲ経テ小林ニ赴ク、此時四五中隊集合スト云フ、日詳ナラス、本營河野主一郎等之ヲ率ヒテ須木口ノ味方ニ合セシメ、人吉坪屋ノ官兵ヲ襲ント議シ、兵ヲ水無越ノ山奥ニ集ム、時ニ官兵水無越筋ノ要岳ニ累ヲ設ケ、或ハ坪屋ノ方位山腹ニ數ケノ守備ヲ為ス、是ニ由テ兵ヲ二手ニ分ケ水無越ニ向フ者四中隊、我隊之ニ加ル、而シテ三中隊ヲ橫擊トシ我中隊ヲ正面ニ向ハシメ、黎明ヲ期トシテ進擊スルニ山路頗ル峻ニシテ橫擊ノ一手輒ク進ミ得ス、二中隊モ奇シク正面ニ軫シテ炮擊時ヲ移ス、正午ノ比ヒ正義七番突然橫擊ス、此機ニ投シ正面吶喊シテ一同進擊スルニ、官兵狼狽四五ノ累ヲ捨テ散乱ス、之ヲ尾擊シテ坪屋ノ本營

ニ到ル、官軍遂ニ諸品ヲ棄テ、走ル、由テ茲ニ兵ヲ集メテ憩ハシム、時ニ一手ノ味方頗ル勝利ヲ得、山ヲ下ル、暫クシテ官亦兵ヲ進メ後面ヲ遮ントスルニ會ヒ味方引テ山ニ上ル、戰フテ利アラスト云、我四中隊ニ於ルヤ坪屋ノ絶壁ニ抛リテ一夜守兵ス、翌曉悉ク兵ヲ水無越ノ山中ニ纏メ、河野主一郎・同姓四郎左衛門等議シテ、此二現在ノ兵隊過半ハ小林郷ニ軫セシム、我隊及ヒ振武十五番止リテ水無越ニ守壘ス、翌味旦官軍榎木峠へ襲擊シ戰ヒ勝テ亦我水無越守壘ノ横ニ突出、或ハ正面或ハ左翼ノ山ヨリ攻撃ス、防戦利アラス引テ亦山岳ノ要地ニ壘ヲ築ク、日詳ナラス、飯野方面味方敗レテ軫陣ノ報ヲ得、内山村ニ到テ守兵ス、或日官兵振武・龍口等ノ守衛ヲ襲フ、官兵利アラスシテ退ク、時間ヲ移シテ再ヒ襲フ、我一分隊ヲ絞リテ之ニ応援ス、官亦退ケリ、日不詳、官兵我右翼ニ方リテ山岳ノ味方ヲ襲フ、味方殆ント危ク正義七番之ニ応援シテ克ク防クト雖モ勝ツコト能ハス、由テ我半隊ヲ官兵ノ後クニ廻ラシム、此地形タルヤ峻岨ニシテ路無し、各樹木ニ攀テ突然背面ニ出テ烈シク炮擊シ、忽チ三ノ守壘ヲ抜ク、須臾シテ官亦我後ロヲ絶ツ、故ニ兵ヲ二ツニ分ツテ之ヲ防クト雖モ彈藥既ニ尽キ、衆寡如何トモ

シ難ク正背面一同一声発炮シテ忽チ兵ヲ深谷ニマトメテ退ク、此日官兵尚龍口・振武ノ守備ヲ襲フテ味方殆ント危シ、此際野尻方面大ヒニ敗レ紙屋ニ退クノ報ニヨリ、我方面悉ク綾郷ニ至リ、紙屋口ノ味方ニ兵線ヲ繫ヒテ守ル、日詳ナラス、官軍来襲ス、紙屋先ニ敗レテ官兵既ニ我横ニ出テ後ロヲ絶ントス、由テ兵ヲ都於郡ニ引揚ケ守兵ス、又高岡口及ヒ宮崎ノ味方敗レテ兵線列ヲ失シ守兵スル能ハス、佐土原ニ引退ク、官兵モ亦続ヒテ迫リ佐土原川ヲ挟ンテ陣シ接戦ニ及フト雖モ米良口ノ味方敗レテ忽チ官兵後面ニ衝キ出大ヒニ苦戦シ、味方悉ク高鍋ニ向ツテ敗走ス、此日我隊竟ニ官兵ニ囲マレ進退途ヲ失シ、隊伍爰ニ乱レテ敗績ス、

明治十一年四月

鹿兒島県下日向国諸縣郡都城

福寝重邦

大峰兼昭

三六 津曲兼敏上申書

明治十年四月六日我郷里ヲ出発シ熊本県人吉ニ赴ク、同所ニ於テ遊軍九番隊小隊長申付ラレ熊本エ出軍致スヘキノ令アリ、椎葉山ヲ経テ木山マテ繰出ス、時ニ川尻方面

破レ道路ヲ遮リ、因テ矢部エ引揚ヘキノ令アリ、則矢部濱町ニ引取、此ノ所エ両三日滞陣ス、同十八日該地ヲ発シ万坂峠ニ出張、此ノ地ニ一泊シテ同十九日夜御船町ニ着陣ス、翌二十日午前七時比ヨリ官兵襲ヒ来リ防戦、終ニ敗軍ニテ鐘打邑^(金内カ)エ兵ヲ揚ケ、爰ニ一泊、翌日南田代エ繰出、守兵スト雖此ノ地戦ハスシテ夜ニ入リテ再ヒ鐘打邑ニ引揚、爰ニ於テ各隊編製、我隊千城三番中隊トナリ、此ノ時病氣ニ罹リ隊外尾前ニ至リ療治ス、時ニ鹿兒島方面我軍潰戦ノ報アルニヨリ、稍快氣ナルヲ以テ日州都城辺マテ景況伺トシテ出張スヘキ旨、江代出張本営桐野利秋ノ令ヲ受則彼ノ地ニ赴キ、三日ヲ経テ江代ニ帰ル、ソレヨリ高鍋彈藥製造所エ出張セヨトノ令ヲ受、直ニ出張、数十日滞陣ス、時ニ宮崎方面我軍敗走ス、統テ佐土原方面モ破レ追々引揚ル、故ニ延岡エ赴ク、同所破レヨリ永井邑^(長)ニ到リ、同八月十七日軍門ニ降ル、

明治十一年四月

鹿兒島県莊内郷

津曲兼敏

三七 肥後雲八上申書

客年西郷隆盛上京ニ就キ、明治十年旧正月二十日宿所発

程、同二十四日日州宮崎ニ着到ス、於当所隊伍整理有テ
貴島清隊兵士トナリ、同二十八日熊本県下出町ニ着スル
ノ処、直ニ翌二十九日田原口守兵之交代ニ差向レ、午前
八時比出町莞隊田原ニ着シ、交代之上翌九日午後六時比
味方ヨリ接戦ニ掛テ不有利、先キ之守場ニ引揚成守ス、
其内双方探撃而已也、同六日未明交代シ植木迄引揚休兵
セントスルヤ、先キニ交代セシ田原口相破レ其守兵植木
ニ引揚来テ俱ニ向坂迄引揚ル、此所ニテ味方之援兵来ル、
之ニ合シテ亦植木迄追復シ此所ヲ守テ同九日迄連戦ス、
然処同日午後六時比銃創ヲ負、川尻病室ニ入ル、該后日
ハ不詳、木山ニ病院ヲ直ス、此所ニ暫在テ療養ヲナスノ
処、患者療養ノタメ帰郷スル者勝手タル之令有テ、旧二
月二十五日木山莞程、帰郷シ今和泉戸長役所ニテ帰順仕
候、右戦地之景情上申候也、

明治十一年三月

鹿兒島県第十四大区四小區
今和泉郷居住
肥後雲八

三八 小久保正贇他三名連署上申書

明治十年二月十二日西郷隆盛等東上ニ随行シ、第四番大
隊ニ番小隊ニ編入ス、時ニ隊長山口孝右衛門・半隊長石

塚長左衛門・分隊長篠崎七郎兵衛也、同十六日鹿兒島ヲ
発程シ、加治木・大口諸所ヲ経道シ十余日ヲ閲テ熊本県
向町ニ到着ス、此時既ニ熊城戦砲声頗ル烈シ、即チ進莞
山鹿ニ着シ当地北面ニ番兵ス、二月廿五日南関街道工官
軍襲撃ス、味方激戦撃テ之ヲ退ク、我右半隊応援及ハス
官軍死骸ヲ捨テ走ル、斃尸殆ト百余名、味方死傷若干員、
三月三日南ノ関進軍ノ令アリ、山鹿全兵ヲ桐野利秋引率
シ午前八時比進軍、途中永野原ニテ我斥候官兵ニ行逢ヒ、
先鋒応戦我カ隊応援本道ノ左翼ノ要地抛テ戦フ、隊長山
口孝右衛門戦死ス、戦弥烈シ、我隊苦戦死傷三十余名、
官兵午後九時比数丁退ク、我隊追撃、官兵高堤ニ抛テ戦
フ、故ニ勝敗決セス、当夜曉山鹿工退軍ス、数日アリ、
午前十時比ヨリ官軍城原ノ壘ニ襲来莞砲ス、我隊応砲殆
ト二時間、官軍退軍ス、此時隊号ヲ改メ一小隊ヲ中隊ト
シ、右半隊ヲ右小隊トシ、左半隊ヲ左小隊トス、石塚中
隊長トナリ、右小隊長篠崎七郎兵衛・半隊長染川彦次郎・
分隊長小久保正贇トス、左小隊長原田長左衛門・半隊長
堀正八郎・分隊長有川静吉トス、間日城原工官軍大挙襲
撃、其勢最モ烈ク晴天太陽ヲ見ス、暗黒ノ内ニ諸所砲彈
破烈シ銃丸雨ノ如シ、我隊甚タ苦戦台場四ヶ所ヲ奪ハル、

我隊小松山ヲ楯ニ取り激戦、距里殆ト五六間ニ過ス、左小隊応援ス、味方ノ背後巷丁位モ馳来ルトキ、砲弾数発隊上ヲ飛行ス、一弾隊ノ中央ニ落テ破烈ス、是力為半隊長堀正八郎始メ五六名ノ手負アリ、堀尤モ深手、左小隊ヲ合シ抜刀突入ス、官軍大敗、味方全軍鯨呼ヲ揚ケ追撃瞬間敵死傷數十シ、大砲・小銃・弾藥等ヲ分捕ス、此時我隊死傷十余名、其後梅ノ木谷エ転軍シ居ルコト三日、山鹿ニ帰陣ス、三月廿日晁田原守ヲ失シ官軍植木エ進入、左小隊応援、其夜緑町ニ一泊、植木ニ火掛リ烟煙天ニ輝キ白昼ノ如ク、争戦ノ音雷ノ如シ、翌日午後二時ヨリ開戦発砲頗ル烈シ、六時比官軍ニケ所ヲ攻落シ彈藥・針打銃ヲ分捕ス、此日手負兩名アリ、当夜熊本応援ノ令アリ、即発城ヲ攻圍シ居ルコト十四五日余、數日アリテ松橋応援、翌日八時比ヨリ官軍式三半隊襲撃、味方憤激シテ之ヲ退ケ追撃スルコト四五丁、翌日川堤ヲ守シニ官軍大勢進入、午後三時迄激戦ス、然レトモ彈藥甚乏ク依テ式三町退軍ス、此役味方死傷十四五名、翌日当所町口エ六ヶ箇ノ台場ヲ築キ守ルニ、左ノ山戦争激烈ニシテ終ニ味方敗レ、我壘前ニモ散隊ニ備テ進入烈戦殆ト二時間、背ヲ分断セシ事ヲ恐レ宇都町三十丁橋ニ退軍セリ、此役死傷二名、

当晁三時比針打銃人員八十余名ヲ撰ミ、大砲相函敵ノ本營ニ夜襲ス、官軍備工嚴ナル故戦コト殆ト一時間余、夜將ニ明ントス、故二兵ヲ纏メ帰陣ス、此時手負式名、翌日川尻・緑川ヲ守ル、居ルコト五日、毎日防戦ス、四月十四日川尻エ応援ス、我左小隊夜行、未明味方襲撃ス、官軍川堤ニ大勢羅列スルヲ狙撃シ數十人ヲ斃ス、然ルニ俄ニ右ヨリ横撃サレ死傷八名、依テ三四丁退キ戦決セス、夕陽隊ヲ木山エ引揚タリ、此時隊長原田長左衛門戦死ス、亦長峯ニ転ス、居ルコト兩日、大津エ転シ右小隊ニ合ス、是ヨリ先右小隊ハ三月廿一日山鹿ヲ退軍シ南但馬ヲ守ル、居ルコト殆ト廿日、官軍進入ス、其日ノ戦終日、翌晁大霧ニ乘シ官軍襲撃、我隊苦戦、官軍大幸シ来リ鯨呼シテ本道ヲ衝ク、本道敗レ喇叭我隊ノ背ニ聞ユ、我隊兵ヲ纏メ退ク、時ニ敵兵既ニ前後ニ充滿ス、依テ間道ノ畠ヲ横切ラントスル時ハ前後ヨリ狙撃ス、我隊散乱漸ク右ノ岡ニ逃ケ登リ敗兵ヲ纏メ鳥ノ巢近ク退軍ス、此時四方戦争酣ナリ、鳥ノ巢村ニモ攻入り味方左右ヨリ突入、官軍敗走、數丁追返シ是ニ戦フ、当夜少シ背ニ守ヲ付引テ之ヲ守ル、數日ノ後大津ニ退軍、兩三日ニシテ官軍兩方ヨリ襲撃甚急、我中隊左右二分レテ応援、味方憤激撃テ之ヲ

走ラス、追討敵ノ本營ニ至テ止ム、此役我隊手負五名、是ヨリ先キ川尻役ニ左小隊長原田長左衛門戦死ス、依テ染川彦次郎隊長トナリ、小久保正賢ヲ平隊長・平井政徳ヲ分隊長トス、此時右道ノ官軍ト戦ヒ憤撃之ヲ走ラス、二二三丁官軍嶮ニ抛テ激発ス、味方難戦、此時隊長染川彦次郎兩所ニ重傷、后チ数日ニシテ死ス、此日銃・彈藥ヲ分捕レリ、其夜矢部ニ退軍、我中隊ヲ編製シ奇兵八番中隊ト改称ス、夫ヨリ諸処ノ嶮山經過シ漸ク江代ニ着ス、夫ヨリ大河内村諸処ノ嶮難ヲ經テ日向ノ国富高新町ニ出ツ、翌日発軍延岡ニ一泊、豊後ノ国重岡駅ニ乱入、巡查ヲ追払ヒ、翌曉竹田エ乱入シ四方ノ道ヲ堅固ニ守ル、居ル兩日、各中隊ヨリ式百余名ノ壯士撰ミ又士官ヲ交ユ、我隊ヨリ分隊長平井政徳出ツ、曉ヨリ兵ヲ大分エ繰出サンスル処、官軍大分ノ半途ニ出張スル由ヲ聞キ、軍ヲ転シテ不意ニ鶴崎ニ乱入ス、折シモ佐賀関ヨリ巡查大分エ応援ノ為メ此地ニアリ、因テ突入、巡查逃走ス、直ニ兵ヲ引揚ケ竹田帰ル、是ヨリ先染川彦次郎大津ニ討タレ、稻田新平破竹隊ニ転隊ス、因テ江代ニテ伊集院宗吉分隊長トナル、数日官軍竹田^(惠良原カ)エヲ原ニ進入ス、我右小隊発軍、戦争数時、遂ニ二ツ嶮山ヲ攻落シ烈戦決セス、夕陽竹田

ニ引揚タリ、復一二日ヲ經テ官軍大挙襲来セリ、因テ天神山守ヲ失ス、我隊応援利アラス、此時我隊死傷多シ、夫ヨリ官軍攻囲攻撃連昼夜絶エス、兩三日經テ古城工官軍襲撃、味方敗ル、我分隊之ニ援ス、官軍憤撃、我軍大二敗ル、此日味方ノ全軍退キ三國峠ノ嶮ヲ守ル兩日、三重ノ市エ進軍、翌日八時比官軍不意ニ進入、味方番兵ノ背ニ出ツ、因テ味方ノ兵逃ケ来リ、我隊先鋒町口ニ戦フ、味方応援ス、依テ官軍大二敗レ追撃二里許リ、此時我隊長七連銃五十余挺・針打銃拾挺・彈藥三箇ヲ分捕レリ、夜半竹田進撃ノ令ヲ下シ窃ニ臼杵進軍ノ内令アリ、即チ発ス、我隊之レカ殿タリ、翌日午后三時臼杵ニ攻撃城ノ大手口ヨリ先登ス、敵城ヲ落テ波打涯ニ集ル、我兵追撃敵降ル、此時數十万个ノ雷管・彈藥・糧食・武器ノ分捕リ数フルニ違アラス、三日ヲ經テ官軍侵入ス、我隊大分街道ノ右ニ援ス、敵七八丁ヲ去ル、我隊進軍一ツノ岡ヲ襲撃ス、官軍中央ノ位置ニシテ我隊ヲ横撃ス、依テ兵ヲ引揚ケ敵ノ尾軍ヲ撃ント右ニ向テ行ク殆ト一里、村道アリ是ヨリ進撃、官兵嶮ニ壘シ眼下ニ狙撃ス、因テ取ル能ス、夜兵ヲ纏テ臼杵ニ還ル、翌日官軍大挙テ攻撃烈シ、昼夜味方諸処ノ守敗レ、終ニ川ヲ界ニシテ守ル、我隊城

中并ニ城下ノ海岸ヲ守リ軍艦ヨリ上陸ニ備フ、翌日未明官軍背ノ高山ニ登リ眼下ニ乱発ス、味方大難シス、此時攻囲殆ト周囲ヲ成ス、依テ神速全軍^(切畑)退軍ス、再度三重ノ市進撃、官軍嶮山ニ抛リ連壘固守シ烈戦ス、此時分隊長平井政徳負傷シ延岡病院ニ送ラル、味方夜半引揚ケ三国峠ノ嶮ヲ守ル、我隊小野市ニ泊シ翌日重岡工軋シ、中隊ヲ三分シ、其一ヲ赤木ニ援ス、赤木ノ戦甚急ナリ、因テ余カ三分ニヲ以テ急ヲ援シ事ヲ乞フ、一日ヲ経テ重岡ヲ出発、二三丁ニシテ赤木道ニ出、此時三国峠ノ味方大ニ敗レ味方重岡ヲ保ツ、故ニ我隊茲ニ止リ重岡ノ左小野市間道ヲ守ル、其日午前八時比高鍋隊ト交代シ赤木エ応援ス、其夜大雨、川激流シ深丈余済ルコト克ハス、大霧ニ乗シ全軍陸地峠ニ退軍ス、居コト両三日、重岡ノ味方軍ヲ鎧ニ退ク、故ニ陸地ノ味方松葉ニ引揚ク、居ルコト一日、奇兵大挙重岡・陸地峠両道ヲ進取ノ令アリ、即夜我隊外二三中隊陸地峠ノ左ニ出ント松葉ノ神社ヨリ山ニ登リ、深々タル嶺々ノ樹中ヲ攀行シ暗夜松明ヲ禁ス、漸ク夜明ル時嚮導道ヲ失シ鎧村山上ニ出ツ、因テ道ヲ軋シ宗太郎越ヲ下リ不動越ノ上ニ出ツ、時ニ午后八時比ナリ、颶風暴雨頗ル烈ク人ヲ倒スノ勢ナリ、此日重岡・陸

地峠ノ両地ニ当テ戦声激烈ニ聞ユ、我隊陸地峠エ出ル能ハス、依テ不動越ヲ下リ柚ケ内工陣ス、我隊応援ノ為メ陸地奇兵本營ニ一泊ス、翌朝我隊先鋒高鍋隊之二次ク、嚮導アリ、陸地峠ノ右ノ絶頂ニ出ツ、敵壘眼下六七間ニアリ、我隊鯨声ヲ揚ケ突入、敵一発スル能ハス、直チニ二個ノ台場ヲ乗取リ十五間余向ノ一壘ト戦争甚々烈シ、此時旧半隊長堀正八郎・右半隊長有川静吉戦死ス、我隊死傷十余名、数時激戦、官軍大ニ敗レ死傷累々、銃器・彈藥ヲ分捕レリ、此日全勝陸地峠全ク味方ノ地トナレリ、居ルコト数日、味方大挙梓峠進撃ノ令アリ、我隊殿軍ゼニブエノ下ニ押来リ、其時ゼニブエハ高鍋隊守シニ敵不意ニ襲撃、代壘シ報国隊四番中隊ト合シ戦争既ニ酣ナリ、我中隊ヲ以援ス、右小隊敵ノ背ニ廻リ左小隊敵ノ正面ニ対シ戦フ、左小隊苦戦数時、我右小隊敵ノ背ニ出不意ニ憤戦、官軍大敗逃走ス、死スルモノ夥シ、此地深々ト樹繁ケリ、白昼暗夜ノ如シ、因テ追ハス、旧高鍋隊エ交代八戸ニ屯泊、梓峠進撃、我隊殿軍及ハス、直ニ水ヶ谷左ノ山ヲ守ル、数日アツテ我隊ノ壘上絶頂ニ協同隊ノ堅メアリ、官軍不意ニ曉三時ニ襲来、協同隊并ニ絶頂連線ノ味方大ニ敗レ、我隊仰テ戦フ数時、此役一名ノ手負アリ、

午前八時比退テ梓峠左ノ中央ニ守ル、居ル旬日、薩・隅・

佐土原・高鍋・延岡諸処ノ味方敗レ永井村ニ屯集ス、奇

兵全軍延岡道ニ襲撃ノ為メ永井村ニ応援ス、此時奇兵ニ

諸所ノ味方ヲ交エ延岡本道ニ突入スレトモ敗ル能ハス、

一兩日アリテ熊田本道味方敗ル、我左小隊援ス、我壘一

兵ナシ、邊見十郎太・石塚長左衛門ノ兩人而耳我應援ヲ

見ト、邊見・石塚大ニ歎笑シ、敵六七十間ノ近ニアリ、

以テ切込可キナリト、我隊直ニ突入、敵左ノ嶮山ヨリ乱

発ス、我隊退キ旧壘ニ依テ防戦、我隊死傷半ニ過ク、当

夜可愛嶽進撃官軍ヲ憤撃、諸所ノ官兵ヲ追払ヒ小林諸所

ヲ押通り横川ニ出ツ、此地官軍連壘、味方奮戦一昼夜半、

彈藥乏ク夜半竊ニ間道ヲ押通り、山田・蒲生・吉野・帶

迫等諸処ニ戦ヒ鹿兒島突入、私学校城山ヲ攻落シ米藏ノ

官軍ト戦、連夜軍艦ヨリ大砲ヲ発ス、市中家屋火掛リ煙

烟天ニ輝キ黒煙天ニ漲ルコト連昼夜、数日ニシテ官軍城

山ヲ攻囲攻撃城山落ツ、西郷・桐野・辺見ノ諸人戦死、

降ル者多シ、此時官軍不意ニ突入、味方ノ兵或ハ十人或

ハ二十人分断シ、事終ニ成ス可カラズ、此時小久保・朮

寅四月廿七日

小久保正實

伊集院宗吉

朮岡信一

平井政徳

三九 田中資雄上申書

戦景況概略

客歳二月西郷隆盛等東上ノ際随行ヲ乞フテ第三番大隊七

番小隊ニ編入シ、同十六日鹿兒島ヲ発シ、同廿二日熊本

県下向町へ着ス、川尻開戦且攻城ニハ不係、翌廿三日該

地ヲ発シ河内村ニ至リ海岸ヲ守ル、同廿五日大隊長児玉

五之助ニ小隊ヲ率ヒ我隊ト共ニ高瀬ノ官兵ヲ進撃ス、交

戦凡六時間ナリ、官兵麓ノ險山ニ抛リ頻ニ防戦ス、故ニ

破ル能ハス、薄暮兵ヲ収メテ伊倉町へ退ク、翌廿六日晚

天官軍襲来ス、全軍直ニ進ンテ寺田ニ迎へ戦フ、交戦甚

タ烈シ、飛丸雨注、是ヲ不厭我兵塩田某・山下某抜刀接

戦敵数名ヲ斃ス、故ニ破ル能ハスシテ暮ニ及ンテ官兵高

瀬ニ退ク、我全軍河内村ニ帰ル、此戦ニ我隊死傷八名余、

此地ヲ守ル旬余、亦転シテ野出村ニ至リ、同所七曲リヲ

持スルコト廿余日ナリ、是ニ於テ中隊編制アリ、本營ノ

令ニ依リ我右小隊ハ中隊長岩切喜二郎引率シテ二本樹ニ

至リ、翌日甲佐苦戦ノ報アリ、援兵トシテ発足シ、半途ニシテ夜ニ入り遥ニ火烟天ニ漲ル、直チニ斥候ヲシテ調ハシム、最早戦敗レ敵ノ有トナリ、故ニ我隊御船ニ抵ル、翌日散兵ヲ纏メ都合其勢三百余名、地形調ヘ築壘守防ス、官兵モ甲佐川ヲ夾テ対陣ス、旧二月廿七日比黎明ヨリ官兵大拳シテ来リ攻ム、大ニ激戦スト雖モ我軍彈藥欠乏シ、故ニ敗レテ畠中村ヘ退ク、此時我隊死傷甚タ多シ、翌廿八日南田代ヘ赴ク、時ニ官兵襲来シ大ニ戦フ、午後四時比ニ至リ終ニ官兵大敗シテ潰走ス、此時敵死骸五六名アリ、夫ヨリ該地ヲ発シ(金内カ)鐘打ニ赴キ築壘守防ス、四月十四日川尻大敗ノ報アリ、同廿三日矢部ヘ引揚ケ即夜該地発足、奈須山ヲ越ヘ尾前ニ抵ル、是ニ於テ左小隊ト合シ亦第三番大隊ニ番小隊ト合併シテ干城四番中隊ト改ム、同五月一日比該地ヲ発シ、江代・人吉ノ間ヲ経テ大野村ニ至リ、鵬翼隊ノ応援トナレリ、佐敷ヲ距ル一里余、同十五日比黎明鵬翼五小隊ト三道ヨリ進ンテ佐敷ヲ襲フ、奮闘接戦既ニ敵營ヲ突ントス、右翼敗レテ退ク、応援ニ約シタル干城二番中隊モ期ヲ失フ、遂ニ抜クコト能ハスシテ大野村ニ引揚ク、同廿日比再ヒ佐敷ヲ進撃セント雷撃・鵬翼隊ト間道ヨリ進ム、途ヲ迷フテ達セズ、誤テ大

口方面ノ諸隊久木野ノ官兵ヲ進撃スルニ会フ、協力攻戦シテ数壁ヲ抜ク、針打銃并彈藥若干ヲ分捕ス、我隊死傷五六名アリ、久木野ノ壘ヲ守ルコト数日、亦転シテ舞床村ニ至リ險ニ抛テ棄壘ヲ築キ敵ヲ待ツ、敵果シテ棄下ニ来リ、四面蟻付シテ薛蘿ヲ攀チ、危岸ヲ匍匐シテ將ニ寨壘ニ逼迫セントス、此時万銃斉シク瞰射ス、敵大ニ駭潰シ其退クニ及テ追躡、斬首若干、或ハ敵亦狼狽深谷ニ随テ自ラ死スル者尠カラズ、豈快哉ヲ呼ザルヲ得ンヤ、然ルニ頭地口ノ戦大ニ敗績、官兵人吉ニ迫ルニ依リ此地モ保守スル能ハス、人吉ニ退キ、夫ヨリ大畑村・田野村或ハ諸縣郡馬関田ノ間ニ対守スルニ旬余ナリ、亦転シテ白鳥山ノ麓ニ抛ル、七月一日比官兵三面ヨリ来リ攻ム、戦利アラス、尋テ高原ノ戦モ利アラス、退テ植松ニ抛ル、軍議一変シテ進撃ニ決ス、同十七日雷撃・破竹・鵬翼隊・我隊ヲ先鋒トシ、振武一大隊ヲ以テ応援トス、官軍ノ不意ヲ襲ハント夜半植松ヲ発シ黎明高崎ニ達ス、土人ヲシテ敵ノ居所ヲ同ハシムルニ敵高原ノ街道ニ屯スト云フ、此時斉シク敵壘ヲ襲ヒ首ヲ斬ルコト十余級、敵其不意ナルヲ以テ死骸ヲ捨テ銃ヲ捨テ先ヲ争フテ潰走ス、我兵追撃十余丁、敵援兵ヲ出シテ拒戦スルコト数刻、遂ニ

勝敗不決シテ植松へ退く、此時死傷六七名アリ、同廿四日比都之城モ敵ノ有トナルヲ以テ此地保守スル能ハス、山之口へ退く、夫ヨリ諸所ニ転陣シ宮崎川・廣瀬川・鳥川ノ險ニ拠ルト雖トモ毎戦利アラス、遂ニ延岡永井村ニ集ル、要害ニ拠リ敵ノ砲撃ヲ拒クコト五日余ナリ、八月十七日午後十二時比ヨリ兵ヲ潜メ山ヲ越ヘ險ヲ攀チ顛倒匍匐シテ、黎明可愛嶽敵壘ヲ襲フテ突然之ニ迫ル、官軍狼狽、兵仗・死骸ヲ棄テ山中ニ潰乱ス、我兵進軍昼夜兼行シテ同十九日祝子川ノ敵ヲ破リ、同廿一日三田井へ突入敵二名ヲ生捕、金穀・輜重ヲ収ム、是ニ於テ前・中・後ノ三軍ヲ定ム、余前軍ニ從ヒ同廿四日鬼神野ノ敵ヲ破リ、同廿五日大風雨モ不厭銀鏡ヲ越ヘ、(村所カ)村庄・上槻木ヲ經テ同廿七日諸縣郡須木ニ至リ、同廿八日小林郷ヲ過キ、同卅日後軍ヲ前軍トナシ官兵ト横川ニ戦フ、勝敗不決、途ヲ転シテ踊郷ニ至ル、官軍亦是ニ拒戦ス、其夜闇黒ヲ待チテ間道ヨリ山田ニ進入、同卅一日蒲生郷ノ官兵ヲ破リ敵数名ヲ斃ス、九月一日邊見等前軍ヲ率ヒ鹿兒島城山ニ進入、同七日比賣島清等策ヲ建テ米藏ノ官兵ヲ夜襲セシメ、該夜十二時比ヨリ兵ヲ二手ニ分チ牧ヲ含ミ、一手ハ肝付邸ノ小径ヲ忍ヒ、一手ハ県庁ノ小溝ヲ潜

ミ、不意ニ之ヲ襲撃シ二柵ヲ抜テ一時官軍動揺スト雖トモ官軍壘ニ拠リテ頻ニ小銃ヲ雨注シ我兵多ク斃ル、故ニ取ルコト能ハスシテ退く、此戦貴嶋清衆ニ先チ敵五名ヲ斃シ憤闘シテ之ニ死ス、夫ヨリ城内東面ニ壘ヲ築キ防守ス、同廿四日官軍大挙シテ城山ニ迫ル、我兵少ニシテ支ユル能ハス、遂ニ落城ス、

(年月日脱)

鹿兒島県下第三大区五小区
田中資雄

四〇 四元悟次郎・芳野覚太郎運署上申書

戦地景況概略

明治十年四月全軍十中隊許鳥巢ヲ守ル、三日敵兵来リ攻ム、勢ヒ頗ル疾烈、我兵殆ント危ク将サニ守ヲ撤テ、走ラントス、我隊馳セテ之ヲ援ヒ憤然刀ヲ揮テ進ム、諸軍勢ヲ得テ勇戦烈闘乍チニシテ六十余名ヲ斃ス、敵兵縦横伍ヲ乱シテ走ル、同四日敵襲来リ、互ニ勝敗ヲ決セス、同五日又然リ、同九日岩坂ニ退ク、尋テ矢部ニ引揚ク於愛我十六番中
隊奇兵隊ト称ク、五月三田井ヲ守ル、地方山アリ鏡山ト云フ、高聳峻嶮要衝ノ地ニシテ敵兵拠テ固守ス、四日夜方サニ暗黒、土人ヲ嚮導トシ兵ヲ潜メ枝ヲ攀チ桂ヲ縋リ、山溪

ノ路ナキニ往キ鏡山ノ絶頂ニ躋達ス、夜方サニ半ハナリ、兵ヲ分チテ三トナシ、座シテ東方ノ白キヲ睽ツ、天既ニ明クレハ煙霧渺漠咫尺ヲ弁セス、我兵三面撃テ下ル、敵兵狼狽先ヲ争テ走ル、日漸ク午時ナリ、既ニ廿九星ヲ抜ク、兵益ス疾銳追蹤將サニ馬見原ニ逼ラントス、敵本營使ヲ馳セ諸隊長ヲ会セシハ中隊長小濱半之丞之ニ赴ク、兵士戰ヒヲ休メテ其返ルヲ俟ツ、少ラクアリテ小濱帰來ル、大ニ怒且罵テ云ク、本營人ヲ得ス、兇輩我ヲシテ軍機ヲ失ハシムト、遂ニ三田井ニ退ク、同廿五日黎明敵兵大挙來リ攻ム、我軍大ニ破レ大楠ニ退ク、尋テ豊後方面ニ陣ス、又六月廿五日赤松峠ニ進撃ス、戰ヒ尤熾シナリ、我兵銳氣殊ニ十倍勇往憤前ス、(憤然力)大小銃雷雨ノ如ク、乍チニシテ十五星ヲ拔キ將サニ重岡ヲ突カントシ、彈藥竭尽スルニ属シ鑑村ニ退イテ守兵ス、七月廿九日再ヒ赤松峠ヲ攻ム、敵ノ邀声甚銳ナリ、我兵大ニ敗レ復々退テ鑑村ノ旧壘ニ守ル、既ニシテ敵兵來リ攻ム、防戦數回、八月一日芳野寛太郎分隊ヲ率ヒ、三河内梅木村ニ進向ノ中津隊ト共ニ壘ヲ築キ守兵ス、期ノ日該地北面ノ高山ヨリ大挙シテ來リ攻ム、宮崎及延岡諸隊(農兵)ナリ敗ラル、因テ我壘左ノ高岳ヨリ敵眼下ニ狙撃シ彈丸霰ノ如シト雖トモ中

津隊及我分隊少シモ屈セス、衆ヲ励マシ死力ヲ尽シ防拒スルコト四時間、終ニ彈丸ニ竭キ僅カニ退ク、同二日夜大高月ヲ襲撃、砲三発ヲ相囂トシ咄咄直ニ馳セテ敵壘ニ殺到ス、斬獲若干、銃器・彈藥數多得タリ、同七日敵兵襲リ來リ、我軍敗レテ熊ノ江ニ退ク、一週間ヲ経テ我分隊熊田ニ引揚ケ本隊ト会ス、同十三日我隊延岡口毛鹿ニ戰フ、奮進シテ直ニ敵軍ヲ破ツテ拾丁許進撃ス、時ニ山手ノ味方已ニ敗レ我頂上ニ敵來リ、万銃齊シク発シ飛丸雨ノ如ク、此ニ半隊長下村新七郎戰死、小隊長古河勝次郎傷ヲ負フ、味方大ニ利アラス、同十五日我隊(長井カ)永井村南端ノ高岳ヲ守ル、敵又來リ攻ム、防戦スト雖トモ終ニ防ク能ハスシテ退ク、此戰ニ四元悟次郎敵ノ囲中ニ陥リ山林ニ潜伏ス(九月三日郷里ニ帰リ后子降服ス)、同十七日午后十時頃ヨリ永井村ヲ発シ敵ノ柵前ヲ忍ヒ、十八日黎明可愛ノ嶽ノ敵壘ヲ我前軍奮進シテ直ニ破ル、敵兵散々ニ走ル、于時某山中二路ヲ迷ヒ行ク所ヲ失フテ敵中ニ取囲マレ、同二十日石岩村ニ至リ素懷ヲ吐露シ情状ヲ陳述シテ軍門ニ降伏ス、

明治十一年四月

鹿兒島県下平民

四元悟次郎

芳野寛太郎

(表紙)

十綴之内

四一 竹内喜平次上申書

明治十年二月第五大隊五番小隊ニ編入セラレ、園田武一小隊長タリ、同十七日鹿兒島ヲ発シ、西目街道ヲ經出水米ノ津ヨリ乗船シ肥後松橋ニ到着シ、翌二十二日熊本城ヲ攻撃ス、同廿三日木ノ葉ヘ進軍、直チニ戦ヲ交ヘ大ニ勝利ヲ得、植木町ニ退テ休兵ス、同廿五日黎明山鹿江進発ス、居ルコト日アリ、官軍來テ攻撃ス、我軍逆テ之ヲ撃チ大ニ之ヲ走ラセ追躡數丁引テ山鹿ヲ守ル、月日不詳、山鹿ノ諸隊南関ニ向テ発ス、我隊ハ間道ヨリ進ミ平山村ニ抵ル比官軍拒戦ス、我隊奮戦、遂ニ勝利ヲ得タリト雖モ日暮ル、ヲ以山鹿ニ退ク、翌日早天田原口急ヲ告ク、即時赴キ援イ植木駅ニ到リ交戦、勝敗決セス、連戦三四日間、此際負傷シテ川尻病院ニ抵リ加療日アリ、該所危急ナルニ当リ御船ニ転院、疵猶癒ヘサルニ依帰郷治療シ、

九月上旬ノ比自首帰順ス、

明治十一年三月

鹿兒島県

竹内喜平次

四二 上村友右衛門上申書

明治十年旧二月十一日区長ノ募ニ応シ百余名ト鹿兒島ヲ発足、大口街道諸駅ヲ經テ同十九日熊本県二本木駅ニ到ル、此ニ於テ隊伍ヲ編製セラレ遊撃七番小隊トナリ、予ハ此時小隊長ヲ命セラレ、該地ニ滞陣スルコト殆ト十余日、旧三月一日御船江出軍ノ令アリ、直チニ発程シ、彼ノ地ニ到着シ守兵スルコト三日、又萬坂江転軍シ壘ヲ築キ防禦スルコト十余日、同十五日木山諸所ノ味方敗走ニ依リ矢部江曳揚トノ令アリ、矢部ヲ經テ江代ニ至ル、此地ニ於テ中隊編製アリ、予隊ハ行進十營番中隊トナリ、此ニ止ルコト十余日計リ、同廿二日軍ヲ人吉ニ移シ一泊ス、同廿八日大口郷大塩邨ニ至リ官軍山野郷ニ居守ノ報ヲ得、速ニ進軍セントスル際、同三十日午前八時比敵兵襲來シ応戦ス、我軍四中隊ナリ、戦央予ハ負傷トナリ吉田病院江送致セラレ、小林郷ヲ經テ帰郷治療セリ、余ハ戦地ノ景況全知ラス、

明治十壹年四月廿一日 鹿兒島県
上村友右衛門

四三 松崎美徹上申書

戦記

明治十年二月故アリ西郷上京ノ事起ル、余四番大隊九番小隊ノ押伍トナル、隊長伊東直二・半隊長藤井鉄之助・分隊長有馬藤九郎タリ、二月十六日ヲ以テ大口街道ニ発程ス、同廿二日熊本県下川尻駅ニ到着ス、トモニ熊本台兵我前驅ノ隊ニ発砲シ、戦初メテ開ケタルノ報アリ、余隊モ進ンテ城外ヲ囲ミ正面ヨリ攻撃スト雖トモ官軍善ク防戦シテ勝敗決セス、暫時城側ニ引纏休兵ス、然ルニ官兵植木駅ニ繰込ミタルノ報アリ、該日午后三時頃我隊一小隊外ニ村田三介隊ト合シテ向坂ニ至リ、官軍ト相戦フ、我軍大ニ勝利ヲ得、官軍火ヲ植木駅ニ放テ退ク、我軍大久保村ニ引揚ケ、爰ニ宿陣スルコト二日間、同廿五日当村ヲ繰出シ山鹿ニ到ル、城原村ニ守兵ス、三月一日山鹿ノ諸軍南ノ関ニ向テ進撃ス、我隊ハ岩村口ヨリ進ンテ平山村ニ抵ル、官軍已ニ該地ヲ扼シ発銃防禦ス、我軍猛戦一時ニ之ヲ撃破シ勢ニ乗シテ長驅シ板桶村ニ到テ止ル、

夜本道砲声遙ニ後ニ響ク、敵或ハ^(背後カ)昔後ヲ梗塞センコトヲ恐レ翌朝引テ岩村ニ退ク、此時敵兵既ニ入り保テリ、別府隊・伊東隊及ヒ鉄肥ノ一小隊直ニ戦ヲ交エ辰ヨリ未ニ至ル、此時本道ノ軍既ニ退クヲ聞キ、遂ニ山鹿ニ退ク、三月十二日数百ノ台兵寄来リ、防戦スト雖トモ寡兵ヲ以テ支フル能ハス、一時引揚ケントスル処ニ援兵駆来リ奇シク攻撃ス、官兵終ニ敗レテ引退ク、午后二時頃ニ至リ尚近衛兵進ミ来ル、復防戦スト雖モ我軍敗レテ山鹿町口迄引揚、其夜九時比官兵モ亦引揚タリ、由テ再ヒ城原エ守兵ス、同十五日黎明官兵大挙来攻ム、此日戦フコト午后二時ニ至ル、官兵終ニ敗レテ潰乱ス、同廿一日田原坂ノ味方敗レテ我隊ニモ引揚ケノ令アリ、鳥ノ栖ニ退キ一泊ス、翌日隈府ニ繰込ミ守兵ス、三月三十日官兵寄来リ、此時鉄肥隊并ニ貴島清隊大敗シテ隈府町口迄引退キ、我隊応援シテ右翼ヨリ攻撃ス、官兵敗レテ終ニ引退ク、四月八日頃官兵復タ大挙来リ攻ム、終日奮戦、我弾薬乏シク、故ヲ以テ其翌昧爽竹迫ニ引揚タルニ、鳥ノ栖本営ヨリ神速ニ引揚ノ令アリテ其夜十時比当所ヲ発シ翌未明鳥ノ栖ニ達ス、此時鳥ノ栖戦方ニ酣ナリシカ、水間新七隊胸壁ヲ棄テ引退キタルニ応援シ、兵ヲ合セテ抜刀シテ切

込ミ敵ノ司令官中尉壹名・兵卒式拾余名ヲ斃ス、同十四日鷄鳴熊本々營ヨリ当所ヲ引揚、大津ノ軍ニ合ス可キノ令アリ、陰ニ各隊ヲ繰上ケ枯木ニ至リ、爰ニ休兵ス、暮ヲ待テ大津ニ進ミ胸壁ヲ築テ守ル、翌十五日黎明ニ官軍來リ攻ム、此時官軍砲隊ヲ正面ニ進ミ両翼ヲ張りテ各塁ニ逼リ瞬時ニ戰、忽チ烈シク炮声如雷、山岳為ニ震動ス、我右翼ノ兵漸ク勝利ヲ得、官兵殆ント敗レントスル時ニ官兵一隊疾風ノ如ク菊池^(菊池カ)街道ノ罌ヲ突衝ス、我兵潰乱罌ヲ捨テ走ル、即チ応援トシテ我隊左翼ヲ逸テ敵ノ背後ヲ撃ツ、官兵敗走シテ潰乱ス、我軍尾撃、敵ノ銃器・彈藥等余多分捕セリ、此ニ防戦スルコト四五日間、同廿日頃矢部ニ引揚ルノ令ヲ受ケ、該夜各隊繰引シテ矢部ニ退ク、爰ニ於テ隊号ノ編制アリ、我隊奇兵十二番中隊ト改称ス、四月下旬人吉ニ引揚ク、此時余ハ足痛ニテ人吉病室ニ入院ス、本隊ハ日向・延岡へ繰出ス、余ハ療治スルコト四週間、漸ク全快ヲ得テ五月下旬ニ至リテ帰隊ス、六月中旬日豊境赤松峠へ進撃、敵ノ胸壁ヲ打抜クコト数十箇所、官兵敗走シ其機ニ乘シテ尾撃セントスル時ニ我軍彈藥乏シク各帯ル処ニ三発ニ過ス、引揚ケノ報アリ、本日鎧ニ退軍ス、翌日陸地峠ニ至リ守兵ス、七月中旬比官軍夜ニ

乘シテ來リ攻ム、我軍敗走シテ矢ケ内ニ退ク、八月上旬官軍ノ警備隊并ニ熊本台兵三四中隊計リ寄來リ、烈シク攻撃ス、此時我隊各抜刀シテ敵ノ銃丸ヲ厭ハス切込ミニ拾余名ヲ斃ス、内士官三名ナリ、此時官軍敗走シテ所々ニ散乱ス、我隊益勢ヲ得テ固ク之ヲ守ル、是時ニ當リ宮崎方面ノ味方數々敗走シテ、遂ニ延岡ニ引退キタルノ報アリ、即チ寄兵惣軍ヲ以テ延岡ヲ復スヘキニ議決シ、夜ニ乘シテ陰ニ引揚ケ、翌午前六時比熊田駅ニ至ル、同日午前十一時比無鹿村ニ進ム、官軍來リ撃ツ、互ニ激戦ニ及ヒ此時我軍切込ントスル時、余ハ銃創ヲ蒙リ長井村ニ退キ入院ス、爾后当所ニ於テ官軍ニ降ル、

明治十一年六月

鹿兒島県下谷山郷
松崎美徹

四四 帖佐経一上申書

戦地景況之概略

初鹿兒島ノ起ルヤ、中原尚雄等政府ノ令ヲ奉シ西郷隆盛ヲ刺殺スルノ説発露スルニ及テ、三將政府へ尋問ノ事アルニ依テ県下拳テ動揺人情憤然、此時ニ至ツテ私学校ノ入校日々続々、明治十年二月上旬七大隊ノ兵ヲ編制ス、

其方決定ノ後発程各順序アリ、我隊一番大隊六番小隊ニシテ相良吉之助隊長タリ、半隊長児玉十郎・分隊長高橋種輔ナリ、則十五日発鹿、途市来・阿久根・出水・水俣・佐敷・日奈久ノ各所ヲ經過シ廿一日午後三時比肥後川尻ニ着ス、今夜我六・七大隊ノ斥候鎮台ノ候兵ト事アリ、廿二日五番大隊先備熊本ノ鎮台之ヲ抗スルニ依リ開戦、我大隊モ之ニ継キ城下ニ戦フ、我隊花岡山ニ到テ城兵直ニ大炮ヲ発シ我ヲ防ク、我隊搦手ヨリ進ム、八幡山ノ下ニ達シ激戦甚烈シク炮声寸時モ不止、此日我軍楯無クシテ城兵ニ狙撃セラルニ依リ死傷尤多シ、戦ヒ半ニシテ官ノ援兵植木ヨリ来ル、我五番大隊二番小隊馳之テ向坂ニ大勝ヲ得ル^{ヲ脱カ}、我隊ハ城下ニ在テ三昼夜連戦、熊本開戦ノ初夜熊本県土城中ニ切入リ忽チ二城ニ乗ランコトヲ乞フ、然リ^{ト脱カ}雖トモ多ク人ヲ損スルヲ愁ヒ本管之ヲ不許、故ニ不果、同廿四日我隊高瀬ニ至ル、初協同隊守之、同所上ノ原ニ於テ抗戦甚勤ム、然レトモ寡兵ニシテ引帰ニ依リ我隊之ニ換ツテ進軍、激戦数刻ニシテ伊倉町ニ引揚又木留ニ至ル、爰ニ於テ二俣ヲ守ル、夫ヨリ三月四日進ンテ吉次峠ニ応援シテ山手ニ登リ敵ノ横ヲ突ク、敵二十余町ヲ退ク、我兵之ヲ尾撃ス、我軍今日死傷五十余名、官軍

死傷百名ニ近シト、夫ヨリ木留ニ帰陣ス、同五日二俣ヲ発シ官ノ斥候ト出合忽地撃テ之ヲ退ク、此時官軍耳取・吉次・二俣ノ兵ヲ合テ田原ノ横ヲ突カント計リ兵ヲ出シテ爰ニ有、我兵左手ノ山ヲ降ツテ敵ノ横合ニ懸ル、敵三町計退ク、我軍応援来、激戦夜ニ至テ木留ニ引揚、此日隊長相良吉之助・半隊長児玉十郎等戦死、其他十八九名死傷、官軍死傷九十余名ナリト云、同月六日^{円台寺カ}田原ニ守兵ス、又他ノ隊ト交代シテ田原ニ至リ加治木隊ト交代シ、七日官軍襲来、戦ツテ之ヲ退ク、八日午後三時比ヨリ官兵烈シク進軍、炮声殆ント如雷、頻ニ進ンテ我柵ニ近ツク四五間、終ニ拔刀接戦死体如山、我兵飛越々々進戦、数十名ヲ切ツテ又旧柵ニ退守ス、此日我兵死傷二十余名、官軍伏尸百余名アリ、廿九日・卅日同断連戦、三月中旬国分隊・山田隊ノ守リ破レテ敵本道ニ出ツ、我隊敵中ニアリ、漸ク左右ニ切抜ク、此時敵狼狽シテ進退抛ヲ失シ、退ク事而已ヲ知ツテ進ムコトヲ不知、^{將候カ}將候・兵士百余名ヲ切伏ス、此戦ヒ我隊長廣瀬喜左衛門戦死、三月上旬又官軍正面ノ台場へ襲来、我隊彈薬ニ竭キ接戦敵四十余名ヲ切テ味方死傷少シ、銃器・彈薬ヲ分捕ス、其夜巡查一名ヲ縛ス、其者云、田原口ハ巡查・近衛ニシテ

此内ノ連戦ニ疲レテ多キニ辟易セリ、今之ヲ押ハ官軍弥破レント、然リト雖トモ我兵彈藥乏シク、遂ニ進能ハス、又五日ヲ經官軍襲来国分隊ノ柵ニ迫ル、我兵苦戦一町計退ク、我隊分隊ヲ出シテ之ニ応援ス、接戦敵十九名ヲ斃シテ我兵死傷七名アリ、其日復官軍大挙シテ我柵ニ迫接戦シテ之ヲ退ク、翌日又襲来頻ニ迫ツテ両軍相距二三間堤ヲ挟テ戦、我隊卒敵ノ銃鎗ヲ閃カシ貫カントスルヲ拒シ、遂ニ之ヲ奪フニ至ル、此戦ニ余三ヶ所ノ薄手ヲ負ヒ二本木病院ニ至、之ヨリ連戦十八日間、我隊僅ニ二十余名ニ減スト、此時貴島清新兵七中隊ヲ率ヒ来リ、我隊及国分・帖佐ノ隊兵員少キ以テ交代シテ木留ニ引揚、村田新八ノ令ヲ以我隊・国分・山田・帖佐ノ隊ヲ合シテ一小隊トナス、後矢部ニ至リ是ヲ奇兵一番小队ト名ツク、夫ヨリ熊本三間町ニ至ル、爰ニ於余帰隊ス、其時熊本城下ノ川ヲ注キ城外ニ水ヲ溜メテ之ヲ攻ム、城外殆ント海ノ如シ、我隊ハ米田氏ノ邸内ニ於テ操練スル五日、或日城兵暮方ヨリ四中隊計ノ兵ヲ以出町ニ向ツテ繰出スヲ見、則チ出町ニ報知ス、案ニ不違城兵砲隊ノ持場ニ迫ル、我隊分隊ヲ出シテ応援ス、彈藥ニ竭キ一町余退ク、官軍其所ニ砲台ヲ築、他隊来テ我隊ト交代シ三間町ニ帰陣、此

所モ出町ノ戦ニ関シ二町計退ヒテ守、翌日城兵糧米・野菜ヲ取テ城ニ運フ、此時安政橋守疎ナリシヲ計リ城兵突出、安政橋敗レテ官兵百余名砂取ヲ指シテ脱ス、我大砲隊之ヲ狙撃スルニ依テ総テ出ルコトヲ得ス、然リト雖帰城セシ兵ハ偶百余俵ノ米ヲ奪ヒ白川ヲ漕渡シテ城内ニ運輸セリ、〔明午橋カ〕我明号橋ノ守リモ敵白川ヲ渡リ戦フ、故ニ我隊之ニ応援シ、終ニ明午橋ヲ取返セリ、四月十四日川尻ノ敗戦ニ依テ我隊モ木山ニ退ク、夜ニ入テ大津ノ下町橋ニ至ル、翌日大津本道櫻馬場ニ戦フコト数刻、日暮レ共ニ引テ又下町橋ヲ守ル、此日総軍矢部ニ引揚ク、依テ我隊亦矢部ニ引揚ル、之ヨリ隆盛等我軍ヲ人吉ニ集メ合シテ八代ヲ進撃センコトヲ謀ルト、官軍鹿兒島ニ上陸スルニ依リ、先之ヲ駆テ、次ニ八代ニ至ラント人吉ヲ発シ、五月上旬振武七中隊・奇兵一番中隊ヲ中島健彦是ヲ率テ鹿兒島ニ赴ク、横川ニ至ツテ探偵ヲ出シ鹿兒島ノ景況ヲ探ルニ、城山并甲突川等ニ砲台ヲ築ク日々盛ナリト、乃チ兵者神速ヲ尊フト、事後ル、時ハ彼レニ備ヘアツテ我ニ不利、故ニ明日鹿兒島ニ突入ント決ス、本営諸兵ヲ部署シテ城山城ヶ谷口・草牟田口・西田橋口・紙屋谷口ヲ進撃セント、我隊ハ草牟田口ヲ破リ平ノ馬場過キ忽地ニ下

町上手ニ出、敵ノ本部ヲ突カシコトヲ聞、振武者城ヶ谷・紙屋谷・西田橋・武ノ橋ヲ取ルコトニ決シ、其夜横川ヲ発シ午前二時川上村ニ至ル、四時比草牟田・新上橋ノ敵ノ炮台ニ近キ潜伏ス、城ヶ谷口ノ懸リ込ヲ待チ夜明ケテ進撃スルコト能ハス、翌朝城山ニ進撃スレトモ取事能ハス、又伊敷ニ引揚、我軍今日ノ死傷僅ニ二十名、翌日我隊ハ原良村ヨリ常盤ノ辺ヲ守ル、官軍既ニ城山及ヒ甲突川内ニ竹柵ヲ築キ事甚嚴密也、或日川尻進軍ノ事アリ、官軍二通スルモノ有ルニ依リ官軍備ヲ設ケ之ヲ敗ル事能ハス、死傷モ又多シ、此戦ハ官軍死傷少シト云、直ニ我軍武村ニ引揚旧塁ヲ守ル、其夜我兵憤激偶八九名アリ、新上橋官軍ノ柵ニ近ツキ突然発砲僅ニ三発、官軍驚城山ノ官軍ト交発砲、味方打シテ大ニ戦フ、我兵窃ニ退ヒテ帰来レリ、其後官軍武ノ岡ニ迫、我兵能ク戦連戦之ヲ退ク、官軍死傷甚多、我軍僅ニ六名、翌日真幸本営村田新八ヨリ報知アリ、飯野其他吉田等毎々進撃スト雖味方少ナキヲ以テ進軍スル事能ハス、依テ応援隊ヲ乞フ、此地モ兵寡力故ニ六月十七日士官十三名ヲ撰ンテ応援隊ノ代リニ行カシム、余モ其撰ニ係リ彼地ニ至ル、爰ニ於テ(願翼カ)鳳翼一番隊ニ編配セラル、同廿一日真幸飯野ノ官軍ヲ進撃ス、

飯野町ニ火シ城山ノ官軍ニ迫ル、官軍狼狽シ逡巡ノ色頭ル、ト雖トモ味方弾薬ニ竭キ吉田ニ引揚ク、六月下旬官軍吉田越ヨリ吉田ノ我軍ニ迫ル、雨降水勢烈シキ故ニ進軍ヲ得ズ、我隊携白砲ヲ以テ之ヲ撃ス、敵飯野ニ引揚ク、又七月上旬官軍山間ヲ忍ヒ吉松ニ来リ、我後ニ出ルヲ以我軍ヲ高原ニ移ス、官軍我飯野ノ川向ノ軍ヲ襲フ、我軍弾薬ニ尽キ小林ニ退ク、我隊モ霧島山ノ麓ヲ通り小林ノ十日町ニ至ル、高原ニ守兵ス、官軍小林ヲ襲フノ報ヲ得、翌日小林ニ斥候ヲ出シ之ヲ探ルニ、既ニ高原ニ襲来ルト、七月中旬高原川ヲ中ニシ戦フ、仁禮某隊モ弾薬竭キ高原麓ニ来ル、我隊又麓ノ馬場ニ戦フ、官兵我背ニ出ルニ依テ総軍大谷頭ニ引揚ケ守兵ス、爰ニ至ツテ七月十六日百引口ノ振武隊ニ応援ヲ乞フ、中島健彦・貴島清等兵ヲ引来ル、十七日高原ヲ進撃ス、我隊先鋒高原ニ至ツテ、官軍本道ニ台場ヲ築キ、其他諸所高原ニ險固ニ柵ヲ結フテ守ル、我隊忍シテ之ヲ窺フニ敵ノ見張飯ヲ喫ス、機失フ可カラサルヲ察シ、忽チ進シテ敵柵ニ至ル、僅ニ一発ニシテ抜刀敵塁ニ迫ル、敵一発ヲ発スル能ハスシテ走ル、我兵之ヲ尾撃シテ高原麓ニ至ル、官兵爰ニ於テ民家ノ壘或ハ兩戸ヲ以テ柵ニ替ヘ仮リニ之ヲ防ク、此日分捕無数、

官軍死傷百五十・生捕三名、我軍モ死傷九十余名アリ、

又大谷頭ヲ守兵ス、十九日又進軍シ本道ノ右手ノ官軍ハ

直ニ追払フト雖トモ本道ハ柵敵ナルカ故進ムコトヲ得ス、

又大谷頭ニ引揚爰ニ守ル、七月廿四日上庄内并都城敗ル

ニ付我隊モ山ノ口ニ至ル、翌日モ彈藥ニ竭キ學ノ木ニ退

守ス、同月廿六日板屋ノ敗レニ依リ官軍學ノ木ノ中間ニ

出ルヲ以テ我隊倉岡ニ引揚、続テ宮崎ヲ守ル、其夜中村

町ニ火シ川原町ヲ守、八月一日官軍進ンテ川岸ニ來ル、

我隊臼砲ヲ打チ之ニ防ク、既ニ倉岡敗ル、ニ依リ佐土原

ノ本道ニ戰フ、夜ニ入川ヲ前ニ取ツテ守、八月三日佐土

原ノ元城下ニ屯セシ官兵高鍋ヲ指テ我背ニ出ントスルヲ

聞、浜手ヲ通りテ廣瀬ニ至ル、夫ヨリ美々津ニ至ル、山

手敗レテ細島ニ官兵上陸スルニ依リ新町ニ至ラントス、

新町モ既ニ官兵ノ有トナリ、爰ニ於テ山手ヲ切抜ク、此

時官軍ノ炮二門并大小炮ノ彈藥ニ駄ヲ分捕テ門川ノ山手

ニ至ル、高千穂口敗レテ官軍延岡ニ出、我隊美須村ニ戰

フ、夫ヨリ方財村ニ至リ富村ニ渡テ守ル、翌日永井村ノ

川面ニ戰フ、爰ニ至ツテ鹿兒島并三田井口・豊後口ノ兵

等此一村ニ集リ、一日延岡本道ヲ敗ルノ事アレトモ既ニ

官軍重圍シ之ヲ敗ル能ハス、遂ニ熊本隊降伏スルニ當ツ

テ我隊モ爰ニ帰順、

(年月日脱)

帖佐經一

四五 益山兼繁上申書

口上覚

私儀

十年旧五月廿一日戸長之達ニ依リ振武十二番中隊付屬壹

番小隊給養ニテ末吉区内池之房江守兵ス、然処旧六月六

日発程ニテ延岡之様繰出シ相成リ到着ノ処、本營ヨリ同

町江番兵被相達候、同月廿八日付屬中隊ト隊号ヲ變制シ、

其砌リ隊長ヨリ一時本官相定ル迄之間、右小隊之半隊長

相勤候様被申付、安井村海岸ヲ防禦シ延岡敗軍之旨報知

アリ、更ニ志ヲ改メ直ニ案内人ヲ求テ官軍番兵先キニ至

リ、旧七月九日降伏仕候処、宮崎裁判所ニテ自宅謹慎被

仰付置候処、無程御放免被仰付、然処前件申上通り一時

半隊長相勤候儀不申上置ヲ悔心致シ、旧十一月十日都之

城警視署江成行自訴仕候処、鹿兒島警視署ニ護送、同所

裁判所ニテ御調ヘヲ受長崎江護送、臨時裁判所ニテ懲役

二ケ年御処刑奉蒙候、尤戰爭等ハ全ク不関、戦地之景況

相分不申候、此段謹テ上申仕候也、

明治十一年三月

鹿兒島県第六十六大区
二小区末吉郷
益山兼繁

四六 山下織兵衛上申書

戦記景況概略

明治十年四月中旬区長ヨリ該区戸長へ募兵スヘク旨達シ
ニヨリ、余モ戸長ノ募リニ応シ同十九日出発、同廿三日
人吉ニ着陣ス、翌廿四日鵬翼五番中隊左小隊長トナル、
乃チ大野村へ出兵スヘキノ令ニヨリ即夜当所ヲ発シ、翌
廿五日該地ニ至リ守兵ス、或日此日不詳佐敷へ進撃ノ令アル
ヲ以テ我隊ハ正面ヨリ進ミ、烈シク攻戦スルト雖トモ左
右井ニ応援ノ兵時刻ヲ誤リ来ラサルヲ以テ我隊頗ル苦戦
ニ及ヒ、七八名戦死シ其他負傷五六名余ナリ、遂ニ利ア
ラスシテ退テ大野ニ帰陣ス、五月一日頃余ハ平病ニ罹リ
入院ス、依テ爾後ハ戦地ニ関セサルヲ以テ略ス、

(年月日脱)

鹿兒島県下樋脇郷
山下織兵衛

四七 川添太之助上申書

明治十年二月四番大隊七番小队ニ編入セラレ、同月十六

日鹿兒島ヲ出發シ、同廿二日肥後川尻駅ニ到リ、直チニ
城下ニ迫リ攻城ス、該夜熊本ヲ發シ植木ヲ応援ス、此時
官軍既ニ敗走スルヲ以テ止テ同所ヲ番兵ス、同廿三日植
木ヲ發シ、山鹿ニ向フ道ニシテ木ノ葉方位ニ當リ砲声夥
シキヲ聞キ、転シテ木ノ葉ニ向フ、到レハ則チ戦既ニ半
ナリ、我隊直チニ官軍背面ノ山ニ登リ頻リニ之ヲ瞰射ス、
官軍辟易、我隊勢イニ乘シ呼諜之ニ迫リ遂ニ官軍ヲ走ラ
ス、該夜植木ニ退キ兵ヲ休スルコト三日間、同廿六日山
鹿へ進軍ス、同廿七日辰牌官軍来リ撃、我隊邀へ戦イ激
戦暫時、官軍潰へ走ル、追撃凡三里可リ、死尸道ニ滿ツ、
退テ山鹿ヲ守ル、三月三日我軍十中隊余ヲ分ツテ二トナ
シ、一ハ本道ヨリ進ミ、一ハ間道ヨリ向イ、直チニ南関
ヲ屠ラントス、官軍既ニ岩村ヲ扼シ終日激戦、同四日田
原口危急屢ニ応援ヲ乞、是ニヨリ我隊ハ転シテ田原ニ抵リ、
呐喊直チニ進ミ戦イ亡フ処ノ數壘ヲ恢復ス、官軍退テ壘
ヲ坂上ニ築キ死ヲ以テ拒キ守ル、是ヨリ連戦昼夜、同廿
日ニ至リ我軍敗走、將ニ味取町ニ抵ラントスル比、植木
方位ニ當リ砲声頻リニ聞ユ、此ニ於テ疾足向坂ニ抵レハ
戦既ニ酣ナリ、暫アリテ敗兵或ハ二十或ハ三十来リ援フ、
故ヲ以官軍大ニ敗走退テ植木学校ニ抛リ保ツ、伏屍狼藉

タリ、我軍進テ植木街頭ニ到リ罌ヲ築テ砲戦ス、同廿五日味爽忽軍進撃、此日右手ヲ傷キ御馬下ニ退キ之ヲ療ス、爾来久ク病院ニアリ、遂ニ帰県スルヲ以テ戦地ノ景状ヲ詳ニセス、

明治十一年二月

鹿兒島県

川添太之助

四八 兒玉良四郎上申書

明治十年二月十七日鹿兒島発程、同廿二日熊本県工着ス、同廿五日山鹿工進軍、三月廿日官軍襲来、奮戦央ニ楠元工引揚ケ、同廿五日隈府工進軍、攻戦数日、戦毎ニ勝利ヲ得、四月十日木山工引揚、同十七日御船ニ進軍、同廿日官兵襲来激戦ス、終ニ利アラスシテ萬坂迄引退ク、六月上旬豊後地ニ出張、同廿六日赤松嶺ノ官兵ニ進撃、暫時二数ヶ所ノ罌ヲ拔キ、接戦半ニ銃創ヲ蒙リ、延岡病院ニ於テ療養ス、依テ爾後ノ戦状ヲ詳ニセス、

寅四月

兒玉良四郎

四九 山下静吾上申書

戦地概略

曩ニ鹿兒島県私学校党ノ一挙ニ於ケル中原尚雄等当路官吏ノ内命ヲ受ケ、陸軍大将西郷隆盛ヲ暗殺スルノ件ニ基クコト豈弁ヲ俟ンヤ、然リ而シテ国ニ法アリ律アルヲ以テ隆盛等其事ヲ懇へ、廟堂ノ公議ヲ仰カント東上スルノ際、隨行ヲ乞テ五番大隊四番小隊ニ偏入セラレ、長崎直五郎之カ隊長トナル、二月十七日鹿兒島ヲ発出シテ同廿日熊本県川尻駅ニ着ス、此時台兵我先鋒ノ行路ヲ遮リ既ニ兵端ヲ開キ防禦ノ策甚タ嚴ナリト聞ク、於是我隊部伍ヲ定メ器械ヲ整へ本日千團端ヲ守ル、城兵瞰射スルコト甚シ、同廿四日段山ヲ守ル、居ルコト二週間ニシテ田原ノ戦其危キヲ以テ援ヲ我隊ニ乞フ、是ヲ以テ直ニ二段山ヲ発シテ田原ニ至リ、連絡ヲ通シテ寨罌ヲ築キテ之ニ抛ル、居ルコト旬余、一日官軍大霧ニ乘シ大幸シテ我寨罌ヲ襲フ、我隊一旦之ヲ防クコト能ハズ、潰走スルコト尅町余官軍勝ニ乘シテ追撃ス、我隊之ヲ幸トシ兵ヲ堤ニ伏セ敵ノ近クヲ待テ万銃斉シク発シ、抜刀接戦敵若干ヲ斃ス、敵兵駭潰死傷ヲ顧ミス先ヲ争テ走ル、コ、ヲ以テ再タビ旧罌ヲ取テ之ニ抛ル、本日ノ戦ニ余銃創ヲ蒙リ、川尻病院ニ於テ創ヲ療スルコト幾旬、終ニ諸道ノ戦ヒ大ニ敗績スルカ故ニ木山ニ転院ス、後ニ銃創稍癒タルヲ以テ人吉

ニ至リ、振武二番二帰隊シ程角ノ本道ヲ守ル、数日ニシテ官軍人吉ヲ破ル、我隊人吉ヲ退キ大畑邑オホノキニ抛ル、大畑ノ戦モ相繼テ敗績ス、於是退テ飯野ヲ守ル、七月下旬官軍大挙諸道ヲ攻撃ス、其勢ヒ甚タ熾ニシテ我兵支ルコト能ハス、小林ニ退ク、既ニシテ都ノ城ノ戦モ亦利ヲ失ヒ、山口・高岡・高鍋・美々津ヲ經過シテ延岡ニ至ル、此時ニ当テ兵氣大ニ沮靡シ四面皆官軍ノ有トナル、一日官軍大兵ヲ以テ衝突ス、我輩奮戦甚タ勉メタリト雖トモ衆寡敵セズ、隊伍散乱潰走ス、余本日ノ戦ニ又銃創ヲ蒙リ、後チ軍門ニ降ル、実ニ明治十年八月廿日也、

明治十一年四月

鹿兒島県

山下静吾

五〇 齋藤八郎上申書

明治十年二月十日第式大隊八番小隊江編入、二月十六日鹿兒島ヲ発シ、加治木ヨリ大口ヲ過キ同二十一日熊本県下川尻ニ着陣ス、暫時休息、川尻ヲ発シ下松尾村ニ趣キ守兵、同所ヲ発シ大津村ヲ守ル、三月中旬頃山鹿江趣キ守兵、田原ノ戦敗走ノ報知、植木応援ノ令アリ、三四中队ト共ニ横撃ス、戦利ヲ得ル、四月上旬頃鳥巢村江趣キ

守兵、小戦度々勝敗決セス、其後敵兵襲撃、不利シテ二三町引揚、各隊大ヒニ奮戦暫時ノ間二本ノ塁ヲ得タリ、守ルコト一週間余ニシテ大津村ニ引揚、同所戦勝敗不決ノ処、引揚ノ令ニ依リ矢部ニ引揚、各隊変襲アリ、我隊奇兵五番中隊トナリ、四月下旬頃矢部ヲ引揚、椎葉山ヲ越テ尾前・江代邑・富高新町江到着、細嶋守兵数日、五月上旬頃同所ヲ発シ、延岡ヨリ豊後佐伯江三四中队ニ而進撃ス、敵兵不戦シテ逃走ス、守ルコト四日、同所ヲ発シ大分ニ進向ノ処、戦不利シテ引揚ノ報知ニ付各隊ト共ニ引揚、五月上旬頃三重市江着、翌暁天官兵襲撃、戦大ヒニ利ヲ得ル、午後一時頃ヨリ白杵進撃、翌一時頃戦大ヒニ利ヲ得タリ、守ルコト一週間余、其後敵兵襲撃、戦不利シテ各隊引揚、重岡ヨリ八戸江暫時守兵、六月上旬頃梓峠進撃、水ヶ谷黒土峠迄追撃ス、黒土峠守ルコト三十余日、七月上旬頃暁天敵兵襲撃、戦不利シテ各隊共ニ梓峠迄引揚、同所ヲ守ルコト数日、引揚ノ報知アリ、八戸ヨリ熊田(長井カ)・永井村江引揚、同所引揚、可愛嶽ノ敵兵ヲ追払ヒ諸所間道ヲ押通り飯野ヨリ小林江引揚、八月三十日横川戦ノ節深手負ヒ踊江引揚、同三十一日降伏ス、九月一日加治木臨時病院江入院ス、

十一年四月

鹿兒島県
齋藤八郎

五一 向田幸藏上申書

明治十年二月十五日陸軍大将西郷隆盛等政府へ諮問ノ筋アリテ上京ニ付隨行ヲ乞ヒ、第一大隊四番小隊ニ編入セラレ、街道西目ヨリス、同廿一日熊本川尻駅ニ到着ス、同廿二日早天城下ニ到ル、戦争始ル、段山口ヲ攻撃ス、同廿四日夜春日村ニ引揚ケ、同廿五日薄暮高瀬へ進軍ノ報ヲ聞キ、我隊其他モ繰出ス、同廿六日八時頃安樂寺村ニ着キ川ヲ隔テ、砲戦ス、官軍川ヲ渡リ岸ニ達セントス、我隊之ヲ撃散ス、其時隊長坂元清緝銃丸額ヲ洞シテ斃ル、此日終日戦争、夜半ニ至リ我隊半ハ伊倉ニ向ヒ、半ハ植木ニ退ク、同廿七日木葉ニ向テ発シ、稲佐村ノ本道ノ右翼ヲ防守スルコト凡三日計、木留ニ抵リ伊倉ノ半隊ト合シ該地ニ止ル、此時土橋七之丞隊長トナル、三月三日官軍大拳シテ吉次峠ヲ攻撃ス、我隊モ木留ヲ繰出ス、吉次ノ本道ノ左翼ヨリ進ミ勇闘奮戦、官軍敗走ス、我隊四五町ヲ追フ、此時官兵急ニ我背後ヲ絶ツ、之レニ依テ退テ峠ヲ守ル、官軍精銳ニシテ戦夜ニ及テ止マス、此時土橋

挺身奮戦、遂ニ丸ニ中テ斃ル、翌四日熊本ヨリ応援四五小隊来ル、我軍勢ヒヲ得テ戦フ、各隊ヲニツニ分チ本道・左翼・右翼ヨリ進撃ス、此時我隊ハ右翼ヨリ進入シ官軍ノ霧ニ乗シ拔刀挺身一斉ニ突入セシカ、官軍敗走ス、我軍追撃スルコト七八町計、此戦官軍ノ死体夥シク道路ニ滿タリ、後我隊ハ吉次ノ本道ヨリ右翼ヲ防守セリ、同十日頃諸軍進撃シ、我隊ハ西安寺村ニ向テ進撃シ墨三四ヲ得タリ、砲戦激シト雖那知山ノ我軍来リ会セザルヲ以テ遂ニ軍ヲ班ス、同廿三日頃吉次ヲ攻撃ス、我隊撃テ之ヲ走セ追撃スルコト三町計、同廿五日頃木留村ニ分隊応援ス、其時手ヲ負ヒ川尻病院ニ入テ之ヲ養セリ、四月十五日比日州都之城ニ転院シ、五月二日頃我剣平愈シテ真幸郷飯野口破竹隊五番中隊ノ分隊長トナリ、同二十八日比官軍大拳シテ襲来リ、味方險固ニ因テ防ク、此時我レ病氣ニ依テ高岡病院ニ入り之ヲ養治セリ、六月十日比官軍日々セマリ来ル、故ニ高岡病院ヲ延岡ニ転院ス、七月十一日比延岡破レ官軍^(長井カ)長江村ヲ取囲、此時奇兵隊先鋒ヲ臨ミ、我隊其他ヲ中軍・後軍ニ分ツテ延岡ヲ取ント度々進撃スレトモ破コト得ス、八月十四日江ノ峠ヲ破リ鹿兒島ヲ指ント軍議定ム、該夜銃兵ヲ集メ江ノ峠ヲ破ント直ニ

繰出ス、江ノ峠ノ守兵情リ味方其不意出ルヤ、当ル処ノ幸哉四方八方ニ撃散ス、九月一日鹿兒島ニ乱入シ新撰旅団ノ兵ヲ散々ニ撃破リ、同三日夜百名計リヲ以テ米蔵ヲ夜撃ス、大ニ味方斃レ帰ル者ワツカ三十名計、其後官軍城山ヲ三エ四エ取囲ノミ、九月廿四日進撃ニ付味方少兵ニシテ防クコトヲ得ス、遂ニ帰順ス、

明治十一年寅四月

向田幸藏

五二 木原胤澄上申書

明治十年二月十六日西郷隆盛等政府江尋問ノ為メ上京ニ付随行シ、第四大隊四番小隊ノ半隊長トナリ、同十六日鹿兒島県ヲ発シ、同廿日熊本県下小川駅ニ到着ス、時ニ先駆ノ隊開戦ノ報ヲ聞ヤ、直チニ半大隊ハ川尻駅ニ赴ク、我隊ハ同所ニ一泊シ、翌廿二日未明小川駅ヲ繰出シ、御船街道ヲ經テ夜十二時頃川尻駅ニ着ス、即夜同所ヲ繰出シテ翌未明熊本向江町ニ着ス、我隊ハ応援トシテ敵来襲ノ所ヲ待ツ、其夜植木口ノ味方苦戦ノ報来ル、故ニ隊長川久保十次曰ク、我隊ハ応援トシテ此地ニ止ル、実ニ辛ナル哉、速ニ此報ヲ以テ本營ニ迫リ、植木口ノ敵ヲ一撃シテ散々ニ追尽シコト是レ我所願也ト、依テ本營ニ至リ

迫ル、即夜十二時頃植木口へ進軍ス、最早味方勝利ニテ官軍敗走シ木ノ葉ニ退ク、我隊ハ此地ニ一泊シテ、翌廿五日未明ヨリ山鹿へ進軍ス、我隊ハ新町街道ヨリ進ム、山鹿ニ至レバ則チ官軍既ニ退ク、我軍此ニ於テ壘ヲ築キ守衛ス、同廿六日朝五時頃官軍大挙シテ来襲ス、我軍奮ク戦フ、我隊ハ左翼ノ山手ヨリ敵ノ横背ニ突進シテ衝撃スレバ、官軍直チニ散乱シ屍ヲ途ニ捨テ退ク、此戦我隊戦死三名ナリ、午後三時頃復山鹿へ凱陣セリ、三月四日南ノ関ニ進軍ノ令アリ、昼十二時頃桐野利秋十四小隊ヲ率ヒ進軍ス、我隊其他五小隊ハ右翼ノ間道ヨリ進ミ僅ニ時ヲ過キ戦ヲ始メ、遂ニ湯ノ平山ヲ乗取ル、官軍大敗シテ走ル、我軍之ヲ尾撃シテ板橋ニ至ル、此ニ一泊ス、翌未明ヨリ南ノ関ヲ衝ントスルニ策ナラスシテ我軍ヲ少ク引キ、本道ノ左横手ニ突出接戦シテ敵ヲ追散ス、暫時アツテ官軍復来リ攻ム、戦ヒ最モ烈シ、夜ニ及テ互ニ合引シテ我軍ヲ山鹿へ引揚ク、此戦終日激戦ナリシガ、我軍死傷頗ル多シ、同七日志々岐村ヨリ官軍襲ヒ来ントスル報アリ、我隊ハ二手ニ分チ左右ノ翼ヨリ廻テ進ミ戦フ、我兵烈風ノ如ク進入セシガ、互ニ激烈ノ接戦ニ及ヘリ、遂ニ官兵堪ヘスシテ敗走ス、此戦敵ノ死骸途ニ滿ツ、我

軍分隊長肝付兼一戦死ス、其他死傷八名ナリ、暮ニ及テ我軍ヲ山鹿ニ引揚ケリ、翌八日我隊ハ山下某隊ト交代シテ熊本城段山ヲ守禦ス、昼夜連戦ニシテ砲声止ムコトナシ、同十二日城兵大挙シテ突出ントス、我軍之ヲ防ク、午前三時頃ニ至リ既ニ^(弾薬力)弾薬尽ントスルニ城兵益々我壘ニ迫ル、接戦最モ烈シ、遂ニ支ル不能シテ大敗ス、此戦我軍死傷頗ル多シ、余時ニ銃創ヲ負ヒ川尻病院ニ至リテ療養ス、亦各所ノ病院ヲ經テ鹿兒島へ帰県治療ス、同十月七日鹿兒島ニ於テ軍門ニ降ル、

右、戦地景況如斯御座候也、

寅四月十六日

木原胤澄

五三 赤崎直記上申書

曩者西郷隆盛等上京ノ際、第六大隊ノ六番小隊分隊長ニ編入サレ、二月十五日郷里出發、同廿日熊本県川尻駅ニ至ル、同廿二日午前四時頃ヨリ兵營旧城へ攻入ント、段山口ヨリ懸リ奮戦シテ守兵ヲ追退ケ、午前十時過段山ヲ乘取り、此ニ圍城スル四日間、連隊長別府某彈丸雨射スレトモ敢テ不撓、挺身勇ヲ奮フテ指揮ス、同廿五日外隊ト交代シ春日村へ引揚休兵ス、同廿六日黄昏同所繰出シ

植木へ暫時休兵ス、翌廿七日黎明高瀬へ押寄セ斥候兵ト発砲、直ニ追退ケ猶進テ川向フノ敵ト相戦フ、敵兵流ヲ乱シテ三面ヨリ迫リ殆ント巻レントス、時ニ僅一塘ヲ隔テ益奮戦スルノ所、敵民屋ニ放火シ勢ヒ猖獗、我兵孤立ト為リ大ニ苦ム、遂ニ退クニシテ終日防戦シ、深更ニ及ンテ植木へ引揚ク、三月四日田原ノ戦争豊岡村へ押出シ連日連戦、互ニ勝敗アリ、同十日此地ヲ川村甫輔ニ譲リ春日村へ転陣ス、翌十一日ヨリ高麗門ヲ固メ台兵ト相持スル三十余日、豈凶ン川尻方面敗績ノ報ヲ得、木山へ引揚、四月十五日武宮へ押出シ守兵ノ所、同廿日早天敵大兵ヲ以テ掛ル、我兵奮然台場ヲ進ミ出ル二町計リニシテ戦フ、敵兵ヲ増シテ味方ノ台場ヲ奪ヒ我兵ノ右側ニ出ツ、因テ台場へ引キ防戦數刻ヲ移ス、然ルニ御船方面ノ敗報至リ、本營ノ令ニ依リ即夜木山村へ引揚、尋テ矢部ニ至リ滞陣ス、此ニ於テ第六大隊ノ八小隊ヲ以テ振武十一番中隊ト改号ス、夫ヨリ間道ヲ經テ人吉へ転陣、時ニ鹿兒島県下へ敵進入ノ報アリ、乃チ同県下加治木郷へ進発シ、五月一日該地へ着陣ス、翌二日蒲生郷へ出張、此ニ守兵スル三旬計リ、六月上旬人吉へ為応援繰出シ、大畑村へ着陣ノ処、人吉城下ハ既ニ敵ノ奪フ所ト為リ味

方大畑迄引退、我隊ハ間道筋且敵ノ景況等為探偵大斥候等へ出、墓々敷キ戦モナク六月十二日飯野へ引揚、諸所へ哨兵ヲ張ル、同廿日敵兵ヲ襲撃セン為山手ヲ廻テ敵壘ノ背後ニ出テ、午前九時比開戦ノ所、続テ正面モ発砲、頗ル快戦ニ及ト雖トモ要害嚴密ニシテ拔能ハス、午後六時頃原田村へ引揚宿陣ス、同廿二日村田某ノ令ニ依リ即夜加治木郷へ進発ス、同廿六日吉野方面敗戦、幾クナラス志布志方面へ敵進入ノ報ヲ得、七月一日該地へ進軍、同七日志布志郷月野村ニテ戦争、勝敗不決、即夜岩川へ宿陣ス、翌八日ノ夜同所繰出シ、明旦百引・市成へ繰出カ躍躍カ掘ノ敵兵ヲ襲ハント外振武隊ハ百引へ進撃シ、我隊ハ市成郷ノ敵へ懸リ聊炮戦、即夜恒吉郷へ宿陣ス、敵亦民屋ニ放火シテ退ク、同十一日大崎郷へ屯集ノ敵ヲ襲ヒ烈戦スト雖トモ遂ニ抜ク能ハス、其夜原田村へ宿陣、敵夜ニ乘シテ退ク、翌十二日早天再ヒ大崎へ繰込ントスル途中敵ノ援軍ト出逢ヒ、互ニ発砲接戦シテ、遂ニ大勝ヲ得タリ、同十五日福山郷佳例川カ嘉例川村へ進撃ノ処味方遂ニ敗走、其夜財部へ転軍ス、同十七日庄内高野村へ為応援黄昏ヨリ同所繰出シ、荒襲へ進撃、奮戦中負傷、都之城病院へ送ラル、其後諸所ニ於テ療養シ八月廿八日郷里ニ帰り帰順ス、

明治十一年三月

鹿兒島県始羅郡加治木
赤崎直記

五四 宮内善右衛門上申書

戦記

明治十年五月八日勇義十一番小隊ニ編入シ、鹿兒島県下向田出張本營ノ指揮ニ從ヒ接近ノ地ヲ守ル、同六月十六日敵兵出水口ヲ襲ヒ来ルノ報ヲ得テ、即日我隊ヲ以テ出水口ノ本道ナル阿久根ノ地ニ向ハシム、此時敵兵已ニ高尾野ニ突入セントスルノ際、人民大ニ狼狽逃走シ手足ノ措ク処ヲ知ラスト、因テ同九日我力隊ヲ出シ阿久根ノ境ニ守ラシム、同日処々転戦、遂ニ桑原ノ城ニ於テ銃創ヲ蒙リ郷里ニ帰ル、治療中八月十三日軍門ニ降ル、

明治十一年六月

鹿兒島県第廿七大区永利郷
宮内善右衛門

五五 四本幾上申書

戦地景状概略

曩ニ西郷氏ノ事ヲ拳ルヤ、第二砲隊ニ編入シ、六番砲車ノ付属トナリ明治十年二月十七日鹿兒島下ヲ発シ、大口

(球磨方)

路ヲ經テ熊本県下人吉ニ到リ、求麻川ノ急流ニ掉シ同廿三日八代ニ到着ス、即日該地ヲ発シ宇土ヲ通過スルトキ、熊本既ニ開戦ス、砲声山壑ニ響キ火焰田野ヲ掩フ、馳テ熊本城ニ進ミ向フ、城ヲ距ルコト十余町、花岡山ニ壘ヲ設ケ砲六門ヲ以テ城中送ニ砲撃シ曠日久シ、三月廿二日比段山口ノ味方敗レ我隊華岡山ヲ固守シ劇戦数刻、敵兵動揺シテ眼下ニ斃ル、敵数百名遙望ス、其後^{日ハ}我隊^{不覺}隊長田代五郎^ハ応援トシテ八代方面ニ向フ、松橋ニツイテ頗ル奮戦、薄暮ニ至リ左翼ノ味方敗レテ一町余退ク、夜ニ入敵兵モ同シク揚ク、翌朝本營令シテ兵ヲ川尻ニ揚ク、於是某第五大隊十番小队ニ転シ川尻駅ニ守兵ス、于時敵兵宇土町ニ侵入ノ報アリ、翌未明ヨリ四五小队ヲ木原山ニ向ケニ中隊余及ヒ応援彗中隊ヲ宇土本道ニ進撃ス、途中敵侵入スルニ会シ、直チニ道ヲ木原山ノ方ニ転ス、我隊之ニ応シテ進ム、敵間ニ町余ノ距離ナリ、又左翼ノ味方モ二中隊ヲ分配シ木原山ニ戦フ、敵兵既ニ退カントスル時、援兵頗ル激戦数刻ニ及ヒ味方死傷多シ、黄昏ニ至リ兵ヲ引揚ケタリ、四月十二日敵大挙シテ来リ攻ム、味方三カ^隊ノ関守兵^{高岡}最急ナリ、依テ我隊之ニ応援奮進スト雖トモ勝敗ヲ決セス、翌十三日連戦、其夜半過ニ町方面ノ

味方失防、敵我軍ノ背後ニ出ルヲ以テ不得止ニ町余退ヒテ防戦ス、同十四日払暁ヨリ進撃必死激戦、終ニ味方利アラス、引テ熊本出町ニ揚ク、同十五日木山ニ転陣シ該地川岸ニ守兵ス、其后^{月日ヲ詳}カニセシ我隊外三中隊余飯田山ニ進ミ不在ニシテ直ニ御船ニ向ヒ、軍配評議中ニ敵兵襲来シ、暫時防戦シテ之ヲ撃テ走ラス、敵死傷若干ナリ、又両三日ヲ經テ敵兵山上ヨリ来リ攻ム、味方大ニ苦戦シ終ニ防拒難シ、故ニ我隊^(金内方)鐘内ニ退ク^{於愛我隊ヲ千城、三番中隊ト稱ク}、又椎葉山内尾前ニ引揚ケ横野ニ守リ、三週間余爰ニ滞陣ス、三月廿日比味方遊軍五番小队ノ壘ニ敵襲来リ、防戦スト雖トモ終ニ敗レ、我隊モ応スル能ハス、不動ニ退キ又鶴村・江代等悉ク敗トナリ岩野ニ退ク、翌朝我進撃ス、途ニシテ人吉ノ味方敗軍ノ急ヲ報ス、止ムヲ得ス日州路ニ転シ米良ニ至リ該地板屋ニ守兵ス、遊五番小队及我隊ハ本道、千城五番中隊西ノ八重、佐土原隊ハ上米良口ト三ヶ所ニ固守ス、敵兵旧米良領境^{地名詳}ナラスニ陣ス、再三進撃スト雖トモ互ニ雌雄ヲ決セス、后^{日ハ詳}ナラス又敵襲来、防戦スルニ味方利アラスシテ小川ニ引ク、敵天包峠ニ抛ル、或日天包峠ヲ進撃ス、我隊ハ正面ヨリ向ヒ、佐土原隊ハ窃ニ敵ノ背後ヨリ衝突シ、直ニ敵軍ヲ破リ逃走スル時、援兵来テ之

二応シ頗ル烈戦ス、味方山險ノ連戦ニ兵勞レ且防拒スルニ彈藥竭キ、夜半越ノ尾ニ退キ該地ノ山林激流ニヨリ壘ヲ築キ守備ス、三日ヲ過キ敵來リ攻ム、防戦中此地ニ於テ某彈丸ヲ受ケ病院ニ至リ、后又延岡ニ転シ療中旧七月七日降伏ス、

明治十一年五月

鹿兒島県

四本幾

五六 野間金左衛門上申書

戦記

明治十年二月第五大隊九番小隊ニ編入シ、同月十七日鹿兒島県ヲ発足、同二十二日熊本県へ到着ス、早先隊始戦ト相見へ、我隊モ暫ク城へ攻撃シ、又転シテ植木江進軍、同日薄暮ニ及ヒ大久保へ哨兵ス、翌朝外隊ト合シ木葉へ進撃一戦シテ勝ヲ得ル、銃器・彈藥若干ヲ分捕ス、夜ニ入テ各隊ト協議シ共ニ軍ヲ植木へ旋ラス、敵兵山鹿道ヨリ我後ヲ襲シコトヲ慮ランヤ、又山鹿へ進軍ス、敵兵更ラニ不見、此ニ於テ四方へ砲台ヲ築キ防拒ノ策ヲ成ス、三日アリテ後敵兵數隊ヲ以テ來リ攻ム、我隊激戦シテ勝ヲ得タリ、又転シテ那智山へ進軍、互ニ防拒スル十四五

日間、戦昼夜止マス、時ニ三月十三日頃橋口某・永山某ノ壘ニ敵兵襲來、直チニ我分隊ヲ以テ援ヒ撃ツテ之ヲ走ラス、間モナク戦ヒ止ンテ旧壘ニ復ス、同月十三日味取峠ヨリ我隊外ニ小隊ト(西安寺ノ)西庵寺へ進撃ス、我隊奮闘スト雖モ敵兩翼ヨリ挟ミ撃チ、遂ニ彈丸ニ中リ戦ヒ半ヨリ川尻病院へ送ラレ、數日療養スト雖モ不愈ヲ以テ止ヲ得ス帰県ス、四月頃(日ハ不詳)我隊鹿兒島県下吉野村雀ケ宮へ到着スルヤ、直チニ本隊へ帰隊ス、夫ヨリ各所ニ於テ戦、末吉郷戦争之時敵ニ取囲マル、降伏ス、加治木郷警視分署ニ於テ自宅謹慎被申付帰宅候処、九月一日我軍再ヒ鹿兒島へ乱入シ直ニ之ニ応ス、夫ヨリ城山ニ於テ防戦スル処數十日、遂ニ同廿八日未明ニ四方ヨリ敵大軍シテ進撃ス、防戦スト雖モ衆寡不敵サル故ニ、遂ニ軍門ニ降ル、右、戦地景況大略如斯ニ御座候也、

明治十一年寅六月日

鹿兒島県平民

野間金左衛門

五七 大磯彦六上申書

明治十年第二月中原尚雄巨魁トシテ外ニ二十余名政府ノ命ヲ受ケ、西郷隆盛・桐野利秋・篠原國幹ヲ暗殺シ私学校

ヲ離間セシ等ノ云々、大逆無道不容易國憲ヲ犯サントスルノ奸謀発覚、顯然タルニ因リ政府へ質問トシテ上京ニ付、県令ヨリモ各府県各鎮台工專使ヲ遣ハシ、西郷等上京ノ旨趣ヲ通知シ管下一般普ク揭露ス、此ニ於テ士民拳テ慨歎セサル者無シ、就中私学校 王ヲ尊ヒ道ヲ研究スルノ校ナレハ、此ノ際ニ至リ政府ノ無道ヲ怒リ孰レカ袖手座視スルモノアランヤ、之レカ為メニ随テ、奸佞ヲ除鋤シ、上ハ (階下カ) 階下ヲ安シ、下ハ万民ノ塗炭ヲ救ハント、同盟ノ人員相ヒ来会スルモノ一夕万余人、乃チ令ヲ下シ部伍ヲ編制シ随テ行ノ通路ヲ定メ、二月十四日ヲ前軍進発ノ日ト決シ、六番大隊・七番大隊別府晋介之ヲ帥ヒ覺城ヲ発程、詰朝統テ三番・四番大隊発足、大磯彦六ニハ第三大隊一小隊辺見十郎太部下ニ編入、西目街道ヲ通行、此日大雪脛ヲ没ス、過ル処ノ村落老幼男女箆壺之ヲ迎ヘ茶菓酒食ヲ供シ慰勞懇々、恰モ慈母ノ愛子ニ於ルカ如シ、進ンテ三太郎越ニ至ル比口氷雪溶解大ニ歩行ニ難ミ、坂中ニ至レハ足滑カニシテ前ニ躓キ後ニ臥ル、時ニ辺見之ヲ憂ヒ衆ヲ励マシ曰、熊本城近キニ在リ、皆勇進スヘシ、今ヨリ躓仆スル者ハ戰友ノ銃ヲ荷ナヘト、須臾ニシテ辺見及ヒ三四輩躓仆ル、乃チ銃數挺ヲ負ヒ峻坂ヲ踰越ス、

此ニ於テ兵威益振フ、同廿二日八代ニ到リ、翌曉天熊本県下川尻ニ到着ス、時ニ熊本城下ニ當リ砲声轟々恰モ雷ノ如シ、烟焰天ヲ庇フ、此時辺見衆ニ告テ曰、先ニ我前驅此ニ着スルヤ、台兵理非ヲ問ハス素リニ我前驅ヲ遮撃セリ、故ヲ以テ止コトヲ得ス、開戦ニ及ヒ、我前軍一撃シテ熊本城迄追詰メタリ、是固ヨリ願フ処ニ非ス雖トモ (下脱カ) 勢イ如何トモ為ス能ス、速ニ進ンテ熊本ノ軍ニ合シ直ニ雌雄ヲ決セント疾足熊本ニ到リ、昏ヲ待チ花岡山ニ登リ城中ノ動靜ヲ瞰ヒ、下テ筒口ニ至リ城ヲ距離式丁許ノ地位ニ進ミ城中ヲ砲撃ス、城兵モ亦之レニ応シ大小砲ヲ放チ昼夜寸間ナシ、我兵此地ニ胸壘ヲ築キ攻撃累日、一日辺見植木ニ於テ村田三介隊ノ得タル十四連隊ノ隊旗ヲ携ヘ来リ、丈余ノ竿頭ニ掲ケ之ヲ罍上ニ立テ城兵ヲ麾キ、大音ヲ発シ罵詈訾シテ曰ク、見ヨ見ヨ、此ノ旗ノ何タルヲ知乎、天我輩ノ誠忠ヲ感シ下シ賜ヘルナリ、汝等苟モ恥ヲ知ラハ急ニ来テ之ヲトレ、今ヤ内ニ軍糧ナク外ニ援兵無シ、然ルニ荏苒孤城ヲ守ル、豈謬ラスヤ、急ニ邪正ヲ分弁シ先非ヲ悔悟シ、速ニ甲ヲ脱キ銃ヲ捨テ我轅門ニ降ハ寛宥之ヲ処セント、又我兵ニ令シ百銃齊シク発ス、城兵ハ遠望鏡ヲ以テ之ヲ熟視シ劇シク連射シ飛丸雨注ス、

爾后軼々攻戦、茲ニ墨スル二十余日、是ヨリ先隊長辺見鹿兒島ニ赴キ、半隊長山本彦十郎之レニ代ル、三月廿日頃官軍八代ニ上陸ス、我隊赴キ援イ廿二日曉天該地ヲ発シ、翌廿三日午時八代砂川ニ抵リ、外五小隊ト共ニ小川ヨリ砂川ニ哨兵線ヲ連ネ之レヲ守防ス、同廿四日官軍我墨壁ヲ襲ハントス、我兵覺リ直チニ墨ヲ越、進テ激戦甚タ猛烈ナリ、官軍遂ニ兵伏^(兵伏力)・死体ヲ捨テ大ニ潰乱ス、此機ニ乘シ敵ヲ尾撃スル里許、天既ニ昏シ、交綏シテ全軍新田邑ニ宿陣、同廿六日午前十時頃ヨリ官軍大拳米リ撃ツ、我軍之レヲ防ク、遂ニ左右翼守ヲ失ヒ松橋ニ敗走、此時永山弥一郎憤然衆ヲ励シテ曰、汝等何カ故ニ斯クノ如ク怯懦ナル、若シ敵ヲシテ此地ヲ破ラシメハ大事之レニ依テ去ラン、生テ善士ト称シ死シテ忠臣ト称ラル、ハ則此時ニアリ、進シテ雌雄ヲ決シ力折矢竭キ斃レテ然ル後止マント、衆大ニ感憤努力之ヲ守ル、同二十八日官軍又來リ戦フ、我軍大ニ進シテ之ヲ敗リ追躡スルコト里許、官軍伏尸・兵伏若干ヲ捨テ走ル、勢イニ乘シ小川ヲ衝カシコトヲ乞フ、本營許サス、故ニ退ヒテ松橋ニ歸ル、同卅日官軍再拳シテ來リ戦フ、我軍利アラス、我隊長山本彦十郎勇進挺前丸ニ中リテ斃ル、其他死傷数名アリ、遂

ニ隈ノ庄ニ退ク、詰朝官軍大衆ヲ以テ來襲フ、我兵支ユル能ハス、川尻ニ退ク、四月一日卅町橋ニ赴キ該地ニ守防ス、地形守ニ利アラスシテ再ヒ川尻ニ歸リ渡頭ノ上流ヲ守ル、茲ニ於テ我軍宇土ノ官軍ヲ進撃ス、官軍險隘ニ抛テ能拒ク、故ニ破ル能ハス、空シク川尻ニ歸ル、同日頃城兵出テ安政橋ニ迫ルノ報ヲ得、急ニ二本樹^(二本木之)ニ赴キ本營ニ乞テ安政橋ニ応援ス、此時城兵百余人既ニ我安政橋ノ守ヲ破リ砂取ニ向フテ出去ルノ後ナリ、我隊二本樹ニ歸營、勞ヲ休スニ三日、同十三日此地ヲ発シテ中牟田ニ赴キ拒守、或日官軍來リ襲フ、我軍遂ニ敗走シテ木山ニ退ク、同十五日該地ヲ発シ、飯田山ヲ越ヘ御船ニ轉シ他隊ト共ニ之ヲ守ル、即日官兵御船ノ背山ヲ襲フ、我隊等邀撃シテ此ヲ敗リ斬首二十余級、脯^(脯カ)ニ至リ兵ヲ収メ旧墨ヲ守ル、同廿日官軍大拳シテ三面ヨリ攻撃、我軍努力防戦スト雖トモ彈藥悉ク竭テ敗走ス、官軍急追此時死傷頗ル多シ、遂ニ鐘打^(金内カ)ニ引揚ケ又南田代ニ赴キ守防ヲ蔽ニシ、猶退テ矢部ニ抵リ薩肥ノ全軍悉ク該地ニ会ス、爰ニ於テ隊伍ノ編制アリテ干城ニ番小隊ト称ス、八木彦八郎隊長トナル、是ヨリ各自糧ヲ負イテ椎葉山ノ峻険ヲ越ヘ尾前ニ次ス、或日官軍馬見原ニ進入、之レカ声援ヲナサ

ント健剛勁足ノモノ三十名ヲ選擢シテ困ヒノ險ヲ越へ、敵ノ壘上ニ出テ虚兵ヲ張り鯨声ヲ作ツテ放銃スル数十発、出沒シテ敵ニ動靜ヲ知ラサラム、如此スルコト二日、椎葉山ニ帰ル、或日不堂野ノ敗聞アリ、湯山村ニ退守ス時我軍屢々敗衄、敵兵勢ヲ得益振ヒ来テ江代ニ突入、我衆寡不適計リ、又岩野村ニ退キ守防ス、敵兵又之ニ抵ル、我兵大ニ憤怒、勇戦一旦之ヲ撃破スト雖トモ彈丸乏シク勝利不全ヲ察シ、旧米良領西八重村ニ守防ス、爾后横谷ノ官軍ヲ三度迄進撃スト雖トモ敵險要ノ地ニ抛テ侵ス不能、或日官軍攻来リ、我軍利ヲ失ヒ横野村ニ転戦、或日小川口ノ敗聞ヲ得、小川街道ハ横野ノ背後ニ出ル処ナルカ故ニ、我隊速ニ馳セテ尾泊口ノ隊ニ応援ス、憤闘接戦官軍敗走、該地ニ拒守スル二日間、或日該地ヲ引揚祇園ノ漣ヲ守ル、此夜官軍兵ヲ潜メテ穂北川ノ上流ヲ渡リ吶喊来リテ我背後ヲ衝ク、我兵事不急ニ出ルヲ以テ大ニ苦戦シ漸ク身ヲ以テ逃ル、退テ高鍋ヲ経耳川ノ上流ヲ守ルコト数日、敵又山陰ヲ襲ニ依リ延岡ニ赴カントス、敵已ニ富高新町ニ衝入タルヲ聞ヤ、則チ途ヲ転シテ山谿ノ間道ヲ求メ川内村ニ出、此日ヤ暴雨盆ヲ覆スカ如ク河水頻リニ漲リ僅ニ爰ニ抵ルヲ得タリ、或日黒木村ニ進軍ス、

八月十四日官軍来襲フ、我軍敗走延岡ニ走ラントス、余道ヲ迷ヒ狼狽スル内ニ官軍延陵^(延岡カ)ニ突出、永井村^(長井カ)ニ達スル能ハサルニ依リ深山ヲ経帰郷潜伏シ、城山ノ落城ヲ聞ヤ、止ヲ不得シテ官軍ノ轅門ニ降ル、

明治十一年六月

鹿兒島県

大磯彦六

五八 池水友之進上申書

戦記景况概略

客年二月西郷隆盛等政府へ尋問ノ筋有之、上京之途熊本県下ニ於テ戦争ニ及ヒ、既ニ官兵鹿兒島県ニ襲来スルニ依リ、予六月十四日応援トシテ出発シ、福山へ赴キ同十七日同所本營ニ着ス、直ニ切隊十番半隊長ニ編入セラレ、即日隊ヲ引テ同所大廻村ヲ保ス、数日ニシテ小隊長ニ転シ保守スル旬有余日、七月三日官兵我本營ヲ襲ハントスル報ヲ得テ、兵士五名ヲ引キ夜陰カニ牛根ニ赴キ探索セシニ、官兵五百余名同所深湊^(深湊カ)エ屯集スルヲ探知シ、直ニ本營ニ帰リ予カ小隊外ニ小隊ヲ以テ、同四日午前九時頃ヨリ進撃、午後九時比ニ至ル迄頻ニ砲戦スルニ成敗未タ決セス、予カ隊既ニ彈藥尽ルニ、垂々トスルニ本營ヨリ

引揚ノ指令ヲ受ケ、再ヒ大廻村ニ引テ保守ス、同七日切隊八番ト交代シ同所町ヲ保守ス、予爰ニ於テ眼病ニ罹、同八日病院へ入室療養ス、時ニ官兵襲来、味方利アラス、病院ヲ未吉・通山諸所、日向美々津ニ転ス、予モ病院ニ付テ移リ、終ニ八月三日当所ニ於テ軍門ニ降伏ス、

明治十一年寅六月

鹿兒島県第七拾九大区
二小区佐多郷
池水友之進

五九 町田萬上申書

明治十年二月西郷隆盛等云々ノ事件政府へ尋問ノ為メ上京ス、途熊本城ニ抵、鎮台兵ニ抑制セラレ開戦ス、勝負屢ニシテ遂ニ隆盛等不利、人吉・江代ニ退軍ノ際、四月上旬頃官鹿兒島ニ上陸、于時隆盛等軍ヲ三手ニ分チ、振武・行進ノ大隊ヲ以テ鹿兒島ニ向ハシメ、正義・干城ノ諸隊ヲ以八代方面ニ当ラシメ、奇兵一大隊ヲ以テ豊後地ヲ衝カシメ、余等固ヨリ鹿兒島ニ在リ、同七八十名ヲ催シ四月十二日頃鹿兒島伊敷邑ノ振武本營ノ命ヲ受ケ此ノ兵ヲ率シ、四月廿二日夜人吉・江代口応援トシテ鹿兒島ヲ発シ、同廿五日人吉ニ着、該夜江代ニ至リ黒肥地邑ニ着ス、即時高城十次ニ引合、兵士ハ江代・柳野・岩野ノ

三ヶ所ニ分配シ、直ニ人吉ニ歸リ須恵村ニ於テ人吉ノ敗レタルヲ聞、該夜植村ニ泊シ、翌日大畑邑ニ到着シ雷撃ニ番中隊ニ編入セラレ、大畑ノ東ノ方黒貫村ニ守防、同廿八日官ノ斥候二十四五名我守ニ来リ炮発ス、我兵撃テ之ヲ走セ進撃シテ五六名ヲ斃ス、退テ又旧壘ヲ守ル、翌日又襲来シテ我兵不利ニシテ田代邑ニ退守ス、翌日官軍大挙シテ来ルヲ告知ス、黎明ヨリ開戦シテ戦フコト二日、夫ヨリ真幸飯野ニ官軍進入スルヲ聞キ、之ニ馳七飯野町ニ出シ城ノ山ノ官軍ニ迫ル、官軍狼狽シ逡巡ノ色頭ルト雖トモ味方弾薬欠乏シテ吉田ニ引揚、六月下旬官軍吉田越ヨリ我軍ニ迫ル、雨降水勢烈キ故ニ進軍スルヲ得ス、我隊携白砲ヲ以テ之ヲ狙撃ス、敵飯野ニ引揚、又七月月上旬官軍山間ヲ忍ヒ吉松ニ来リ、我後ニ出ルヲ以テ我軍ヲ高原ニ移ス、官軍飯野川向ノ軍ヲ襲フ、我軍弾薬竭キ小林ニ退ク、我隊モ霧島ノ麓ヲ經過シ小林ノ十日町ニ至リ高原ニ守兵ス、官軍小林ヲ襲フノ報ヲ得、翌日小林ニ斥候ヲ出シ之ヲ探ル、既ニ高原ニ襲来ス、七月中旬高原川ヲ中ニシテ戦フ、仁禮某隊モ弾薬ニ竭キ高原ノ麓ニ来ル、我隊又麓ノ馬場ニ戦フ、官兵我カ背出ルニ依テ総軍大谷頭ニ引揚ケ守兵ス、爰ニ至テ七月十六日百引口ノ振武ニ

応援ヲ乞フ、中島健彦・貴島清等兵ヲ引来ル、同十七日
高原ヲ進撃ス、我隊先鋒高原ニ至テ、官軍本道ニ台場ヲ
築キ其他諸所堅固ニ柵ヲ結ヒ固守、我隊忍テ之ヲ窺フニ
官ノ哨兵飯ヲ喫ス、機ハ失フ可ラサルヲ脱カ察シ、装丸ノ一発
ニテ咄喊シ官柵ヲ乗取り、敵一発ヲ要セスシテ走ル、我
兵之ヲ尾撃シテ高原麓ニ至ル、官兵爰ニ於テ民家ノカヲ豎ヲ
取出シ急劇之ヲ防ク、故ニ進ム能ハス、分捕無數・伏尸
百余、我軍モ死傷九十余名アリ、同十九日退テ大谷頭ニ
守兵ス、我軍進撃シテ本道ニ迫ルトイヘトモ柵嚴ナルカ
故ニ進ヲ得ス、又旧壘ニ守ル、七月廿四日上荘内・都ノ
城敗ル、ニヨリ我隊モ山ノ口ニ至ル、翌日退テ學貫ニ保
守ス、廿六日板屋敗レ學貫ノ背後ニ出ルヲ以テ我隊倉岡
ニ引揚、続テ宮崎ヲ守ル、其夜中村ニ火シ川原町ヲ守ル、
七月廿七日官軍川岸ニ来ル、我隊白砲ヲ以テ之ヲ防ク、
遂ニ破レテ廣瀬ノ本道ニ戦フ、夜ニ入川ヲ前ニシテ守ル、
八月三日佐土原ノ官軍高鍋ヲ指シテ我背出ントスルヲ聞
キ、海浜ヨリ藤野ニ至リ、夫ヨリ美々津破レテ官兵細島
ニ上陸シ新町モ官兵ノ有トナル、依テ山手ヲ切抜ケ此時
砲二門・銃器・弾薬ニ駄ヲ分捕門川ノ山手ヲ守ル、高千
穂口敗レテ官軍延岡ニ出ツ、我隊美須村三須カニ戦フ、夫ヨリ

方財邑ニ至リ、富邑ノ渡ヲ守ル、翌日永井邑長井カノ川面ニ戦
フ、爰ニ於テ各地口ノ兵此ノ一村ニ集ル、一日延岡本道
ニ進軍スト雖トモ官軍重圍ヲ構ヘ防戦スルニ依リ敗ルコ
ト不能、八月十七日熊本隊等敗レテ帰順スルノ際、我隊
モ爰ニ帰順ス、故ニ爾後ノ戦状ヲ不詳、

明治十一年五月

鹿兒島県

町田萬

六〇 中村金五郎上申書

先般陸軍大将西郷隆盛外式名政府工尋問ノ筋有之、上京
ノ際第四番大隊六番小隊押伍ヲ以テ随行シ、明治十年二
月十七日鹿兒島ヲ発ス、同廿二日熊本県下ヘ達シ即チ本
營ヲ護衛ス、本隊ハ即日山鹿工繰出シ志宿村ヲ守ル、一
週間ヲ経護兵交代ト成リ本隊ヘ帰ル、時ニ三月四日木葉
口ノ味方破レ応援ニ馳セ及ハス転シテ田原轟木村ヲ守ル、
翌日進ンテ那知山ノ官兵ヲ討チ勝敗分タス、夜ヲ以テ壘
ニ帰ル、一兩日ヲ経官兵我壘ニ襲来シ、之ト戦ヒ勝利ヲ
得、台卒壹名ヲ生捕リ、銃器・弾薬ノ分取少ナカラス、
十余日ヲ経テ白濱村ニ壘転ス、翌黎明官軍襲ヒ来リ、激
戦數合ニシテ五六町ヲ追撃ス、爾后木留口味方苦戦スル

ヲ以テ余一分隊ト応援ニ馳セ、劇戦數回ニシテ更ニ勝敗ヲ分ケス、故ニ一同抜刀呐喊シテ切込ミ瞬間ニ七八人ヲ斃シ、官兵支ユル能ハス、散々敗走ス、依テ軍ヲ収メ我一分隊ハ白濱壘ニ帰ル、四月十五日川尻口味方破ル、ヲ以テ全軍木山ヘ引キ揚ケ、又御船・金内エ転ス、我隊金内ヲ守ル、此ニ於テ各隊ヲ編制シ我隊行進八番中隊ト改称ス、此時余隊長ニ擢ラル、而シテ同廿四日全軍矢部ヘ引揚、梨子嶽ヲ越シ江代ニ出、五月一日該所ヲ発シ、同四日鹿兒島吉野村ニ達ス、此時官軍早鹿地ヲ占拠シタリ、故ニ我隊後口迫・長瀬戸ニ繰込ミ哨兵ヲ張ル、六月八日比官軍大挙シ華倉ノ味方難戦ノ報ヲ得、我カ左小隊此ノ急ニ馳セ至レハ、則チ花倉坂之壘破レ官兵中ノ丁点侵入シ、同所ノ人家ヲ火シ既ニ營ニ近ツカントス、時ニ我隊直前奮進シテ大ニ官兵ヲ破ル、官兵ハ地理ニ疎ナルカ故礮山一ノ峻山ヘ逃入り、此時余隊モ続キ来リ、官兵ヲ斃ス算ナシ、或ハ高岸ヨリ落チ手足ヲ折キ腰ヲ摧カレ纒ニ命ヲ助カル者モ又少カラス、大ニ勝利ヲ得、即チ該所ノ壘ヲ復ス、同廿三日亦官軍大挙シテ各壘ヲ攻撃シ未タ勝敗ヲ分タサルニ、官兵千余、艦ニ乗シテ帖佐松原ニ上陸シ吉野口味方ノ背後ヲ衝突ス、我軍腹背敵ヲ受ケ、終ニ

拒守スル能ハス、期シ長瀬戸・桂山等ノ諸壘ヲ捨テ一時川上ヘ引揚ク、故ニ官兵ハ拱手シテ此ノ諸壘ヲ取レリ、然レトモ翌二十四日暎天我軍進撃シ官兵ヲ追払ヒ、旧壘ヲ復シ固守スル前日ノ如シ、此時伏尸數拾(拾力)ヲ見タリ、又ツルナル銃拾余挺・同彈藥并針打銃・彈藥各數万発ヲ分捕ル、爾來屢官兵我壘ヲ侵ス、然レトモ我軍能ク相拒キ抜クコト能ハス、六月二十五日比ニ至リ官兵川内口ヲ破リ我背後ヲ突キ、終ニ鹿兒島ノ官兵ニ合ス、続セテ武ノ岡等ノ諸壘陥リ鹿地持チ難ク以テ全軍ヲ帖佐ニ引ク、而シテ我隊別府川ヲ守ル、夫ヨリ固分・敷根・福山・末吉・岩川・清武・宮崎其他諸所ニ於テ奮戦猛闘スト雖トモ我軍毎戦不利、以テ美々津川ニ至リ築壘固守ス、居ル五六日、山陰街道破レ延岡ニ引、又連敗シテ永井村ニ退(長井カ)キ大ニ無鹿村ニ戦ト雖トモ亦我軍利ナク、味方猪ノ嶽ノ(可登岳之)困ヲ脱スル際途ニ迷ヒ、終ニ我軍ノ行所ヲ知ラス、夫ヨリ潜行シテ鹿兒島ニ帰ル、故ニ其後ノ景況ヲ不詳、

明治十一年六月

鹿兒島県下田上村

中村金五郎

六一 柳田源八上申書

明治十年五月八日勇義十一番小隊二編入シ、鹿兒島県下
限之城郷内向田出張本營ノ指揮ニ從ヒ接近ノ地ヲ守ル、
同六月十六日敵兵出水口ヲ襲来ルノ報ヲ得テ、即日我隊
ヲ以テ出水口ノ本道ナル阿久根ノ地ニ向ハシム、此時敵
兵已ニ高尾野ニ突入ラントスルノ際、人民大ニ狼狽逃走
シ、手足ノ措ク処ヲ知ラスト、因テ同九日我隊ヲ出シ阿
久根ノ境ニ守ラシム、同日該地ニ戦フト雖トモ雌雄ヲ決
セス、尤モ地利ノ不便ナル故ニ山下村ニ引テ固守ス、同
十一日払曉我隊ヲ出水地ニ進ム、同十三日再ヒ山下村ニ
返シ、翌十四日田代村ニ転陣ス、同十五日阿久根ノ内宇
都へ宿陣ス、此際ニアタリテ病ニ罹リ郷里ニ帰ル、治療
中八月十三日軍門ニ降ル、同二十八日鹿兒島本營ヨリ猶
亦出軍可致ノ布告ヲ得、平佐郷ノ内草原ニ出張ル折柄、
出軍ニ及サルノ向ニテ退帰ル者有ルヨリ共ニ帰郷シテ、
戸長へ我輩同列ノ名簿ヲ出シテ自首帰順ス、

明治十一年

鹿兒島県下

柳田源八

六二 竹下升一上申書

戦地景況概略

客歲西郷氏ノ事ヲ拳ルヤ、第壹大隊八番小隊ニ編入シ、
明治十年二月十五日鹿兒島県下ヲ発シ、出水街道ヲ経テ
熊本県下水俣ニ至ル、同二十一日川尻駅ニ着陣ス、翌二
十二日全軍熊本城ヲ攻ム、将勇ニ兵銳ニシテ奮闘猛戦、
其勢力殆ント天地ヲ震撼スルニ足ル、而シテ連戦数回、
已ニ城壁ニ近ツクト雖トモ堅固ニシテ彈丸如霰ナルヲ以
テ進ム能ハス、故ニ我隊ハ引テ出町ニ守囲ス、一週間ヲ
過キ山本村ノ内清水ニ転陣ス、后二三日ヲ経田原口ノ援
兵トシテ半隊ヲ出シ戦フ、同十九日該地ノ味方破レテ山
本村ニ退ク、復タ猛勇烈戦シ敵兵ヲ追退ケ植木ニ守ル、
翌日我左小隊ハ援兵トシテ三ノ峠ニ進撃ス、敵敗走、亦
タ翌日木留ノ戦ヒ急ナルニ依リ援兵ヲ乞フ、故ニ木留ニ
向ヒシガ、味方ノ壘破レニ三丁退キ防戦スルニ会シ、敵
勢ヒ猖獗ナリ、味方兵ヲ励マシ頗ル烈戦ス、敵敗散シ再
ビ旧壘ヲ取ル、於爰其左足ニ刀削ヲ負フ、川尻病院ニ至
リ療養ス、二週間ヲ過キ植木守兵ノ本隊ニ帰ル、于時四
五日^{月日}ヲ経敵數十名抜刀ニテ不意ニ我壘ヲ襲来セシニ、
中隊長松元與八郎兵ヲ励マシ猛勇接戦シ、敵數十ヲ切伏

スト雖トモ援兵来リ、終ニ支ユル能ワスシテ一二丁退キ
 防拒シテ味方横撃ス、敵亦タ散乱シ、尸数多捨テ走ルヲ
 追撃シ旧壘ニ抛ル、此時我隊死傷十二名ニ及ブ、四月十
 五日川尻ノ敗報来リ、我隊ハ引テ弓削ニ守ル、防戦ス、
 后三日ニシテ味方ノ全軍矢部ニ引揚ケベキトノ令アリ、
 我隊モ矢部ニ至ル於愛各隊編制アリ、我隊ハ振武九番中隊ト称ク、不日ニシテ馬見
 原ヲ經椎葉山ヲ越ヘテ人吉ニ至リ、鹿兒島ニ赴キ、五月
 五日黎明ヨリ旧城山鹿兒島城ヲ云ノ敵軍ヲ攻撃センコトヲ約シ、
 我隊ハ冷水ヨリ進ミシニ城壁堅固守備嚴ナルニヨリ引テ
 紙屋ノ谷ニ守ル、同六日川尻武ノ橋下流ヲ云ヨリ夜襲ヲ約シ進撃
 ス、愛ニ我隊後軍トナリ川中満汐渡ル能ハス、已ニ東白
 トナリ策ヲ失シテ小野村ニ引ク、又タ武村ノ嶮ニ抛リ數
 防戦勝利ヲ得、銃器・彈藥等ヲ捕ル、后三週間ヲ經某吉
 田真幸本宮村田新八方ニ到リ破竹一番中隊ニ転ス、二十
 余日該地ニ滞陣防禦スルニ大口方面ノ味方敗報来リ、我
 隊モ吉田ヲ引揚ケ諸々高原及ヒ都ノ城辺ニ於テ數戦ス、
 前勝後敗終ニ延岡永井村(長井カ)ニ退キ該地ニ於テ防戦ス、于時
 某敵中ニ困マレ時勢窮迫如何トモスベカザルヲ察シテ軍
 門ニ降ル、

明治十一年四月

鹿兒島県
竹下升一

六三 萩原金左衛門上申書

明治十年五月十二日我区戸長川越作左衛門ノ指揮ヲ受ケ
 十三名同列、翌十三日発足、県内隈之城ノ内向田江至ル、
 茲ニ勇義隊本營アリ、即刻二番小隊江加入サレ分隊長ト
 為リ、同所学校跡へ各隊繰廻ヲ以テ番兵ス、夫ヨリ東郷
 ノ内横座越峠江守兵スルコト五日間、其内既ニ官軍出
 水・高尾野ノ兩郷江進入アルト聞ケリ、因リテ六月十五
 日本營ノ令ヲ受ケ阿久根・野田兩郷境田代ニ転シテ守衛
 ス、同月廿日阿久根郷桑原城ノ味方引揚ルノ報知ニヨリ、
 我隊モ又東郷田海村へ引揚ケ宿陣ス、然ルニ右阿久根ノ
 守兵敗北ノ報知ニヨリ、翌廿一日高城郷ニ出張ス、於是
 官軍押寄ル、依テ直ニ竹藪ノ中江伏兵防戦スト雖モ我軍
 敗シテ平佐郷ニ引退キ、皿山ノ下川堤へ台場ヲ築キ守兵
 ス、六月廿三日向田ノ味方敗軍ノ報知ヲ得、樋脇郷ノ内
 楠元村へ退テ一泊ス、翌廿四日早朝官軍四方ニ充滿ス、
 此時味方ノ全軍悉ク退散セリ、

鹿兒島県薩摩国伊佐郡第四十
一大区小二区二百八十八番地

明治十一年三月

萩原金左衛門

六四 飛田親教上申書

肥後并米良戦況上申

明治十年二月十三日西郷隆盛工隨行、第四大隊四番小隊
工編入、同十六日鹿兒島発程、同廿二日熊本県下進入セ
シニ、味方第一番大隊先着、城外四方二兵ヲ分配シ官軍
ト相戦フ、因テ吾隊モ進撃セント城廻廻看スレトモ兵ヲ
布キ攻撃スルノ要所ナクシテ、当日ハ安政橋ノ下ニ番兵
ス、然ルニ其翌廿三日未明木ノ葉へ官軍宿陣セシトノ報
知ヲ得、速ニ木ノ葉へ進発、午前十時頃ヨリ攻撃、相戦
フコト午後三時頃ニ至リ益烈戦、日已ニ没セントスルニ
及ンテ官兵退軍景況ニ付味方鬨声ヲ揚ケ抜刀切込、官兵
散乱シ路上或ハ所々ノ斃死凡二百余名、味方ノ死傷僅ニ
十五名余ト云、其時分捕針打銃三百余挺・彈藥一万二千
発余ニテ大勝利ヲ得、夜ニ入テ植木駅工引揚ケ宿陣ス、
同廿五日午前六時頃植木ヲ発シ山鹿へ着陣、其翌廿六日
午前八時頃官兵志々木村・城原・鍋田ノ間道三方ヨリ進
来ル、因テ吾隊是ヲ防戦奮撃セント兵ヲ要所へ分配、相
戦フコト午後一時頃ニ至リ味方切込、官軍大ニ敗走ス、

路頭其他ノ死骸実ニ是ヲ容ル、所ナキカ如シ、其時ノ戦
争味方大勝利ヲ得、午後二時頃ニ至リ其場ヲ引揚ケ同所
町工宿陣ス、夫ヨリ五月五日官軍城原へ陣ヲ布キ吾隊ヲ
進撃セント同日午前八時頃進発、城原へ着スルヤ、直チ
ニ交战殆ント二時間ニ及ヘリ、不幸ニシテ余ハ茲ニ手負
シ、未タ勝敗分タサル内、其場ヲ退キ川尻病院へ入室、
数日療養イタスト雖モ平愈ノ見込ナキニ依テ五月下旬方
一先帰県ス、然ルニ六月上旬頃伊藤權平宮崎ヨリ我区志
布志へ出張、海岸防禦ノ兵ニ小隊ヲ募ル、其時一番小隊
ノ分隊長トナリ暫時志布志ヲ堅守ス、然ルニ宮崎本營ヨリ
至急繰出ヘキノ命ヲ得、同廿四日志布志発程、其翌廿五
日宮崎ニ至リ爰ニ滞陣、諸所エ番兵スルコト数日ナリ、
七月四日米良口へ官軍襲来ニ付至急彼地へ押出ベキ旨桐
野利秋ヨリ指令ス、則チ宮崎発軍、同十六日米良小川へ
着陣、官兵ノ宿陣ヲ探偵スルニ、(天包方)雨包峠工出陣ノ景況ニ
付米良本道且間道ニ至ル迄悉ク番兵シ、官軍進撃セハ一
戦試ミント吾隊勇氣満々タリ、同十八日午前七時頃官兵
小川へ進入ニ付待受ケ激戦、午後二時頃ニ至リ互ニ奮戦、
勝敗不決、日已ニ斜陽ニ及テ官軍雨包峠へ引揚、吾隊ハ
矢張小川ヲ守ル、夫ヨリ四五日経テ吾隊干城七番中隊ト

編制ス、此時左小隊長ト為ル、同廿三日午前六時頃小川ヲ発シ、官軍布陣スル処ノ雨包へ進撃勇戦スト雖モ吾隊利アラスシテ、同日午前十一時頃小川へ引揚ケタリ、然ル処官軍直チニ小川へ進撃ス、相戦フコト午後二時頃ニ至リ竟ニ吾隊敗走、越ノ尾ニ引揚ケ堅守セシ処、味方ノ全軍戦利アラスシテ延岡へ引退キ、因テ吾隊モ彼地へ引揚クヘキノ報知ヲ得、速ニ越ノ尾ヲ発シ、延岡エ引揚ントスル途中石河内村官軍へ行逢、於是ヤ弾丸乏シク故ニ戦コト不能、終ニ取囲マレ、高鍋ノ内轟村ニ於テ別働隊ニ降伏セリ、

明治十一年二月廿八日 鹿兒島県第百四大区志布志 飛田親教

六五 春田吉二上申書

戦地景況概略

明治十年三月下旬邊見十郎太ノ募リニ応シ小隊長ニ拳ラレ、三月二十七日鹿兒島ヲ発シ、四月一日熊本ニ着ス、遊撃六番小隊ト名ケラル、同四日熊本城下ニ守兵、同十四日川尻敗走ニ付守場ヲ引揚竹宮ニ退守ス、同廿日午前七時頃ヨリ官軍大拳シテ来リ戦フ、我軍不利シテ木山ニ

退ク、同廿一日木山ヲ引揚、椎葉山ヲ越へ同廿六日人吉ニ着ス、翌日本営ヨリ人吉ノ内頭地口ニ番兵ス可キヲ達ス、五月三日頃椿^{名地}ノ我軍利アラスシテ平清ニ退ク、于時我隊并熊本隊半小隊右翼ノ間道ヲ廻リ俄ニ横撃ス、官軍依之退ク、故ニ又其地ニ拒守ス、同十四日頭地口ノ味方敗走ニヨリ平清ノ我軍敵ニ囲マレンコトヲ恐レテ山ノ口ノ三口山ニ退ク、同三十日官軍来テ山ノ口ヲ襲フ、我隊等拒戦ス、余当日七時頃傷ヲ蒙リ、人吉新町病院ニ至レハ已ニ転院ノ後ナルガ故、直ニ我郷踊郷ニ帰り療養ス、爾後戦ヒノ始末ハ目撃セス、

(年月日脱) 鹿兒島県下踊郷 春田吉二

六六 山内六之丞上申書

記

明治十年三月戸長ノ達ニテ出泉郷^(出水カ)工為番兵可致出兵旨承リ、同郷ヨリ五十三名四月一日出立、遊撃九番小隊押伍工編入、上村工当日着、矢筈ノ方工番兵中半隊長被申付、然処同月十三日官軍ヨリ進撃ニ成リ終日戦争、夕暮味方敗北、^(木俣カ)貝亦エ引取、同所滞在中病ニ罹リ、出泉病院工一

週間余入院、病不致平愈候故、暇ニテ野田郷エ帰郷イタシ、其後於分署自首帰順ス、此段戦地ノ景況上申仕候也、

鹿兒島県三十六大区一小区
野田郷
山内六之丞
明治十年三月

六七 兒玉勘左衛門上申書

戦記

明治十年丑四月十日戸長ヨリ被募、同十三日兵士ニテ鹿兒島県ヲ発程シ、加治木街道江通行シ人吉ニ到リ、拾三番大隊三番小隊ニ加入シ、直ニ又溝辺・加治木辺ニ番兵ヲ張り、六月中旬比末吉郷江曳揚ケ番兵シ、又恒吉郷ニ引揚ケ番兵シ、夫ヨリ日向ノ国ニ引揚ケ、爰ニ於テ振武中隊ノ半隊長被申付、海岸ニ番兵シ、八月初比延岡敗軍ノ節永井邑^{長井カ}ニ引揚ケ台場ヲ守ル処、我軍鹿兒島ニ切り抜ル時、我隊官兵ニ被取囲、終ニ降伏仕候、以上、右、戦況ノ次第悉ク取覚不申候ニ付大略此段申上候、以上、

鹿兒島県
兒玉勘左衛門
明治十一年三月

六八 中島泰助上申書

戦地略記

客年西郷隆盛軍ヲ旋シ鹿兒島ノ官軍ヲ囲ミ、戦争ノ際旧四月廿六日戸長ノ達ニ依テ同県谷山エ出兵シ、半隊長ヲ命ゼラレ、同所海辺ニ番兵ス、日ハ失念、官軍ノ進撃ニ逢フテ敗北シ帰順ス、

鹿兒島県下第六大区
三小区五百八拾六番地
中島泰助
明治十一年三月

六九 國生直右衛門上申書

戦地景況之概略

明治十年二月某日西郷隆盛等云々ノ事件 政府へ尋問ノ為上京ノ際、四番大隊二番小隊山口孝右衛門隊兵士ニ編入セラレ、同十六日鹿兒島ヲ発シ、途大口ヲ經テ水俣ヲ過キ、同廿二日熊本城攻戦、即日植木ニ抵リ、斥候長ヲ命セラレ、山鹿ニ進戦、該地岩村・鍋田等ニ戦戦、三月廿一日山鹿ノ総軍鳥巢ニ退軍、爾後屢々戦争ニ及ヒ、遂ニ川尻敗レテ鳥巢口大津ニ転軍、該地ニ於テ斥候隊ノ半隊長トナリ両三度闘戦、総軍矢部ニ引揚ケ、胡麻山ヲ經江代ニ抵リ、軍議決シテ奇兵廿一番中隊トナリ、日州富

高新町ニ抵リ延岡ヲ經過シ竹田ニ進軍、我隊及ヒ報国隊一小隊ヲ以テ八幡山ニ防戦數回、苦戦ニ及ヒ、竹田總敗軍ノ際、重岡ニ引揚ケ又三重市ヘ進撃、続テ臼杵ニ突入、該地ノ戦不利ニシテ切畑ヘ退ク、爾後病患ニ罹リ、延岡病院ニ於テ二週間余療養、佐土原本病院ヘ移サレ大患者ハ帰県、治療ヲ可相加旨達セラレ帰県ス、故ニ以降ノ戦状ヲ不詳、

明治十一年五月

鹿兒島県

國生直右衛門

七〇 竹ノ内善次上申書

明治十年丑旧三月三日戸長ヨリ命ヲ受ケ同日加治木郷ヘ発足、吉田郷ヲ經テ旧同十二日熊本県下人吉ニ到リ、第拾三番大隊三番小队押伍ヘ編入セラレ、須臾ニシテ鹿兒島県下加治木郷ヘ出兵可致達ニ依リ当所発足、加治木ニ到リ海岸ニ防禦ス、此時振武拾壹番中隊ト編制シ、同旧五月廿日頃令ヲ受末吉ニ引揚、此ニ哨兵スルコト三日間、又恒吉ニ移リ、此ニ哨兵スルコト四日間、旧六月初頃達ニ依リ日州延岡ニ引揚、同十三日当所ニ於テ同隊ノ左小队長申付ラレ、同十四日古家ニ到リ海岸ニ防禦ス、同旧

七月初頃延岡敗軍ノ報知依リ永井邑^(長井カ)ヘ引揚、防守スルトモ官軍四面數重取囲マレ、同十日可愛嶽ノ官軍ヲ打破リ岩戸ヘ突出、後軍トナリ官軍襲來戦フ、夜入引揚ノ令ヲ受ケ、夫ヨリ三田井口七ツ山諸所ヲ經テ同旧廿二日吉田郷ニ突出、官軍ト戦フ、此時官軍ニ取囲マレ、終ニ帰郷降伏ス也、

明治十一年寅五月

鹿兒島県下重富郷第五拾壹大区
小一区九拾番地

竹ノ内善次

七一 菱刈良之助上申書

明治十年二月十五日陸軍大将西郷隆盛上京ニ付、砲隊小頭ニ而隨行、同廿二日熊本城開戦相及城内迄追込、不致落城候ニ付三十日程城カリ相堅メ居候処、官軍鹿兒島江進入ニ付右熊本ヲ引揚鹿兒島江着ス、六月下旬敗軍ニ及ヒ、終ニ延岡江退軍、八月十五日永井村決戦之時致手負、^(長井カ)同所病院ニ而降伏仕り候、此段御届申上候也、

十一年四月

菱刈良之助

七二 桐原彌一郎上申書

明治十年旧三月廿三日勇義九小队ニ編入シ、鹿兒島県下

向田本營ノ指揮ニ從ヒ接近ノ地ヲ守ル、旧五月三日敵兵出水口ヲ襲ヒ來ルノ報アルニ因リ、即日我隊ヲ以テ阿久根ノ地ニ向ハシム、七日敵兵突入シ桑原城ニ戰フ、我軍敗レテ波留村ニ走ル、翌八日大斥候ト成テ高尾野ニ向テ発ス、九日高尾野ノ本道野田ニシテ敵ニ遇フ、直チニ撃テ利アラス、阿久根ニ走ル、此時病作り我郷里ニ帰ル、旧八月十五日帰順ス、

明治十一年六月

鹿兒島第三十四大区高城郷
桐原彌一郎

七三 山元鉄二上申書

明治十年五月六日向田ニ於テ勇義九番小隊長ニ撰ハレ、六月十三日阿久根ニ至ル、桑原ノ城ニ守兵ス、同十七日敵來ツテ頻リニ銃砲ヲ発ス、我軍迎撃テ利アラス、波留村ニ走ル、翌十八日復タ桑原ノ城ニ至ル、敵一人モ見エス、故ニ夫ヨリ斥候トシテ高尾野ニ向テ発ス、同十九日野田ノ途ニ敵ニ遇ヒ直チニ戰フ、敗走シテ又桑原ノ城ニ返戦ストイヘトモ遂ニ破レテ向田ニ走ル、敵追撃シテ大川路ニ來ル、我軍遽カニ川内川ノ橋ヲ燒落シテ向田ヲ守ル、我隊巢山ヲ守ル、同廿二日敵軍四面ヨリ來テ向

田ヲ攻ム、我軍大ニ敗レテ散乱ス、余ハ之ヨリ家ニ帰レリ、故ニ爾後ノ戦状ヲ不詳、

明治十一年六月

鹿兒島第三十四大区
山元鉄二

七四 中馬甚七上申書

戦記概略

明治十年丑四月十三日鹿兒島発足、同十七日宮崎本營へ着、即チ佐土原金札製造掛被命混ト關係致居候処、日々官軍迫來、八月十二日同所引退キ^(延岡方)延岳ノ内於大武降伏仕候ニ付戦地不詳、此段申上候也、

明治十一年寅六月

鹿兒島第一大区一小区
中馬甚七

七五 原田勤次郎上申書

戦地景況概略

明治十年二月十七日西郷隆盛等政府へ尋問ノ趣キ有之、上京ニ付随行ニ加リ、第五番大隊八番小隊長石橋清八郎隊ニ編入シ、鹿兒島県下ヲ発程シ、西目街道ヲ通行シ同廿一日熊本県松橋ニ着ス、爰ニ於テ我カ前備工砲声スト

聞ク、依テ明日暁天ヨリ熊本城江攻撃ス、是ヨリ植木街道經テ高瀬・稻サ・木ノ葉・田原・竹宮(健軍力)ノ各所ニ戦ヒ、

終ニ四月下旬頃矢部江引揚ケ、爰ニ各隊変革アリ、余ハ干城六番隊ニ編入シ、奈須山ヲ越テ人吉ニ出、同廿九日鹿兒島県牛山郷工攻撃シ、山野ノ官軍ヲ撃破シ、久木野上ノ場ニ転戦シ再ヒ牛山ノ戦ヒ利アラスシテ曾木ヲ守ル、爰ニモ屢防戦シ彈藥乏キ故不利ニシテ、横川・踊ヲ經テ豊山郷ノ内王子ノ茶屋ニ激戦ニ昼夜ニ及ヒ、五月廿五日上庄内高野へ繰引ス、爰ニテ干城一番ト合併シ干城一番ト改ム、荒曾へ進撃致シ再ヒ高野ヲ守ル、數日ニシテ財部ニ出戦ヒ破レテ都ノ城ニ退キ、山ノ口ヲ經テ宮崎ノ内ガクノ木・清武ノ両所ニ防戦シ、終ニ宮崎川ヲ守ル、又爰ニテ隊号ヲ改メ雷撃一番ト号ス、數日ニシテ山手ノ味方守ヲ失ヒ佐土原ニ繰引キ佐土原川ヲ守ル処、又山手ノ方不都合ヲ生シ美々津川ニ防禦スル処、山陰ノ方面破レ官軍背後ニ出ル、依テ門川ニ引キ全軍合スルコト不能、山野ヲ潜行シ鹿兒島ニ歸リ、十月初旬軍門ニ降ル、

明治十一年六月

鹿兒島県下

原田勳次郎

七六 岩崎幸左衛門上申書

私儀、去年旧正月西郷隆盛ノ上京ノ節、即チ正月元日鹿兒島江集合、一番大隊八番小隊々長谷元良助隊江編入兵士ニテ隨行、同三日出發西目筋通行、同九日熊本県下川尻へ着、即夜八時繰出シ、十日城攻戦争之節城涯ニテ銃創ヲ受ケ、川尻ニ番病院江送ラレ、次テ廿六日歸県、二月十二日我家へ着致シ、五月廿八日歸順願出自宅謹慎ノ処、六月五日放免セラル、然ル処再度西郷党城山工切出テ候節、其翌日戸長所ヨリ呼出、又候出兵致候様達承候ニ付未タ銃瘡平愈不致迎茂出兵出来カタキ段断候得共、永谷卯一ヨリ出兵不致者ハ敵同様切捨可申敵數申聞ケ、何分明日当谷山郷ノ内中村ニ於テ処分可致候間、左様可相心得トノ事ニ付即チ差越シ、同所ニテ同様断申述、即チ歸宅致シ罷在候、後五六日有テ警視分署ヨリ御呼出相成候、依テ其余戦地ノ形景詳細ハ存知不仕、此段上申仕候也、

明治十一年第六月

鹿兒島県合山郷

岩崎幸左衛門

七七 満木清雄上申書

明治十年二月西郷隆盛上京云云ニ付テハ傍觀スルニ忍ス、
數輩議ヲ決シテ鹿兒島ニ赴キ隨行ヲ乞フ、時ニ県令大山
綱良之レヲ鹿兒島ニ止ム、累日ニシテ熊本江進發ノコト
ヲ命セリ、由是兵士貳百三拾余名仮リニ隊伍ヲ組ンテ二
月八日郷里ヲ發シ、同十二日熊本春日山ノ本營ニ達シ、
於是遊撃一・二番ト隊号ヲ定メ、余ハ一番小隊給養トナ
リ、其夜安政橋江守兵ス、時ニ官兵小川口ヨリ進入ニ付
応援スヘキノ令ヲ受、同廿日兩隊共ニ小川江繰出ス、此
日海東村江進撃、大ニ勝利ヲ得テ官ノ陣營ヲ攻取ル、夕
ニ及ンテ兵ヲ揚ケ近村江守兵ス、同廿七日八代口ノ官軍
小川口ヲ襲フ、終小川本道ヨリ味方敗レテ我隊モ松橋ニ
引揚、即日山手一ツ橋村ニ至リ守ル、同廿九日官軍松橋
全面ニ攻撃ス、此日萩野尾方面激戰ニ付我半隊ヲ出シ横
ヲ突ク、官兵散乱シテ小川ニ退ク、同三十日官兵我守兵
ヲ襲フ、勝敗決セス、相引ニシテ兵ヲ揚ル、四月一日官
兵亦忽掛リス、時ニ松橋本道破レテ至急引揚ノ報アリ、
川尻ニ兵ヲ揚ケ其夜宇都官兵ヲ襲トイヘトモ利アラス、
兵ヲ揚テ川尻大橋口江守兵ス、四月五日同所ヲ軋シテ御
船ニ至ル、同十日同所ヲ發シテ木山病院ニ至リ、是ニ入

室セシ重創ヲ護送シ我郷里ニ帰り、仮リニ病室ヲ設ケテ
之ヲ療治セシメ尚帰陣ノ途中ニ聞ク、味方悉ク人吉ニ向
フテ兵ヲ揚ケシト、依テ江代村ニ至ル、於是桐野利秋令
シテ日、日州宮崎江出張シテ病院ノ要品其他數品買入送
ルヘシト、則發シテ宮崎ニ至ル、無程桐野モ同所ヘ軋營
シテ募兵ヲナシ蟠龍隊・宮崎隊ト号、是ヲ豊後及ヒ三田
井ノ両口ニ差向ケ、余ハ之レガ給養惣差引トナツテ出軍
スヘキノ令ヲ受ケ、該地ヲ發シ延丘^(延岡カ)ニ至リ凡六七十日間
滯陣シ、両口ノ本營池上四郎 東胤正等指揮ヲ受ケ兵糧・
彈藥ノ手配ヲナシ、且彈藥製造等ノコトヲ担当セリ、時
ニ宮崎方面味方敗ル、ニ兵糧等ヲ同所川島村ニ送リ貯蓄
ノ際、八月十四日延丘口味方敗走シテ悉ク川島村ヨリ永^(長)
井村江退ク、四方官兵ニ圍レ進退愛ニ迫ル、八月十七日
我軍鷄鳴ノ比鹿川口・江ノ嶽台場ノ官兵ニ進撃シ、大ニ
勝利ヲ得テ銃器並彈藥其他分捕多シ、其夜ハ山中江一泊
シテ同十九日祝子川村ニ至ル、途中ニ於テ台場ニケ所ヲ
乘取り勝利ナレ共兵糧ニ苦ミ、牛數頭ヲ買フテ兵喰ニ用
ヒ、晝夜ヲ厭ハス岩戸村ニ至リ、同廿一日三田井口ニ突
出ル、同所官兵守兵ノ処、忽子追退ケ雉子野村ニ突出、
此兩村ニテ兵糧・銃器・彈藥等分捕多シ、夫レヨリ七ツ^(鬼神野カ)

山米良路ヲ經テ覺巢下小村郷ニ至ル、於是夫卒壹名銃創ヲ負フテ田畝ニ伏シ居ルト土人之レヲ報ス、即駕籠ニ乗セテ之ヲ呼ヒ尋問スルニ、福岡産ニシテ官ノ夫卒二履ハレ小林ニ滞留セシニ、薩兵突入ノ際銃創ヲ受ケ進退自由ナラスト、依テ金五円ヲ与ヘテ之レヲ戸長ニ托シ厚ク療治セシメ横川郷ニ至ル、同所ニテハ終日砲声止事ナシ、

此日台場三四ヶ所乗取レトモ本道・台場守リ嚴ナレハ勝敗決セス、味方夜ニ乗シテ間道ヲ經蒲生郷ニ出ツ、於是西郷・桐野ヨリ令シテ曰、先ツ覺ニ突入シ官兵追退ケタル后蒲生ニ兵ヲ揚ルノ議ニ決シ、既ニ発スト、依テ籠城ノ用意手配ヲナセト拾四名余モ之レニ加ル、然ルニ此ノ旧城タルヤ薪水ニ便ナラス、殊ニ兵員數少ニシテ急ニ籠城ナリカタケレハ、其旨ヲ述ント跡ヲ追フテ鹿兒島ニ赴ク、途中余ハ痛所アリ、後レ立ニシテ久末村ニ至ルニ、土人昨日戦跡へ手負一人忍居ルヲ見当リ、介抱シテ味方ノ本營ヲ尋テ護送スルニ会シ、尋問スレハ、生国仙台人鎮台兵昨夕ノ戦ニ深手ヲ負ヒ進退ニ迫リ其儘忍居タル旨ヲ述フ、即チ旅用トシテ金五円ヲ与ヘ村役ヲシテ戸長方ヘ送り、療治ノコトヲ托シ置キ直ニ発シ、吉野村^(花棚カ)華棚ニテ官兵二道ヲ遮ラレ間道ヲ經テ伊敷村ニ至リ、九月一日

鹿兒島ニ出テ味方ニ会ス、同三日韃靼冬々口味方破レテ悉ク鹿兒島城中ニ籠ル、九月廿四日鷄鳴ニ及シテ官軍惣進撃シテ大ニ苦戦、進退爰ニ迫リテ軍門ニ降ル、

明治十一年三月

鹿兒島県都城

満木清雄

七八 志水元善上申書

戦地景状

明治十年五月十三日薩ノ先鋒我竹田二着、即チ大ニ募兵ノ令ヲ出ス、於是余中川濤太郎其他有志五十余人ト往テ之ニ応ス、乃チ部伍ヲ編制シテ一小隊トナシ中川ヲ以隊長トナシ、余該隊分隊長ニ挙ラレ、同廿四日拜田原ニ於テ戦争、互ニ勝敗アリ、翌廿六日我軍遂ニ敗績シ山手ニ引揚ケ茶屋辻ニ番兵ス、是日我隊戦死六人アリ、居ルコト二日、転シテ竹田城辺ヲ拒守ス、同廿九日古城敗レ拳軍宇目小野市村ニ引揚ケ守兵ヲ置キ、転白杵へ進軍、我隊葛葉ニ守兵ス、其後從テ転シ錢笛嶺ヲ守ル、鎌攘四番絶頂ヲ守リ、我隊奇兵六番ト半腹以下透進築壘之ヲ守ル、七月一日官軍銳ヲ悉シ来リ攻ム、鎌攘隊ノ守壘殆ト破レントス、偶々奇兵八番隊来リ援ヒ其背ヲ衝クニ会フ、

官兵顧ミ潰ユ、我隊奇兵四番ト勢ニ乗シ大呼馳下夾撃ツテ大ニ之ヲ破ル、是日我隊即死一人・被創六人アリ、其後数々転守シ、終永井村ニ抵リ、八月十七日帰順ス、

帰順仕候、
(年月日脱)

鹿兒島県
洲邊與市

明治十一年六月

大分県
志水元善

八〇 池田十郎上申書

戦地景況

七九 洲邊與市上申書

戦記

先般西郷隆盛等其他政政^(政府方)へ尋問ノ為上京スルニ随從シ、

明治十年三月三日発程シ、諸駅ヲ經テ同五日宮崎駅へ到着ス、コ、ニ於テ隊伍ヲ定ム、我一番小隊兵卒ニ加入シ、小隊長能勢十九郎指揮ニ從ヒ、同六日該地発軍シテ飯野郷ニ至ル、同七日当地出發シテ高岡郷ニ至ル、同八日加久藤郷ニ至ル、同九日該地出發シテ人吉ニ到ル、同十日熊本県八代ニ至ル、コ、ニ於テ憩居ス、不覚日、同県出町ニ至ル、コ、ニ於テ守兵ス、三月十五日田原ニ繰出シ

明治十年三月卅日我高江郷ヲ発シ大口ニ至リ、九番大隊八番小隊谷村助七隊ニ編入セラレ、人吉ニ至テ妙見山ヲ進撃シ馳テ八代ニ進入、該地ニ於テ屢劇戦ス、四月十四日該地ノ戦ニ負傷、直二人吉病院ニ送ラレ、後帰宅療養ス可キ旨達セラレ帰郷、既ニ官軍進入、之アルニヨリ帰順シタルノ所、九月一日隆盛等日州永井村ノ重困ヲ脱シ鹿兒島へ再来ノ際其指揮ニ応シ、巡查捕縛ノ為馳セ向ヒシニ城山落城ノ後再度帰順ス、

明治十一年六月

鹿兒島県下高江郷
池田十郎

我隊正面ニ進撃ス、大ニ戦ヒ日西山ニ入ニ味方敗走ス、

八一 安藤源之丞上申書

予力隊モ該地ヲ避テ数町ヲ退キ守兵ス、我平病ニシテ即日川尻エ送ラル、入院ス、同五月帰県シテ療養ス、同九月一日隆盛襲来ノ際再ヒ出軍ス、終落城シテ軍門ニ降ル、

先般西郷隆盛等政府エ尋問ノ儀ニ付、上京ノ際ニ当リ数千人随行ヲ乞フ、之レヲ許ス、依テ余ハ第三大隊四番小队ニ編入シ、山下喜衛小隊長タリ、于時明治十年二月十

六日鹿兒島県下ヲ発程シ、西目街道ヲ経同二十一日熊本
 県下宮ノ原ニ着陣ス、此ニ於テ我先鋒既ニ台兵ト事アル
 ヲ聞ク、且台兵城下ヲ火シ烟煙天ニ漲ルヲ見ル、此夜同
 所市街ヲ守衛ス、頓テ山下喜衛部下ニ令シテ曰、台兵我
 先鋒隊ノ行路ニ擁シ暴ニ発銃ス、我兵不得止開戦ニ及ヒ
 撃テ之レヲ走ラス、台兵退テ城ニ抛リ籠城ノ準備ヲナス、
 依テ先鋒大隊ヲ以テ黎明ヨリ攻撃セントノ報アル故ニ、
 我隊モ之ニ応スヘシト、同廿二日黎明同所ヲ発シ行軍里
 余ニシテ砲声夥シク聞ユ、是ヨリ城下ヲ指テ駆ル甚タ急
 ナリ、午後三時頃安政橋ヲ渡リ実地ノ景況ヲ検スルニ、
 諸隊既ニ城壁ニ逼ル、時ニ山下部下ヲ指揮シテ大手門ニ
 逼ル、城兵頻リニ防禦ス、互ニ狙撃、勝敗未決ス、薄暮
 ニ兵ヲ安政橋ノ河堤ニ移シ哨兵ヲ出シテ守囲ス、同廿三
 日城兵突出ス、我兵之ヲ拒ク、時ニ蒲生彦四郎一小隊ヲ
 率ヒ来援ス、戦ヒ数刻ニシテ城兵火ヲ放ツテ去ル、半隊
 長川寄兵十郎重創ヲ負ヒ之ニ死ス、外ニ兵士一名負傷ス、
 同廿四日我四番小隊・酒匂軍助隊及ヒ長寄直五郎隊ト三
 小隊ヲ以テ段山口ヨリ八幡山ヲ夜襲スヘキ令ヲ受ケ、午
 後八時頃安政橋ヲ発シ花岡山ニ至ル、途ニ本営ヨリ報知
 来リ曰、城内糧乏シキニ依リ夜襲ヲ止メ段山口ノ守兵ニ

代ルヘシト、依テ三小隊共ニ同所ニ赴キ代テ固守ス、同
 三月九日夜同所ヲ交代シ向町ニ至リ、田原口ニ出張ヲ本
 営ニ乞テ、同十日黎明同所ヲ発シ植木町ニ至ル、此ニ於
 テ山下・酒匂・長寄等木留本営ニ至リ田原方面ノ敵ニ当
 ラント、村田ニ乞フテ更ニ軍議ヲ設ク、村田是レ余望ム
 所也ト大ニ喜ヒ策ヲ述フ、我軍ヲ二手ニ分チ、一軍ハ木
 葉ヲ攻撃シ、一軍ハ那智山ノ敵ヲ撃下シ、田原口ノ横ヲ
 衝カハ敵兵必ス動揺セン、此機ニ乘シ田原口ノ守兵ヲ以
 テ短兵急ニ衝突シ木葉ヲ取り、然後高瀬ニ及ント決議シ、
 同十一日三小隊木留村ニ至リ、三官及ヒ押伍ハ村田ニ隨
 行シ吉次山及ヒ那智山等進撃ノ地形ヲ検ス、暮ニ木留ニ
 到ル、同十二日黎明我四番小隊及ヒ酒匂軍助隊ノ二小隊
 ハ吉次峠ヲ越ヘ木葉ニ近クニ、敵早我軍ノ来ルヲ覺リ要
 地ニ抛リ谷ヲ隔テ雨射ス、我兵憤戦スト雖トモ敵要害ニ
 抛ルヲ以テ終ニ渡ル能ハス、時ニ各所ノ味方不利、暮ニ
 及ンテ全軍ヲ木留ニ引揚ク、此日我隊兵士四名負傷ス、
 同十三日田原口出張ノ令ヲ受ケ、午前七時頃同所ヲ発シ、
 田原坂ノ左翼轟村ノ守兵松木亀五郎隊ト交代シ之ヲ守ル、
 同十四日官軍田原坂ノ正面ヲ侵ス、守兵敗レテ数丁ヲ退
 ク、山下之ヲ見テ我軍利ナキヲ謀リ、即チ部下ヲ勵シテ

日、今日事窮リ、依テ衆憤戰敵ヲ撃チ銃器・彈藥捨タルヲ拾ハス、各切捕ニ取リ此敗ヲ贖ハント、自ラ左半隊ヲ率ヒ至リ援フ、此ニ於テ正面ノ守兵長寄直五郎隊ノ左翼ヨリ斜ニ突入、官軍散々ニ敗走ス、我兵逃ルヲ追テ忽チ三塁ヲ取り斬首五六十ヲ得、銃器・彈藥之二準ス、小隊長山下喜衛・押伍折田常政・貴鳥順助・兎玉正三・柴義光等之二死ス、外ニ死傷十八名ニ及フ、戰數刻ニシテ旧壘ニ引揚ク、是ヨリ正面ノ応援トシテ交々一分隊宛ヲ出サシム、其後官軍來襲スル連日、悉ク撃テ之ヲ退ク、死傷相当、昼夜砲声止マス、兩軍ノ距離三四十歩ニ至ル、此ニ於テ余分隊長トナル、同十九日大雨曉露ニ乘シ官軍又大拳シテ來侵ス、甚タ急ナリ、田原坂ノ守兵支ル能ハス、潰走ス、我隊憤戰横撃スト雖トモ利アラス、終ニ引テ木留本營ニ至リ、村田ニ状ヲ告ク、村田即時ニ令シテ日、敵ニ已ニ向坂ニ達シ能勢彌九郎隊之ヲ支ユ、速ニ半隊ヲ植木ニ出シ横撃シ、又半隊ヲ円臺寺村ニ出シ敵ヲ拒クヘシト、直ニ左半隊ヲ植木ニ繰出シ、半隊長相良膳太輔ト右半隊ヲ率ヒテ円臺寺村ニ至ルニ、程ナク那智山ノ守兵敗走ス、官軍尾撃シテ來ル、我半隊ト一手ニ成テ之ヲ拒ク、暮ニ及ンテ官兵村落ニ火ヲ放チ退テ那智山ノ麓

ニ陣ス、此時左小隊ハ植木ニ出テ横ヨリ抜刀ニテ切込ミ大勝利ヲ得、敵ノ死骸二百余名、銃器・彈藥無數、我總軍植木町迄押返シ守リヲ布キ、又押伍永田敬助・日高堅介外ニ兵士二名負傷セリトノ報アリ、同廿日我右半隊人吉隊ト円臺寺ヲ代リ植木ニ至リ、左半隊ト合シ植木町ノ右翼ヲ守ル、此時能勢彌九郎隊植木ノ本道、其次ヲ黒江八左衛門隊、其次ヲ我四番小隊、其次ヲ山口十藏半隊、其次藤井直二郎隊ト順次ニ守線ヲナス、是ヨリ鳥ノ巢ニ続キタリ、同廿五日我總軍進撃ス、敵壘固シテ拔ス、引テ旧壘ヲ守ル、此時半隊長相良膳太輔・押伍野間清兵衛戰死ス、同廿六日官軍我壘ニ逼ル、我兵憤戰シテ之拒ク、官軍我壘前十四五歩ノ地ニ闖ク、我兵精射シ數十名ヲ斃ス、夜ニ及ンテ官軍終ニ壘ヲ築ク、兩軍ノ距離十五歩或ハ二三十歩ニ至ル、互ニ唾罵シ或ハ木石ヲ擲チ狙撃ノ連戰昼夜砲声止ス、此ノ如ク三旬ヲ経ル、此ニ於テ小隊ヲ編制シ中隊トナシ、余右小隊長トナル、爾後右半隊長凶師新介等戰死ス、四月十四日官軍川尻口ヲ襲ヒ、我軍大ニ敗走シ、官軍既ニ熊本城ニ達ス、我軍城圍ヲ解ク報アリ、總軍ヲ永峯ニ引揚ヘキ令アリ、同十五日兵ヲ揚ケ暮ニ永峯ニ至ル、同十六日保田窪ニ出張シ壘ヲ築テ守兵ス、

此時北郷久成保田窪ノ本道ヲ守ル、是ヨリ右翼竹原半兵衛、其次ヲ黒江八左衛門順次ヲ經テ永峯ニ至ル、左翼ハ岩切喜次郎、其次ヲ我四番中隊是ヨリ竹宮口(離軍力)ニ続ク、同廿日黎明官軍大拳シテ来リ保田窪ヨリ竹宮口ヲ侵ス、終ニ竹宮口ノ守兵破レテ我壘ノ横ニ出テ疾ク攻ム、我隊憤戦ス、然シテ官軍我背後ニ廻リ三面ヨリ攻撃ス、我兵死傷多シ、依テ支ル能ハス、十余丁引退クニ永峯・金平等兵ヲ率ヒ来リ援フニ会フ、我兵勢ヲ得テ又衆ヲ励シ、撤兵ヲ配布シ拔刀ニテ四方ヨリ切込ミシカ、官軍散々ニ敗走ス、我軍進ンテ右翼ハ旧壘ヲ越ヘ尾関ノ渡シヲ絶ツ、官軍狼狽逃ルニ路ナシ、我軍悉ク之ヲ斬ル、左翼ハ保田窪ノ旧壘ヲ悉ク復ス、斬首百余級ヲ得、又長四斤砲二門・小銃百余挺・彈藥及ヒ諸品無數、我兵氣益振フ、此時左小隊長内之倉喜兵衛・左分隊長菊池藤七戦死、外ニ死傷二十余名ニ及フ、此夜御船口ノ敗報来ル、依テ全軍ヲ木山ニ引揚ヘキ令アリ、即夜木山ニ赴ク、同廿一日總軍矢部二引テ配兵ス、我隊總軍ノ応援トナリ滞陣スル兩三日、爰ニ於テ各大隊ヲ編制シ田原口出張ノ兵ヲ以テ振武隊ト号ス、我隊北郷久成隊ト合併シテ振武三番中隊トナル、北郷久成中隊長タリ、吉井為一右小隊長・余左小隊長タ

リ、同廿三日馬見原ニ引揚宿陣ス、同廿四日胡馬山(胡麻山)ヲ越ヘ人吉ニ至ル、三日ヲ經テ岩野ニ至ル、同廿八日振武大隊ハ人吉ニ来ルヘキ急報アリ、依テ夜中ニ発シ明曉人吉ニ達ス、此ニ於テ中島健彦・貴島清西郷ノ本營ニ至リ、振武一大隊・奇兵一番中隊ヲ率ヒ鹿兒島ニ発向セシコト乞ヒ、許ヲ得テ同廿三日鹿兒島ニ発向ス、本日午後三時頃中島等振武一大隊ニ將トシテ人吉ヲ発シ小畑ニ至リ宿陣ス、同卅日同所ヲ発シ真崎(真幸力)吉田ニ至リ宿陣、五月一日同所ヲ發シ横川ニ至リ宿陣ス、時ニ全軍會議、振武十一番中隊ハ地形ニ精ナルヲ以テ加治木ヲ守ルヘシト、余隊ハ山田ノ間道ヨリ蒲生ヲ經鹿兒島ヲ突ント決議シテ、直ニ同所ヲ發シ蒲生ニ至リ宿陣ス、同三日全軍同所ヲ發シ吉田郷本名村ニ至リ再び會議、同所ヨリ川上村又下田村及ヒ坂元村ノ間道ヲ經伊敷村玉里邸前ニ至リ、岩崎城山ノ背ヨリ黎明攻撃セント、又我三番中隊及武強兵衛隊ハ高麗橋・武橋ノ両橋ヲ渡リ、松原神社屯集ノ官軍及ヒ下町ニ在ル本營或ハ輜重ヲ衝キ、見玉矢八郎隊ハ新上橋ヨリ平ノ馬場ヲ衝キ、梶元ヲ破リ我隊ト合シ城山ノ落手兵ヲ擊、能勢弥九郎隊・奇兵一番山野田(新照院)ハ新正院谷ヨリ城山掛リ、松元与八郎隊ハ城ヶ谷口ヨリ、園田武一

隊ハ冷水谷ヨリ城山掛り、余隊ハ惣軍ノ応援トシテ玉江橋二陣シ、仮二本営ヲ定メ四方ノ報ヲ待ント決議シ、午後十時本名村ヲ発シ下田村ニ至ル処、天俄ニ大雨シ夜色暗黒咫尺ヲ不弁、漸ク黎明玉里邸前ニ達ス、全軍未来ラス、僅ニ奇兵一番中隊伊集院英輔隊大斥候トシ先ニ来ル、頓テ武強兵衛隊来ル、直ニ我隊及ヒ武隊ハ攻口遠道ナルヲ以テ先ニ進ニコトヲ伊集院等ニ伝へ、高麗橋ニ至リ城山ノ變ヲ待ツ、天明ルニ及ンテ城山静謐ナリ、午後八時頃ニ至本営ヨリ令ヲ報シ来リ曰、各隊列着ノ期ニ後レ攻撃ノ機ヲ失フニ依リ速ニ兵ヲ伊敷村ニ引揚ヘシト、此ニ於テ北郷久成・武強兵衛等各部下ニ向テ議シテ曰、今朝ノ機ヲ失ヒ白昼ニ掛ルト、又明曉ヲ待ツテ果スニ執カ、余等答曰、白昼ト雖トモ官軍未タ我軍ノ来ルヲ知ラサルカ故ニ備ヘ全ラス、毎ニ我兵勢ヒ猖獗、此機ニ乘シ宜シク兵ヲ用ヒ空ヲ衝クニ如ス、北郷等之ヲ然トシ此議ヲ中島等ニ問ハント直ニ起テ本営ニ至ル、午後二時ニ又北郷等ノ使又来リ、今日ノ議決セサルニ依テ速ニ兵ヲ引揚クヘシト、二中隊共ニ伊敷村梅ヶ淵ニ引揚ケ、明曉ヲ以テ前議ヲ果サント決ス、同五日黎明又発シテ武村ニ至ルニ、官軍城山及ヒ新上橋ノ河堤ヨリ発射ス、我兵通過シテ高

麗橋ニ至リ、二中隊ヲ二手ニ分チ、一ツハ吉井為一右小隊ヲ率ヒテ橋上ヲ衝キ、武隊ノ左小隊之ニ援タリ、一ツハ余左小隊ヲ率ヒテ肥田某屋敷外ヨリ川ヲ渡ント武隊ノ右小隊ヲ応援トシ、既ニ河堤ニ至ルニ、官軍河中ニ柵ヲ植ヘ壘ヲ固シ我軍ノ来ルヲ覺リ忽チ兵ヲ戒メ発銃ノ要意ヲナス、我兵渡ル能ハス、暫ク間ヲ伺フ、然ルニ北郷来リ、橋上ノ敵壘嚴ニシテ渡ルコト能ハサルニ依リ兵ヲ潛メ城山ノ變ヲ待チ、味方山ノ頂上ニ登ルヲ見ハ直ニ死闘シテ渡ラント言、依テ兵ヲ家屋ノ傍ニ伏ス、時ニ城山ノ砲声恰モ雷ノ如シ、午前九時頃ニ至リ俄ニ砲声静マリ動靜詳カナラス、依テ斥候ヲ本営及ヒ城山ニ駆ラス、午後四時頃ニ及ンテ斥候帰来リ、城山各地ノ攻口官軍壘ヲ高シ柵ヲ結ヒ、我軍憤戦スト雖トモ志ヲ得ス、依テ全軍ヲ伊敷村ニ引揚ク可キ令アリ、即チ兵ヲ揚ケ伊敷村ニ至リ守兵ス、本日戦ヒ始ルヤ、官兵城外ニ放火シ火炎天ヲ焦シ烟煙地ヲ覆ヒ、燃ルコト三晝夜ニ及フ、同六日各隊玉江橋ニ会シ川尻進撃ノ議ヲ決ス、爰ニ於テ町田萬新兵一小隊ヲ率ヒ来援ス、此夜同所ヲ発シ、原良村及ヒ西田村ヲ經天神ヶ瀬戸ヨリ田上村・荒田村・天保山塩浜ニ至ル、先鋒隊進ンテ川ヲ渡リ壘壁ノ柵ヲ抜ントスル時、官軍悉

ク兵ヲ戒メ齊シク彈丸雨注ス、我兵河中ニ斃ル者数十名、後軍之ヲ援ントスルニ水深シテ渡ル能ハス、我軍発銃ヲ止メ河堤ニ伏セ官兵ノ動静ヲ伺フ、時ニ北郷久成・武強兵衛・園田武一等議シテ曰、尺寸ノ地ニ大兵ヲ集メ今渡ルニ利アラス、三中隊ヲ以テ軋シテ武ノ橋ニ突入セント、直ニ率ヒ武橋ニ至ルニ、官兵ノ壘壁益嚴ニシ頻発射ス、故ニ退テ八幡社前ニ至ルニ、中島来リ、兵ヲ伊敷村ニ引揚ヘキヲ令ス、黎明ニ及ンテ全軍伊敷村ニ至リ配兵ス、我隊矢上ケ城ヲ守ル、同八日又軋シテ玉龍山床安ノ峯ヨリ内ノ丸本道ヲ中央ニシ、右ハ龍之尾ノ嶮ニ抛リ各所壘ヲ築テ守兵ス、児玉矢八郎隊・武強兵衛隊ハ上ノ原丸山・園田武一隊ハ冷水山上、藤井直次郎隊ハ冷水本道、行進砲隊ハ内瀬山上、伊集院英輔隊同山下、毛利權兵隊・市来矢之助隊・仁禮孝右衛門隊ハ玉江橋近辺ヨリ原良村、奇兵一番山野田一輔ハ同所尾畔山ヨリ西田村、黒江八左衛門隊・松元與八郎隊田上村ニ各築壘守兵ス、是ヨリ數日軍無シ、時ニ中島等各郷ニ令ヲ伝ヘ兵ヲ募ル、応スル者殆ント十五中隊、之ヲ新振武隊ト号ス、加之上町商人一小隊来応ス、之ヲ振武付屬隊ト云、同十日過キ水俣ヨリ川路大警視ノ書状ヲ鹿兒島出張ノ川村参軍ニ達セント

欲シ、誤テ我本營ニ来ル、其意速ニ大軍ヲ発シ鹿兒島ト人吉トノ中腹ヲ衝キ我兵ヲ前後応スル勿ラシメント、依テ之ヲ人吉西郷ノ本營ニ通ス、其後行進大隊鹿兒島吉野ニ繰込ミ我軍ヲ援フ、此ニ於テ始テ吉野方面ノ守兵備ル、同廿日過キ振武二番藤井直二郎隊ヲ揚ケテ人吉ニ応援ス、故ニ園田隊其壘ヲ合テ之ヲ守ル、其后官軍浄光明寺ヨリ侵入シ我壘ニ逼ル、戰數刻ニシテ撃テ之ヲ却ク、銃器及彈藥・手旗等ヲ取ル、此時官軍武村ノ守兵黒江八左衛門壘ニ逼ル、一時敗走數丁ヲ退キ之ニ戰、園田隊之二応シ官兵ヲ走ラス、頗ル勝利ヲ得タリ、尸數十二及ヒ銃器・彈藥ヲ奪フ、又草牟田村・吉野村・花倉坂ノ戦ヒアリ、味方悉ク勝利ヲ得、其後奇兵二中隊鹿兒島ニ来リ坂元村ニ陣シ、一中隊ハ別府九郎率ヒ我隊ノ右翼上ノ原・馬ノ背ヲ守ル、一中隊ハ神宮司助左衛門率ヒ我隊ノ左翼玉龍山頂上ヲ守ル、時ニ中山甚五勇義一大隊及ヒ白砲十挺ヲ率ヒ川内ヨリ鹿兒島ニ入ル、後冷水及ヒ上ノ原ニ築壘、白砲連発スル數日、是ヨリ行進砲隊十二斤砲及ヒ四斤半砲ヲ鑄造シ、武ノ岡及ヒ桂山ニ備工狙撃連日、時ニ出水口方面ノ味方危急応援ヲ鹿兒島出張ノ振武二乞フ、即チ中山甚吾勇義一大隊ヲ率ヒ之ニ赴ク、同廿二日官軍重富

二上陸シ銀金坂ヲ越ヘ牟禮岡ニ抛リ、吉野村ノ守兵行進隊背後ヲ衝キ大ニ之ヲ破ルヲ見ル、即チ銳兵十名ヲ撰ミ自ラ率ヒ実方ニ至、尾下山ニ登リ雀ヶ宮ノ敵ヲ横撃ス、同時ニ桂山ノ守兵松岡隊敗走ス、官軍我兵ノ左翼ヨリ横撃ス、終ニ支ユル能ハス、退テ早馬ヶ岡ノ嶮ニ抛リ防ク、此時官軍我本隊ノ壘壁内ノ丸本道及ヒ玉龍山ノ頂上ニ在ル奇兵十四番神宮司助左衛門隊ノ壘ヲ侵ス、已ニ奇兵十四番敗走シ、我本隊四方ニ敵ヲ受ケ頻ニ憤戦スルノ報来ル、時ニ鈴木小太郎兵ヲ率ヒ川上村ヨリ来ル、又桂山ノ兵松岡隊及ヒ韃靼冬々本道ノ守兵日置吉左衛門隊敗レ引テ坂元村ニ在リ、之ヲシテ代リテ拒カシメ、直ニ我十名ヲ率テ本隊ニ帰リ共ニ勇奮シテ拒戦ス、此時奇兵十四番中隊坂元村ノ本道ヨリ横撃ス、官軍敗走引テ桂山ニ陣ス、此時吉野方面ノ守兵敗レ川上村ニ退陣ス、壘壁悉ク官軍ノ有トナル、同廿三日払暁ヨリ行進ノ諸隊進撃頗ル激戦、疾ク逼リ吉野ノ旧壘ヲ悉ク復ス、此時我隊玉龍山上ヨリ横撃シ数十名ヲ斃ス、此日吉野ノ戦ヒ官軍死骸及ヒ銃器・彈藥悉ク捨テ走ル、同日貴島清振武ノ各隊ヨリ精兵ヲ撰抜シ百二十名一中隊トナシ、自ラ率ヒ川内ニ応援ス、同廿四日黎明官軍我隊ノ壘壁内ノ丸本道ヲ襲ヒ、壘前五

六歩ノ地ニ来リ攻ム、已ニ接戦ニ及ントスルニ我隊床安ノ峯上ヨリ一時ニ発射ス、官軍狼狽シテ走ル、伏尸及ヒ銃器・彈藥道路ニ横ハル、同時ニ官軍武村・田上村ノ正面ヲ衝キ、又谷山郷ニ上陸シ涙橋ノ守兵今喜入カ隊ヲ撃破シ、紫原ヲ越ヘ田上村ノ壘上ニ出テ背後ヨリ目下ニ狙撃ス、砲声地ヲ動カス、故ニ我軍利アラサルヲ謀リ、直ニ一分隊ヲ率ヒ赴援フ時、武強兵衛至リ援ニ会フ、已ニ田上村ノ守兵敗レ田上河原ニ引揚ク、此時中島健彦来ル、又神宮司隊・別府隊来援フ、此ニ於テ進撃ノ決議シ中島令ヲ下シテ日、武・毛利・神宮司・別府隊及ヒ我隊等ヲシテ紫原ヲ進撃セヨト、直ニ進シテ紫原ニ逼ル、官軍谷ヲ隔テ陣ス、我軍道狭シテ僅ニ一人ヲ通スルニ依リ渡ル能ハス、兩軍互ニ狙撃ス、時ニ官軍大幸シテ武岡ニ逼リ、我兵危急ナルニ依リ紫原ノ兵ヲ引揚ケ、速ニ武岡ニ応スヘキ報ヲ得、即チ兵ヲ揚ケ、速ニ間道ヲ經テ武岡ニ赴キ援フ、時刻モ不移官兵ノ応援続クヲ見ル、我兵憤戦シテ拒ク、午後ニ至リ抜刀接戦死傷頗ル多シ、暮ニ我兵悉ク彈丸竭キ又求ル所ナシ、依テ各隊止ヲ得ス水上坂ノ上ニ退キ築壘守兵、是ヨリ先キ入来郷ノ戦ヒ我軍利アラス、擾乱シテ行ク所ヲ知ラス、同廿五日山野田一輔来リ日、

今日既ニ進退極マレリ、依テ西田村及ヒ原良村ヨリ進シテ城下ヲ衝キ決死一戦センコト如何、余等答曰、然リ、共ニ本營ニ至リ議セント、直ニ赴テ伊敷村ニ行ク、途ニテ吉井為一交代トシテ一分隊ヲ率ヒ来ルニ会フ、之ニ語ル、前事ヲ以テス、夫ヨリ本營ニ至リ決議ヲ中島ニ談ス、此ニ於テ中島各中隊長ヲ呼フ、直ニ武・北郷・園田・松下等来ル、會議半ニ官軍入来山道ヲ越ヘ郡山ニ出テ、比志島ノ間道ヨリ花野・川上村ヲ經テ已ニ下田村ニ侵入スルノ報来ル、之ヲ聞テ直ニ余前日武岡応援ニ用ユル所ノ一分隊ヲ率ヒ、我本隊ノ守墨玉龍山ヲ指テ走ル、途ニ上ノ原ニ至ルニ、官軍ノ後軍坂元村^(天井ヶ峯)天上ヶ峯ニ抛リ、先鋒ハ上ノ原ノ守兵武隊及ヒ馬ノ背ノ守兵別隊ノ墨ヲ取り之ヲ火ス、守兵潰走シテ行所ヲ知ラス、余官兵前・後軍ノ中間猿返ノ岡ニ出テ兵ヲ伏セ守兵ノ行所ヲ伺フ、時ニ我隊群集シテ背ケ原ヨリ寄元某ノ屋敷内ヲ忍ヒ、天上ヶ峯ニ在ル官軍ノ横ニ出テ抜刀ニテ切込ミ、余一分隊ヲ以テ之ニ応ス、官軍不意ヲ擊レ縦横狼狽シテ走ル、我兵僅ニ間ヲ得テ伊敷村ニ引揚ケ、即時ニ中島令シテ曰、我全軍ヲ下田村ニ転シ官軍ノ背後ヲ衝クヘシト、直ニ間道ヲ經テ下田村ニ至ルニ、行進隊下田ノ本道早馬ヶ岡ノ傍ニ

出テ天上ヶ峯ノ官兵ト戦フ、味方兵少キヲ以テ園田隊ヲ本道ノ応援ニ備エ、余隊ヲ七窪ニ下シ横ヨリ天上峯ヲ衝ク、然ルニ天上峯嶮ニシテ登ル能ハス、時ニ下田本道ノ兵破ル、依テ振武ノ全軍引テ下田村ヲ守ル、行進隊ハ吉野ニ在リ、同廿六日官軍大挙シテ吉野及ヒ下田村ヲ襲フ、我隊奇兵一番中隊ト下田村ノ本道ニ出テ拒ク、時ニ吉野ノ守兵破ル、依テ武隊及ヒ園田隊赴キ援ヒ敵ヲ數丁追崩ス、午後ニ至リ吉野方面敗レテ吉田郷ニ引ク、依テ振武ノ全軍重富郷ニ引テ守兵ス、同廿七日振武隊ハ蒲生郷ニ至リ各所ヲ守ル、我隊惣軍ノ応援トナリ麓ニ陣ス、此時行進隊ハ帖佐郷ニ在リ、同廿九日官軍吉田涼松ノ守兵振武一番中隊ノ墨ヲ襲ヒ戦ヒ始ル報ヲ聞ヤ、我隊直ニ本道ヲ指シテ走ル、途ニ佐山ニ至ルニ早ヤ守兵敗レ退クニ会フ、爰ニ於テ我一分隊ヲ敗兵ト合シテ爰ニ備エ、左分隊長有馬賢介之二將タリ、又右翼ニ數丁ヲ隔テ二分隊ヲ仁禮孝右衛門隊ト合シテ爰ニ備フ、中隊長北郷久成・右小隊長吉井為一之二將タリ、余殘兵ヲ率ヒ右五六丁隔テ岡下ニ至リ毛利權平隊ト合テ杉山ヲ楯トス、已ニ官兵衝キ来ル、我兵憤戦抜刀勢ヒ猖獗、官兵數丁ヲ引テ吹隴^(龍吹カ)ヲ楯トナス、互ニ狙撃ス、此時本道ノ兵敗走ス、官軍尾撃シ

テ既ニ蒲生ニ達シ背後ヲ絶ツ、我隊四方ニ敵ヲ受ケ俄ニ山路ヲ求メ蒲生北村ヲ經テ山田ノ北山田村ニ退ク、爰ニ北郷・伊集院・仁禮等敗兵ヲ纏ルニ會フ、是ヨリ間道ヲ求メ北山村ノ山道ヲ越ヘ溝辺石原ニ至ル、時ニ日暮ル、本日吉井爲一・有馬賢介重創ヲ受ケ死ス、外ニ負傷四名ニ及フ、同三十日我隊伊集院隊ト北山ノ峠ニ、一方ハ山鹿野金山ノ間道、又一方ハ大村間道・山田間道三巷アリ、之ヲ守リ横川口ト守線ヲナス、時ニ本營加治木西ノ上別府村ニ在リ、又溝辺口出張四中隊ノ會議所ヲ設ケ、七月一日横川口敗レテ踊郷ニ引揚ケ、本道ノ守リ無キニ依リ我隊伊集院隊ト本道ニ転シテ守兵、時ニ官軍横川町ニ陣ス、此ニ於テ北郷等各小隊長ヲ呼ヒ曰、先ニ中島來リ、若シ横川方面ノ官軍襲來ラハ、此四中隊ヲ以テ要地ニ拠リ防拒スヘキヲ命ス、依各地形ヲ求ムヘシト、各答曰、此地形左右広野ニシテ數里平ナリ、僅ニ四中隊ヲ以テ守ル可キノ地ニ在ラス、若シ守兵シ官軍襲來セハ必ス敗ル、及テ四中隊ヲ以テ死ヲ極メ横川方面ヲ夜襲シ決戦スルニ如ス、北郷曰、一時ニ激戦シ若シ四中隊悉ク戦滅セハ官軍大兵ヲ以テ直ニ加治木ニ突入り、本營及ヒ輜重ヲ取り振武・行進ノ背後ヲ絶タハ我軍東西ニ孤立ス、然

ルトキハ全敗ノ極ニ至ル、公等唯英名ヲ潔スルノミ、依テ四中隊ヲ率ヒ本營ニ到リ此議ヲ中島ニ談シ再命ヲ待ツテ進退ヲ決スヘシト、各之ヲ然リトシ、終ニ夜四中隊共ニ本營ニ至リ中島ニ談ス、中島令シテ曰、全軍ヲ加治木滝門寺坂ニ引揚ケヘシト、依テ滝門寺ニ至リ守兵、本日貴島清川内ヨリ一中隊ヲ率ヒテ帰陣ス、同三日我全軍踊方面ノ兵ト守線ヲナシ本手道ケ原ヲ守ル、行進隊ハ加治木ニ在リ、同五日日州大崎辺ノ敵ヲ撃ヘキノ令アリ、朝六時頃同所ヲ発シ中島等全軍ニ將トシテ福山ニ至リ宿陣ス、同六日未明六時ニ出發シ末吉郷ニ至リ、薄暮ニ同所ヲ發シ払曉全軍志布志郷松山ニ達シ一時兵ヲ息フ、同七日黎明同所ヲ發シ恒吉郷ニ至リ守兵ス、時ニ官軍志布志ニ出テ我軍ニ尾シ來リ、恒吉ヲ距ルコト二十余丁宮原ニ陣ス、四方皆敵ナリ、同八日百引進撃ノ議決ス、振武一番ヨリ六番中隊ヲ以テ先鋒トシ、余隊ハ応援トス、夜ヲ待テ出發シ、同九日午前八時頃百引ニ達ス、此ニ於テ六中隊ヲ三手二分チ、一軍ハ麓ノ本道ヨリ、一軍ハ高熊^{高隈}街道ヨリ、一軍ハ我三番中隊及ヒ四番中隊及ヒ四番中隊ハ高熊街道ヨリ左ニ山ヲ越ヘ官軍ノ壘下ニ至リ、一彈モ發セズ抜刀シテ切込ミ忽チ三壘ヲ取ル、官軍逃走ス、我

兵尾撃シテ麓ノ後ナル上林ニ出テ目下ニ雨注ス、麓屯集ノ官兵大ニ狼狽シテ走ル、時ニ近衛砲隊直ニ大砲二門ヲ押出シ麓ノ中央ニ備ヘ二弾ヲ発ス、同時ニ我軍高熊街道及ヒ本道ヨリ麓ニ切込ミ百五六十名ヲ斃ス、官軍散々ニ山手ヲ指シテ走ル、暫アツテ官軍亦上林ニ在ル我隊ノ右方二三峠在リ之ニ陣ス、此ニ於テ我隊四番中隊及ヒ仁禮隊・松下隊ト合シテ憤戦、疾ク攻メ又三壘ヲ取ル、官軍市成山ヲ指シテ走ル、我軍尾撃シテ方々ニ追フテ山中ヲ探ス、終ニ官兵ノ行所ヲ知ラス、頓テ全軍ヲ麓ニ引揚ク、此時生擒會計官一名・付属三名・兵卒十余名・銃砲隊ノ夫卒百余名、又分捕大砲二門・鞍馬一疋、米金及ヒ銃器・彈藥・諸物品數フルニ暇アラス、我隊死傷七八名ニ及ヘリ、薄暮ニ全軍ヲ恒吉ニ引揚ケ守兵ス、此日市成及ヒ宮ヶ原ノ官兵動揺散乱シテ大崎及ヒ牛根ニ引ク、同日大崎進撃ノ議決シ奇兵ニ中隊及ヒ新振武隊先鋒タリ、振武一大隊ハ応援ナル、夜中ニ発シ翌十一日大崎ニ到ルニ、先鋒隊ノ戦ヒ砲声雷ノ如クナルヲ聞ク、振武一大隊ハ荒佐村ニ進ム、官軍我軍ノ至ルヲ見テ直ニ大砲ヲ発ス、爰ニ於テ俄ニ兵ヲ配布ス、我隊及ヒ四番中隊ハ左翼ヲ衝キ官壘ノ後ニ出ツ、官軍頻ニ発射ス、我兵進ンテ一壘ヲ取

ル、即時ニ余負傷ス、依テ後事ヲ詳ニセス、其ヨリ都ノ城病院ニ至リ療養ス、其後我軍屢敗走ニ依リ所々ニ転院シ、終ニ延岡ノ永井村ニ到ル、后子三日ヲ経テ官軍數重ノ囲ヲ切り破リ官兵ヲ切散シ、夫ヨリ処々ノ官軍ヲ追崩シ、終ニ鹿兒島県吉田郷ニ到ル処、官軍味方ノ中央ヲ遮リシ処、元來余手負ニテ身体自在ヲ不得、依テ花尾山ニ潜伏シ、其以後鹿兒島ニテ帰順ス、

明治十一年五月

鹿兒島県
安藤源之丞

八二 蜂須賀權之進上申書

戦記

明治十年二月廿一日西郷氏ノ軍七大隊悉ク河尻ニ集ル、兵勢頗ル奮フ、皆謂ク、台兵怯弱恥ヲ知ラス、只死ヲ之恐ル、安ソ能ク上ヲ親ミ長ニ死スルノ節義アラシヤ、我ヲ見ハ未タ動スシテ先ツ潰ヘ、砲声一タヒ聞カハ胆破レ魂飛ハント、心甚タ之ヲ侮ル、二十二日進ンテ熊本城ヲ攻ム、四面重疊之ヲ囲ミ斉ク鉄砲ヲ注射シテ急ニ逼ル、城兵又々之ニ応シ兩軍頻リニ殊死シテ奮戦ス、焰煙満空ニ纏漫シ天日光アラス、砲丸頂上ニ破裂シ銃丸足下ニ迸

転ス、恰モ電光閃々雷声烈々、驟雨疾ク到ルカ如シ、同廿三日二番大隊九番小隊植木方面ニ応援シ、木葉ノ戦ヒ左側ノ山ニ沿ヒ疾駆敵ノ側面ニ出テ横撃一発、敵兵擾乱先ヲ争テ走ル、我兵尾撃稲佐ニ至ル、同二十五日高瀬ノ戦ヒ敵兵川岸ニ拠テ防ク、我兵進ム能ハス、晚景植木ニ返ル、同二十六日胸壁ヲ築テ木葉ヲ守ル、敵兵来リ攻ム、我兵防ク能ハス、退テ田原坂ヲ守ル、連戦日アリ、三月八日更代ノ兵到ルヲ以テ二番大隊九番小隊熊本ニ転シ段山ヲ守ル、一日城兵開門シテ急ニ来リ逼ル、我兵懈テ守備全カラス、大ニ敗レ退テ日向崎ヲ守ル、四月二十日御船ニ陣ス、敵兵来リ襲フ、邀撃之ヲ走ラス、同二十一日木山ニ退キ尋テ矢部ニ至リ、后チ人吉ニ入ル、五月九日山野ノ敵ヲ撃テ大ニ利アリ、（并良迫也）イラカ迫マテ追撃ス、又該地久木野村ニ応援ス、両日ヲ経テ敵兵来撃ス、我兵策ヲ失シ破ル、ヲ奮進シテ、終ニ之レニ勝チ尾撃數町ニ到ル、生擒及ヒ兵器若干ヲ得、引テ牛山郷ニ退ク、或日隣接ノ敵兵ト戦フ數回悉ク利ナシ、襲山郷ニ退守スルノ時大久保村ニ戦フ、激戦時ヲ移ス、進シテ砲壘ヲ取ル、翌日朝天敵ノ彈道ニ近キ潜伏シテ器械・彈藥ヲ得タリ、又大久保ノ我兵敗レ、後チ財部ニ戦フト雖トモ防戦ノ術無ク散

乱シ、終ニ美々津ニ退キ軍門ニ降ル、

明治十一年四月

鹿兒島県下穎娃郷
蜂須賀權之進

八三 一宮之家上申書

明治十年二月西郷隆盛、中原尚雄等ノ故ヲ以テ兵ヲ率イテ東上ス、池辺吉十郎其他有志ノ徒争起シテ之ニ応ス、余モ亦之ニ同意シ十二番小隊分隊長ト為リ、同廿五日出発出町熊本本營ニ会集ス、午時我軍高瀬ニ向ツテ進発ス、翌廿六日寺田村ニ至リ官軍ノ伏ニ陥ル事不意ニ出ルヲ以テ我軍大ニ潰乱ス、余深入、敵兵ニ取囲マレ遂ニ擒ニ就キ、直ニ檻獄ニ送致セラル、故ヲ以テ爾來戰陣ノ形状全ク目撃セス、

明治十一年五月

熊本県
一宮之家

八四 久富直之丞上申書

客年二月西郷隆盛等政府へ尋問ノ筋有之、上京ノ際余第ニ大隊五番小隊へ編入シ、同十五日大口街道ヲ経テ同廿一日熊本県下川尻駅ニ着ス、爰ニ於テ先驅ノ隊へ熊本台兵俄然頻リニ砲発スルノ報ヲ聞キ、我隊ニモ先ヲ争テ進

ミ八幡山ニ向ヒ之ニ応戦ス、戦フ事終日勝敗決セス、同午後六時頃ニ至リ二本樹ニ引揚ク、同廿六日官兵松橋へ上陸ノ報アリ、我隊及ヒ二番小队転シテ亀崎ヲ守リ哨兵ヲ張ル、而シテ三月十四日大津ニ至リ、同十六日南郷ノ郡黒川邑ニ繰出シ、四方ニ胸壁ヲ築テ固守ス、或日官兵斥候三十余名寄セ来リ、我分隊ヲ以テ撃シテ之ヲ却ク、同十七日巡查兵我胸壁ニ襲来ス、我兵一ツハ敵ノ左翼ヲ繞リ、一ツハ背後ニ出ルノ約ヲ成シテ、鯨波抜刀激戦、官兵敗績、其機ニ乗シ一里余ヲ追躡ス、官兵ノ隊長佐川某及ヒ数十名ヲ殪シ銃器・彈藥等ヲ分捕セリ、我兵死傷僅ニ四名ナリ、爰ニ於テ我隊中隊ニ編制ス、余半隊長トナル、或日坂梨屯集ノ巡查兵豊後地ニ引揚ルノ探報ヲ得、四月十日彼ノ地ニ繰出シ柵壘ヲ構ヘテ固守ス、同十四日黎明官兵大挙シテ寄来ル、我兵所々ノ守リヲ引揚ニ手ニ分ケ、一ツハ援兵トシ、一ツハ間道ヨリ横撃破竹ノ勢ヲ成シテ戦フ、既ニ彈藥欠乏、我兵帯フル所僅ニ三四発ニ過キス、官兵我壘前ニ逼リ発砲雨ヲ注クカ如シ、遂ニ支フル能ハスシテ退ク、此時我兵十余名官兵ノ背後ヲ繞リ抜刀シテ笹倉ニ衝入り、本営ニ火ヲ放チ銃器・彈藥等ヲ焼キ、或ハ分捕シ黒川邑ニ退ク、此時我兵死傷十余名ナ

リ、余爰ニ於テ小隊長トナル、已ニシテ川尻方面ノ敗聞至リ矢部ニ引揚ク、爰ニ於テ隊伍ノ編制アリ、奇兵四番中隊トナル、四月廿四日矢部ヲ殲シ、胡麻山ノ嶮路ヲ經テ江代ニ引ク、五月十三日我隊外ニ二隊先驅トシテ大分県重岡ヲ襲フ、官兵狼狽逃走ス、翌十四日各兵強壯ナル者ヲ撰テ一隊トナシ挺前シテ竹田ヲ襲撃ス、巡查兵屯所ヲ棄テ潰散逃走ス、同十六日官兵鶴崎へ上陸ノ探報ヲ得、見兵百余名ヲ繰出シ、途ニ二十八名ヲ撰ヒ車ニ乗シテ之ニ馳セ市街ニ衝入ル、時已ニ夜、乃チ暗号ヲ唱へ群集ノ敵ニ先ヲ競テ進ミ数十名ヲ殪ス、官兵狼狽スルノ際敵ノ応援雲霞ノ如ク尋キ来リ、又戦フ事一時間ナルヘシ、兵ヲ収メテ竹田ニ引揚ク、然ルニ或日官兵当地（惠良原之）江良原邑へ繰込ミタルノ報アリ、五月廿日曉ニ乗シ進撃スト雖トモ官兵嶮要ノ地ニ抛リ、其高キハ数千仞、終ニ抜クコト能ハスシテ竹田ニ引揚ク、同廿二日又玉来邑ニ寄セ来リ、我隊進撃スルニ又利有ラス、引テ小鷹野邑ヲ守ル、或日官兵再ヒ襲ヒ来ル、撃テ之ヲ却ク、是ヨリ互ニ対峙シ戦フコト十余日、同廿九日我軍竟ニ敗績シ小野市邑ニ退キ、翌三十日三重市エ進軍ス、六月一日官兵曉霧ニ乗シ前後ヨリ襲ヒ来ル、戦ヒ数刻ニ滴ス、官兵潰乱逃走ス、殪

ル、者八十余名、我半隊ヲ以テ追躡ス、我軍死傷僅二八名、即夜発程、翌二日十二時頃臼杵ヲ襲フ、我隊ハ右ノ山手ヨリ先驅トナツテ正面ヲ横撃ス、官兵壘ヲ棄テ潰走、或ハ海川ニ溺レ或ハ降ルモノアリ、此時銃器・彈藥等ヲ分捕セリ、爰ニ於テ所々ニ拒壘ヲ構ヘ固守ス、同六日官兵我壁ノ左翼ノ山岳ニ寄セ来リ、互ニ対峙スルコト四日間、官兵左右ヨリ進撃ス、我軍三四町退キ大川ヲ挟テ防戦ス、官兵我軍ノ彈道ツクミ峠ヲ絶ントス、我隊之レカ為メ爰ニ固守ス、而シテ翌日官兵我軍ノ背後ニ繞テ攻撃ス、激戦スト雖トモ支フルヲ得スシテ桐畑ニ退ク、而シテ我軍三重市ヘ進撃シ勝敗決セス、夜ニ及ンテ小野市邑ヘ引揚ケ三国峠ヲ守ル、同十三日官兵午前四時頃霖霧ニ乘シ一斉ニ吶喊シテ我軍ノ不意ヲ突ク、我軍敗シテ重岡ニ退ク、爰ニ於テ屢進撃スト雖トモ利有ラス、爰ニ対峙スルコト四日間ニシテ熊田ノ駅ニ退ク、時ニ官兵日豊境赤松峠并宗太郎越ニ柵壁ヲ構ヘ保守スルコト甚嚴ナリ、或日我隊先驅トナリ宗太郎越ニ進撃シ官兵ノ壘横ヲ衝ク、鯨波拔刀激戦十余壘ヲ拔ク、俄ニ風雨頻リニ起リ咫尺モ弁セス、又彈藥欠乏空ク矢ケ内邑セニフヘ峠ニ退テ保守ス、七月二日官兵我胸壁ニ襲ヒ来リ、我隊頗ル苦戦ス、

時ニ奇兵八番中隊来リ援ケ、突然官兵ノ背後ニ出テ数名ヲ殲ス、官兵潰乱逃走ス、數日経テ我半隊転シテ陸地峠ヲ守ル、七月中旬頃午後四時ヨリ官兵寄セ来リ、我隊奮起シ鬪戦スルニ彈藥尽キ、官兵我壁ニ逼ル、木石ヲ擲テ戦フ、夜ニ入り抜刀シテ切入ント大ニ呼フ、官兵彈藥・銃器ヲ捨テ逃走ル、此時我兵負傷僅二六名、爰ニ至リ他隊ニ譲リセニフヘ峠ニ降ル、爰ニ固守スルコト十余日、而シテ宮崎方面屢敗軍、是ニ応援スヘキノ報アリ、電馳シテ之ニ赴ク、我軍宮崎・佐土原ヲ引テ高鍋ノ境(一ツ瀬カ)イッセ川ヲ挟テ拒キ戦フ、我隊之ニ応ス、八月二日我軍敗シテ美々津ニ退ク、我隊福瀬邑ニ至リ壘ヲ築キ川ヲ挟テ固守ス、同六日頃官兵寄セ来リ、斥候至ルヤ、我兵壘上ニ黍ヲ植ヘ空ヲ示シ誘ヒケレハ、果シテ官兵我壘前ニ逼リ列ヲ連ヌ、今ヤ発射ノ機ト鬪声ヲ拳テ乱射スルニ、官兵散乱逃走ス、又翌日襲来ス、直チニ討テ之ヲ退ク、然ルニ即時山陰邑ノ味方難戦ノ急ヲ告ク、直チニ我隊之レニ応援ス、途中官兵富高新町ニ突キ入りタリト聞キ、間道ヲ忍ヒ河路ヲ經テ度川(渡川カ)ニ至ル、爰ニ止ルコト五六日、而シテ我軍大ニ敗績シ永井邑ニ退ク、是ニ於テ屢進撃ストモ利有ラス、官兵壘ヲ高フシ四方ヲ圍繞シ、大小砲ヲ発ス

ルコト雨ヲ注クカ如シ、八月十七日我軍曉霧ニ乗シ囲ヲ脱ント可愛嶽ノ山路ヲ進行シ、千余人ノ兵士万死ヲ期シテ頂上ノ官兵ヲ破リ重圍ヲ脱ク、爰ニ於テ隊ヲ前・中・後軍ト編制アリ、余中軍トナリ、山谿ノ峻ヲ經テ道ニ官兵ヲ破リ、九月一日鹿兒島ニ突進ス、余此日負傷セリ、

明治十一年寅五月

鹿兒島第二大区小二区
久富直之丞

八五 武藤東四郎他四名連署上申書

鹿兒島日向国第九十七大区高鍋方域戦争景状

明治十年二月初旬西郷隆盛兵隊隨從、上京ノ顛末県庁ヨリ布達ニ及ヒ、就テハ同県下各区出兵隨行ノ由該区伝聞、壯年輩沸騰揺ス、故ニ其趣ヲ県庁江伺ヲ經テ進退スヘキノ議ニ一決シ、指令ヲ待テ区内鎮撫、数旬平穩ナリ、然ルニ三月上旬頃貴嶋清宮崎工出張本営ヲ設ケ、日向一般兵士ヲ募リ、加之県令大山ヨリ貴嶋ヘ兵士ヲ可募書面ヲ得、因テ二小队貴嶋ニ属シ肥後熊本ニ出張セリ、此際兵士ヨリ其等ニ後事ヲ托シヲケリ、其後兵士死傷多、兵員寡少ナルヲ以テ本営ヨリ頻リニ増員ヲ督責ス、由テ猶又九十余名ヲ出セリ、既ニシテ五月中旬桐野利秋宮崎ヘ

出張割拠ノ令ヲ布キ、支庁ヲ改メテ軍務所トナシ、事務扱所ヲ郡代所トナシ、軍政其他都テ軍務所ヨリ出ツ、高鍋ヘ八坂田諸藩ヲ遣シ出張本営ヲ設ケ、之カ參軍トナシ該区ノ軍事ヲ掌ラシム、此ニ於テ募兵、募金ヲ始メ銃砲・彈藥製造ヲ興シ、兵隊ニハ士族ハ勿論農商ニ至テモ富ミ且ツ壯強ナルモノハ之ヲ募リ、十余隊ヲ編制シ鐵擧隊ト稱シ豊後・高千穂・細嶋等ヘ出シ、其他已下方域ヲ固メ令ム、然ルニ七月下旬都城敗レ官軍宮崎ニ出ルヲ聞ヤ、宮崎・佐土原モ亦統テ敗レ、八月二日朝穂北・佐土原・富田三面ヨリ官軍大衆寄セ来リ、高鍋旧城下ニ突入放銃火ヲ布在ニ縦ツ、五十余戸ヲ焚ク、既ニシテ官軍充満、由テ佐土原川ノ守兵後レテ至ルモノ官道塞カルヲ以テ路ヲ海辺ニ取リ、蚊口港ヲ渡リ耳津ニ達スルヲ得タリ、高鍋エラク処ノ出張本営ハ桐野等既ニ引キ来ルヨリ耳津川ノ要地ニ防クノ手配ニテ倉卒引揚、直ニ耳津ニ退キ諸事指揮ヲナセリ、耳津川ニハ急ニ船橋ヲ架シ、翌三日我軍悉ク渡リ畢ルヲ待チ乃橋ヲ撤ス、是ニ於テ諸隊北岸ニ浴ヒ港口ヨリ上流幸脇・飯谷・鳥川諸村ニ至リ、鱗次羅列土豚若クハ席ヲ束ネ楯トナシ、之ニ加ルニ大煩數門ヲ運輪シ要地ニ配リ守備甚嚴ナリ、四日官軍耳津川ニ迫リ南

岸ヨリ斥候ス、我軍川ヲ隔テ北岸ヨリ之ヲ逆ヘ撃ツ、十

二斤煩數発十余名ヲ斃ス、我飯谷村ノ守兵モ亦山腹ニ砲

台ヲ設タリ、時ニ官軍陸続南岸余瀨村ニ集リ糧ヲ炊クモ

ノ、如シ、乃放射數発彈丸其正中ニ墮チテ破裂ス、衆狼

狽シテ散ス、是ニ於テ官軍又兵ヲ毘沙門山ニ配リ銃砲放

発ス、之カ為メニ我十二斤煩布置甚不便ナリ、故ヲ以テ

此夜潜ニ櫓時阪ノ險ヲ冒シ運転シテ其頂上ニ備フ、其他

諸煩又從テ移ス、官軍陣列悉ク目下ニ在リ、然シテ官軍

之ヲ知ラス、四日又交戦、我軍乃十二斤ヲ以テ狙撃ス、

照準違ハス、官軍其不意ニ出ルヲ以テ驚駭又敢テ近カス、

兩軍交戦凡三日間、銃砲響キ実ニ山嶽ヲ崩ス、此際官軍

烙丸ヲ放チ幸脇村ヲ焼ク、而テ北岸守リヲ失ハス、官軍

渡ルヲ得サルモノハ実ニ要地ト煩砲ノ利ニ由ルト云、然

ルニ七月七日官軍既ニ間道ヲ踰ヘ耳川ノ上流山陰口ヲ破

リ、直ニ富高二突入、我守兵防ク能ハス、門川ニ引退キ、

是カ為メニ耳川北岸ノ守兵前後官軍ニ挟マレ、八日未明

急ニ壘ヲ捨テ富高二突出激戦、竟ニ衝破スルコト能ハス、

各間道ヲ経テ門川ノ守兵ニ合スト云フ、

鹿兒島県下第九十七大区

二三小区

明治十一年五月

武藤東四郎

神代勝彦

石井卓巳

財津吉一

團井忠人

八六 小野長四郎上申書

明治十年二月熊本隊十番小隊兵士ニ編入セラレ、同廿五

日午後ヨリ高瀬ニ向ツテ進発シ、該夜木留村ニ宿陣ス、

同廿六日高瀬ノ官軍ヲ撃ント進ンテ寺田村ニ抵レハ、官

軍既ニ此地ニ来リ居、直チニ開戦ニ及縦横交闘、我軍遂

ニ敗走ス、此日頭ヲ傷キ退テ鷲ノ尾村ニ到リ加療凡ニ週

間計リ、疵愈ルニ及ヒ大田尾ニ帰隊ス、居ルコト五六日、

我隊田原ニ転陣、此際小隊斥候トナル、一日薩兵ト議シ

短兵一斉敵壘ヲ衝突ス、官兵モ亦謀略アリテ急ニ左右ニ

開避シ挟ンテ我軍ヲ撃射ス、故ヲ以死傷頗ル多シ、此ニ

於テ引テ旧壘ニ帰ラントスレトモ彈丸雨注、兵士逡巡、

此時同隊筑紫弥一単身壘ニ向テ歩ス、既ニシテ官兵銃劍

ヲ閃カシテ来リ撃ツ、筑紫刀ヲ揮ツテ迎ヘ戦イ、遂ニ重

傷ヲ負テ退ク、予亦繼キ進ムトキニ敵兵二人馳来リ、一

人銃ヲ我ニ発スレトモ幸ニ頭上ヲ飛鳴シテ過ク、予直チ

ニ進テ之ニ迫レハ敵兵忽チニ逃走セリ、此ニ於テ勢達ス可ラサルヲ察シ退テ本隊ニ合ス、同廿日田原口敗レ輜重方ト共ニ味取・須屋ヲ經テ大田尾ニ抵リ、猶輒シテ野出村ヲ守ル、此際八番小隊參謀ニ転ス、時ニ同隊木留ニアルヲ以テ行テ之ニ加ル、即日該処敗レ退テ万葉寺村ニ止ルコト四五日ニシテ夜中兵ヲ揚ケテ木山ニ到ル、此際小隊長闕ルヲ以テ小隊長トナル、四月十九日木山ヲ発シ御船ニ進軍ス、翌日官軍大挙来リ撃ツ、我軍拒戦スト雖モカラ支ユル能ハス、惣軍遂ニ矢部ニ走ル、翌日万坂ヲ守備ス、翌日男成村ニ抵リ隊伍編制アリ、予三番中隊ノ幹事トナル、同廿四日同処ヲ発シ、道ヲ胡麻山越ニトリ人吉ニ達シ、本營及各隊西間村ニ宿陣ス、五月六日比我隊遠ノ原ニ進軍、予ハ隊用アリテ人吉ニ留リ用ヲ竣リテ本隊ニ加ハル、翌朝我軍山野ニ進撃、官軍退キ走ルコト三里許リ、我軍追躡深川ニ到リ壘ヲ対シテ砲戦ス、居ルコト日アリ、忽チ病ニ罹リ人吉病院ニ入テ療養ニ週間許リ、人吉危急ナルニ当リ都ノ城ニ転院ス、数日ヲ經テ病漸ク愈ヘ、本隊踊ニアリト聞キ行テ帰隊ス、翌夜踊ヲ引揚ケ田口村ニ退守ス、此ニ於テ病氣再発シ戦地ニ出ル能ハス、本營ニ從テ庄内ニ抵ル、留ルコト三四日、病院掛リヲ命

セラレシカ都ノ城敗ル、ニ及ンテ病院ヲ宮崎ニ移シ、又佐土原ニ転院ス、此時我軍勢イ日ニ蹙マリ座視ニ忍ヒサルモノアリ、故ヲ以強テ起テ帰隊セリ、七月二日官軍不意ニ我背後ニ繞リ出我軍散乱敗走ス、予病羸疾ク走ル能ハス、単身山中ニ潜居シ、遂ニ一ノ民家ニ投テ潜匿凡ソ二閱月、九月下旬ニ至リ佐土原警視出張所ニ自首帰順ス、

明治十一年四月

熊本県

小野長四郎

八七 松本末吉上申書

明治十年西郷隆盛等上京ノ際隨行、四番大隊四番小隊川久保十次隊付屬ニ編入サレ、二月十六日鹿兒島ヲ発シ、大口街道ヨリ水俣ヘ出同廿二日熊本城開戦、爾後田原ニ於テ我半隊長木原敬介負傷、看病ニテ川尻ニ至リ木山ニ転シ鹿兒島ヘ帰県、四月二十日鹿兒島ヲ発シ、胡麻山ヲ越ヘ馬見原ニ於テ帰隊、夫ヨリ人吉ヲ經豊後地諸々ニ転戦、八月十七日永井村破ル、ノ際降伏、爾後帰県、九月一日隆盛等再来ノ折復右ニ与シ、市民ヲ招聚シ種々奔走(周旋力)、遂ニ落城ノ後再度帰順降伏致候也、

鹿兒島県平民